
スケープゴート

シン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スケープゴート

【Nコード】

N1957U

【作者名】

シン

【あらすじ】

ハードコア・サイコサスペンスですが、ある意味、ファンタジーかも知れません。

性的描写や猥褻表現があります。苦手な方はご注意ください。

美貌の少年、一色透には、幼い頃から、紅蓮、青華、白亜、紫生、夏黄、緑乃、藍香、朱道、灰裂、茶京、羽紺、赤樹、緋影、銀嶺、黒都……と、さまざまな《友だち》がいた。

今、透は、その《友だち》と、カインという優しげな面貌の青年と共に、ある目的に向かって動き出す。

だが、その《友だち》とは一体、何なのか。

人類最初の殺人者の名を持つ、カインという青年は何者なのか。

「黒都は駄目だ……。黒都だけは出さないように見張っていてくれ、カイン」

透がそう言った黒都とは、一体何者なのか。

ミラノへ訪れた透とカインは、美しいモデル青華を使って、ミラノのトップ・デザイナー、デ・クレシエンツォに近づく。が、一方で、夏黄の殺人現場をパリの天才アーティスト、サミュエル・アルフアンデリに見られ、恐れていた黒都が現れる……。

A R E A ・ 1 米蘭（ミラノ） ？（前書き）

性的描写、猥褻表現があります。苦手な方はご注意ください。

AREA・1 米蘭（ミラノ）？

AREA・1 米蘭^{ミラノ}

^{スケープゴート}
生贄であつた彼の、身代わり（スケープゴート）にならんとした者たちが、いる……

SCAPE GOAT・1

蕭蕭たる雨の降る一日で、あつた。

昼間だというのに暗く、街は瘴気に包まれているかの如く、淀んでいる。

足を一步踏み出す度に、^{ジャンキー}麻薬中毒者たちが使い終えた、皮下注射器を、踏み付けた。

^{ンキー}雨が降っていることにも気づいていない様子で、見た目にも^{ジャ}麻薬中毒者だと判る連中が、徘徊している。

^{ヘロイン}子供たちが、茫と虚空を見つめて、濡れた路上に座っている。
薬を打ち終えたばかり、なのであろう。

異様な雰囲気で、あつた。

商業と金融、ビジネスの街たる北方の雄、ミラノは、霧に包まれる冬と、蒸し暑い夏に蝕まれ、それでも、よく働き、よく稼ぎ、強かな実力を見せつけている。^{ジャンキー}イタリアらしからぬ都市である。

だが、街を行き交う^{ジャンキー}麻薬中毒者たちの姿は、イタリアらしい、と言えるかも、知れない。

このミラノだけでなく、ローマにも、ベロナにも、こういった場

所が、存在、する。

麻薬中毒者たちの徘徊するその通りに、雨のヴェールを纏う、二つの人影が現れた。

美しい人影であつた。

だが、影だけで、その人影の美貌が判る、ということが有り得るのだろうか。

有り得る、のだ。

その二つの人影が、そうであつた。

一人は、優しげな面貌をした長身の青年である。二七、八歳だろう。金色の髪を長く伸ばし、緩やかに一つに束ねている。物静かな雰囲気、その優雅な歩き方からも伝わって来る。緑翠の瞳も暖かい色を灯し、長身に相応しいハイ・ネックとハイ・ウエストのトップとボトムも、さらに、その静けさを際立てて、いる。

もう一つの人影は、少年であつた。

きれい、と形容できる美貌の少年である。二十歳前後、だろうか。神秘的な新月の夜に創造されたかのような漆黒の髪と、それと同色の射干玉の瞳を、している。雨に濡れ、さらに艶やかな輝きを増す髪である。一線の狂いもない麗容も、まだ線の細い少年らしいラインを映す質の良い革のトップとボトムに彩られ、不思議な色香を漂わせている。

二人共に、妖しい、とも言える魅惑を纏う、人影であつた。

雨に煙るその人影の前に、数人の麻薬中毒者たちが立ち塞がった。ヘロインを買う金も無く、追い詰められているのだろう。目の下のクマと、痩せこけた頬が、秋の雨に、余計に不気味に浮かんでいる。
「中国人かい？ それとも、日本人？」

と、己より目線が下にある少年の方へと、歩み寄る。

近くで見る少年の面貌は、まだ幼さを留める、ほんの子供のような愛らしさであつた。それでも、戦慄を覚えるほどの、美貌である。ヘロインで抑制されているはずの麻薬中毒者たちが興奮しているのも、無理のないことであつただろう。

少年は、麻薬中毒者たちを無視して、通り過ぎた。

「おい、待てよ——」

麻薬中毒者たちが、行く手を塞ごうと、前に立つ。

刹那、であった。

ヒュン、と雨さえ劔るような、高い音が駆け抜けた。

「ひぐつ！」

喉を詰めるような声が、上がった。その声は、一つだけでは、なかった。麻薬中毒者たちの数だけ、声が上がる。

優しいな面貌の青年が、タン、と地を蹴り、後ろへ飛び退く。

少年も、小柄な体軀を翻して、脇へ飛んだ。

刹那、凄まじい血飛沫が、雨に混ざって噴き出した。

麻薬中毒者たちの喉が割れ、そこから、生臭い紅の霧が噴き出して、いる。

少年の手には、鞭があつた。しなやかで鋭い、革の鞭である。それは、少年の美貌と漆黒の髪、そして、射干玉の瞳に、よく似合つた。

その鞭こそ、麻薬中毒者たちの喉を裂いた鞭であつた。

「……『紅蓮』か？」

青年が訊いた。

少年は、フツ、と鼻を鳴らし、鞭を革のボトムの腰に巻き付ける。その姿は、まるで、蛇を巻き付ける、荒ぶる神のようにも、見えた。「行くぞ、カイン」

紅蓮か、と問いかけられた少年は、血を噴く死体に一瞥もせず、再び雨の中を歩き始めた。

紅蓮——それは、彼の名前、なのであろうか。だとすれば、紅蓮か、と彼に問いかけた青年は、今、初めてその少年が誰であるかに気づいた、というのだろうか。今まで共に歩き、共に行動していたにも拘わらず……。

だが、少年は、ためらいもせず、その青年を、カイン、と呼んだではないか。充分に互いを知り合う素っ気ない口調で。

しかし……。

カイン——確かその名は、聖書に刻まれた、人類最初の殺人者の名、ではなかっただろうか。

カインとアベル——。二人は神々に共に供物を捧げたが、神々はアベルからの供物だけを喜び、カインはアベルを妬んで、殺してしまふ。

その優しげな青年に、人類最初の身内殺しの名は、あまりに相応しくなく、思えた。

だが、返り血を避けるために飛び退いたあの身のこなしは、その名に相応しい、とは言えないだろうか。

「殺すことはなかっただろう、紅蓮？」

今度は、はつきりと、その少年を『紅蓮』と呼び、青年——カインの名を持つ青年は、言った。

「まだオレで良かったのさ。これが『黒都』なら、通りに蹲る子供たちをも、全て自らの餌食にしていた」

その言葉に、優しげな緑翠の瞳が、サツ、と凍った。

それほどの言葉、であったのだ。

何事にも動じそうにない優しげな青年が、黒都、という名に、あからさまな脅えを示し、顔色を、変えた。そうさせるに充分な、そして、余りある意味を持つ名前だったのだ。

「違つかい、カイン？ 黒都は我々の中で最も無垢な存在だ」

無垢……。人々は、無垢の真実の意味さえ、考えようとは、しない……。

AREA・1 米蘭（ミラノ）？

二人は、それから無言で足を進めた。
すぐに繁華街へ、出る。

欧州の都市には、必ず広場というものがあり、暖かい気候に包まれるイタリアでは、取り分け、広場は市民の生活に係わるものとして、深く暮らしに結び付いている。

教会、市庁舎、居酒屋、カフェ、商店街、地下鉄の駅……市民にとって必要なものが、全て広場の周囲に集まっているのだ。

人々はそこで出逢い、エスプレッソを飲みながら、語り合う。

ふと、紅蓮が、一つのショー・ウィンドウの前で、足を止めた。
本当に不意に、何かに惹きつけられるように、ピタリ、と足を止めたのだ。

「どうした、紅蓮？」

カインは、その紅蓮の様子に気づいて、声をかけた。

だが、紅蓮は返事もせず、ショー・ウィンドウの中の愛らしいマリオネットを、きらきらと輝く瞳で、見つめている。幼女のような真摯で無邪気な瞳である。今にも指をくわえそうなほどに、一生懸命、マリオネットの愛らしさを確かめている。

「……ほしい」

紅蓮が言った。

「ん？」

「これ、ほしい。白亜、このお人形がほしい」

と、カインを見上げて、訴える。

口調だけでなく、仕草や表情まで、幼い子供と化してる。

その姿は、さっき、路上にたむろする麻薬中毒者たちを、鞭で非情に殺してしまった少年と同一人物とは思えなかった。純粹培養に育てられた瞳を持つ、全くの別人である。——いや、それ以前に、彼は自分のことを『白亜』と呼ばなかっただろうか。

「……。この間も、似たような人形を買ったばかりだろう？」

紅蓮の変化に戸惑うでもなく、カインは、幼子を説き伏せるように、静かに言った。

「だってー、ほしいつ。白亜、このお人形がほしい。——おねがい、カイン。こんどはがまんするから、このお人形だけ、買って」

紅蓮——いや、白亜と名乗った少年は、カインとショール・ウィンドウを交互に見つめ、泣き出しそうな顔で、訴える。

通りを歩く日本人観光客たちが、奇異なものを見るような視線で、その白亜とカインの姿を盗み見ながら、二人の側を通り抜けた。

チラチラ、と振り返っては、堪え切れない様子で、プツ、と吹き出し、口々に小声で囁き合う。

「クス。なあに、あの子？　きれいな顔立ちだけど、男の子よねエ？」

「きつと、ゲイなのよ。ヨーロッパじゃ珍しくもないもの」

「気持ち悪い。いくらきれいな子でも、あれじゃあ、ちよつと厭よねエ。きつと、日本にいらなくなつて、こつちに恋人を探しに来たのよ」

「でも、一緒にいる金髪の青年、素敵じゃない？　優しげで、背が高くって——。あんなきれいなカップルって、ちよつとないわよ」

「でも、ゲイはゲイよ。それに、お人形をねだるなんて、行き過ぎじゃない？　小さな子供でもないのに——。鳥肌が立つわ」

「それはそうだけど……」

嫌悪と興味、羨望と異端視が続く中、白亜はまだ、カインに人形をねだっている。

ショール・ウィンドウの奥の店員たちも、陰でクスクスと笑いながら、

「東洋人にもゲイっているのね」

などと、小声で囁き合っている。

カインは一つ、溜め息をついた。

「好きな人形を買って来るといい」

と、白亜の手に、カードを渡す。

「わあいつ。グラーツイエ、カインっ」

白亜は満面の笑みで、白い頬を上気させ、いそいそと、そして、ドキドキと、期待に胸を膨らませるよう、店の中へと入って行った。店員たちが、笑うのをやめ、顔を元の通りに切り替える。

「あのオ……。ショー・ウィンドウにある、あのお人形をください。半分が黒で、半分が白に黒の水玉もようのお洋服を着た、マリオネットのお人形を……」

白亜は、はにかむように、店員に言った。

店員たちは、懸命に笑いをかみ殺しながら、少女のように恥じらう白亜の言葉通り、そのマリオネットを、包装紙に包んだ。

そして、白亜が支払いを済ませ、包装したマリオネットを大事そうに抱えて店を出るのを見て、また、口々に囁き合う。

「胸があれば、完璧に女の子よねエ」

「ホント。仕草は女の子なのに、男の子の格好をしているから、余計に変なのよ。いっそのこと、女の子の格好をすればいいのに」

「そういえば、あの子、モデルの『青華』に似てない？」

「『青華』っていうと……ミラノでのショーのために、トップ・デザイナーのデ・クレシエンツォが日本から連れて来た、っていう、あの？」

「似てるでしょ？ あの子、『青華』の変装かも知れないわよ。――デ・クレシエンツォは以前から日本びいきで、最初の結婚相手も日本人だったけど、『青華』はその日本びいきの中でも特別ですもの。女の私が見ても、うつとりするわア……」

「同じ東洋人だから似ているような気がするだけじゃない？ さっきの子は、あんな言葉遣いをしてても、一応、男の子だったし」

「じゃあ、兄弟か何かかしら？」

「そうかもね。カードの名前は……ケイン・ローウェル……。あの子の名前じゃなくて、きつと、一緒にいた金髪の青年の名前ね。イギリス人か、アメリカ人か……」

店の中で下世話な詮索が続く中、白亜とカインは大通りへ出てタクシーを拾い、滞在先のホテルへと向かっていた。中央駅から歩いて数分のところにある、五つ星の最高級ホテルである。

そのタクシーの中でも、白亜は包装されたマリオネットを嬉しそうに抱え、早く部屋へ戻って広げて見たい、というように、何度も包装の切れ目から、中のマリオネットを覗いている。

カインはただ優しく瞳を細め、その白亜の姿を見守っていた……。

AREA・1 米蘭（ミラノ）？

滞在先たる宮殿風のホテルへ戻ると、ちょうど、部屋の電話が鳴り出した。

「はい、一色……」

窓際にあるライティング・デスクへと足を向け、カインは、軽い受話器を持ち上げた。

白亜は、周りのことなど何も見えていない様子で、ベッドに腰掛け、さっそくマリオネットの包みを開いている。

電話の中から、声が届いた。

「東京の藤村様より、お電話が入っております」

と、フロント係が相手を告げる。

「そう……。繋いでくれ」

そう言うてから、カインは、電話の送話口を手で押さえ、白亜の方を振り返った。

すでに、人形遊びが始まっている。白亜は、頬ずりもキスも、あらゆる愛情表現を駆使して、人形の遊び相手を努めている。

「『透』、藤村氏から電話だそうだ。もう原稿は出来ていただろう？」

マリオネットで遊ぶ白亜に向けて、カインは別の名前を呼びかけた。

白亜の表情が、ふつ、と変わった。

愛らしい幼女のような表情から、作家、一色透の表情へ。

「ん？ ああ。——いや、まだ書き直したいところがあるんだ。今日、ドウオモの尖塔を見て、イメージが変わった。雨に霞む石の芸術は、もつと陰鬱で繊細だったよ。そして、ゾツとするほどにきれいだ……」

その光景を見るように、瞳を細めて、透は言った。

カインは、ライティング・デスクの前で、その透の言葉を、電話

の向こうの藤村に伝えた。

まだ十代で、文壇界にセンセーショナルなデビューを遂げた、美貌の少年作家、一色透――。彼こそ、唯一、戸籍上の生を持つ、確かな存在であった。

カインが電話を切って振り返ると、それを見て、透が口を開いた。

「……この人形は、白亜か？」

と、マリオネットの大きな襟を摘まんで、カインの前に持ち上げる。

じきに二十歳になろう、という少年には、似つかわしくないものである。もちろん、透自身の趣味でもない。

「ああ。どうしても欲しいと言って利かなくて」

「少しは我慢させるよ。このままじゃあ、部屋中、人形だらけになる。――ぼくに、人形を抱きながら、小説を書け、とでも言う積もりかい？」

「フツ」

と、鼻を鳴らし、カインは緑翠の瞳を、静かに、伏せた。

優しいな面貌だけに、何を思つての笑みなのかは、解らない。次から次へと変わる『透』の人格を前にしても、全く驚かない冷静さを取つても、彼がどれほどの人物なのか、想像もつかない。――いや、それ以前に、彼ら二人はどういう関係なのだろうか。

兄弟、ではないだろう。

仕事上の知り合い、でもないに違いない。不思議な関係の、二人であつた。――いや、二人、なのだろうか。

荒ぶる神のような紅蓮や、幼女のような白亜……その者たちを、

何と呼べばいいのだろうか。

「……君がいてくれて良かった、カイン。君がいなければ、ぼくはきっと、狂っていた……」

窓ガラスを伝う雨のように静かな口調で、透は過去を見るように、ゆっくりと言つた。

カインは黙って聴いている。普段から、口数が多い方ではないの

だろう。だからこそ、優しい面貌の中にも、得体の知れない何か、浮かび上がる。

「ぼくが目的を遂げるためには、みんなの力が必要だ。——でも、『黒都』は駄目だ。『黒都』だけは出さないように見張っていてくれ、カイン。『黒都』が出れば、ぼくは、また……」

恐怖とも、悍ましげとも受け取れる表情で、透は言った。

カインの表情も、今までとは打って変わって、深淵を覗くように強ばっている。

黒都——。紅蓮も口にしていた名前である。その名の主の出現は、二人に取って、一体、何を意味するものなのであろうか。

「黒都だけは……駄目だ……」

震えるように繰り返し、透は、カインの存在を確かめるよう、服をつかんで、すがりついた。

カインの胸の中に顔を埋め、悍ましさを忘れようとするかのように、唇を結ぶ。——いや、その漆黒の瞳に灯っている輝きは、淫靡で妖しい色香に満ちた、欲望、ではないだろうか。

透の手が、カインの腰をゆるりと這い、下肢の狭間に、滑り込む。

その行為に、カインの表情が、きつく、変わった。

サッ、と透の手から体を離し、目の前の存在を厳しく見据える。

透でありながら、透ではない者を。

「君は……紫生か？」

と、代わった人格に、問いかける。

「ハッ。相変わらず、僕のセックスの相手はしてくれないんだな。

僕はもう勃ってるんだぜ、カイン。これから、僕を慰めてくれる相手を見つけないかなきゃならないのかい？」

紫生か、と問われた人格は、革のボトムの中に指を忍ばせ、欲情して堅くなっているモノを、自らの手で扱きながら、皮肉げに言った。

カインは何も応えず、くるり、と紫生に背中を向け、白亜が散ら

かしたマリオネットの包装紙を片付け始めた。

「ちえつ。こっちは、『青華』の代わりに、『青華』のフリをして、デ・クレシェンツォに抱かれてやってる、ってのにさ。少しくらい、労ってくれてもいいんじゃないのか？」

不機嫌な口調で、紫生は言った。

「君は、男なら誰でもいいんだろう」

背を向けたままの言葉である。

「誰でも？——ハッ！ 不能者^{インボ}は勘弁してもらいたいね。僕は、太くて堅いモノをぶち込んでもらいたいんだ。僕が悲鳴を上げて悶え苦しむような、最高のモノを……」

堪え切れないように自慰を始め、屹立した欲望を扱きながら、紫生は喉を反らして、喘ぎを零した。

顔立ちが美しいだけに、その行為は、神々の美酒より、人々を酔わせるものであつただろう。

AREA・1 米蘭（ミラノ）？

SCAPEGOAT・2

アジアを中心に、オリエンタルなイメージを強調した衣装を纏う、女たちが、いる。

記者も大勢、詰め掛けている。

目当てはもちろん、『青華』である。

だが、ショーを明後日に控える、デ・クレシェンツォのリハーサル会場に、その姿は、見当たらなかった。もとより、『青華』が記者たちの取材の申し込みを承諾したことなど一度もないのだ。当然、マスコミの前にも、おいそれと姿を見せては、くれない。

だが――。

突然、会場内に、おおつ、と低いどよめきが渡った。記者たちが、一斉に表情を変えて、その一点を見つめている。

そこには、長い髪を一糸の乱れもなく背に零す、麗しい東洋の女神が立っていた。デ・クレシェンツォの方へと歩みを向け、記者たちなど相手にもせず、冷たいまでの神秘を放っている。

まるで、そこだけが別世界と化してしまったかのような、華やかさ、であった。

「お、おい……あれが『青華』かよ……。何て女だ……。とんでもない雰囲気じゃないか。まさに、東洋の神秘だな……」

「あ、ああ……。何か、妙な気分になる……」

シャッターを切ることも忘れた様子で、記者たちが口々に呟きを零す。

オリエンタルな前合わせのキモノにも似た衣装を纏う『青華』の姿は、人々の視線を釘付けにするのに、充分であっただろう。

美しいだけではなく、何か独特の雰囲気があるのだ。他のモデルたちには絶対に持ち得ない、不思議な色香、とも言うべきものが。「驚いたな……。マスコミ嫌いで、記者がいる間はリハーサルにも姿を見せない、と聞いていたのに……」

「全く……。今日はツイているらしい。写真があれば、記事も——」
「そこまで言い、やっと、シャッターを切っていないカメラの存在に気づいたのだろう。記者たちは、慌てカメラを構え直し、一斉に『青華』へとレンズを向けた。」

一つのフラッシュを皮切りに、そこかしこで、シャッター音が、鳴り響く。奇妙な虫でもいるのか、と思えるような連続音である。だが——。

「本日の取材はここまでです！ 記者の皆様はお引き取りください」
スタジオ内のスタッフが、記者を追い払うように前に立った。——いや、事実、追い払っているのだ。

「え？ ちょっと待ってください。『青華』がやっと出て来たのに——」
「また、明後日のショーでご覧ください。ここからのリハーサルはお見せ出来ません」

「待ってください。一言だけでも——」

「シニョリーナ・青華っ、デ・クレシェンツォとの関係は——っ」
「あの噂は本当ですかっ！ デ・クレシェンツォとの結婚も考えている、というのは——」

「一言お願いしますっ、シニョリーナ・青華っ！」

そこら中で、パシヤパシヤとシャッター音が重なり合い、いくつものフラッシュが、青華を包んで、その神秘を浮き彫りにする。

彼女の美貌と妖しさには、国籍など関係ないのだ。

「やれやれ。ファッション界の記事を書きたいのか、三流ゴシップ記事を書きたいのか判らん連中だ」

亜麻色の髪に、口ひげを蓄える五十歳過ぎの男が、青華の傍らに来て、苦々しげに呟いた。

貫録のある物腰は、超一流のデザイナー、と称されるに相応しい

ものであつただろう。

彼こそ、青華を日本から連れて来たトップ・デザイナー、パリコレやミラコレでもその名の高い、デ・クレシェンツォ、である。

「きつと、カメラを持つと人格が変わるのよ」

冷やかに、そして、楽しげに、青華は言った。

紅を引いた唇を持ち上げるその様は、戦慄を覚えるほどに、美しい。漆黒の瞳がさらに際立ち、見る者全てを、虜に、する。

魔性、だ。

彼女の美は、男たちだけではなく、女たちさえも、虜にする。その魅力の元に跪かせ、片手で易々と魂を抜く。

モデルたちも、その姿に溜め息をつき、ぼう、と東洋の神秘に見惚れていた。

「やつぱり『青華』には敵わないわよね……」

「ホント。彼女以外のアジア人がショーのトリを取るのには納得できないけど、彼女がトリじゃあ、何も言えないわ」

名の知れたトップ・モデルたちの中でも、青華はさらに頂点にあり、衣装合わせのための控室なども、全て個室が用意され、何でも特別待遇を受けているのだ。それでいて、そのことに文句を言うモデルは、一人もいない。それほどの魅力を、青華は余りあるほどに備えている。

一体、どれほど神々の寵愛を受ければ、その妖しい美貌と魅力を授かることが出来る、というのだろうか。——いや、それは神々に与えられたものではなく、悪魔に魂を売り渡して、手に入れたものであつただろうか。

AREA・1 米蘭（ミラノ）？

「ねエねエ、あそこにいる金髪の青年、誰かしら？」

「え、どこ？」

「あのドアの側よ。優しげで、物静かな感じの、髪の長い……。彼もモデルかしら？」

そこには、壁に凭れて立つ、秀麗な面貌の青年がいた。ショーのモデルだとしても、決しておかしくはない長身である。

「ああ、彼は『青華』のご主人よ」

「ご主人っ！ 『青華』って、結婚してるの？」

「そうらしいわよ。姓だって、日本名じゃなくて、ローウェル、っていう英国名だし……」

「へエ……。じゃあ、『青華』とデ・クレシエンツォが怪しい仲だ、っていう噂もデマなの？」

「でしょうね。だって、あんなに素敵なご主人がいるんですもの」
そのモデルたちの囁き合いは、パンパン、とチーフ・マネージャーが手を打つ音で、ピタリ、と止まった。

「さあさ、お喋りはおしまいよ。明後日のショーを失敗させる積もりなの？」

険のある四十代半ばのチーフ・マネージャーの声に、モデルたちも、リハーサルに戻り始めた。

チーフ・マネージャーの厳しさは、今日に始まったことではないが、このところは特に、機嫌が悪い。ファッション界の女性らしいスタイルも、細身の体には棘々しく映り、苛立ちばかりがよく目立つ。それは、今まで全て自分の思い通りに動かすことの出来ていたモデルたちの中に、そうは行かないモデルが混じってしまったせいだったかも知れない。険しい視線も、無言のままで『青華』に向くことが多かった。

「行こう、青華」

モデルやスタッフたちがリハーサルを始める中、デ・クレシェンツォは、衣装合わせのための控室へと、青華の肩を促した。奥にある、個室である。

そこに入り、ドアを閉じる。

壁に凭れ掛かっていたカインの姿は、いつの間にか見えなくなっていた。あれほど目立つ容貌の青年でありながら、気配さえ立てず、いつの間にか人々の視線の中から消えていたのだ。

その姿は、たった今、青華とデ・クレシェンツォが消えた控室の前に、あった。中の様子を窺うでもなく、ドアの脇に立っている。

控室の中では、衣装合わせのために服を脱ぐ青華の姿が、あった。――いや、衣装合わせのため、だろうか。

「きれいだ、青華……」

デ・クレシェンツォの手が、露になった青華の肌へと、おずおずと伸びる。

引き締まった体軀は、華奢な腰も、美しいラインも、どれも見事に整っている。少年らしい、しなやかな肢体である。

舌が、伸びた。

青華の中心に顔を埋め、デ・クレシェンツォが、愛しげにそれを口に含んでいる。敏感な先端を舐めては、喉の奥までそれを求め、吸い付くように引き戻す。その愛撫に応え、青華の中心が、熱を帯びて育ち始めた。

「あ……っ」

しつとりと潤う肌にも似て、細い吐息が、悩ましく、零れ、落ちる。

「や…… あっ、あ……っ」

続く愛撫に、青華は切なげな表情で、それを求めた。――いや、青華ではなく、青華のフリをした紫生、である。

色を求めるその眼差しは、総毛立つ官能を映している。

その青華の中で――いや、紫生の中で、眉を潜めるような会話が、続いていた。

『あの紫生の色狂いは何とかならないのかしら？ あれが私ですって？ 冗談じゃないわ』

本物の青華が、唇を歪めて、不満を零す。

『でも君は、デ・クレシェンツォに抱かれるのは厭なんだろ、青華？』

皮肉げに視線を持ち上げ、そう言ったのは、自信に満ち溢れた明るい面貌を持つ少年、である。

『それはそうだけど……。あなただって、あんな変態は願い下げでしょう、夏黄？』

『俺は元々、女にしか興味はないさ』

夏黄、と呼ばれた明るい面貌の少年が、肩を竦めるように、言葉を返す。

『ねー、なんのお話し？ 白亜も聞きたい』

幼い声が、入り込む。

『あなたは駄目よ、白亜。——ほら、向こうで緑乃に遊んでももらいなさい』

その視線の先には、おとなしそうな少年が、いた。

『やだやだっ。白亜も聞きたいっ！』

白亜は、ぶんぶんと首を振り回して、だだをこねる。

『しーっ！ 静かに。透が目を醒ますでしょ』

『だってー……』

『透ならまだ何とかなるけど、黒都が目を醒ましたらどうなると思うの？』

その言葉に、白亜の面が強ばった。

白亜だけでは、ない。他の面々も、同じように恐怖の形相を焼き付けている。

『おいおい、青華。白亜に脅しをかけてどうするんだよ。俺だって、

背筋が凍るぜ』

身震いしながら、夏黄が言う。

『私だって……言いたくないわよ。紅蓮に近寄るのも厭なのに』

『紅蓮がいるから、黒都は目醒めずにいるんだよ。——そうだろ？

透が危険な目に遭っても、先に紅蓮が飛び出すから、黒都は手を出さずに眠っているんだ』

『……』

『俺たちは、透のためにも、黒都だけは外に出しちゃいけないんだ……』

AREA・1 米蘭（ミラノ）？

夕暮れの広場では、無数の鳩が石畳に舞い降り、貪欲に餌を求めて、人々の踏み出す足になど脅えもせず、忙しなく首を動かしていた。

敷き詰められた石畳に映える黄昏は、広場を行き交う人々の一人が消えたところで、何の不思議もないように、思わせる。それほどに切ない光景、であったのだ。

その黄昏の一番の餌食になりそうな少年が、広場に、いた。頼りなげで、儚げで、今にも消えてしまいそうな雰囲気をして、黄昏の中に座り込み、ただ茫と鳩を眺めている。膝の上のスケッチブックも、ただの一度も開かれては、いない。

「声でもかけないと消えてしまいそうだな、君は」

その少年の傍らに立ち、カインは言った。

「……え？」

少年は、その言葉さえ聞いていなかったように、戸惑いながら、顔を上げる。動作も、鈍い。

「いや、何でもなし。邪魔をして悪かった。好きなだけそうしていればいい」

と言ったところで、広場に来てから、すでに、二時間以上、経っているのだ。その間、儚げな少年がしていたことと言えば、鳩を眺め、色を変える空を眺め、行き交う人々を眺め……他の人間とは時間の進み方が違うように、ただぼんやりと過ごしているだけである。

「あ……ごめん。また、ぼく、茫として……」

申し訳なさそうな表情で、少年は、言った。

「いや。——絵は描けそうか？」

「まだ……。ぼくは……とろいから……」

「急ぐ必要はないさ。君の描く絵は、君そのものだ、緑乃……。時間がゆっくりと流れているのが、よく解る」

カインが言うと、緑乃は嬉しそうに、頬を染めた。

他の《存在》という時と違い、カインの口数が多いのも、当然のこと、であっただろう。カインが黙っていれば、緑乃は何時間でもじっとしたまま、自分の世界に浸っているのだ。

浮世離れしている、というか、自分のペースを崩さない、というか、現代社会の流れにはついて行けない少年、であつた。

もちろん、そんな少年であるから、名声を得るために絵を描いている訳でもなく、ただ自分の好きなことをしている、というに過ぎない。たとえ、その絵が、画商たちが挙って欲しがる絵であろうと……。

「ねエ、カイン……」

「ん？」

「ぼくは、透の役に立てるのかな？　ぼくは……こんなだし、他のみんなみたいにやり柄もないし……。ただ、無駄に時間を費やしているだけのよう気がする」

緑乃は、不安げな表情で言葉を綴り、小さな顎を持ち上げた。

「……君は君でいいのさ。少なくとも、私は君といると気分が落ち着く」

カインは優しい眼差しで、そう言った。

緑乃の頬が、薄紅色に、ポツ、と染まる。

そんな小さな褒め言葉さえ、彼にはとても嬉しいことなのだ。自らの美しい容貌にさえ、得意意識をもたず、また、気づいているのかいないのかも、定かではない。

「ぼく……透が好きなんだ。だから、透の力になりたい。青華や紫生みたいに、人と話するのは苦手だけど……。藍香みたいに、ピアノもヴァイオリンも上手じゃないし、朱道みたいに、何の情報も探って来れないけど……。何か出来れば、嬉しい」

と、カインを見上げる。

「……透の子供時代のことを話してくれないか。よく一緒に遊んだらう？」

黄昏を見つめるように、カインは言った。

緑乃は、コクン、と素直に一つ、うなずき、話を始める。

「透は……いつも、ぼくたちと仲良くしてくれた。お義父さまに蔵の中に閉じ込められる度に、ぼくたちを呼び出して、泣きながら……。それでも……。ぼくたちといると、とても楽しそうだった。透には、ぼくたちだけが遊び相手だったんだ。暗くて、埃臭い蔵の中だけが遊び場だったけど、《友だち》も一杯、増えて、楽しくて……。機械に詳しい《友だち》や、スポーツなら誰にも負けない《友だち》……。凄いなだよ。世界の記録にだって、届く素質があるんだ。藍香だって、どのコンクールに出ても負けなくらい、ヴァイオリンやピアノが上手だし……」

「……透も、君たちがいたから、蔵の中に閉じ込められても怖くなかった、と言っていたよ」

その言葉に、緑乃がまた、頬を染めた。

「ぼくたちは……。透が大好きだったんだ……。紅蓮も、小さい頃は、あんなに残忍じゃなかったんだよ。そりゃ、昔から気は強くて、乱暴なところもあったけど……。今みたいに、すぐに人を殺したりすることはなかったんだ……。透のお義父さまが……。あの人が、透に酷いことをするから……。とても酷いことをするから……。だから、紅蓮も我慢出来なくなつて……。だって、本当に酷いことをするんだ。透はまだ小さい子供だったのに、あんな……。だから、ぼくたちは、みんな透を守ろう、って……。でも、あんまり酷くて、みんながパニックに陥った時、黒都が……。黒都が出て……」

緑乃の声が、恐怖に震えた。肩を抱き込むように身を縮め、黄昏の中に蹲っている。

「もういい、緑乃。君がいつまでも《友だち》でいてくれれば、透もきつと喜ぶ……」

震える緑乃の肩を優しく叩き、カインは暖かい眼差しで、言葉を綴った。

「ぼく……。ぼく、黒都が……。怖い」

「……。私もだ」

普段は眠っていて、目を醒まさない、黒都——。決して、彼を目
醒めさせてはならないのだ。

AREA・1 米蘭（ミラノ）？

どれくらい、そうしていただろうか。

カッーン、カッーン、と石畳を踏む、高い靴の音が響き渡った。陽は暮れ、辺りはすでに闇の中に堕ちている。

鳩の姿も、人の姿も、見当たらない。

カインの姿も、いつの間にか消えていた。

広場には、緑乃だけが佇んでいる。

靴音は、女であった。四十代半ばの、きつい顔立ちをした女である。茶色い髪を耳の下で切り揃え、ファッション界に相応しい、垢抜けたシンプルなスタイルをしている。体つきも肉感的ではなく、細身で、神経質そうな印象を与える。

「時間通りですね、チーフ」

緑乃は、その女性を前に、腰を上げた。

いや、彼はもう緑乃ではない。

そして、目の前にいる女性は、デ・クレシェンツォのリハーサル会場にいたチーフ・マネージャー、カルラ・プロファアーテ、であった。

「その呼び方はやめてちょうだい、夏黄。青華とそっくりの顔でそう呼ばれると、まだ仕事をしているような気分になるわ」

「失礼、シニョーラ・カルラ……。姉が、いつもそう呼んでいるもので……。どうぞ、車がある」

有閑マダムと若いツバメ、としか見えない二人は、静かな広場を後にして、道路の脇に止めてある一台の高級車に乗り込んだ。

二人ともリア・シートに腰を下ろし、ゆったりと、くつろぐ。

運転席には、先に姿を消したカインが、乗っていた。その姿は、前後の座席を遮る黒いフィルム張りのシールドのために、リア・シートからは、見えない。

「出してくれ」

その夏黄の声と共に、車は滑らかな動きで走り出した。

「本当に、声まで青華に似ているのね」

わずかに眉を顰めて、カルラが言った。

「よく言われますよ。二卵性双生児ではなく、一卵性双生児みたいだと……。ぼくが青華に似ているのは厭ですか、シニョーラ？」

「カルラよ」

「シニョーラ・カルラ……」

妖しさを含む眼差しで、夏黄は、カルラの瞳をじっと見据えた。

カルラの表情が、恍惚と溶ける。

「彼女は、女の私から見ても嫉妬の対象にならないほどに美しいわ。そして、あなたも……」

と、夏黄の視線に、熱を灯す。

唇が触れ、重なった。

冷たい舌が絡み付き、体の中心を疼かせる。

「ん……あ……」

舌の動きに、堪え切れない吐息が、零れ、落ちた。

首筋に滑り降りる淫靡な舌に、細い喉が反り返る。

情事は、車の中で性急に続いた。そして、それが果てる頃、

「愛してるわ、夏黄……。私の可愛い坊や……」

その言葉が合図のように、銀色の光が、鋭く、走った。

カルラの肢体が、刹那、強ばる。

「……ぼくも、年上の女性の方が好きですよ」

抑揚のない声で呟くと、夏黄は、カルラの体から、手を、離れた。

ドサ、っと、カルラが、シートに突っ伏す。

裂けた喉から噴き出す血が、シートにたっぷりと吸い込まれる。

夏黄の手には、ナイフがあった。たった今、カルラの喉を掻き切ったナイフである。

前後の座席を切り離していたシールドが、電動音と共に、ゆつくりと開く。

「……紅蓮か？」

運転席から、カインが言った。

「いや、俺は夏黄だよ。紅蓮は、透に危険が迫らない限り、滅多に出て来ないさ」

「そうか……。この先で車を捨てる」

「ああ。カルラは男に犯された後で殺されたんだ。女の青華に疑いはかからないさ。——この車の持ち主には気の毒だけど」

血を含んだシートを見据え、夏黄は肩を竦めて、軽く言った。

シートを取り替えたところで、この車の持ち主が、もうこの車に乗る気にならないことは、容易に知り得る。

そして、イタリアでは、車の盗難など珍しくもない。盗んでください、と言わんばかりに止めてあった車の方が、悪いのだ。

「『灰裂』には、機械いじりだけじゃなくて、盗みの才能もあるんじゃないのか？」

その夏黄の言葉に、フツ、と鼻を鳴らすような笑みが、零れた。

窃盗、スリ、強盗……泥棒の多い物騒な国、というイタリアのイメージは、もはや覆しようもなく、世界各国に浸透している。

子供たちも手慣れたもので、昼間の繁華街であろうと、平気で盗みを働く。もつとも、盗まれるのは、間の抜けた観光客がほとんどなのだが。

「なあ、カイン。モデルたちの中にも、青華のことを調べようとしている奴がいるかも知れないぜ。俺が突き止めてやるうか？」

「……。結構だ。私が側で見張っている」

「ちえっ！ 男が欲しくて、ホルモンを撒き散らしている女が山ほどいるっていうのにさ。それも、青臭い処女じゃなくて、成熟した『女』ばかりが——。その気にならないのかい、カイン？」

「……」

「まあ、青華ほどの美人はいないけどな」

車は、物騒なイタリアの街を、警戒もせずに、走り続けた……。

AREA・1 米蘭（ミラノ）？

薄暗いその部屋は、暗室であつた。

薬品の匂いが、鼻を突く。

細長い影は、フィルムであろうか。

その向こうに、肩幅の広い男の人影が、ある。三二、三歳だろう。肩につくつかないかで切り揃えられた真つすぐの髪が、手に持つピンセットの動きに合わせて、時折、揺れる。

広い肩幅も、がっしりとした、という印象はなく、女性が焦がれそうな、洗練された雰囲気、纏っている。

カメラマン、という言葉よりも、フォト・アーティスト、という言葉葉が似合う青年であつた。

その彼の手元には、写真がある。

美しい少年の写真である。

優しい青年と共にいる写真も、ある。

少年は黒髪の東洋人だが、青年は金髪の欧州人で、二人共に、被写体としては、一流の美を備えている。充分、芸術としての価値がある存在である。

だが、その写真の中には、芸術とは掛け離れた、血生臭いものもあつた。

「パリが誇る天才アーティストのこの私が、雑誌記者が欲しがるようなスクープを撮るハメになるとは、な」

写真を見ながら、ボソリ、と呟く。

唇は、嘲笑のように歪んで、いる。

自らを天才と呼ぶ彼には、相応しい表情であつたかも、知れない。写真は数枚、あつた。

広場で見かけた少年の写真である。

儚げで、頼りなげで、今にも黄昏の中に入れてしまいそうな表情をしている。

その表情を見て、思わずシャッターを切ってしまったのだ。屋内から広場を覗いて撮ったものでも、その表情は、見事に美しく捕らえられている。

だが、その後、とんでもない写真を手に入れることになった。

車の中で犯され、喉を掻き切られた女の写真である。

もちろん、その前に、その車から降りて来る金髪の青年と、黒髪の少年の写真も、撮ってある。返り血一つ浴びてはいないが、彼ら二人が殺したことは、確かであった。

広場から車に乗るまで、女は確かに生きていたのだ。生きて、自分の足で歩いていた。

そして、その女の顔は、彼には見覚えがあった。デ・クレシェンツォのチーフ・マネージャー、カルラ・プロファアーテである。

当然、彼女と一緒にいた少年が、誰に似ているのかも、すぐに解った。カルラを殺したであろうその少年は、デ・クレシェンツォが日本から連れて来たモデル、青華に似ていたのだ。それも、双子か、と思えるほどに……。

戸惑うことは、それだけでは、ない。

広場で見かけた少年は、頼りなげで、今にも消えてしまいそうな浮世離れた雰囲気纏っていたのに、カルラを殺し、車から降りて来た少年は、自信に満ち溢れた面貌をし、現実を見つめるに相応しい瞳を持っていた。

同じ顔、同じ姿形、同じ服装をしていながら、その二人——広場で見かけた少年と、車から降りて来た少年が同一人物であるとは、彼にはとても、思えなかった。

レンズを通して見れば、人の内面も見えて来る。ほんのわずかな心の移り変わりさえ、手に取るように、見て取れるのだ。

もちろん、顔の造りだけを言うなら、二人は確かに同一人物である。そして、青華とも、瓜二つ、と言えるほどに似通っている。だが……。

「今世紀最大のアーチスト、サミュエル・アルファンデリともある

う者が、芸術家から雑誌記者に転向する積もりかい？」

ピンセットに摘まんだ写真を持ち上げ、サミュエルは自分自身に問いかけた。——いや、それは問いかけてではなく、皮肉、であつただろうか。

サミュエル・アルファンデリ——。パリを初めに、世界各国に名を知られる、天才アーティストである。豪華な金髪と青い瞳は、その容姿だけで、女性ファンを魅了する。

「少なくとも、この写真を警察に届けて、《天才芸術家サミュエル・アルファンデリ、犯人逮捕に協力》などという、芸術性のカケラもない、マヌケな新聞の紙面にだけは、載りたくないね」

鼻を鳴らすように、独り、呟く。

ナルシスティックな呟きは、そのまま、彼自身を表すものでもあつただろう。

「さて、どうするか……。私としては、あの少年を、ぜひ、モデルにしたいものだが……。それに、青華……」

青い瞳は、これからの深謀を語るよう、妖しい輝きに満ちていた……。

AREA・1 米蘭（ミラノ）？

SCAPEGOAT・3

パシャ、と湯を弾く音が、した。

ゆったりとした大理石のバスタブに、美しい裸体が揺らめいている。完璧な線を結ぶ、造形美術の傑作である。華奢に引き締まった腰も、スラリと伸びる手足も、目に眩しく、輝いている。

「やっぱり、ホテルのバスより快適だな。さすがは、デ・クレシェンツォの別宅だ」^{ヴィラ}

疲れた体を癒すように、透はバスタブの中で手足を広げた。

「青華からの気遣いだ。『透はミラノへ来てから、PCの前に向かいっぱなしで疲れているだろうから』と」

傍らに立つ、カインが言う。

ここは、デ・クレシェンツォが、青華のために解放してくれた、ミラノ郊外のヴィラである。大理石をふんだんに使ったバス・ルームだけでなく、全てが贅沢に造られている。

ショーも大成功に終わり、マスコミを逃れて、少し前に、このヴィラに着いたばかりである。

デ・クレシェンツォは、まだマスコミの相手に、ショー会場に残っている。

今、このヴィラにいるのは、透とカイン、そして、数名の使用人たちだけだった。

「背中を流してくれないか、カイン？」

パシャ、と水音を弾かせ、透はバスタブの中から、体を起こした。

だが、カインは何か他のことを考えていたのか、ハッ、としたよ

うに、顔を上げた。

「——え、あ……何か言ったかい、透？」

と、聞いていなかったことを裏付けるような言葉で、問い返す。

「君が茫とするなんて珍しいな。何を考えていたんだい？」

背を流すスポンジを渡し、透は、カインに背中を向けて、問いかけた。

「青華の……デ・クレシェンツォのショーに来ていた男のことを、少し……。あの男、カメラを持っていたのに、結局、一度もシャッターを切らなかった。そのくせ、青華ばかりをじっと見つめて……」
透の背を洗いながら、カインは言った。

「雑誌記者じゃないのか？」

「さあ……。どこかで見たような気が……」

雑誌記者、というような雰囲気では、なかったのだ。サングラスを掛け、高級なソフト・スーツに身を包み、青華の出番だけを待っていた。豪華な金髪を肩まで伸ばし、まるで、青華の方も彼だけを見つめて当然、というように――。

「変質者に付きまとわれるのも迷惑だなア。危なくて外も歩けやしない。——いや、ぼくに近づいた方が危険、と言っべきか」

カインの方を振り返り、透は、チラ、っと視線を持ち上げた。

その視線に応えるように、カインも、フツ、と瞳を細める。

優しげな面貌は、そういう時、本当に、優しげに見える。

「髪も洗ってくれないか、カイン」

「ああ」

カイン自身もバスタブの中へと足を入れ、服を着たまま、外に湯を飛ばさないように、透の髪を洗い始める。

「……思い出すよ。あの頃、ぼくはまだ八つになったばかりで、髪も自分でうまく洗えなかった。いつも、こうして君に洗ってもらって、その指先が心地よかった。それでも、目にシャンプーが入るのが怖くて、ギョッ、と堅く目を瞑って……」

「……」

「カイン……。ぼくは……。何故、あんな目に遭わなくてはならなかったんだろう？」

幼い日を見るように、透は、ゆらゆらと揺れ動く湯船を、見つめた。

「ぼくは……。お義父^{とっ}さまに、何故、あんな目に遭わされるのかも、解らなかった……。ぼくは、他の子と同じように、自分にも父親が出来たことが嬉しかったんだ。だから……。お義父さまに気に入ってもらおうと、一生懸命努力をした。ちゃんとすることも利いたし、お義父さまの部屋にも、勝手に入ったりしなかった。それなのに……」

不安定な動きを続ける湯が、過去の傷を映し出す。

ただ側に寄っただけで怒られ、話しかけただけで怒鳴られ、それでも、何とか父親に気に入ってもらおうと、不憫なほどに努力をしていたのだ。

父親の機嫌を損ねる度に、蔵の中に閉じ込められ、食事ももらえず……。それでも、母親が出て行った屋敷では、父親だけが頼れる存在だった。

父親とは、そういう厳しい存在なのだ、とも思っていた。

そして……。やっと父が優しくしてくれた、あの日……。透をニューヨークに連れて行ってくれ、貴族の子弟のような、半ズボンのスーツを着せてくれた、あの日。

八つになったばかりのことであつた。

AREA・1 米蘭（ミラノ）？

招待されたパーティに、父親と二人で出掛け、透は、わくわく、と胸を躍らせていた。

だが、そのパーティの席には、貴婦人の姿は全くなく、何人かの紳士がいるだけで、パーティ、と言っても、きらびやかな雰囲気ではなく、薄暗い部屋の中での集い、だった。

それでも、父親と共にいることで安心し、透は少し大人になったような気分さえして、ドキドキ、と大人の世界を覗いていた。——いや、何より、父親が優しくしてくれた、ということが嬉しかったのだ。伸ばした手を握り返してくれるだけで、透は心が蕩けそうなほどに、茫となった。きつと、あれほどの幸福を感じたことは、なかっただろう。

まだ、何の不安も感じては、いなかった。

紳士たちの淫靡な視線が絡み付き、匂いだけで酔いそうなワインを飲まされても、ただ幸せなだけだった。

紳士たちの交わしている言葉も解らなかったが、それで不安になることは、なかった。解らないことが、余計に大人っぽい場所にいるのだ、というような気がして、さらに鼓動が高鳴ったのだ。

そして——。

「透、もうそろそろ湯から上がった方がいい」

不意に、背後から声が届いた。現実のものであるはずのその声は、あまりに静かで、どこか遠くから聞こえて来る声のような気が、した。まるで、あの日の紳士たちの囁きのように……。

あの日、ワインで酔った透の耳には、そう聞こえたのだ。そして、買ってもらったばかりのスーツを脱がされ、その時、初めて不安が過った。

何をされるのか解っていた訳では、ない。それでも、雰囲気が違うことには、気づいていた。

逃げようとすると、紳士たちは、透の周りを取り囲むようにして、手を伸ばした。

何かを言っていたが、透にはその言葉が何であるのかも解らなかった。

紳士たちは、すぐに透の腕をつかみ取った。

父親は助けては、くれなかった。それどころか、助けを求めてすがりついた透の体を押さえ付け、紳士たちに、差し出したのだ。

心が碎けてしまう刹那、であった。

紳士たちが肌を撫で、透の体を弄る中、父親は、ただ黙って見ていただけだった。

何も考えることなく、出来なかった。

紳士たちの体臭がきつくなり、指先が、より一層、不安をかき立てる場所に入り込んでも、逃げることも出来なかった。

「や……やめ……っ」

幼い日の記憶が蘇る中、透はバスタブを擦るように後ずさり、脅えながら、喉を開いた。

その様子に、カインが眉を寄せて、首を傾げる。

「——透？」

「や……いやだ……とーさま……っ」

透の口から零れた言葉に、カインの表情が、ハッ、と変わった。

「透、私は——」

「やめ——っ。いやだあ——っ！ ゆるしてっ。ゆるして、とーさま！ いい子にするから。うるさくしないから。だから……。いやだあああ——っ！」

耳を塞ぎたくなるような絶叫が、上がった。

大理石のバスタブの中、透は手足をバタつかせ、恐怖に歪む表情で、悲痛な叫びを放っている。

「しっかりとするんだ、透！」

暴れ回る透の体を抱きすくめ、カインは強い口調で、呼びかけた。だが、透はそんな言葉など聞こえていないように、涙を零して暴

れ続ける。

「青華！ 夏黄！ 誰でもいいから透と代われっ！」

その言葉に、ふっ、と透の体がおとなしくなった。

カインはゆっくりと、手を離れた。

「……君は？」

「青華よ」

「そうか……」

息をついて、バスタブの中から身を起こす。

頭から全身、ずぶ濡れである。

「あの時を思い出すのが辛いのは、透だけじゃないのよ、カイン。

私だって……辛いわ。出て来たくないほどに」

「……ああ。解っている」

透の父親が、透にどんな仕打ちをしたか――。それは、カインも聞いている。

大勢の大人たちに、幼い透を与えたのだ。男と逃げた母親の子には、それが似合いの姿だ、と言って、まだやっと八つの幼子を、男たちの欲望の対象として、差し出した。

そして、黒都が現れたのだ。男たちの餌食となる透の叫びに、黒都が沈黙を破って、外に出た。

誰もがパニックに陥る中、あの黒都が……。

使用人が来客を伝えに部屋に訪れたのは、濡れた服を着替え、髪を乾かしてからのことだった。

若いメイドである。頬を染め、カインの姿を見上げながら、その来客がどんなに素晴らしい人物かを、まくし立てる。

訪れた人物は、今、パリで話題になっているというアーチスト、サミュエル・アルファンデリ、であった。

そして、その人物の名前を聞くと同時に、カインも、デ・クレシエンツォのショールで青華を見つめていた男が、誰であったのかに思い当たった。

ショールに来ていた時は、サングラスで顔を隠してはいたが、傲慢そうな唇は、確かにその人物がサミュエル・アルファンデリであることを、裏付けていた。

「……悪いが、青華は誰にも会わない。そう伝えてくれ」
カインは無表情に、言葉を渡した。

「え？ ですが、マスコミの方ではなく、あのサミュエル・アルファンデリで——」

「青華はショールで疲れているんだ。そう伝えて、納得してもらってくれ」

耳を貸さずに、冷たく言う。

「はい……」

メイドは意気消沈した様子で、うなずいた。その時だった。

「青華のご主人は、優しい顔に似合わず、冷たいらしい」

勝手に入り込んで来たのか、豪華な金髪を肩まで伸ばす青年が、メイドの後ろから姿を見せた。薄い唇が、皮肉な形に歪んでいる。

彼こそ、メイドが来訪を伝えに来たパリのアーチスト、サミュエル・アルファンデリである。

「……青華に何か御用で？」

抑揚のない口調で、カインは訊いた。

「ああ。少し調べただけでも謎だらけだ。日本のどのモデル・クラブに問い合わせても、青華というモデルはいないと言う。もちろん、本名も何も解らない。今日は、それを聞きたいと思ってね」

「彼女はニューヨークでデビューしたので……。私が持っているモデル・クラブに所属しています。フル・ネームは、青華・ローウェル。私の妻です。あなたに帰っていただこうと思ったのは、私は妻をととても愛していて、その妻をこれ以上疲れさせたくはなかったからです。——これで満足ですか？」

「——」

余りにも、あっさりとしたカインの言葉に、サミュエルの表情が、唖然と変わった。そして、次には肩を揺らして笑い出す。

「クックツ……。なるほど——。では、君は彼女の男装趣味にも付き合つて、広場で仲睦まじく過ごしながら、人殺しもする訳だ」

「……」

「あの青華の長い髪はカツラかい？ それとも、広場で見た短い髪の方がカツラ？」

サミュエルは、ツカツカと部屋の中に入り込み、探るように、カインの表情を垣間見た。

メイドは、どうしていいのかわからない様子で、ドアの前に突っ立っている。

カインはそのメイドを下がらせ、それから、サミュエルの方を振り返った。

「あなたの勘違いですよ、ムツスイユ・アルファンデリ。青華も私も、広場に出掛けたこともなければ、人殺しもしていない」

と、顔色一つ変えずに、淡々と言う。

事実、『青華』は広場には出掛けていないし、カインは人を殺していない。

「別に、私は君や青華を脅しに来た訳じゃない。ただ、青華に私のモデルになつてもらいたい、と思つてね。——この写真と引き換え

に」

そう言つて、サミュエルがスーツのポケットから取り出したのは、黄昏の広場に佇む『緑乃』と、その傍らに立つカイン、そして、車から降り立つ『夏黄』と、同じように車を降りるカインの写真であった。

「これは君たち二人の写真だ。——そうだろう?」

と、唇の端を持ち上げる。

「……ええ、そうみたいです」

驚きもせず、そして、否定もせずに、カインは言った。

「認めてもらえたのなら、話が早い。私も、頭の悪い人間とは話をしたくないものでね」

「あなたのフォト・アーティストとしての腕には感服しますよ、ムツスユ・アルファンデリ。さすがはパリの生み出した芸術家だ。こんな見事な『合成写真』は初めて見る」

その言葉に、サミュエルの瞳が驚愕に変わった。

「——。な……っ。これのどこが合成写真だと言ったっ!」

と、怒りを露に、怒鳴りつける。

あまりに冷静なカインの態度も、余計に怒りを煽ったのだろう。カインは取り乱すこともなく、立っている。眉一つ動かさず、人の言う感情など持ち合わせていないかのような表情で。

「では、これはどうだ! 君たちが乗っていた車の中にあつた死体だ。カルラ・プロファアーテ——。デ・クレシエンツオのところのチーフ・マネージャーだ。君が犯して殺したんだろう?」

最後の切り札であるかのような写真を取り出し、サミュエルは言った。

「……他の写真との繋がりから見れば、私が犯して殺したようにも見えますね」

「見えるんじゃない! 君が殺したんだっ」

「では、そう言つて警察に持って行かれてはどうですか? ここは警察ではありませんよ」

「――」

飽くまでも冷静なカインの言葉に、サミュエルはきつく、こぶしを握った。

「玄関までお送りしますよ、ムツスイユ・アルファンデリ。私の精液が、カルラ殺害の犯人特定のために必要なら、快く警察に提供しましょう。疑いは早く晴れた方がいい」

「貴様――っ！」

相手にもしないカインの態度に、サミュエルは、握ったこぶしを振り上げた。

だが――。

カインは、そのこぶしを、いとも容易く受け止めた。片手で難無く受け止めたのだ。それだけでなく、常人の目には捕らえることも出来ない速さで、もう一方の手を、サミュエルの鳩尾に埋め込んだ。その物静かな容姿からは、窺い知れない敏捷な動きである。

「ぐうつ！」

背中を丸め、サミュエルは床の上に蹲った。

カインの表情は、変わってはいない。呼吸一つ、乱しては、いない。

「なるほど……。青華の夫は……。ボディ・ガードも兼ねている、という訳か……」

押し殺すような声で、サミュエルは言った。そういう声しか、出せないのだ。

「……私が本気になっても敵わない相手もいますよ」

「え……？」

「これは忠告です、ムツスイユ・アルファンデリ。二度と青華に興味を持たないようにしなさい。でなければ、あなたの身の安全を保証できない」

「……その優しい顔で、脅しかい？」

「あなたのために思っていているんです。あなたは、青華を知らなすぎる」

カインがそう言った時であつた。

奥のベッド・ルームへ繋がる扉が、ボタン、っと大きく開け放たれた。

ハッ、としてそこへと、視線を向ける。

そこには、青華が立っていた。——いや、青華では、ない。長い髪もしていなければ、女の装いもしていない。

手には、鞭を持っている。

「青華……？」

不審げな顔で、そう言ったのは、サミュエルであった。

「生憎だったな。オレが青華なら、おまえも生きて帰れただろうが

——」

青華と瓜二つでありながら、青華でない者が、ニヤリ、と笑う。

手に持つ鞭が、ギシ、っと不気味な音を立てた。

「よせつ、紅蓮！ 場所を考えろ——っ」

そのカインの言葉を聞く様子もなく、紅蓮が鞭を振り上げる。

カインは咄嗟に、床を蹴った。

ビシ——っ、と鞭を打つ激しい音が、響き渡る。

「くうっ！」

苦鳴を上げたのは、カインであった。サミュエルを抱え、床に転がった刹那、鞭が足を掠めたのだ。もちろん、カインでなければ、掠めるくらいでは済まなかっただろう。

「どういう積もりだ、カイン？ その男を生かして帰す、とでも言う積もりか？」

氷のような視線で、紅蓮が言った。

「場所を考えろ、と言ったはずだ……。彼は、あの麻薬中毒者たちのように、どこで死んでも構わない人間ではない。ここで殺したらどうなるか……」

身を起こしながら、カインは言った。足を痺れさせる痛み of のせい、額に汗が滲んでいる。

サミュエルは、訳が解らない様子で、茫としている。日本語が解らないせいもあるだろうが、目の前には、もっと訳の解らないこと

が展開しているのだ。青華と瓜二つの少年が、それでも、青華ではなく、況してや、広場で見かけた浮世離れた少年でもなく、車から降りて来た強かな少年でもなく、また、別の、同じ顔の少年が、残忍に鞭を振り上げたのだ。それも、脅しではなく、端からサミュエルを殺すために。

同じ顔をした人間が、四人も存在しているのだ。

すぐに受け入れられることでは、なかった。

「オレの知ったことじゃないさ。そいつを生かして帰せば、透の身に危険が及ぶ」

紅蓮が、再び鞭を振り上げる。

「よせ、紅蓮！ 誰か紅蓮を止める——っ！夏黄！ 朱道！ 目を醒ませ、透！」

その呼びかけに、鞭を振り上げる紅蓮の手が、空を切る前に、ピタリ、と止まった。

表情も、苦しげに大きく歪む。

だが、鞭を持つ手は、まだそれを放とうとするかのように、震えている。まるで、誰かに押さえ付けられているかのように。

まだ、誰とも代わってはいないのだろう。代わるまい、と紅蓮が拒んでいるのだ。

「やめるんだ、紅蓮！」

自分で自分を制止するように、紅蓮が言った。少なくとも、他人にはそう聞こえただろう。

だが、実際にそう言ったのは、夏黄である。

「煩い！ オレに指図をするなっ」

また、紅蓮が自分自身を怒鳴りつける。今度は本物の紅蓮である。そして、夏黄に対しての言葉であった。

「指図じゃない。俺たちは透を守るためにいるんだ。——そうだろう？ カインの言う通りにするんだ」

「冗談じゃない。オレはオレのやりたいようにするさ。もちろん、透を守るために」

「駄目よ、紅蓮！　あなたのしていることは、透を破滅に導くための行為でしかないわ」

そう言ったのは、青華であった。

もちろん、それも他人から見れば、全て紅蓮の独り言に過ぎない。サミュエルも、ますます戸惑いを深める表情で、呆然と紅蓮を見上げている。

「放しやがれっ！」

「やめてえ——っ！　もうやめて、紅蓮！　透がかわいそうよっ。透をいじめないでえっ」

白亜が泣き出しそうになって、叫びを上げる。

凶暴な面貌から、突然、幼い子供のような面貌に代わる紅蓮の姿は、異様でも、あった。

「紅蓮……ぼくも、白亜の言う通りだと思う……。ぼくたちは……透を追い詰めるようなことをしちゃあ、いけないんだ。ぼくは……ぼくは、何の役にも立たないけど……でも、透にだけは迷惑をかけたくない」

視線を落として、緑乃が言う。

「ハッ！　オレが透を追い詰めている訳じゃない。周りの奴らが透を追い詰めて行くんだ」

紅蓮は、まだ鞭を離さずに、抵抗している。

「おい、紫生、もっとしっかり紅蓮を押さえてろよ！」

「やってるだろっ。僕だって、デ・クレシエンツォの相手に疲れてるんだ。灰裂や朱道に言えよ！」

一人の人間が、次々に違う顔付きで言葉を交わすその光景は、奇異、としか呼べないものであった。

ある時は荒ぶる神の如く、ある時は女のような口調で、ある時は幼い仕草で、ある時は少年らしい顔付きで、ある時は消え入りそうなおとなしい声で、ある時は、けだるさを含んだ眼差しで……。テレビの画面を切り替えるように変わる人格は、初めて目にする人間には、戸惑いを通り越して、恐ろしい、とも映るものであったかも、

知
れ
な
い。
。

「これ……は……」

サミュエルの瞳も、震えていた。

「これは……多重人格……なのか……？ 青華は……青華は一体……何なんだ……？」

と、もはや収集のつかないパニックを前に、眩きを、零す。
その時だった。

「キヤアアア——っ！」

突然、全てを引き裂くような悲鳴が上がった。女が発したような叫びであったが、それも、目の前の少年が上げた叫びであった。そして、頭を抱えるようにして身を縮め、床の上に蹲っている。

「青華……藍香か？ どうしたんだ、藍香？」

カインは、その様子を見て、問いかけた。

「黒都が……黒都が……」

藍香が震える声で、喉を開く。

目を睜るに充分な言葉であった。

「逃げるんだ、カインっ！ 黒都が目を醒ます！」

そう言ったのは、夏黄であった。

続いて、青華も同じように、声を放つ。

「逃げるのよ、カイン！ この部屋から——この屋敷から——。黒都はあなたまで殺してしまう！」

「君たちで止めることは——」

「出来ないわ！ 紅蓮でも黒都は止められない。早く逃げて——！ 悲痛な叫びが、カインの足を追い立てる。

「紅蓮のせいだ！ 紅蓮がカインの言うことを聞かずに、彼を殺そうとするから——」

「何だと！ おまえたちが騒いだせいだろう！」

「やめて！ 二人とも！ 早く逃げて、カイン！ もう黒都が——」

——
ピタ、っと白亜の音が、そこで、止まった。
パニックを起こしていた表情が、一転して、風が凪ぐように、静かになる。

妙な妖気が、ある。

不気味な雰囲気、辺りを包む。

それは、今まで目にしていた《友だち》とは、明らかに、違った。
カインは、ハッと体を強ばらせ、サミュエルの腕をつかみ取った。
「来るんだ！」

と、ドアの方へと足を踏み出す。

「ま、待ってくれ。これは一体——」

「死にたくなければ、ついて来い！」

戸惑うサミュエルを厳しく促し、痛む足で翻る。

黒都が目を醒ましたのだ。幼い透が危機に陥ったあの日と同じように——。透の危機を前に、皆がパニックを起こした時と同じように、また、黒都が目を醒ました。

カインは、恐怖を背中に部屋を飛び出し、それをかき消すように、ドアを閉じた。——いや、閉じようとした時であった。

「うわあ——っ！」

サミュエルが、何かに足を取られたように、ボタン、と床の上に突っ伏した。その足には、長い鞭が巻き付いている。

スズ、っと体が引きずられた。

その奥にあるものを見ることは、出来なかった。また、見てみようとも思わなかった。そこまで愚かにはなれなかったのだ。

指を結び、カインは、サミュエルを諦めて、ドアを閉じた。そして、屋敷の外へと駆け出した。

悲鳴は何も、聞こえなかった。

だが、背筋には、冷たい汗が、伝って、いた。

無垢——。いつか紅蓮が、黒都のことをそう呼んだ。

だが、人々はその言葉の意味を本当に理解しているのだろうか。

幼子を見て、

「まあ、純粹無垢で、天使のように愛らしいこと」

と、頬を緩めることが出来る存在ではないのだ。

無垢な人間は、罪も良心も知らない赤子のように、殺意すら持たずに人を殺すことが出来る。氣に入らない、とか、憎らしいという感情もなしに、目の前にいる人間を殺すことが出来るのだ。

赤子が無垢でありながらも愛らしいのは、彼らが決して、人を殺せるほどの力を持っていないからである。もし、何も知らない赤子が、大人と同じだけの力を――それ以上の力を有していたとしたら、それ以上に恐ろしい無垢があるだろうか。

彼らは、殺す積もりもなく、また、相手が誰であろうと構わず、何にも汚されていない無垢な心で、目につく全てに手を伸ばす。

黒都がまさに、その無垢なのだ。

生まれたばかりの嬰兒のように、ものの善悪も知らなければ、禁忌もない。やってはいけないこともなければ、やらなくてはならないことも持つてはいない。

彼こそ、無垢の名に相応しい存在なのだ。

それが恐怖でなくて、何だと言えよう。

この世で一番恐ろしいことは、無垢な人間を目の前にした時なのだ……。

AREA・1 米蘭（ミラノ） ？？

SCAPEGOAT・4

灰皿の上で、最後のネガを燃やし終え、カインは、その燃えカスを流すために、洗面所へと腰を上げた。

原型を止めていないそのネガと写真は、サミュエルのアトリエから持ち出して来たものである。

そして、ここは、作家である一色透とカインが滞在しているホテルの一室であった。

あのヴィラでの事件は、まだ何の報道もされていない。隣家も遠く、メイドも殺されてしまったために、警察に通報する人間がないのだ。

メイドは、カインが殺した。青華があそこにいたことを知っているメイドを、生かしておく訳には行かなかったこともあるし、メイドたちも、黒都に殺されるよりは、カインに殺される方が、余程マシであつただろう。

テレビや新聞は、もっぱらデ・クレシエンツォのショーの成功と、そのショーのチーフ・マネージャー、カルラ・プロファアーテが遺体で発見されたことだけを、伝えていた。

犯人は、まだ捕まつてはいない。犯された直後に殺されていることから、男であることは間違いない、とされている。そして、ショーの後、取材を受けていたデ・クレシエンツォが、その後、自宅へ戻らず、取材陣を巻くようにして行方を暗ましていることから、デ・クレシエンツォが犯人ではないか、と匂わせる報道も伝えられている。

目下、デ・クレシエンツォは行方不明のままであった。

当局がデ・クレシエンツォの行方を探り始めれば、遠からず、あのヴィラでの惨劇も発見されることだろう。

その時は、どういう言葉で、あの凄惨な様が伝えられるのだろうか……。

洗面所では、水を出しっ放しにして、透が何度もえずきながら、胃の中のを吐き出していた。——いや、もう胃の中は空っぽなのか、吐き出しているものは、唾液だけである。

「……眠れるように、薬を持って来ようか、透？」

カインは訊いた。

透は黙って、首を振る。

カインもそれ以上は言わず、灰皿の中の燃えカスを、洗い流した。「眠れば……夢を見る……。もう二度と……あんなことは……ごめんだ……」

「……」

「口の中にも……まだ血肉の味が残って……ぐう……っ！」

また洗面台に顔を突っ込み、瞳を潤ませながら、胃液を吐き出す。幼い日、透の口を犯した男たちのペニスを、黒都は表情一つ変えずに、咬みちぎったのだ。そして、吐き出しもせず、それをゆつくりと咀嚼して、飲み込んだ。

ペニスを咬みちぎられた男たちがのたうち、凍りつく中、黒都の狂気は、それだけには終わらなかった。

透の幼い体を貫いていた男たちの目を抉り出し、他の男たちも、一人残らず残忍な方法で殺して行った。わずか八つの幼子が、大人たちを惨殺したのだ。

父親の死体は、骨まで細かく砕いてあった、という。

透の《友だち》の中で、最大の危険に陥った時に現れる無敵のヒーローであったはずの黒都は、大人たちの余りの醜さのために、狂気の魔人と化してしまったのだ。

カインは、苦しげに洗面台に顔を突っ込む透の背を摩り、緑翠の瞳を、静かに、伏せた。

「……心配いらない、カイン。ぼくは……こんなことで、諦めたりはしないさ」

肩で息をつきながら、透はきつい眼差しで、言葉を吐いた。カインは黙って、タオルを渡した。

口を拭う透の顔色は、死人のように蒼冷めている。

「ぼくは……こんなことくらい……」

「透……」

「言葉も解らないニューヨークで……たった独りになって……。君と逢うまで……。君に逢ってから……ぼくは……」

「ああ、解っているさ、透」

あのパーティで男たちを殺し、父親を殺し、我に返った透は、たった独りになっていた。知らない土地で、右も左も判らない場所であたった独りに。

わずか八つの幼子が、冷酷無比な大都会に、無防備な姿で取り残された。

言葉も解らず、これからどうすればいいのかも判らず、また、黒都がしたことに脅え、狂いそうになっていた時——その時に逢ったのが、カインだった。

三日に一度は雨が降る、というニューヨークで、陰鬱な雨が降る中、カインが透を拾ってくれた。——いや、拾ってくれた、という言葉が正しいのかどうかは、判らない。

ただ、カインに出逢った、ということ、透の身は安全になった。優しいな面貌であり、まだ十代の少年であつたにも拘わらず、そのカインの言葉に逆らうギャングたちなど、ただの一人もいなかった。

誘拐、殺人、レイプ、麻薬など日常茶飯事のニューヨークで、幼い透が無事でいられたのも、全てカインのお陰だった。

カインの住まいは、いつもマンハッタンの最高級ホテルの一室だった。

日本へ戻るまで、透もずっと、そこでカインと共に、ホテル暮ら

しを続けていた。その頃から、カインは寡黙な少年だった。それでも、何日かすると、きれいな日本語で、透に話しかけて来てくれた。そして、日本へ戻り……。

父親が行方不明のまま、透が全ての財産を継ぐことになった。幼い子供が父親を殺して、独りでニューヨークから戻って来たなど、誰も思いもしなかった。

ニューヨークは、人が行方不明になっても、不思議ではない街なのだ。透の父親も、きっとその中の一人になったのだろう、と誰もが哀れむように、囁いていた。

もちろん、本来なら、透の父親ではなく、透自身が、その危険な大都会の餌食になるところだったのだが。

透の父親も、その筋書きを目論んで、透をニューヨークへと連れて行ったのだろう。弄ぶだけ弄んで、ハドソン川にでも捨ててしまえば、それで、日常的な事件が一つ、出来上がる。珍しくもない幼児誘拐殺人事件である。

もちろん、犯人は上がらない。後は、子供を亡くした哀れな父親として、日本へ戻ればいいだけだ。

だが、その父親の目論みは、崩れ去った。その日からずっと、透とカインの関係は、変わることなく、続いている。

透に取っては、蔵の中で遊ぶ《友だち》以外に、初めて心を許すことが出来た存在が、カインだったのだ。

「ぼくが信頼できるのは君だけだ、カイン……。君がいるから、ぼくは……何があっても耐えられる……」

すぎるようなその眼差しは、凍りつくほどの強かな輝きをも、秘めていた。

幼い頃からの《友だち》、そして、カイン……。彼らが透を支えて来た。

「しばらく休んだ方がいい、透。デ・クレシェンツォはおとなしく眠っている」

「ああ。ありがとう、カイン……」

AREA・1 米蘭（ミラノ） ？？

目を醒ました場所は、見知らぬ部屋の、見知らぬベッドの上であった。マットレスだけの、簡素なパイプ・ベッドである。

カーテンが閉じているせいで、部屋の中は薄暗い。

それでも、部屋の造りや、間取りからして、ここが高層アパートの一室であることが、窺えた。ミラノでは、ごく一般的なものである。

だが、どうしてこんなところにいるのかまでは、解らない。

デ・クレシェンツォは、取り敢えず、ベッドの上に体を起こした。

——いや、起こそうとした時、四肢を繋ぐ革ベルトが、ピン、と張った。

ベッドに四肢を固定されているのだ。

頑丈な革のベルトは、デ・クレシェンツォの手足と、ベッドの鉄パイプを繋いでいる。

それだけではなく、体が妙に重く、けだるい頭痛が残っていた。

そして、全裸である。

時間の感覚も、定かでは、ない。

「な……っ。これは一体……」

目を見開いた時だった。

「目が醒めたのね、シニョーレ。デ・クレシェンツォ」

不意に、ベッドの足元から、声が届いた。

顔だけを持ち上げ、その声の方を覗き見ると、そこには、青華がローブ姿で、立っていた。たった今シャワーを浴びたばかりのように、首筋に、長い黒髪を張り付かせている。

その様は、それだけで男を欲情させるような、悩ましさを備えていた。

だが——。

「青華……これは一体、何の真似なんだ……？」

その悩ましさに見惚れながらも、デ・クレシェンツォは、戸惑いを露に、問いかけた。

顎の髭の伸び方からしても、あれから——ショーが終わってから、数日が経っていることは間違いない。体のけだるさも、その長い眠りのせいだっただろう。

だが、数日間も、一度も目を醒まさずに眠り続ける、ということが起こり得るのだろうか。

もし、起こり得るのだとすれば——何日も目を醒まさずに眠っていたのだとすれば、それは、薬のせいではないのか。

記憶は徐々に鮮明になりつつ、あった。

ショーが終わったあの日、マスコミの取材を受け、その後、デ・クレシェンツォは、青華が先に行っているはずのヴィラへ、マスコミを巻いて、向かったのだ。そして、ヴィラへ着いた時、車を降りるなり、背後から誰かに殴られた。首の後ろに手刀を喰らい、そのまま意識を失ったのだ。そして、気がついた場所は、ここだった。

「青華……ここは……」

「ショーの成功のお祝いよ。こういうのも、刺激があっていいでしょう？」

紅を引いた、赤い唇が持ち上がった。

男なら、誰もがその唇を汚し、征服したい、と思うだろう。

「し、しかし、これは……っ」

「中途半端は嫌いなものよ。そんな男になんて、興味もないわ」

冷たい瞳が、突き刺さる。

「あ、あ、私は別に——っ。き、君の望みなら、どんなことでも……っ」

デ・クレシェンツォは、慌てて言葉を継ぎ足した。

「そう……。いい子ね、デ・クレシェンツォ。ご褒美を上げるわ」
ひらり、とベッドの上に優雅に飛び乗り、青華は足元の鉄パイプに腰を下ろした。デ・クレシェンツォの股間に足を伸ばし、爪先で敏感な部分を巧みに弄る。

「青……華……」

デ・クレシェンツォの声が、掠れた。
もうそんな体力など残っていない、と思える体が、青華の爪先に
反応して、熱を帯びる。

「これを女に突っ込んだことはあつて、デ・クレシェンツォ？ あ
なたの、この醜いモノを……」

言いながら、青華は、グイ、っと爪先を押し付けた。

「あうっ！」

苦痛と官能の呻きが、上がる。

「早く応えなさい、デ・クレシェンツォ。応えない子には、お仕置
きをしなくてはならなくなるわ」

「あ、ああ……ある。女にも……あう……っ！」

「素直ないい子ね。愛しているわ、デ・クレシェンツォ」

「あ……ああ、青華……。私も君を……君をとめて、愛している……」

……。君は本当に素晴らしい……」

デ・クレシェンツォの瞳が、恍惚と潤んだ。

呼吸も目に見えて荒くなり、青華の爪先に弄ばれる部分も、堅さを増して、育っている。

「私は女？ それとも男？」

「君は……美しい女性だ……。私の大切な……」

「ありがとう。とても嬉しいわ」

爪先の動きに合わせて、デ・クレシェンツォの先端が、たつぷりと、濡れる。

「私は女よ、デ・クレシェンツォ。誰でもいいからこの汚いペニスを突っ込んでもらいたい」紫生」とは違うわ」

「……」紫生」？」

青華の零した名前を拾い、デ・クレシェンツォは意味を解せない様子で、顔を上げた。

「あなたは私の独り言を聞いてはいけないのよ！」
グッ、と爪先がきつく食い込む。

「ひつ、あ……っ！」

「あなたは私の虜なのよ。それを忘れないでちょうだい、デ・クレシエンツォ」

「あ、ああ……」

額に滲む汗のままに、デ・クレシエンツォは、うなずいた。

与えられる痛みも、多分、快感でしか、なかった。

時には腰を振って男を求め、時にはデ・クレシエンツォを犬のように扱い——その青華の姿は、悪魔以上の魅力だったのだ。迷わず魂を売り渡してしまうほどに。

「ねエ、デ・クレシエンツォ。子供が泣いているわ。まだ幼い子供が……。あなたはその子供に手を差し伸べて？」

漆黒の瞳を薄く細め、青華は訊いた。

「ああ……。子供の手を取り……。優しく……」

「嘘をおっしゃい！」

ぐり、つと足先が食い込んだ。

「わああああ——っ！」

足に踏み潰される股間の痛みに、デ・クレシエンツォは悲愴な叫びを喉から放った。

それは、もがきようもない苦しみであった。

「あ……。あ……。う……」

「悪い子には、お仕置きをしなくてはならない、と言ったでしょう？　嘘をつくのは悪いことよ、デ・クレシエンツォ」

「や……。やめ……。く……。っ」

「あなたは子供を苛めるのが好きでしょう？」

「あ、ああ……。そうだ……」

「どうやって苛めたの？　あなたにも子供がいたでしょう？」

「……。あの子は……。私の子では……。妻が浮気をして作った子で……」

「そう。可哀想に」

青華は言った。

デ・クレシエンツォの表情が、安堵に、緩んだ。

だが、それは束の間の安堵であつたのだろう。青華の瞳は、ゾツ、とするほどの冷たい輝きを灯している。

「本当に可哀想ね……。父親が誰であるか、というだけで、愛してもらえない子供は」

「……。せつ、青華？」

デ・クレシエンツオの顔が、強ばった。

不安ではなく、それは、あからさまな恐怖を示すものであった。

「何を脅えているのかしら、デ・クレシエンツオ？ 私が怖くて？」

「……」

言葉は何も、返らなかった。もう口を開くことさえ、恐れているのかも、知れない。

「ねエ、デ・クレシエンツオ。子供は誰を恨めばいいのかしら？」

自分を愛してくれなかった父親？ 浮気をした母親？ それとも、生まれて来てしまった自分自身？」

「わっ、私には……っ」

「そうね。あなたには判らないわね。この先、生きていたところで、きつと判りはしない」

冬が訪れたのか、と思うような眩きであった。

デ・クレシエンツオの面は蒼白に、額には汗が浮かんでいる。手足を拘束され、無防備な姿で全身をさらしている恐怖が、今、やつと身に迫るものとして、現実味を帯びて来たのかも、知れない。

「もうあなたに用はないわ、デ・クレシエンツオ。透が味わった裏切りと恐怖には足りないでしょうけど、少なくとも、これからあなたに弄ばれる子供がいなくなることだけは確かでしょうし……」

「……青華？」

「これが私たちが選んだ道よ。どんな時も透のスケープゴートとなり、醜い大人たちに透が受けた傷を返してあげる——」

凄まじい悲鳴が上がったのは、その時であった。

「うわあああ——っ！」

デ・クレシエンツオが涎を垂らし、目を剥いたまま、気絶、する。そこには、踏み潰された性器だけが、悍ましい形で、今の叫びの名残を留めていた。

青華は汚れた足をシートで拭い、優美な仕草で、ベッドを降りた。そして、ドアの脇へと視線を向け、

「あとはお願いね、カイン。麻薬中毒者たちに私刑リンチを受けたように

でも見せかけておけばいいわ。狂気の殺人犯ですもの……。彼が死ねば、ミラノ市民は、ほっ、とするわ」

鮮やかな笑みは、すぐにドアの外へと消えて行った……。

「親に愛してもらえない子供は、誰を恨めばいいのかしら？」

きつと、いつかはその答えも、出る……。

A R E A ・ 1 米蘭（ミラノ） ？ ？ （後書き）

次回、A R E A ・ 2 ^{ニューヨーク}紐育編になります。

AREA・2 紐育（ニューヨーク）？

AREA・2 ニューヨーク 紐育1

彼に、人類最初の殺人者の名を与えたのは、一体、誰であつたのだろうか……

SCAPEGOAT・1

木々と古い建物に彩られたそこは、アメリカ独立のさらに一四〇年前に創立された、アメリカ最古の大学、ハーバード・ユニバーシティ、であつた。

東部のエリートの子弟が学ぶ、名門私立大学——アイビー・リーグの各校である。

その構内はハーバード・ヤードフレッシュマンと呼ばれ、一年生はその中の学寮ハウスに、二年生以上は十三ある学寮ハウスの内、いずれかに入ることになっている。

透も、その十三の学寮ハウスの一つに入っていた。

あのミラノでの秋から数カ月——マサチューセッツ。

十月から冬に入っているこの地方では、クリスマス前のこの季節ともなると、すっかり雪景色に覆われている。

「支度は、透？」

そう言つて、部屋へと姿を見せたのは、カイン、であつた。

彼は、もう大学などつくに卒業しているが、今日は透の迎えとして、この地に足を運んでいた。

「ああ。すぐに出られる」

透は言った。

こちらの方は、やっと二十歳、という年齢の通り、まだこの大学の学生である。

大学は今日から、タイムブレイク学期末休暇に、入る。

二人は、小さなトランクだけを片手に下げ、身軽な装いで部屋を出た。

際立つ美貌の二人が寮内を歩いていても、周りに何ら違和感を与えないのは、何故なのだろうか。

有りと有らゆるものを恍惚とさせるその容貌も、気配が消えている時には、人を狂わせるものではないのかも、知れない。

「次は？」

学寮を出て、ハウスケンブリッジの街並を裂いて走る車の中、透は運転席のカインに問いかけた。

「シルヴィオ・スパーロのクリスマス・パーティに招待されている。

——もちろん、断つてもいいが」

チラ、——と瞳が持ち上がった。

優しいな面貌の中に、一つの意味が浮かんでいる。

「……ニューヨーク？」

透は、強ばる面で、問い返した。

「ああ。——どうする？ あの前へは戻りたくないだろう？」

「……」

「私も今回は余り乗り気ではない。シルヴィオ・スパーロは、NYの五大ファミリーの一つ、ボナーノ・ファミリーを取り仕切るニューヨーク・マフィアのドンだ。五つのファミリーの中では一番小さい組織とはいえ、この前のような——デ・クレシェンツォの時のような楽な相手ではない」

「……」。で、長く関わらず、この学期末休暇の間に片付けた方がいい

い、という訳か」

「ああ。さっきも言った通り、私は乗り気ではないが」

緑翠の瞳を薄く細め、カインは、珍しく同じ言葉を繰り返した。彼がそんな風に、同じ言葉を使うことなど、滅多にないことなのだ。

「向こうが会いたいの誰なんだ？」

透は訊いた。

「……緑乃の絵を買いたいそうだ」

「——。緑乃の？ 無理だっ。緑乃はマフィアと向かい合って話せるような性格じゃ——」

不意に、透の言葉が、プツ、と途切れた。それだけではない。表情も、頼りなげな少年のものに変わっている。

「……緑乃か？」

その変化を見て問いかけたのは、カインであつた。

透と入れ替わった緑乃が、それを肯定して、コクリ、とうなずく。「ぼく……やりたい。透の役に立つのなら、ニューヨークへ行つて、その人に会つ……」

「もう一度、言う。私は乗り気ではない」

カインは、三度目の同じ言葉を口にした。

これは初めてのことである。

「でも——っ。でも……ぼく、今まで何の役にも立たなくて……。やっと、透の役に立てるのに……」

「……」

「連れて行つて欲しい、カイン……。絶対に迷惑はかけないから」

緑乃は、すぐような瞳で、カインを見上げた。

その真摯な瞳を見た者は、彼を決して危険な目に遭わせたくない、と思うだろう。

彼は、守られるべき者、なのだ。

「……いいだろう。ただし——。君が失敗すれば黒都が出る。そのことを判って言っているんだろうな、緑乃？」

「――」

カインの言葉に、緑乃の表情が強ばった。

黒都――。何があるうと、彼を再び表に出してはならないのだ。
純粹無垢なその魔人を……。

「ぼく……」

「落ち着いて考えることだ。パーティまで、考える時間がない訳ではない」

「……」

ニュー・イングランドに降る雪は、ニューヨークに降る雪とは全く違い、『アメリカ人の精神の故郷』たるイメージを形造りながら、ただ静かに降り続いていた……。

AREA・2 紐育（ニューヨーク）？

SCAPEGOAT・2

何という、ぞんざい無礼な街であろうか。

スーパ―のレジに立つ女ときたら、品物は投げ付けるし、客に釣銭を投げ返す。文句を言おうものなら、睨みつける。

汚く、騒々しく、卑しく、浅ましい――。

これが、^{「ニューヨーク}紐育、なのだ。

アメリカ人が心の故郷と見るニュー・イングランドとは掛け離れた、猥雑きわまりない無法都市。

それでも、ここもまた、アメリカである。――いや、他の地方のアメリカ人は、この街がアメリカである、などとは認めていない。

アメリカ人の持つアメリカのイメージは、白いペンキ塗りの教会と、赤いペンキの小学校、その周りの緑の芝生……ニュー・イングランドの風景こそ、アメリカ的なものなのだ。

そして、この街にそんなものなどありはしない。

ここは無国籍の街、ニューヨーク……。

「大丈夫か、緑乃？」

パーク街とレキシントン街、四九丁目から五〇丁目にかけてのブロックを占める、ニューヨークを代表するホテルの一室で、カインは、正装に身を包み、身じろぎ一つしない緑乃を見て、声をかけた。

たっぷり一〇秒ほど経ってから、

「え……？ あ、何、カイン？」

と、緑乃が射干玉の瞳を持ち上げる。

緊張もあるのだろうが、この緑乃の反応は、いつものことである。

だが、表情はやはり、ぎこちない。それでも美しいのは、悪魔に魂を売り渡した証拠であろうか。

「……。君は無理に話をする必要はない。スパーロには、絵と同じように、時間の進み方の違う少年だと話してある」

「話して……？ カインはその人と——シニョーレ・スパーロと、どういう関係？」

その緑乃の問いかけに、霜が降りるような沈黙が、渡った。

「私のことは何も訊かない約束だ。たとえば、この街がNYであつても」

と、沈黙の後に、霧氷がきらめく。

「あ……ごめん」

何も訊かない約束……。

彼は——カインは、一体、何者である、というのだろうか。

幼い日、透を拾ってくれた青年——いや、その時は少年であつた寡黙な麗人。彼のお陰で、透は冷酷無比なこの大都会でも生きて行けた、という。

その優雅な物腰で、きれい、と形容するに相応しい面貌で、彼はどんな世界を生きて来た、と。

得体が知れない、のだ。十数年の星霜を持っても、緑乃には、未だ一度として、カインの「姿」が見えたことは、ない。

「そろそろ行こう、緑乃。イヴの夜は早いめに出た方がいい」

カインの言葉に、緑乃はぎこちなく足を踏み出した。

ただのぎこちなさではない、と思っていたら、右手と右足が同時に出血している。が、この場合、転ばなかっただけマシであろう。

カインは気づいているのかいないのか、敢えて指摘もせずに、緑乃が歩き方を直すまで、振り返ることはしなかった。

エレベーターに乗るまでに直ったことも、救いであつたのだろう。二人はホテルを後にして、車寄せから黒塗りのリムジンに乗り込んだ。向かい合わせのリア・シートに、それぞれテーブルを挟んでゆったりとくつろぐ。革張りの豪華なシートは、高級ホテルのソフ

ア以上の座り心地の良さを備えている。

このリムジンは、カインのものだという。

黒いフィルムを貼ったシールドの向こうの運転手が、アクセルを踏んだ。

クリスマス美しいイルミネーションが、この極悪非道な街さえ、聖なる場所に変えている。

リムジンは、その輝きをまるで自分のものであるかのように、黒いボディに映しながら、夜の中を駆け抜けた。

AREA・2 紐育（ニューヨーク）？

「緑乃、最初に言っておくが――」

カインが言いかけた時だった。

「かーさんっ！」

緑乃が突然、声を上げた。まだいくらかも走っていない時である。

緑乃は、リムジンの窓に張り付くようにしながら、賑やかなクリスマスの街を追っている。もちろん、視線で。

そして、彼はもう緑乃ではない。

透、なのだ。

「車を止める！ 止めてくれ、カイン！」

「――透？」

「かーさんが――かーさんがいたんだっ！」

と、車窓を割らんばかりに、声を粗げる。

透の母親――。それは、幼い透を残して、男と一緒に逃げてしまった、という女性のことであっただろうか。

カインは天井のスイッチに手を伸ばし、その一つを指で押した。電動音を伴って、運転席との間のシールドが下がり始める。

その中、運転手に声をかけ、透の望み通りに、車を路肩で止めさせる。

透は、車が止まると同時に飛び降りた。わき目も振らず、母親を見かけたらしい場所へと、駆けて行く。

彼は、自分を捨てた母親に逢いたい、というのだろうか。

母親に捨てられたせいで、あんな目に遭ったというのに、それでも母親を求めるのだろうか。

もしそうなら、それは憎しみのためなのか、それとも……。

「ドン・スピーロに、少し遅れると連絡をしておいてくれ」

運転手にそう告げて、カインも車を降りて、透の後を追いつけた。クリスマスの雑踏の中を、ホテルの中と変わらないように、優雅な

足取りで突き進む。

この無作法な街が、少し、怯んだ。

そう思えたのは、街を行き交う人々が、ほとんど同時に、同じ人物の方へと視線を向けたせいであっただろうか。

最初は美しい少年に。

次には美しい青年に。

誰もが、この厳しい寒さの中、うつすらと頬を染め、二人の姿を見つめていた。

透の姿は、五九階建のモダンなビル——パンナム・ビルの前に、あった。何とも言えない表情で、行き交う人々の姿を追っている。見つからなかった、らしい。

「透、君が見た時、君のお母様は、どの方向に向かって歩いていったんか？」

カインは、立ち尽くす透の背中に、声をかけた。

「車の進行方向に……四二丁目の方に——。だから、見失うはずはないんだ。必ずぼくとすれ違はずで……」

透の言葉の通りなら、確かに見つからないはずはないだろう。

だが、現実には、そんな女性とはすれ違いもせず、似た人間にも逢わなかったのだ。

考えられることは、といえば……。

AREA・2 紐育（ニューヨーク）？

透は、身動きもせずに、立っている。

人の流れにぶつかりながら、じつとその場に立ち尽くす彼の姿は、まるで、水の流れに飛沫を上げる、孤独な岩のようでもあっただろうか。

「ぼくは……ぼくは幻影を見たのか、カイン？ クリスマスの精霊に悪戯からかわれたのか？」

と、すぐるように、カインを見上げる。

「……。緑乃と入れ替わって眠っていたはずの君が、何故、母親の姿を見つけることが出来たんだ？」

透の言葉には応えずに、カインはその疑問を問いかけた。

透だけは、他の「存在」とは違うはずなのだ。緑乃のような《友だち》とは別個の存在——第一人格たる透——透たる透であるために、他の「存在」が表に出ている時は、覚醒できない。少なくとも、今までの透はそうであった。

「緑乃が教えてくれたんだ……。ぼくの母さんがいたと……。それで、ぼくを起こしてくれて……」

「緑乃は君のお母様の顔を知って？」

カインは訊いた。

透に母親がいた頃、まだ《友だち》は存在してはいなかったはずだ。

「ああ、知ってる。緑乃だけじゃなく、みんな……。蔵の中には、かーさんの写真が一杯あって。かーさんが出て行った時、お義父さまが、かーさんのものを全部、蔵の中に入れたから……。多分、見つけて来たのは朱道だったと思う。ぼくは、その写真をみんなに見せて……。これがぼくのかーさんだと……」

「十年以上も前の写真だろう？」

「……。そうだったな。緑乃の見間違いだ。こんなところにかーさ

んがいるはずがない」

本当に納得した訳ではないだろうが、透はそう言って車の方へと戻り始めた。

唇は自嘲に歪んでいる。

カインは一つ、呼吸を置いた。

「……緑乃が見た女性が確かにこの通りを歩いていたのなら、突然どこかに消えるはずはない」

「え？」

振り返った透の瞳に、視線だけで方向を示す。

その視線が示す先は、フランス・ボザール様式を取り入れた、歴史を感じさせる建物であった。

一九一三年に完成した、グランド・セントラル駅である。パナム・ビルのすぐ北に位置するその駅は、ニューヨークの列車の発着を担っている。

「まさか、かーさんは本当に……っ」

「このニューヨークで人を探すのは難しい。旅行者であれ、住人であれ……」

「今から追いかければ——っ」

「透」

カインは、駅へ向かうとする透の腕をつかみ取った。

「ドン・スパーロのパーティはどうする積もりだ？」

と、ただ静かな眼差しで、問いかける。

もし、その眼差しが怒りを含むものであったなら、透もカインの手を振り払うことが出来ていたであろう。

「……。パーティには出席する。そして、かーさんも探す。たとえばここがニューヨークであろうと」

「……何のために？」

カインは訊いた。

どんな応えを望んでのものなのかは、解らない。

「もちろん……ぼくが味わったのと同じ苦痛を、あの人に与えるた

めだ」

冬には相応し過ぎる言葉、であった。

彼が味わった苦痛――。幼い日のあの出来事だけが、唯一、彼と母親を繋ぐものであるのだとすれば、それはあまりにも、不憫ではないだろうか。

「私でも、この街で、たった一人の人間を捜し出すことは難しい。

偽名を使っていたり、故意に身を隠しているのなら、まず不可能だ。

――だが、手は貸そう」

「ありがとう、カイン……」

二人は車の方へと戻り始めた……。

AREA・2 紐育（ニューヨーク）？

ライト・ツリーがきらめく華やかなパーティ・ホールの一角に、その男は、いた。奥に設えられた、一際立派な椅子に腰掛け、二人のボディ・ガードに守られている。

ホールの要所要所にも、数名のボディ・ガードたちが、控えている。

男は五十代の半ばであろうか。太い眉と毛深い腕、浅黒い肌に、上等なタキシードを纏っている。その姿は、シチリアの血を誇るように、傲慢である。もちろん、傲慢でなくてはならないのだらう。

シルヴィオ・スパーロー^{ファミリー}。彼は、ニューヨークの五大ファミリーの一つ、ボナーノ一家を率いるドン、であった。

「お久しぶりです、シニョーレ・スパーロー」

その男の前に、カインは優雅な物腰で、声をかけた。

それ以外には、握手も交わさなければ、笑みも見せない。

それでも、スパーローは気分を悪くしていないようで、

「全く、随分久しぶりだ」

と、楽しみに皮肉を口にした。

「ご無沙汰の失礼は、改めてお詫びを——」

「詫びも長い挨拶も無用だ。元気にしていたのかね、カイン？」

と、葉巻を銜えながら、狡猾げな瞳で、カインを見上げる。

ボディ・ガードが、その葉巻に火を点ける。

「今日は、ケイン・ローウェルの名前で出席しております……」

カインは言った。

彼は、マフィアのドンに、この名前で呼べ、と指図をする積もりなのであるうか。

「ハッハッ！ この私に呼び方を指図する人間がいるとは、な」

スパーローは、別段、怒りを見せるでもなく、カインの言葉を笑い飛ばした。

だが、彼ら二人は、一体、どういう関係だというのだろうか。

それは、ここにいる誰もが持つ疑問であつただろう。

彼ら二人が、初対面である、ということはあるし得ない。久しぶり、という挨拶からしても、パーティーの招待状が、カインの元に届いたことからしても、それは、はつきりとしている。それでいて、二人の繋がりなど何も見えて来ないのだ。

彼ら二人を繋ぐものは、どこにあるというのだろうか。

「その少年が、あの絵を描いた画家かね、カイン——いや、ケイン・ローウェル？」

カインが言った通り、カインをケインと呼び直し、スパーロは緑乃の方へと視線を向けた。

「ええ——」

「あの、ぼく、画家なんて、そんな……。ただ好きで描いているだけで、そんな立派なものじゃ……」

恐れ多い言葉を聞いたように、緑乃は真っ赤になって、居心地悪そうにうつむいた。

普段と何ら変わらないその受け応えは、相手が誰であつても変わることはないのだろう。

スパーロの瞳が、好色な形に持ち上がった。

空の色など容易く変えてしまうほどの美貌の少年が、初々しい仕草ではにかんでいるのだ。無防備に、何の警戒も持たずに——。それ以上に、スパーロの触手をそそのめるものがあつただろうか。——いや、彼でなくとも、誰もがその愛らしい少年を手に入れたい、と思つたに違いない。絵だけではなく、緑乃そのものを——。

「もつとこっちへ来たまえ」

そう言つて、スパーロが緑乃の前に手を伸ばした時だつた。その手が緑乃に触れる前に、カインが、スパーロの手首をつかみ取つた。動く気配さえ見せず、スパーロの右手を押さえつけたのだ。

思いもかけない出来事に、ボディ・ガードたちの表情が、大きく変わった。

「貴様、スパーロ様に何を——っ」

と、カインの前に足を踏み出す。が、

「よせ」

そう言ったのは、スパーロであった。カインにつかみ掛かろうとするボデイ・ガードを睨みつけ、

「おまえたちがどうにか出来る相手ではない」

と、冷やかに言う。

「……は？」

ボデイ・ガードたちの表情が、戸惑いに変わった。それはそうだろう。物静かな青年を前に、屈強なボデイ・ガードたちが役に立たない、と言われたのだ。

AREA・2 紐育（ニューヨーク）？

「おまえたちは、この男のことを知らんだ」

「しかし——っ」

「私は、あの時から、彼が人間だ、と思ったことなど一度もない」

「……」

スパーロの言葉に、誰もが口を噤んで、動揺を映した。

人間だ、と思ったことなど一度もない——そう言われるほどの青年とは……。

人類最初の殺人者の名を持つ青年、カイン——彼は一体、何者だ、というのだろうか。

「失礼、シニョーレ・スパーロ……」

その優雅な容姿に相応しい動きで、カインはスパーロの手首から、指を離した。

スパーロも、もうその手を緑乃に伸ばすことなく、引っ込める。

「しかし、君がそうまでして守っている少年がいるとはな。興味をそえられるよ。もちろん、その凄まじい美貌も含めて」

と、視線だけで、緑乃を犯す。

「勘違いですよ、シニョーレ・スパーロ。私は緑乃のために、ではなく、あなたのために……あなたに何も無いよう、こうしただけです……」

その言葉が、どれほど恐ろしい意味を持つものであるのか、スパーロは理解したのであるうか。狡猾な面貌が、これ以上はなく強ばった。

「……。なるほど。君よりはずっと人間らしいと思っていたが、そうではないらしい」

「……」

「君に勝るとも劣らない美貌を見た時は、さすがに手を出す気は起こらなかったが、口を開いてみればただの少年だ。危険な匂いなど

全くしない……。それに気を許して手を出そうとしたことが間違っていた、という訳か」

再び椅子に凭れかかり、スパーロは、チラ、っと視線を持ち上げた。

だが、カインは、

「いえ……。彼は普通の少年です。名前は緑乃……。危険というものは破片かけらも持ち合わせてはおりません。あの絵を描いた、ただの学生です」

と、静かに言う。

「フム……。あれは奇妙な絵だ。——いや、不思議、というのか。どういう目で見ればいいのか、全く解らん」

「あ、あの、『人』です……。っ。あれは『人』を描いて……」
恥ずかしげに頬を染めながら、緑乃は言った。

「『人』？ ほう。君には『人』がああいう風に見えているとは、面白いものだ。天才画家と呼ばれた亡き芸術家の若き日を見るようだ。——あの絵を手放す気はあるかね？」

感心するように眉を持ち上げ、スパーロは訊いた。

「ぼくなんかの絵で良かったら……」

「君はどうかね、ケイン？」

「あれは緑乃の絵ですから。彼の好きなように」

「ふむ。やはり、わしには君という人間が、さっぱり解らん。何の目的があつて、このパーティーの招待を受けたのかも、な。——こんな俗物的な集まりに顔を出すことなど、初めてのことだろう？」

「……」

カインの面貌は沈黙であつた。その沈黙の意味を、どう受け取ればいいのかも、判らない。

「絵の値段を言いたまえ、シニョーレ・緑乃」

スパーロは、解答を聞くのを諦めたように、再び、緑乃の方へと視線を向けた。ただの少年たる、今日の主演に——。

「あ、あの……。ぼく、お金は……」

「どうやら、ただの売買をする積もりではなさそうだな。もつとも、ケインが伴って来たのなら、当然だろうが」

その言葉に、ボディ・ガードたちの表情が、また、さっきと同じように厳しく変わった。

かつて、スパーロを前に、そんな注文を持ち出した子供などいなかったせいだろう。

だが、金以外に、マフィアと取引できるもの……。それは何だと言うのだろうか。

「明後日の夜、時間を割こう。私もここでは聞く気がしない。——それでいいかね、シニョーレ・緑乃？」

「あ、は、はい……っ」

緑乃は、緊張のままに、うなずいた。

「ありがとうございます、ドン・スパーロ……」

カインも続いて、礼を言う。——いや、礼の言葉さえ忘れている緑乃の代わり、だったかも知れない。

それを見て、緑乃は、ペコ、っと慌てて頭を下げた。が、どう見ても慌てているようには見えない鈍い動きである。それに、そのお辞儀が日本の礼儀である、と相手が知らなければ、礼を言ったことにもならなかっただろう。

「おい、二人にシャンパンを持って来い。せつかくのナターレ（クリスマス）の夜だ。美しい聖人はもてなさなければ、な……」

彼らを、魔人、と呼ばなかったことだけが、せめても、だったかも知れない……。

AREA・2 紐育（ニューヨーク）？

SCAPE GOAT・3

氷の息吹で出来ているような夜の中、車はホテルへと向かって走っていた。

「ごめん、カイン……。ぼく、あまりうまく喋れなくて……」

緑乃は、申し訳なさそうに言って、うつむいた。

「喋らなくてもいい、と言ったはずだ。それに……。スパーロは、君でなければ時間を割かなかったかも知れない」

「……え？」

「気をつける、というような意味だ。——朱道と代わってくれるか？」

カインは、いつもと代わらぬ優しい面貌で、そう言った。

「あ……うん」

緑乃は、一つうなずき、目を閉じる。

二人はすぐに入れ替わった。

漆黒の瞳が、ゆっくりと開く。

「緑乃に無謀なことをやらせるものだ。見ているだけで胃が痛んだ」
緑乃ではない少年——朱道が冷めた口調で、開口一番、吐き捨てた。

「皆、同じ意見か？」

と、カインは訊いた。

「ああ。早く誰かが代わってやれ、の一点張りだ。皆、黒都が目を醒ますのが怖いのだ。もちろん、私もだが」

黒都——。聞いた者も、口にした者も、瞬時に面を強ばらせる名前である。

「……緑乃は、ああ見えても結構、強いさ」

「鈍いのさ。自分が今、誰を目の前にしているのかさえ、判っていない」

「フツ……」

鼻を鳴らすだけの笑みが、零れ、落ちた。

「まあ、あのシシリー・マフィアは、その緑乃を気に入ったようだが――。私には、どうしても気に入ることが出来ない。スパーロではなく、君が、カイン」

朱道は、そう言つて、カインの顔を、チラ、つと見上げた。

カインは何も言わずに、黙っている。

「君がどれほどの人物なのか、私には見当もつかなくなった……」
その言葉にも、カインの面は静かなまま、何も言わず、話すら聞いていないように、ただ窓の外を見つめている。

彼が口を開いたのは、それほど長い沈黙の後では、なかった。

「君が探つて来なくてはならないのは、私の素性ではない、朱道。透のためになる情報だ」

と、運転席とのシールドを、コン、と叩き、運転手に車を止めさせる。

透の《友だち》の中で、情報収集に優れた能力を持つ、朱道――。
「いいだろう。――だが、カイン。私が一番信用していないのは君だ。たとえ、透や緑乃が、どれほど君を信頼していようと」

「……正解だな。私が信用できないものも、私自身だ。君が言うように……私は、自分が『何』であるのかすら、知ってはいない」

「いつか私が調べてやるさ。君が人間なのか、魔物なのか――。黒都の恐ろしさを誰よりも早く悟ったことからしても、私には――私にも、君が人間かどうか判らない」

冬めいた言葉を車に残し、朱道は夜のニューヨークへと飛び出して行った。

モニー・タワーの星形のライトが、白い光を点滅させ、雪が降ることを告げている。

「少なくとも、私よりもモニター・タワーの天気予報の方が、よほど信頼できるな」

ポツリ、と呟き、カインは、車を出すように、と運転手に告げた。人間ではない——そう呼ばれる玲瓏な青年が存在しても、一向に不思議ではないのが、この街——ニューヨークなのだ……。

AREA・2 紐育（ニューヨーク）？

パサ、と鳥が舞い降りるように、風が立った。

「おい、今、あっちの方で何か物音がしなかったか？」

屋敷の周りを巡回するガードの一人が、その音を聞いて、瞳を細める。

「サンタクロースでも来た、ってか？」

もう一人は、相手にする気もない様子である。

この寒さの中では、当然のことであつただろう。早く見回りを済ませて、暖かい屋敷に入りたいだけなのだ。

「先に行つてろ。ちよつと見て来る」

「この寒いのにご苦労なこつた」

その弦きが届いたかどうかは判らないが、男は屋敷を取り囲む塀の方へと歩いて行つた。

「確かこの辺りだつたと思つたが……」

と、風の立つた辺りに来て、視線を巡らす。

身を隠せる場所、といえば、木の陰くらいだ。

銃を構え、男は慎重に木の陰へと踏み出した。息を殺し、ゆつくりと引金に力を込める。と同時に、素早く木の陰へと回り込む。

だが――。あるものと言えは静寂だけで、人の姿どころか、虫の一匹も飛んではないない。

「チツ。思い違いか」

寒さの中の無駄骨に、舌を打って、銃を降ろした刹那であつた。

バサ、つと梢が沈黙を破つた。

ひらり、と何かが舞い降りる。――いや、何かではなく、人ではないだろうか。

だが、ガードには、銃を構え直すことが、出来なかった。不審な侵入者が目の前にいるというのに、ガードの体は、凍りついたように、動かなかつたのだ。

何故——いや、解っている。体が動かない理由も、銃を構え直すことが出来なかった理由も——。その人物に魅せられたのだ。魅入られた、と言ってもいい。

凄まじい美貌の少年であった。

髪は月を喰らう新月闇のように漆黒に輝き、瞳は黒曜石のように冷たい濃度に色づいている。——いや、色など含んでは、いない。寒さに色を失くした唇や肌も、幻想的なほどに、白く妖しく澄んでいる。

魔物か——そう考えたのは、はたして彼だけであっただろうか。

そして、その少年の顔は、ガードには確かに見覚えがあった。忘れるはずもない。ついさっきまで、スパーロのクリスマス・パーティーに、カインと共に出席していた少年である。浮世離れた学生で、確か、緑乃、と言っていた。

AREA・2 紐育（ニューヨーク）？

しかし……彼は本当に、あの少年なのであろうか。あの夢で、頼りなげな少年だ、というのであろうか。

月の光のような玲瓏な面貌は、顔立ちこそ瓜二つでありながら、あの少年と同一人物であるとは、ガードにはとても思えなかった。人を見分けるものが顔ではなく、身に備わる雰囲気であるとすれば、今、ガードの目の前にいる少年と、パーティで見かけた少年は、全くの別人であつただろう。

「きつ、貴様は——っ」

やっと出て来た言葉であつた。

だが、それ以上は続かなかつた。戸惑う時間が、あまりにも長過ぎたのだ。

喉に入つた一撃に、ガードは呻きすら上げることが出来ずに、バタン、と倒れた。

「……侵入して来たのが人間なら、必ず動く。それを待っていればいいものを。今度からは、己の勘をもつと信用することだ」

ただ冷ややかに言葉を落とし、朱道は、ガードのポケットの中を手早く探つた。

睜いたままの眼が、生々しい。

涎を垂らす口からは、もう白い息も零れては、いない。

今度はない、のだろう。

「この男は持つてない、か……。自分で鍵を開けて入るしかなさそうだな」

ポケットの中を探り終え、朱道は、自らの胸に飾るクリスマス・ローズの蕾を抜き取つた。その茎を折り、淡い蕾をガードの口へと無造作に詰め込む。

美しい、とは間違つても思えない、不気味な姿である。

もう長く留まることはせず、息の凍る寒さの中、朱道は屋敷の方

へと翻った。

いつから、こういうことが好きになったのかは、判らない。蔵の中で透と一緒に遊んでいた頃は――いや、きつと、あの頃から、こういうことが好きだったのだろう。饅えた匂いのする薄暗い蔵の中で、色々なものを見つけては、透の心を弾ませていた。

他にも、透が眠っている間に、透の父親の部屋に忍び込み、その中を探ったこともある。

そして、見つけたのだ。当時は、読めない字がほとんどであった、日記帳を……。

「まだ明かりがついているな……。先に、灰裂に代わった方がよさそうだ」

鉤針のついたワイヤー伝いに、二階の窓から屋敷の中へと忍び込むのは簡単だった。そこから、ガードたちの眼をかい潜って、地下室へ降りることも。

「後は旨くやってくれよ、灰裂」

地下室には、たくさんの木箱が並べてあった。もちろん、積んでもある。

中身は……兵器だ。銃の類いだけではなく、肩打ち式のミサイル――スティングーや、手榴弾まで収めてある。

もちろん、これは一部だろう。

だが、これだけあれば充分だ。

「……東欧製だな。こっちは、パキスタンでのコピー製品か」

まだグリースでベトつく銃や、精巧な金銀細工の装飾の施された銃を見て回りながら、灰裂は楽しむように、呟いた。

こういうものを弄^{いじ}ることは、彼には何よりも楽しいことなのだ。もちろん、己に与えられた役目も忘れてはいない。

木箱の中を確かめながら、灰裂は手際良く作業を進めて行った……。

AREA・2 紐育（ニューヨーク）？

誰もが冗談一つ口にしない朝、であった。

目の前には、雪で凍てついたガードの死体が、ある。

口の中には、クリスマス・ローズの蕾が詰め込まれて、いる。

その意味は明白、であった。

典型的なマフィアの殺し方だ。

女を意味する花や、切り落とした性器を口の中へ詰め込むのは、仲間の妻や女に手を出した者、という意味であり、『沈黙の掟』^{オルメタ}を破った者の口の中には、石が詰め込まれる。後者は、もうこれでも喋れない、という意味であり、密告者や、警察に協力をした人間に与えられる。

だが、ファミリーでは、人一人殺すのにも、必ず最高幹部会にか^{「インシニョーネ」}け、その決定に従わなくてはならないことになっている。もし、誰かが仲間の女を寝取ったのだとしても、勝手に殺してもいい、ということにはならないのだ。

厄介な揉め事が起きた——それが、誰もの思い、であった。

殺されたガードと最後に一緒にいたのは、共に見回りをしていた、パオロ、という《兵隊》であったことが判っている。今は、彼が第一容疑者である。

「パオロの女の自宅へは、今、何人か人をやっています。昨夜のパオロに不審な様子はありませんでしたが一応——」

「もういい」

事務的に続く相談役の報告に、ドン・スペーロは、もう訊く積もりはない、と言うように、庭を見下ろすことが出来る窓の側から、翻った。

暖炉の側の大きな肘掛け椅子に腰を降ろし、指の間でくゆっていた葉巻を、口に運ぶ。

その指先が震えているように見えたのは、気のせい、だったのだ

ろうか。

「——ドン・スペーロ？」

相談役は、いつもと様子の違うスペーロを前に、首を傾げた。

「厭な予感がする……」

その呟きに、紫煙が、揺れた。

「は？」

「……おまえには解らんだろうな、ヴィトー。恐怖を目の当たりにしたことはないおまえには」

「……？ 今回の事件と何か関係が——」

「ない。——いや、多分、ないのだろう」

スペーロは、自分自身に言い聞かせるように、少し弱い言葉で繰り返した。

あの時もそうだったのだ。蒼い月の夜、わずか十四、五歳の少年を前にした時も……今と同じ不安に駆られた。

きれいな少年であった。美しい、という言葉を使うよりも、きれい、という言葉を使った方が相応しい——。

普通の少年とは、どこか違う雰囲気を持ち、月の精霊か、と思わせるほどの玲瓏な神秘を漂わせていた。

淡く輝く金髪と、年に似つかわしくない静かな物腰を持ち、幻の如く霞んで見えた。

彼に何をされた、という訳では、ない。

彼は人を殺してもおらず、また、殺そうともしていなかった。それでいて、得体の知れない不安感が、スペーロの胸には押し寄せていたのだ。

AREA・2 紐育（ニューヨーク）??

あの日、スペーロは、国連ビルとイースト川を臨む、高級ホテルの一室で過ごしていた。

窓からは、国連ビルの中でも一際高い、事務局ビルの姿が見えていた。大理石二〇〇〇トンと、ガラス五四〇〇枚、そして、アルミニウムのパネルで出来た、継ぎ目のないモダンなビルである。他のビルのように一般公開もされておらず、世界中で働く二万人以上の国連職員の内、三分の一が、そこで働いているという。

そこに、その少年がいたのだ。事務局ビルではなく、継ぎ目のない外側に――。

何をしているのだろうか、と思う前に、どうやってあんなところに行ったのだろうか、と思う気持ちの方が先であった。

そして、その答えが出る前に、少年は、消えた。

消えた、としか思えなかったのだ。実際には、ワイヤーか何かを使つて降りたのだろうか、その人間離れした技は、消えた、としか思えなかった。

そして数日後、スペーロはその少年に逢うことになったのだ。

国連ビルのすぐ北――かつては国連ビルも含めてスラム街だったタートル・ベイ――当時、すでに高級住宅街に変わっていたサットン・プレイスで。

一際立派な要人の屋敷に、彼は、父親と共に招かれていた。子供は彼一人だけだった。

スペーロが、ホテルで見たことを彼に話すと、彼は、ただ一言、こう言った。

「そういう月の蒼い夜は、神に傷つけられた少年の姿が見えるそうですよ」

と……。

スペーロはその場に呆然と立ち尽くした。

手のひらには汗が滲んでいた。

聖書の中の人物のことを、彼の名前と引っかけて、軽い洒落で持ち出されただけだというのに、恐怖、とも呼べる戦慄を覚えたのだ。得体の知れない冷たい恐怖を――。

もちろん、それは刹那のことで、その少年も、寡黙なところを除けば、ただ優しげできれいな少年だった。

今も、その印象は変わってはいない。

ただ、時々、ふつ、と憶い出すのだ。

あの時感じた恐怖は何であつたのだろうか、と。

何故、彼に、あれほどの戦慄を覚えたのであろうか、と。

そして、それは、いつまで経っても『憶い出すことが出来ない記憶』となっていた。

憶い出せることは、ただ一つ――いつも忘れられないでいられるものは、ただ一つ――その少年の名前、だけ。

ケイン・ローウェル……。

「――ドン・スペーロ？」

あの日の回想に耽る中、相談役たるヴィトコンシリオリーの声が耳に届いた。

随分、長く黙っていたのだろう。ヴィトーの表情も心配げである。

「はつきりしているものを『恐怖』とは言わん……。得体が知れないからこそ『恐怖』と言うのだ……。」

「は？」

「パオロを殺した犯人の捜査は、二、三人選んで任せておけ。後の者は、この屋敷の警備だ。少なくとも、明日の夜が終わるまでは……。」

逢ってしまったことを後悔する人間がいるとすれば、ただ一人――。それでも逢いたい、と思わずにいられない、あの少年だけ……。

ベッドから離れたソファに腰を降ろし、カインは手元のファイルを眺めていた。

昨夜——いや、日付が変わった深夜、朱道がスパーロの屋敷から持ち帰って来たものである。

もちろん、朱道が持ち帰ったものは、ファイルをコピーしたUSBメモリであり、今、カインの手元にあるのは、そのメモリを差し込んだモバイルPCである。

朱道はまだ、ベッドの中で眠っている。——いや、透は、と言った方がいいだろうか。

眠っている姿は、幼い日のままに、愛らしい。

その愛らしさを見るでもなく、カインは手元のファイルだけを見つめていた。

「……私の情報はなし、か」

と、感情もなげにそう呟き、読み終えたファイルを、テーブルに置く。

トン、っと軽い音がした。そのせい、という訳ではないだろうが、透がぼんやりと瞳を開いた。

「君は？」

カインは、『おはよう』という挨拶の代わりに、そう訊いた。

「透だよ。……あふ。モーニン、カイン」

途中に眠たげな欠伸を挟み、透はまだ寝足りないように、寝返りを打った。

均整の取れた小柄な体躯が、美しい肌をさらして、毛布から、零れる。

「……裸で寝たのか、緑乃は？」

それは透の問いかけであった。ひんやりとした感触に、全裸であることを知ったのだろう。

「いや、朱道だ。昨夜、凍えて帰って来て、バスで暖まった後、そのままベッドに入って眠っていた」

その言葉に、透は、ガバ、っと体を起こし、

「何か解ったのか！」

と、眠気も吹き飛んだ様子で、問いかけた。

「君の母君のことなら、NOだ」

「……そうか」

「そっちは私が当たっている。朱道には、スペーロの屋敷へ行ってもらった。——ファイルを見るか？」

さっきまで読んでいたファイルの入ったPCを持ち上げ、カインは訊いた。

「いや……。後でいい」

その透の返答は、寝起きだから、という理由だけではなかっただろう。《友だち》が探してくれる答えよりも、自分が探すべき答えの方が気になっていたのだ。

今の透の頭の中には、幼い日の記憶に残る、美しかった母の姿と、昨日、パンナム・ビルの前で見かけた、あの女性の姿だけがあった。「どっちにしても、君がニューヨークにいられるのは、大学が始まるまでだ。——もうこれ以上は休めないだろう、透？」

カインは訊いた。

「そうだな……。秋にもサボってミラノまで行ってるし、これ以上休んでたら、博士課程に進むのも遅れるかも知れない。——それに、原稿にもまだ手をつけていないし」

担当の藤村氏が聞いていたら、真っ蒼になりそうな言葉である。

「……変わっているな、君は」

呟くように、カインは言った。

「そう？ 自分がどれほどの人間なのか知りたいんだよ。生まれて来て良かったのか、この先、生きて何をするのか、このまま生きていてもいいのか……」

「……」

「その答えを手に入れるためなら、何でもする……。馬鹿馬鹿しい勉強も、くだらない小説書きも、この手を血に染める人殺しも……。これは復讐じゃない。誰にも愛してもらえなかったぼく自身が選んだ生き方だ」

あの事件があつたから辿り着いた道ではなく、透自身を選び取った道――。そう語る彼の瞳の、何と強かなことだろう。そして、何と美しいことだろう。

「ぼくが最初に出す答えは、ぼくを捨てたかーさんが持っている。あの女が、^{ひと}ぼくの最初の道標だ」

哀しくは、ないだろうか。

不憫では、ないだろうか。

母と子を繋ぐものが、十数年間の恨みだけ、というのは。

カインは黙って、透の肩にガウンを掛けた。

透の手が、カインのその指をつかみ取る。

二つの視線が、交差した。

「……何を訊きたい？」

そう言ったのは、カインであった。表情一つ変えてはいないというのに、透を見据えるその眼差しは、言葉を拒むもののようにも、見える。

「君の両親のことを……。一度も聞いたことがない。——君にも母親はいるのか、カイン？」

透は訊いた。

だが、人に対して、母親はいるのか、という問いがあるだろうか。そして、それに真面目に応える人間がいるだろうか。

いる、のだ。

「……いや。少なくとも、カインと呼ばれるようになってからは」

「恨む相手もないのに、何故、独りで生きていけるんだ？」

「さあ……。そんな自問を繰り返すことも、とつくにやめている」

「……」

「お茶を入れよう。君も着替えをしないといい」

二人は、それぞれの方向へと、向きを変えた。

カインが紅茶を入れる中、透はシャワーを浴びて、着替えをした。

朱道がスパーロの屋敷から持ち帰ったファイルに目を通すのは、

お茶を飲みながらに、なった。

ファイルには、麻薬、闇賭博、兵器売買、誘拐、売春……あらゆる非道が記してある。

かつて、ニューヨーク・ファミリーは麻薬に手を出してはならない、という掟があったことなど、忘れられているような活動ぶりである。

「人身売買、か……」

紅茶を、コクリ、と流し込み、透はファイルの文字を目で追った。呟きの低さとは対照的に、漆黒の瞳は、厳しく、鋭い。

「君のように親に売られた子供も何人もいる。——もつとも、君のところは、父親が麻薬中毒者だとか、子供を売らなければ食べていけない、というような、金が目的の売買ではなかっただろうが」

チラ、つと緑翠^{みどり}の瞳が持ち上がった。

何故そんな表情が出来るのだろう、と思えるほどの、無機質さである。

透は、そのカインの表情を、静かに、見据えた。

ヘロインを買う金欲しさのために父親に売られた子供や、貧しさのために売られた子供——彼らは、透とどれほど違った、というのだろうか。

理由が解っているだけ——答えが解っているだけ、幸せだ、とでも言うのだろうか。

「……それは、ぼくが君の母親のことを訊いた仕返しかい？」

と、冷たく問う。

カインは、フツ、と瞳を細めた。

その意味までは、解らない。彼はいつも、そうなのだ。

この十数年の歳月の中、彼が己のことを話したことなど、ただの一度もなかっただろう。

もちろん、それで透に不都合がある訳では、ない。彼がカインでありさえすれば、透は彼のことを信頼してられるのだ。彼は、父親のように透を傷ついたりもせず、母親のように、透を捨てて逃げたりもしない。善人でも、悪人でもなく、それが透には心地よかった。

だが、善にも悪にも魅かれない人間がいる、というのだろうか。いるとすれば、それは神にも悪魔にも裏切られた人間、なのかも知れない。

「透、君の母親のことだが……」

透に期待を持たせないようにするためか、カインは淡々とした口調で、口を開いた。

「昨日はクリスマス・イヴだ。毎日、あの駅から、あの時間の列車に乗っているのではなく、昨日だけ、あの時間の列車を利用していた、という可能性の方が高い」

「……今日、同じ時刻に駅に行ってみても、現れない、ということか」

「可能性の話だ」

「……」

「久しぶりにこの街を歩いてみるかい、透？ 君に取っても懐かしい街だ」

互いを見据える時間は、長く続いた。

先に唇の端を持ち上げたのは、どっちであっただろうか……。

A R E A・2 紐育（ニューヨーク）??

S C A P E G O A T・4

何という女であろうか。

夜になるとドレス・アップした人々が繰り出し、華やかな世界となる『The Great White Way』——大きな白い通り、と呼ばれる四二丁目。そこから五〇丁目までマンハッタンを斜めに横断している『世界一長い通り』、ブロード・ウェイの中心女は、豪華な毛皮のコートを羽織って、歩いていた。

東洋人であろう。毛皮の襟を掠めるシヨート・ボブの黒髪が、エキゾチックにミステリアスに、輝いている。

まず、雰囲気が違う。その美貌のせいだけではなく、現実存在させてはならない、神々の手に余る神秘を備えている。

彼女をエスコートしている青年も、また然り。長い金髪を、肩で柔らかく一つに束ね、その長身を際立てている。こちらも、ハツ、と息が詰まるほどの麗身であった。

二人とも、ファースト・クラス上流階級の紳士淑女としか見えないのに、そうではないと思える雰囲気まで立ち昇らせている。

「退屈だったかしら、カイン？」

隣を歩く長身の青年を見上げて、女は訊いた。

「さっきのミュージカルが？ それとも、この街が？」

カインは優しい眼差しで、問い返した。

クスクス、と楽しげな笑みが零れ落ちる。

「確かに、ブロード・ウェイは上品すぎて、あなたには退屈だったかも知れないわね。——青華のエスコートをして、もっと別の場所へ行く方が良かったかしら？」

「フツ……」

鼻を鳴らすだけの返答、であった。

「わたしも本当はクラシックのコンサートか、オペラの方が良かったんだけど……」

「エスコート役に気を遣って？」

「そうね。——でも、せっかくミュージカルと映画の国にいるのですもの、アメリカ的なものに浸るのも悪くはないわ」

女はまだ、さっきのミュージカルのテンションの高さを残すように、口数多く喋り続けた。

際立って美しい面貌に、どこか子供のような仕草が混じっている。ブロード・ウェイのショーが終わり、人々が溢れ出すこの時間、タイムズ・スクエアは、お祭りのように活気づく。高級な店だけでなく、ポルノ・ショップやゲーム・コーナー、トップレス・バー……。さまざまな階級の人々が集い群がる。

ふと、カインは、誰かの視線を感じて足を止めた。

「ねエ、カイン——」

「静かに、藍香」

と、エスコートする女性——藍香の言葉を低く遮り、人波の中に視線を飛ばす。

サングラスを掛けた女が一人、翻った。華やかなブラウンの巻き毛の女である。三十歳前後——いや、もう少し年上だろうか。大人の色香を纏う、艶やかな女だ。^{あで}黒のレザー・コートが、どこか不敵にはためいて、いる。

「今さら人の視線を気にするのかしら？ 羨望の眼差しも、危険な視線も、ここでは日常のことでしょう？」

藍香も、サングラスの女が翻るのを捕らえながら、皮肉な口調で、カインを見上げた。

翻った女だけではなく、誰もが二人の美しさに見惚れているのだ。……そうだな」

カインは言った。

「行きましょう。私もこんなところで『紅蓮』に出られたくないわ。この毛皮もドレスも、この間買ったばかりなのよ。返り血をつけられたりしたら厭だわ」

「……紅蓮はそれほど愚鈍ではないさ」

「ハイヒールでも？」

疑わしげな視線で、藍香は訊いた。

確かにハイヒールでは、紅蓮も勝手が違うかも知れない。

だが、ハイヒールでの麗人の飛翔は、さぞ美しいことだろう。ドレスのスリットが鮮やかに割れ、はためき、見事な脚線美が露出する様は、男なら誰もが目にしてみたい、と思うに違いない。

二人は、そんな男たちの願いを適えるでもなく、人込みを避けて、静かな一角へと歩き出した。

AREA・2 紐育（ニューヨーク）??

風が、鳴る。

四角いビルの叫び声にも、聞こえる。

自由と独立、WASPとエスニツクに彩られるこの街では、いくつものアメリカン・ドリームが誕生した。

だが、それは、ほんの一つまみの人間が得たものに過ぎない。

貧困、強盗、レイプ、殺人、誘拐、麻薬……あまりにも多くの人間が、この街の犠牲となっている。

この街は、犠牲者を喰らって成長するのだ。

「……透もこの街の犠牲者の一人だったのね」

もう賑わいも届かなくなった場所に来て、藍香は、幼い日を思い起こすように、呟いた。

カインは黙って、コートのポケットに白い片手を差し込んでいる。
この街に生贄として捧げられた幼子——。その幼子の姿を思い起こしているのだろうか。

「わたしたちは、透のことを助けたかったのよ……。でも、今自由に自由に透と入れ替われる訳じゃなかった。——この街は誰でも受け入れてくれるけど、決して優しい訳じゃない。美しいもの、醜いもの、豊かなもの、貧しいもの……。それを問わないのも、ただ、この街が国籍を持つていないから。——でも、今なら……。国籍も何も持つていないわたしたちなら、透の身代わり（スケープゴート）になってあげることが出来る……。あの時の透の苦痛を、醜い大人たちに返すことも……」

ただ父親に愛してもらいたい一心だった幼子の心を、完膚無きままに打ち砕いた大人たちに——。

純粹で汚れない心を、欲望の両手で引き裂いた大人たちに——。

誰が透を傷つけたのかは、関係ない。透が今、そういう生き方を選んだ、ということが全て、なのだ。

不意に、辺りの雰囲気が変わった。

「感じるか？」

それはカインの問いかけであつた。

「ええ。わたしとあなたを見ているわ」

視線さえ向けず、藍香も声を潜めて、気配を読み取る。

建物の陰から、スウ、と人影が現れた。

サングラスを掛けた女である。ミニ・タイトにブーツを履き、長いレザー・コートを纏っている。肉感的な体つきや、引き締まったウエストが、妖艶な色香を放っている。

紅を引いた赤い唇が、持ち上がった。

さつき、タイムズ・スクエアで見かけた女である。

「わたしたちに何か御用かしら？」

声をかけたのは、藍香であつた。

その言葉に、女の眉がわずかに歪んだ。期待していた言葉とは違つた言葉を聞いたような反応である。

「私を覚えていないのかしら？—— まあ、あの時はあなたも小さな子供だつたんですもの、仕方がないわね」

と、夜には相応しくないサングラスを外して、顔を見せる。

見覚えのない顔である。少なくとも、藍香には。

「あなたの勘違いですよ、レディ。——行こう、藍香」

カインは、そう言つて藍香の肩を軽く叩き、車の拾える通りの方へと、翻つた。

「え？ でも——」

その藍香の戸惑いにも応えずに、無言で通りへと足を進める。

彼には——カインには、その女が誰であるか解つたのであろうか。妖艶に色づく、その女の正体が——。

「相変わらず、人と係わるのが嫌いなね。——でも、驚いたわ。

あなたがまだ、その子と一緒にいるなんて——。ねエ、カイン？」

女は瞳を細めて、名前を呼んだ。

彼女は、カインの名前を知っているのだ。

「……何の用だ？」

しらを切り通すことをやめたのか、カインは足を止めて、問い返した。

「私の用が他にあつて？ あなたを手に入れるためなら、その子を精神病院にぶち込んでも構わないのよ。あなたが大切にしているその狂人を――」

「よせつ、ジーン！」

カインが叫んだ刹那、であつた。

AREA・2 紐育（ニューヨーク） ？？

ヒュン、と凍てつくような風が、夜を、劔った。

高く飛翔し、鋭い鞭を放ったのは、藍香であつた。——いや、彼はずでに藍香ではない。透に害をなす者が現れた時、目を醒ます荒ぶる神、紅蓮。

カインが女——ジーンを制止するのも構わずに、しなやかな鞭を打ち放つ。

月夜の狼のように毛皮が舞い、蒼い月光を浴びる中、腰まで割れたスリットが、鮮やかな脚線美を閃かせた。

ビシ——つ、と鞭を放つ鋭い音が、響き渡った。

女は鞭を受けたはずであつた。

だが……。

「これは……」

着地と同時に、紅蓮の瞳は凍りついた。

ジーンは傷一つ負つてはいない。紅蓮の放った鞭が届いていないのだ。それは、目の前にある、透明なガラスのせいであつただろうか。

「……強化ガラスか？」

そう訊いたのは、カインであつた。

ジーンの前には、銃弾さえも跳ね返す防弾ガラスがあるのだ。「私はニューヨークで生まれた人間よ、カイン。そして、ここは、New York, N.Y.……。身の守り方は知っているわ。この街の犠牲にならないためにも、ね。あなたたちをここへ招_よんだのもそのため。あんな無残な殺され方をするのは、ごめんですもの」

唇の端を少し持ち上げ、ジーンは紅蓮の方へと一瞥を送った。

知っている、のだ。彼女は、あの時のことを知っている。まだ、

八つになつたばかりの透が、黒都の支配の元で行った殺人のことを——。

今から十二年前——彼女はその時、二十歳過ぎくらいであっただろうか。

だが、それでも紅蓮の記憶に、彼女の姿は残っていない。あの頃の透は、ただでさえ情緒が不安定で、黒都が行った行為のために、精神状態も尋常ではなかったのだ。

「……死にたくなければ、私と透には近づくな、ジーン。これは最後の忠告だ」

月とでも話をするように、カインは普段と何ら変わらない口調で言い残し、通りの方へと翻った。

「待て、カイン。この女を生かしておく積もりか？」

紅蓮が不満を露に、視線を突き刺す。

美しい女の姿でのその言葉は、ワルキューレを思わせるような、気高い魂さえ感じさせた。

戦の士気を鼓舞し、瀕死の者に引導を渡す女戦士——彼の姿は、戦の庭で散った戦士たちの集うヴァルハラにこそ相応しくはないだろうか。

「……殺せるのか、今？」

カインは振り返らずに、そう言った。

その言葉に、紅蓮が、ギシ、つと鞭を握り締める。

ジーンは、銃弾さえ跳ね返すガラスの向こう側にいるのだ。手を出すことが不可能な場所に。

「この女は何者だ？」

全てを凍りつかせるような瞳で、紅蓮は訊いた。

「君を……透を最初に見つけ、私のところへ知らせに来たのが、彼女だった。君は覚えていないだろうが、君に襲い掛かれた彼女の方は、よく覚えていることだろう」

「——」

透が襲い掛かった女——いや、あの時は透が誰であったのかすら、定かではない。

だが、透の異常性だけは、彼女にもよく解っただろう。

「あの時、喰いちぎられた皮膚は、整形手術で何とか元通りになったけど、右手の中指は、まだうまく動かないのよ。私まで狂いそうになったわ」

と、ガラスの中から、言葉を放つ。

血まみれの幼子に、突然、襲い掛かれた彼女の恐怖は、確かに狂気を呼ぶものであつたに違いない。

「今度は指では済まない。もう二度と顔を見せないことだ」

そのカインの言葉に、

「危険な子供を飼い馴らせたことがそんなに嬉しいの、カイン？」
と、ジーンは言った。

「……」

「あなたもいつか、その子に喰い殺されるわよ。十二年前の、あの事件のように」

そう忠告する彼女の声は、震えてはいなかっただろうか。

凄まじい美貌の少年に成長した狂人を前に――。

その狂人と、十二年間も共に過ごして来た青年を前に――。

彼らを前に、震えていたとしても、おかしくはない。震えない方がおかしいのだ。

カインは何を言うでもなく、背中を向けて歩き出した。

紅蓮も振り返らずに、後が続く。――いや、ヒュン、と一度、鞭を走らせ、高いヒールの踵を切り離す。

「藍香にどう言い訳をする積もりだ、紅蓮？」

転がる踵を見るでもなく、カインは無関心な口調で問いかけた。

「ハッ。また買い直せる、と言って喜ぶさ」

「女は……男が考えている以上に、厄介なものかも知れないぞ……」
その呟きは、誰を指してのものであつたのだろうか。

大切なヒールの踵を切り落とされてしまった藍香に――。それとも……

AREA・2 紐育（ニューヨーク）??

『ひどいわ、紅蓮ったら!』

ヒールの踵を邪魔物のように切り落とされてしまった藍香は、紅蓮と代わったことを後悔するように、紅蓮の内側で、怒りを打付けた。

『たかがヒールの一足だろう。紅蓮が言ったように、また買い直せば済むことだ』

玲瓏な雰囲気を持つ、静かな面差しの少年が、大人びた口調で、淡々と言う。

『たかが、ですって? あなただって、大切な扇を折られたら黙ってはいないでしょう、茶京?』

『私の中啓（儀式用の扇）と、君のヒールを同じにしないでもらいたい。あの中啓は国宝級のものだ。紅蓮が君のヴァイオリンやピアノを壊した、というのなら別だが』

茶京、と呼ばれた大人びた少年は、飽くまでも静かな口調で、そう言った。

『これだから男って厭だわ。お金で買い直せるものなら、何を壊してもいいと思ってるんですもの』

『……それは失礼。そんな積もりはなかったが、私の中啓を引き合に出してもらいたくなかったもので、ね』

『それくらいにしておけよ、茶京。ただでさえ、おまえの言い方は女の神経を逆なでするんだ。黙っていればモテるものを』

そう言って口を挟んで来たのは、何をするにもスマートな物腰であろう、と思わせる少年であった。

彼は、羽紺うづこん、といって、テニスやスキーあらゆるスポーツにズバ抜けた才能を持ち、その容姿なくしても、女の視線を惹きつけることが出来る、という華麗な雰囲気うづこんの『存在』である。

『あなたも同じよ、羽紺。男って、どうして女にモテることばかり

しか考えないのかしら』

『紫生みたいに、男に尻を振ることを考えている奴の方がいいのかい？』

『——。もう、わたしに話しかけないでちょうだい。よけいに腹が立つわ』

『本当は、カインに特別な女がいたことが気になっているんだろう？』

『——』

ますます険悪な雰囲気が立ち込めた。

『何しろ、あの女は、透さえ知らないカインの過去を知っているかも知れない女だ。もしかしたら、恋人だったかも——』

『茶京と藍香の喧嘩を止めに入っただのなら、そのくらいにしておけ、羽紺』

そう言つて、羽紺の言葉を遮ったのは、朱道であつた。

『……。相変わらず、カインのことが嫌いなようだな、朱道』

『嫌いな訳ではない。ただ信用していないだけだ』

『何でも調べなきゃ気が済まない、ってか？』

『……。カインの過去を知ったら、もっと信用できなくなるかも知れない。あの男には、知らない方が良かった、と思うような過去しかないのさ』

知らない方が良かった、と思うような過去——。それが正しいのかも知れない、と、ふと思つたのは、勘違いであつただろうか。

人類最初の殺人者の名を持つ青年、カイン——彼は一体……。

A R E A ・ 2 紐育（ニューヨーク） ？ ？

S C A P E G O A T ・ 5

屋敷は厳重な警備に守られていた。物々しい、とも言えるガードの数である。

庭には犬も放してあった。赤い歯茎と鋭い牙が、訓練された動きで徘徊している。侵入者の喉笛など、容易く咬みちぎってしまうに違いない。

「ようこそ、ミスター・ローウェル、ミスター——」

玄関に迎えに出て来た執事の言葉は、そこで、止まった。目は、信じられないものを見た時のように、凍りついている。

カインは、その執事の表情を見て、庭の方を振り返った。庭に立つ他のガードたちも、執事と同じように、両の目を大きく見開いている。声さえ出せない様子である。

それは全て、一人の少年のせいであった。

カインの後ろについて来ていたはずの緑乃は、いつの間にか庭にしゃがみこんで、自分の世界に浸っている。——いや、彼と犬の世界に、といった方がいいだろうか。

カインは、それを見て薄く瞳を細めた。

「緑乃、犬と遊ぶために来た訳じゃない。失礼にならない内に早く来るんだ」

と、獰猛としか言えない犬に頬擦りをしている緑乃へと、声をかける。

「あ……ごめん……。すみません」

他のことに気を取られてしまうと、肝心なことを忘れてしまう、という、いつものクセが出たのだらう。緑乃は、カインの声に、やっと気づいたように顔を上げた。

彼には、目の前にあるものだけが全てであり、一歩足を踏み出す度に、違う世界へと迷い込むのだ。だからこそ、人には見えないものを見ることが出来、人には描けない絵が描ける。

だが、それは、常識の時間の中で暮らしている人間には、理解し難いことであつただろう。人など容易く咬み殺してしまう獰猛な犬に、頬擦りをするにしても。

そして、訓練された犬が、主人以外の人間に懐く、などということとは、新しい世界を見ようとしてもしない人間には、考えることも出来ないことだつたに違いない。

執事やガードたちの瞳目も、それ所以、であつた。

「すみません、シニョーレ……。とてもきれいな犬だったので、つい見惚れて……」

と、執事たちの驚愕になど、全く気づいていない様子で、緑乃は申し訳なさそうに視線を下げた。

「あ、い、いえ……。ようこそ、ミスター・緑乃……。どうぞ、こちらへ」

やっと我に返つた執事は、それでもまだ幻でも見ているかのような表情で、カインと緑乃を屋敷の中へと案内した。

彼が知る限り、今まで、あの犬たちに頬擦りをした人間などいなかったのだ。もちろん、犬たちも、知らない人間に頬擦りをさせたりすることなど、一度もなかった。人を咬み殺すように訓練された犬たちなのだ。

その犬を手懐ける人間を『恐ろしい』と見るか、『心優しい』と見るかは、人それぞれであつただろう。

二人は執事の案内に従い、二階の一室を前にしていた。

ノックと共に、執事が二人の来訪を中に告げる。

ドアは、二人のガードの手によって、内側からすぐに開いた。

右手の立派な肘掛け椅子に、ドン・スパーロが腰掛けている。

「時間通りだ。――掛けたまえ、カイン。そして、ミスター・緑乃」と、きついイタリア訛りの英語で、革張りのソファへと二人を促

す。

部屋の中は、ニューヨーク五大ファミリーの名に相応しい、絢爛豪華な家具調度に埋まっていた。お世辞にも、趣味がいいとは言い兼ねる部屋である。

「無駄話はいらないだろう。さっそく、あの絵の値段を聞かせてもらおう——」

と、二人がソファに掛けるのを見て、スパーロが口を開いた時だった。庭を見下ろす窓の方から、派手な騒ぎが伝わって来た。

『そっちへ逃げたぞ！ 捕まえろっ』

どうやら、誰かが屋敷の庭に侵入して来たらしい。

『こつちだ！ 犬が一匹、死んでいる！』

その言葉に、緑乃が泣きそうな顔になって、眉を落とした。生まれた時からの親友を亡くしてしまったかのような表情である。

きつと、彼は、蚊にも喜んで血を吸わせてやっているのだろう。

騒ぎはまだ続いている。

『侵入者も傷を負っているぞ！ 血の跡が向こうまで続いている』

口々にガードたちが、叫びを交わす。

ただの泥棒ではないらしい。

「——おい」

スパーロが、ドアの脇に立つガードの一人に、視線を放った。それだけで意味を解したのか、ガードは目礼を残して部屋を出た。

「…… ニューヨークは、まだこの調子ですか」

カインは、冷めた口調で、口を開いた。

「君がニューヨークのことを訊くのかね？ この私に？」

「フツ……」。一番の適任かと思いましたが」

「……。かも知れん。この街が、君と同じように得体が知れんことは、よく知っている」

「……」

しばらくすると、庭の騒ぎも収まったのか、ガードたちの怒鳴り声も聞こえなく、なった。

スパーロの指示で庭の様子に行っていたガードが、また部屋へと戻って来る。そして、スパーロの脇に立って、耳打ちをした。スパーロの表情が、わずかに変わった。チラ、っとカインの方を垣間見る。

その唇は、こう動いた。

「ジーン・ライナーという女性を知っているかね、カイン？」

笑みを持たない問いかけである。

カインの表情は変わらなかったが、緑乃の表情は、刹那、変わった。まるで、荒ぶる神の如く、冷酷に――。

「ええ。――彼女が捕まりましたか？」

緑乃の変化を知っているのか、いないのか、カインは慌てるでもなく、そう訊いた。

「いや。庭に忍び込んでいたのは、男だ。その男の口から、その女の名前が出たそうだ。彼女に命令されて、君を見張っていた、とな」その言葉に、緑乃の表情が、元の通り、浮世離れした少年のものに、切り替わった。

まるで、獲物を嗅ぎ分ける獣のような反応である。獲物がいない、と知れば、また静かな眠りにつく。

「どうも失礼を……。この屋敷にまで忍び込んで来るとは思わなかったもので」

カインは、尾行者を伴って来た失礼を、失礼とも思っていない口調で、淡々と詫びた。

「この私もナメられたものだ。すんなり入り込める、と侮られているとはな。――君が欲しいのなら、渡してもいいが」

「……私には欲しいものなどありませんよ、シニョーレ・スペーロ」何も欲しがらない人間など、本当にいるのだろうか。

普通の人間がそんな台詞を吐いたのなら、きっと、誰もが笑い飛ばしたことだろう。

だが、そう言ったのは、蒼い月のように玲瓏な青年である。彼が欲しい、と思うものの方が、見当もつかない。

もうそれっ限、話が侵入者のことに戻ることは、なかった。

「――で、絵の値段だが……聞かせてもらえるかね、ミスター・緑

乃？」

と、スパーロが言った。

緑乃は、何度も練習した言葉を繰り返すように、口を開いた。

「あ……はい。あの……他の人の前では……」

と、ドアの前に立つ、二人のボディ・ガードの姿を垣間見る。

ガードのこめかみが、怒りを表すように、ピク、っと動いた。

だが、その怒りが、緑乃へ向けての言葉に変わる前に、

「いいだろう。当然、君の方もカインに出てもらう、ということになるが、構わんかね？」

と、スパーロが、緑乃の隣に腰掛けるカインの方へと、視線を向けた。

「はい、それは……」

「では、君の言う通りにしよう。——おい、席を外せ」

そのスパーロの言葉に、ガードたちの表情が、ますます憤るように、厳しく変わった。

「しかし、ガードもお付けにならずに、そんな少年と二人になられるなど——」

「十四、五歳の子供を相手に、何がガードだ」

「あの……ぼくはもう二十歳に……」

その緑乃の声は、小さ過ぎて、無視された。

アジア人が年より幼く見られることなど、今に始まったことではない。

「ですが、東洋人など一番信用できない人種で——」

「さつさと出る！ この私に恥をかかせる積もりかつ！」

スパーロの怒りが爆発した。子供が一人になることを承諾しているというのに、ファミリーのドンたるスパーロが、ガードなしでは話が出来ないなど、何にも勝る屈辱である。

そのスパーロの怒りを見た緑乃の表情は、可哀想なほどに、不安げな色に変わっている。カインと離れ離れになる、というこの状況を、後悔していたかも、知れない。

もちろん、ガードたちの表情も、真つ蒼である。

「は、はっ」

と、慌てて部屋から飛び出して行く。

カインも、ポン、と緑乃の肩を軽く叩き、手の温もりだけを残して、部屋を出た。——そう。彼の手も、暖かい、のだ。彼の手が冷たい、などと、何故、勝手に思い込んでいたのだろうか。

部屋の中は、緑乃とスパーロの二人だけになった。

「飲みたまえ。少しはリラックス出来るだろう」

頼りなげな——本当はいつもそうなのだが——その緑乃を気遣うように、スパーロはコニャックのグラスを差し出した。

「あ、はい……。グラーツィエ」

緑乃は素直にグラスを受け取り、口をつける。コニャックなど、舐めただけで倒れそうな雰囲気をしているというのに、酒類は全く平気らしい。器が同じせいだろうか。

「さて、そろそろ君の話を聞こうか」

そのスパーロの言葉に、緑乃はグラスを置いて、話を始めた……。

A R E A ・ 2 紐育（ニューヨーク） ？ ？

カインは、ガードに通された別室で、スパー口と緑乃の話が済むのを待っていた。

座りもせず、壁に凭れ掛かっているその姿は、何を考えているのかは解らないが、緑乃の心配をしていないことだけは確か、であつただろう。

そして、緑乃に手を出さない限り、スパー口の身に災いが降りかかることも、あり得ない。

冷たい風が、部屋に、入った。

「……何の用だ？」

視線を向けるでもなく、カインは訊いた。

窓から部屋に入り込んで来たのは、女であつた。ガードたちに捕らえられた男を囚にして、彼女が屋敷に忍び込んでいたなど、誰も考えてはいなかっただろう。恐らく、カイン以外は。

「それが私にする質問？ 私の用は、いつもあなたただけだわ」

女——ジーンは、青い瞳を薄く細めた。

男なら、誰もが虜になりそうな眼差しである。

だが、カインは、黙って壁に凭れている。

彼は一体、どんな女になら欲情する、というのだろうか。

「ねエ、カイン。あなた、自分が何者なのか知りたくはないの？」

不思議な——訊き方を間違えている、としか思えない問いかけである。当人を前に、その当人のことを知りたくはないか、という質問の仕方があるだろうか。あるとすれば、それは……。

「私は『カイン』だ。それ以外に必要なものなど何も無い」

冷然たる口調で、カインは言った。

「では、あの少年は、あなたにとって必要なのかしら？ あんな気味の悪い子……。あのきれいな顔立ちだけでもゾツとするのに、よく一緒にいられるわね？」

「……」

「あんな子、さつさと精神病院へ閉じ込めるべきだわ。小さい頃は、二、三分間の嗜眠^{しみん}状態を境に別の人格に代わっていたのに、今のあの子はどう？ すっかり自分でコントロールしているじゃない。――怖くないの、カイン？ あの子、絶対に普通じゃないわ」

ジーンは身震いするように、言葉を続けた。

「……怖いさ」

カインは言った。

「それなら、どうして――っ」

「君は、善良で安全なものにだけ惹かれる訳ではないだろう、ジーン？」

「それは……」

「私にも彼にも近づかない方がいい。君のためにも」

「あなた……何か思い出したの？」

「……」

沈黙が、零れた。

それは、どれほどの意味を持つ言葉、であったのだろうか。

「あなたは私のものよ、カイン。あんな気味の悪い子になんて渡すものですか。傷だらけのあなたを助けたのは――」

ジーンが言いかけた時だった。ドアの向こうに、ガードのものらしき足音が、近づいて来た。

軽いノックの後に、スパーロの部下が姿を見せる。その時にはもう、ジーンの姿は部屋の中から消えていた。

窓から、冷たい風が差し込んでいる。

「ミスター・ローウェル、お連れの方と、ドン・スパーロの話が終わりましたので、部屋にお戻りになるように、とのことですよ」

「ああ、グラーツイエ」

カインは、緑乃のいる部屋へと足を向けた。

彼は一体、何者なのであろうか。

そして、緑乃がスパーロと交わした話とは……。

「話はどうだった、緑乃？」

屋敷を後にし、豪華な黒塗りのリムジンの中で、カインは、向かいのシートに座る緑乃へと、声をかけた。

「あ、うん……。シチリアからの荷がもうじき着くから、その中から分けてもらえるって……。もちろん、他の人達には内緒で」

と、緑乃は応える。

「そうか……」

「ダメ？　すぐの方が良かった？」

無表情なカインを見ての問いかけであった。

普通の人間なら、表情を見れば言いたいことが解るというのに、彼に限っては、そうではないのだ。

「いや。構わないさ。取り敢えず、こっちの欲しいものが解っただけでも、向こうは安心しただろう」

その言葉に、緑乃は、ホッ、と胸を撫で下ろした。

取り敢えず、今のところは順調に透の役に立っているのだ。

「透のお母さま……。見つかриそう？」

と、ホッ、としたついでに、問いかける。

こういう時は、いい応えが返って来るものなのだ。

だが――。

「いや。実名でホテルに泊まっている、という可能性は消えた。男と一緒にいるのなら、その男の名前で泊まっているだろうし……。駅にもあれ以来、姿を見せない」

と、カインは、ここがニューヨークであることを告げるように、淡々と言った。ここでは、誰が姿を消しても不思議ではないのだ。

「ぼく……。透に言わない方が良かったのかな？　透のお母さまがいた、なんて……」

「何故？」

「だって……透を捨てた人のことなんか……。透のお母さまは、透のことが邪魔だったんだ。朱道が見つけた日記帳には、そんなことが一杯、書いてあつて……」

「日記？ 透の母親の日記なのか？」

カインの問いに、緑乃は、ブンブン、と首を振った。

「透のお義父さまの……。小さい頃、朱道が透のお義父さまの部屋に忍び込んで、その日記帳を見つけたんだ。朱道は昔からそういうことが好きだったから……。もちろん、その頃は読めない漢字がほとんどだったけど……。でも、書いてあることは、なんとなく判つて……」

「それで？」

「それで……。透が見ちゃいけない、と思つて、みんなで相談してこれは捨ててしまおう、つて……。その後、透はお義父さまに酷く叱られて……。ぼくたちが日記帳を持ち出したから、透のお義父さまは、透が勝手に部屋に入り込んだんだと思つて……。本当は、ぼくたちが悪かったんだ。透の体を勝手に使つて動き回っていたから……。だから、それから、もう透に迷惑をかけないようにしよう。つて……。みんなで、決めて……」

「そうか……」

透が自分自身の異常を知つたのは、カインと出逢つてからのことなのだ。それ以前の透は、《友だち》の存在など全く知らず、飽くまでも、蔵の中で遊ぶ架空の存在が、《友だち》であつた。

古い絵の具が、その実体である。

ままごと遊び、とても言えばいいのだろうか。

何色もの絵の具を目の前に並べ、それぞれに名前を付けて、人形の代わりに遊んでいたのだ。暗い蔵の中の恐ろしさと、寂しさを紛らわすために……。黙つていれば幽霊が出る、という恐怖心から、透はその《友だち》たちと喋り続けた。

もちろん、その《友だち》たちも、透の言葉に応えてくれた。

そして、蔵へ閉じ込められる回数が増える度に、父親の叱責を受

ける度に、透のその遊びはエスカレートして行つたのだ。

よく使う白の絵の具は、中身を出し切るように丸めてあり、幼子のように愛らしかった。だから透は、その白い絵の具を、一番年下の妹にした。もし、遊び相手が色鉛筆であつたなら、ほとんど使うことのない白色は、一番のつぼの長兄になつていたかも、知れない。それから、《友だち》はどんどん増え続けた。父親の機嫌を損ねる度に、哀しいことがある度に……。

「透は……透には、ぼくたちのことを気づかれちゃいけない、って思ってたけど、黒都が……黒都が出たあの日から、ぼくたちもうまくコントロール出来なくなってる……誰もその時間を覚えていないことがあるようになって、不安になって……それで、カインに相談しよう、って……」

もちろん、その頃には、カインも透の異常に気づき始めていた。異常を来す原因があることを承知していたのだから、当然のことだろう。——といって、日本での透の境遇を知っていた訳では、ない。飽くまでも、大人たちを惨殺した透の行動を鑑みてのことである。いきりなり、ぞんざいな口を利くようになったり、猫のように甘えて来たり……。そして、透自身がそれを覚えていないことが、何よりの異常の裏付けであった。

多重人格——その結論を出すのにも、そう時間は掛からなかった。多重人格は、一方が、もう一方のことを知らなかったり、双方ともが互いの存在を知らなかったり、双方ともが互いの存在を知っていたり……。と、いくつかのケースに分かれる。双方が同時に出現する場合もある。

透の場合は、第一人格たる透自身は何も知らず、他の存在——《友だち》たちだけが透のことを知っている、という一方通行のケースだった。

透の中では、飽くまでも《友だち》は絵の具を使つての『ままごと』であり、透自身がその絵の具を持って動かなければ、蔵の中を歩き回ることもし出来ない存在だったのだ。

当然、朱道も『透の母親の写真』を見つけて来るなど出来なかった。

だが、それは透からの視点であり、《友だち》たちからの視点とは、違った。彼らは、透の中で、それぞれの人格として息づいてい

ただ。父親や母親の愛を受けられなかった透の《友だち》として――。父親や母親の代わりに、透を愛してくれる存在として……。

その話を全てを聞き終え、それでもカインは、透を精神病院に連れて行くことはしなかった。それが何故なのかは、解らない。

普通なら、狂人と化して人殺しまでした人間を、たとえ幼子であっても、野放しにしておくことはしなかっただろう。いつ、また、人格に異常を来して、同じ行為を繰り返すか判らないのだ。

人々は、これまでもずっと、そういう者たちを隔離して来た。常識、という器から零れた者たちを、精神病院と名を変えた近代的な牢獄に閉じ込めて来たのだ。彼らの世界を否定して、ただ、危険という理由だけで――。

もちろん、危険だろう。そして、人を殺しても法律では罪を問えない彼らの存在は、何よりの脅威であつたに違いない。

だが、それを――全てを彼らのせいにしてしまうことが出来た、というのだろうか。

狂人を創り上げた人間の罪を問わなくても良かった、というのであろうか。

誰が間違っている、という訳ではない。

ただ、カインは一つの道を選択し、透もまた、自らの道を選択しただけのことなのだ。たとえそれが、奈落の底へと続く道であろうと……。

「ぼくは……ぼくたちも透も、あの時のことは、とても感謝してる。ぼくたちが信頼できるのは、カインだけだから……。あの時、カインに相談して、本当によかった……」

カインに相談して……。

だが、彼は一体、何者なのであろうか……。

『——ったく。緑乃のおつむの中は、どうなってるんだ？』

舞台裏で、そう言っただけ肩を竦めたのは、現実を見据えることの出来る強かな瞳を持つ少年、夏黄であった。

『あら、どういう意味？ あなたも朱道と同じように、カインのことを信用していない、とでも言う積もりなの、夏黄？』

トップ・モデルに相応しい華やかさで、青華が冷ややかに問い返す。

『その話じゃないさ。スパーロの屋敷での話だ。緑乃は、もうとつくにそんなことなど忘れてるようだが』

『ああ、あれ。あれなら大丈夫よ。紫生もいることだし』

『解ってないな。スパーロが犯りたいのは、男に尻を振る紫生じゃなくて、初々しくて、何も知らない緑乃だぜ。紫生が自分からケツを出してみるよ。そこでスパーロは我に返る』

『あら、じゃあ、私と紫生が入替わった時はどうなの？ 私だって、あんな節操のない人間と同じに見られるのは厭だったけど、渋々、入れ代わったのよ』

『デ・クレシェンツォに抱かれる方がもつと厭だ、って言ったんだから、仕方がないたる。それに、君みたいなサディストには、結構、似合ってたさ』

『誰がサディストですって？ そんな言葉は緋影ひえいに使うことだわ』

『あいつは、その上に『真性の』っていう言葉がつくのさ。男の喉からペニスの先まで、ジリジリと剃刀を走らせるのを見た時は、寒気どころか、吐き気がしたぜ』

その時を思い出すように身震いをし、

『それより、問題は緑乃だ。あいつは、『次に会って取引をする時も、カインとボディ・ガードは抜きで』と、スパーロに言われた言葉の意味も解っていない。当然、今日のように話だけで済むと思っ

ている。あつさりとうなずいて、おまけにカインにもそのことを話していない』

『後で、私たちがカインに伝えれば済むことじゃない。緑乃にも』

『まあ、あいつにはいい薬だ。今度は、右手と右足を同時に出すくらしいの緊張じゃ済まないぜ』

『コケるかしら？ この顔と体に傷をつけられたりしたら厭だわ。私、モデルなのよ』

かなり切実な、そして、目一杯の心配を込めた言葉であった。

『カインという間は、コケることもないさ』

そう言ったのは、夏黄ではなく、さつきから二人の話を聞いていたらしい、朱道であった。一応、カインのことを信頼しての言葉、らしい。これは滅多にないことである。

『あら、あなたがカインのことを褒めるなんて珍しいこと』

と、青華も目を丸くして、皮肉を送る。

『……。あの男は、スパーロに少年趣味があることさえ、緑乃に一言も伝えていないんだ。私が調べた限りでは、欲しいと思った少年は、必ず手に入れている、というのに——。カイン以外……』

『へエ、カインも狙われたのか。どうりで、スパーロが緑乃の手を取ろうとした時、すぐに間に入った訳だ』

その夏黄の言葉は、パーティでの出来事を思い出しているもの、だっただろう。

『逆効果だ。かえってスパーロは緑乃に興味を持ったし、緑乃はまだスパーロの少年趣味に気づけずにいる』

『あのまま手を握らせてやっても同じだったさ。緑乃は気づきもしないし、スパーロも諦めない。二人つきりになれる時間があるんだからな。——何か言いたいことがあるなら、はっきり言えよ、朱道……。私たちは、カインにいいように利用されているのかも知れない』

『利用？』

朱道の言葉に、誰もが皆、目を見開いた。

『馬鹿なことを言うなよつ、朱道。カインと俺たちは、もう十年以上も一緒にいるんだぜ』

『——で、その十数年で、カインのことをどれだけ知った？』

『——。それは……最初から何も訊かない約束で……』

『カインは端から、緑乃をスパーロに会わせる積もりでいたんだ。緑乃ならスパーロも油断することを知って』

揺るぎのない口調で、朱道は言った。

『そんなことをして何になる、っていうんだよ？俺たちを利用したって、カインには何の得にもならないじゃないか。何の目的があつて、そんなことをするっていうんだ？』

『……。まだ、解らない。私はそれを調べる積もりだ』

『調べるですって？私たちは、最初に決めたはずだわ。透のためになることだけをしよう、って。絶対、透に迷惑をかけるようなことをしてはいけない、って——。それを破る積もりなの？』

青華は咎めるように、朱道を見据えた。

『私は、透が大切だから言っている積もりだ』

『透はカインを信頼しているわ。私たちは、その透の思いに反することをしてはいけないのよ』

『透にもカインにも気づかれないうちにやるさ。——緑乃とは私が入れ替わる』

『え……？』

『スパーロはカインのことを何か知っているはずだ。ベッドの中でなら、それも訊き出せるだろう』

『……』

舞台裏に、雪が降るように、沈黙が、零れた。

紫生が何か文句を言っていたが、それを聞く者は誰もなかった……。

AREA・2 紐育（ニューヨーク） ???

ニューヨークの夜景が、見える。

華やかな五番街に聳えるビルの上階は、美しく豪華な住まい、であつた。

大きなガラス張りの一面には、マンハッタンの摩天楼がきらめいている。

モダンであり、芸術的であり、溜め息が零れるほどの贅沢な雰囲気にも包まれる部屋には、白髪混じりの紳士が、いた。部屋の照明が消えているせいで、顔までは見えない。小柄、とはいえない体つきであろう。シルエットからは、そう受け取れる。

煙草の紫煙が、広がっている。

ドアが開いたのか、細い光が部屋の中へと差し込んだ。

光の幅が、広くなる。

それでも、初老の紳士の姿を照らし出すことは、なかった。

「——一色透の方はどうなっている？」

部屋に訪れた人物を見て、初老の紳士は問いかけた。

「手は色々と考えていますわ。カイン——いえ、ケイン・ローウェルが側にいる間は、迂闊に手を出すことも出来ませんから」

と、ドアの前に立つ女は、受け応えた。

「ローウェルが育てた『殺人兵器』か……」

「……」

「早々に手を打って捕まえろ。あの少年——一色透を……」

「これが、君の言っていた品物だ。ペルシアン・タン——純度九〇パーセントに達する最高級品だ」

この間と同じ部屋の中で、ドン・スパーロは、薬包に包んだ新書本ほどの大きさの包みを、取り出した。

「中を確かめたまえ」

と、緑乃の手に握らせる。

「あ、はい……っ」

いつになく緊張した面持ちで、緑乃はぎこちなく薬包を開き始めた。

カインと、スパーロのボディ・ガードたちは、別の部屋へと移っている。この部屋には、緑乃とスパーロの二人だけである。

そして、この屋敷に着くまでの間、緑乃が数度コケかったことは、言うまでもない。もちろん、その度にカインが支え、緑乃の顔や体に傷がつくようなことは、なかった。が、青華は気が気ではなかったであろう。

今も、舞台裏では、低い囁き合いが続いている。

「ねエ、あの子ったら、ヒロインの味なんて判るの？」

顔や体が無事だと判ったら、一応、緑乃のことも心配してやる気になったらしい。青華は、眉を寄せて、朱道を見上げた。

「さあな。テレビや映画で、こういう時にどうするのかくらい知っているだろう。注文通りの純度のヒロインかどうかは、私が教える」

「致死量くらい舐めるんじゃない？」

「大丈夫……だろう」

朱道の声も、心持ち、弱い。やはり、不安なのだろう。

「判らないわよ。緑乃のやることですもの。九〇パーセントの純度のヒロインなら、注射針ニードルを使わなくても、楽々陶酔感ラッシュに浸ることが出来るし——。緑乃も、お酒と同じように、いくら舐めても大丈夫

だ、って思ってるんじゃない？ ほら、一〇パーセント程度のヘロインを扱う時と同じ感覚で——。ニューヨークのスラムに出回っているヘロインなんてロアー・イースト・サイドの三から三・五パーセント程度のものか、もう一つの麻薬市場、ハーレムの、六・五パーセント平均くらいのものでしょう？ ガツガツ食べたって平気だ、くらいに思っているかも知れないわよ』

『いくら緑乃でも、そこまでは……』

声はかなり、弱くなった。

『もしかしたら、薬包を開こうとして、部屋の中にバラまいたりしてそれくらいのことなら、緑乃なら絶対、やるでしょう？』

『……』

今度は完全に、沈黙した。もちろん、長くは沈黙してられない。

『おいっ、緑乃！ 私と代われ！ 出来ないことをするんじゃないっ』

と、声を粗げて、緑乃を止める。

だが、緑乃はよほど緊張していたのだろう。

「え？ 何？」

と、声に出して、問い返す。

『あの馬鹿っ！』

そんな声が飛んだのも、無理はない。

スパー口も、突然、虚空に話しかけた緑乃を見て、訝しげに眉を寄せている。日本語であつたとはいえ、明らかに独り言とは違っていたのだ。

「どうかしたのかね？」

と、瞳を細めて、緑乃を見据える。

別の人格と話をしている、とは思ってもいないだろうが、通信機や、何らかの連絡手段を隠し持つて、誰かと話をしている、という疑いが芽生えたことは、間違いない。そっちの方が、よほど厄介である。

ふっ、と緑乃の表情が、変化した。茫洋とした少年のものから、どこか冷めた雰囲気を持つ少年のものへ――。そう。彼はもう緑乃ではない。朱道である。

「あ、いえ……すみません……」

と、緑乃の真似をして、言葉を返す。

下手な言い訳をしないことも、良かったのだろう。スパー口も、緑乃が普通の少年とは違っていることを知っているせいか、それ以上、問うことはしなかった。

朱道は、ホッ、と胸を撫で下ろしながら、薬包の中身確かめた。中のセロハンを破いて、粉を舐める。

白い粉は、確かに注文通りのヒロインであつた。

しかし――。

「君は……本当に緑乃君かね？」

スピーロが、言つた。あまりにも手際のいい朱道の作業、所以であつたかも、知れない。薬包の中身を確認する手つきも、どこか冷めた面貌も、今までの緑乃とは、どんなに真似ても違つているのだ。もとより、緑乃の真似ほど難しいものもない。

「あの……？」

突然、引つ張り出されたように――いや、事実、引つ張り出されて、緑乃は、きよとん、と首を傾げた。

スピーロの表情も、再び戸惑いの色に切り替わっている。

「い、いや、何でもない。私の思い違いだ。君が別人のように見えるなど、年を取つたとしか思えん」

と、いつもと同じ緑乃を見て、取り繕う。

取り敢えず、その場は収まつた。

舞台裏で、朱道たちが冷や汗をかいていたことは、言うまでもない。

だが、それだけの冷や汗では、終わらなかつた。

「ヒロインが！」

と、スピーロが目を瞠つて、声を上げた。

見れば、緑乃が手に持つ薬包から、白い糸が伝つている。さつき、朱道が中身を確認する時に破いたセロハンの穴から、ヒロインが零れ出しているのだ。

二つのことを同時に考えることの出来ない緑乃は、朱道の声が届いた時から、ヒロインのことなど、きれいさっぱり忘れていたのだらう。傾ければ零れる、という考えもなく、セロハンの裂け目を斜めにして持つている。

「あつ、あつ！」

と、慌ててはいるものの、うろたえるばかりで、対処の段階にも至っていない。

舞台裏では例の如く、

『ついにやったわね』

『ああ。もう口を出す気にもならない……』

と、完全に見放すような会話が、零れていた。

最初から、緑乃には荷が重過ぎる役だったのだ。

「ご、ごめんなさいっ。ばく……っ」

どっちに謝っているのかは判らないが、緑乃は可哀想なほどに、焦っている。——いや、動作は相変わらず鈍いが、気持ちだけは焦っている。だから、余計におぼつかないのだ。

「……君は変わった子だ、緑乃」

スパーロが言った。その眼差しは、淫靡なものに変化している。

あまりに頼りない緑乃の言動が、そうさせたのであるうか。

「ヒロインなら心配せんでいい。後で零れた分を——いや、君が欲しいだけ用意してやろう。その代わり——」

と、グイ、っと緑乃の腕をつかみ取る。

「……シニョーレ・スペーロ？」

緑乃は瞳を持ち上げた。

唇が重なったのは、その時であつた。

そのことを緑乃の頭が理解するのに、一〇秒ほどかかるか、と思えたが、前以て忠告を受けていたせい、か、それに関しての反応は、早かつた。

「ん……っ！」

と、目を見開いて、さらに、焦る。——そう。焦つたのだ。戸惑いも驚愕も、その焦りに追い打ちをかけていた。

スペーロの手が、緑乃を強く抱き締める。

一方の手が、緑乃の下肢の狭間に滑り込んだ。

五本の指が、その中心をつかみ取る。

緑乃は、ハッ、と体を硬くした。

「やめ……っ！」

と、体を擦つて、それを拒む。

粘りつく舌に、喉の奥から酸っぱいものが込み上げていた。男に唇を塞がれ、舌で口の中を犯されるなど、緑乃には吐き気をもよおすことでしかありえなかつた。

「ぐう——」

息を止めて、込み上げる吐き気を抑えつける。

瞳の縁には、そのための涙が溜まっていた。

しかし、パニックを起こしていたのは、緑乃だけではない。舞台裏も、また同じである。

『早く代わってあげてっ、朱道！ 緑乃が可哀想だわ！』

と、藍香が泣き出しそうな声で、叫びを上げる。

『私はさっきから代わろうとしている。だが、緑乃がパニックを起こしていて代わらないんだ』

『何……ですって……？』

シン、と舞台裏が静まり返った。

『だから、緑乃にこんな役をやらせるな、と言ったんだ！』

夏黄が腹立たしさを打付けるように、言葉を投げる。

『そんなことを言っている場合じゃないでしょう！　今は何とか緑乃を落ち着かせるのよ』

青華が、夏黄を窘めるように、きつく言う。

『どーしたの？　緑乃、どーかしたの？』

幼い声が、紛れ込む。

『向こうへ行っていないさいつ、白亜！』

『おい、白亜に当たるなよ』

『そんなこと、あなたに言われなくても解ってるわよ。でも——。
このまま緑乃が我を失って、黒都が目醒めたらどうなると思つのよ！』

それは、青華だけが抱えている懸念では、なかった。ここにいる誰もが考えていたことである。

黒都——。また、彼が目醒めしてしまうのであろうか。

この荒み切ったニューヨークで——。

透の心を打ち砕いた無法都市で——。

あの無垢な魔人が、姿を見せるといふのだろうか。

『いやだああ——っ！』

刹那、悲痛な叫びが、部屋に渡った。

廊下にも届くであろう絶叫である。

だが、スパーロの部下たちは、誰一人として部屋には入って来なかった。恐らく、スパーロにそう言い付けられているのだろう。

もちろん、別室にいるカインの耳にも、緑乃の声は届かなかったに違いない。

「大丈夫だよ。さあ、力を抜いて……」

スパーロが、緑乃の腰をがっちりと抱える。

「ひっ……」

喉を詰めるような声の後、息を吐くことさえ出来ないような叫びが上がった。サイレント・ムービーを思わせるような、表情だけの痛々しい叫びである。

スパーロの腰が、淫靡に動いた。

緑乃は、身動きもせず、じっとしている。

射干玉の髪だけが、スパーロの動きに合わせて、規則的に揺れている。

「いい子だ……。すぐに良くなる。——初めてではないだろうか？

君の体を見れば、すぐに判る。本当に美しい……。この滑らかな肌……。東洋人は、何よりも神秘的な存在だ……」

静か過ぎは、しないだろうか。

痛みすら訴えない緑乃の表情は、別人のものに変わってはいないだろうか。

「……カインとは寝たのかね？ 彼はとうだった？ 君たち二人の絡み合う姿は、さぞ美しいことだろう……。神々でさえ、きっと、その美しさの前には、恍惚となる……」

彼には——スパーロには、判らないのだろうか。

ソファに伏せる緑乃の表情が、氷のように冷たく変わっていることが。

手のひらに食い込ませていた指先が、いつの間にか緩んでいることが。

「君の愛らしさは天使以上だ……。この華奢な腰も、しなやかな四肢も、どんな芸術よりも素晴らしい……」

スパーロが、そう囁きかけた時だった。

「さつさとイケよ、ジジイ」

緑乃が言った。――いや、彼は緑乃ではない。

だが、それなら彼は誰だ、というのであるうか。朱道は確か、緑乃はパニックを起こしていて代われない状態だ、と言ってはいなかっただろうか。

それなら――。黒都が出た、というのであるうか。あの黒都が、再びここに――。

「緑乃……？」

スパーロの表情が、戸惑いに変わった。明らかに違う人物――緑乃ではない『存在』を前に、戸惑っている。もちろん、本当に緑乃ではない、と思っている訳ではないだろう。ただ、突然の緑乃の变化に、状況を理解できずにいるのだ。

フツ、と嘲笑うような笑みが、零れ落ちた。

色薄い唇が、歪んでいる。

確かに笑みであるはずなのに、それが笑みであるとは、信じたくもないような悍ましさであった。

「緑乃、か。あいつなら、もうとつくに気を失っているさ」

と、顔を上げるでもなく、言葉を返す。

そうなのだ。緑乃が気を失ったからこそ、彼も代わることが出来たのだ。

「何を言っているんだ、緑乃……？ 君は、こうしてここに……」

スパーロも、やっとその恐怖に気づいたのだろう。欲望とはまた違った汗を、浮かべている。

「イカないのなら、オレはもう相手をしてやらないぜ。オレが黒都でなかっただけでも、感謝することだ」

「……黒都？」

「オレが黒都なら、あんたも、安らかな死だけを願っただろう」

ひらり、としなやかな肢体が、翻った。

その手の中には、ベルトがある。

『よせつ、紅蓮！』

舞台裏から、声が飛んだ。

いつの間にか緑乃と入れ替わっていた紅蓮を前に、《一同》が面を凍りつかせる。

多分、皆がパニックを起こしている間に、入れ替わったのだろう。「ハッ。いいのかい？ オレが殺らなきゃ、黒都が殺るぜ。おまえたちが騒いだせいで、いつ目を醒ましてもおかしくない状態だから」

皮肉な口調で、紅蓮は言った。

黙り込むしかない言葉であった。確かに黒都の妖気は目醒めかけであり、寝はぐれた嬰兒みどりこのように、誰が宥めてもおとなしく眠らない状態になろうとしている。

「……何を言っているんだ、緑乃？ 誰と話を……」

口を開いたのは、スピー口であった。独りで、何かを喋っている紅蓮を見て、ますます瞳を戸惑わせている。

今の紅蓮は、誰の目から見ても、奇異な狂人と映ったであろう。

全裸でベルトを構える、あまりにも美しすぎる狂人である。

「今、教えてやろうじゃないか」

そう言って、紅蓮はしなやかにベルトを振り上げた。

『よせつ、紅蓮！ その男を殺すな！ その男はカインのことを知っているはずなんだ！』

舞台裏での朱道の言葉は、間に合わなかった。

ビシ——っ、と激しい音が響き渡り、紅蓮が、タン、と床を蹴った。後方へ退き、着地した刹那、スピー口の喉から、真紅の血が飛沫を噴く。

何と生臭く、汚穢な光景であっただろうか。

そして、何とその美しい少年に相応しい光景であっただろうか。血が似合う、のだ。

飛沫を上げ、唾液が固まるような匂いを放つ紅の血は、彼に最も相応しい。

『馬鹿なことを……。私が話を訊く間、生かしておくことぐらいは出来たはずだ』

朱道は腹立ちを打付けるように、冷然と言った。

「言ったはずだ。オレは誰の指図も受けない。透が黒都の出現を望んでいない以上、オレは黒都を出さないように、その危険分子を始末して行くだけさ。オレの好きなやり方で」

『……。さつさと代われ、紅蓮。ガードに気づかれない内に、ここを出る』

「カインを置いて行く、ってか？」

『私一人ならそうするだろうな』

床の上には、喉の割れたスパー口の死体だけが、天井を凝視するように、転がっていた……。

AREA・2 紐育（ニューヨーク） ???

ドン、と低い振動が、鼓膜を震わすような爆音と共に、突き上げた。

スペーロの屋敷が炎を吹き上げ、凄まじい黒煙を上げ始める。

それを車の中から眺めるカインの表情は、ただ静かなままであった。何も言わず、緑翠の瞳を薄く細め、ゆったりとリア・シートに凭れている。怒っているのか、微笑んでいるのかすら、判らない。

だが、滅多に見せない表情であったことだけは、確かだろう。

朱道は、手元の遠隔操作機リモートコントローラーを脇へ置き、そのカインの表情を、じつと見つめた。

車のシートの上で、遠隔操作機リモートコントローラーが、時折、跳ねる。

その遠隔操作機は、以前、朱道がスペーロの屋敷に忍び込んだ時に仕掛けた爆弾を、起動させるためのものであり、たった今それを起動させたばかりである。

その爆弾を仕掛けたのは、あの時、朱道と入れ替わった灰裂である。

屋敷の地下には大量の武器が隠しており、小さな爆弾を数箇所に仕掛けるだけで、屋敷を丸ごと吹き飛ばしてしまうほどの破壊力となった。

だが、それは、スペーロに裏切りと苦痛を与えた後で、起動させるべきものであったはずなのだ。透が父親に与えられた裏切りと苦痛を、スペーロに与えた後で……。

しかし、それは紅蓮の出現で、止む無く潰つぶえた。

「今度、緑乃にあんな役をさせてみる……。私は透の意志に反することでも、君を殺す、カイン」

朱道は、呪詛のように吐き捨てた。

カインは何も言わずに、黙っている。もちろん、彼が何を考えているのかは、解らない。今回、緑乃にこの役を回したことにしても、

——ただ透の役に立ちたがっていた緑乃に、その機会を与えてやり
たかっただけなのか、それとも、カインのことを知る人間、スパー
口を始末させたかっただけなのか、彼の真意はまるで読めない。

抑、^{そも}彼は一体、何者だ、というのだろうか……。

AREA・3 紐育（ニューヨーク） 2 ？

AREA・3 紐育^{ニューヨーク}2

誰かが獲物を狩ろうとしている——その獲物がどれほど危険か知りもせずに……

SCAPE GOAT・1

この街は、何故、これほど傲慢なのだ。

政治はワシントンD・C.にあり、ニュー・イングランドのように、他を圧倒する大学も持っていないというのに、我こそはアメリカの顔である、とでも言いたげに、踏ん返り返って、のさばっている。

何が起こっても驚かず、また、何でも起こす者たちが、いる。その太々（ふてぶて）しさは、何とかならないのであろうか。

本物だけが評価される街——。そう胸を張っておきながら、これほど四方八方に蔓延っているまがい物を、どう説明するというのだ。
紐育——。^{ニューヨーク}

この街は、いつも図々しく、そして、いつ訪れても、刺激的、だ……。

「……スパーロの屋敷が吹き飛んだそうだな？」

五番街に建つビルの最上階から摩天楼を眺め、初老の紳士は感慨もなげに呟いた。

ニューヨーク五大ファミリーの一つ、ボナーノ・ファミリーのドン、シルヴィオ・スパーロの屋敷が、爆破炎上したと聞いた上での言葉、である。

生存者は、ゼロ。もちろん、スパーロ自身も、半ば肉片と化した形で発見された。

「警察の方では、スパーロの屋敷の地下にあつた武器の火薬が、何らかの原因で発火したのだろう、と見ていますわ」

女は、少しも信用していないような口振で、受け応えた。それは、初老の紳士にしても同じであつたに違いない。

その爆破現場には、爆破の少し前まで、あの二人がいたのだ。

人類最初の殺人者の名を持つ玲瓏な青年、カイン。

そして、壮絶な美貌を持つ東洋の少年、一色透。

その二人が、スパーロの屋敷の爆破事件に関わっていたことは、明らかである。

「あなたが思っている以上に、一色透は危険な存在かも知れませんが、サー・ウェブスター。——それでも、あの少年をお望みかしら？」

「ああ、もちろんだ……。この私の目の前で、弟と同じ目に遭わせてやる」

初老の紳士——ウェブスターの呟きは、ともしれば、摩天楼に潜む闇の中から浮かび上がって来た、奈落の底からの声のようにも、聞こえた……。

AREA・3 紐育（ニューヨーク） 2 ？

ボストンから空路で、約一時間——週末を利用して、透は再びニューヨークに訪れていた。

年明け、二月に入り、大学は春学期が始まっているが、金曜の夕方から、日曜にかけては、誰もが解放感を味わうウィーク・エンドである。勉強に追い回されている学生たちも、皆、パーティやコンサートに明け暮れている。

週末は、学期中の学生たちの、唯一の楽しみなのだ。

だが、透の週末は、そんな楽しみとは掛け離れていた。

クリスマス・イヴの宵、パンナム・ビルの前で見かけた母親の姿——それだけが、この週末を支配していたのだ。

母親とは、それが凡そ十五年ぶりの邂逅であつただろうか。透が五つの時、透を捨てて出て行つたつきり、会っていないのだ。男と一緒に何処かへ行つた、と父親からは聞いている。

それでいて、透には、母親との厭な想い出など、一つも、なかった。楽しかった想い出しが残っていないのだ。

もちろん、五つになるまでの記憶であるから、どれも鮮明なものではなく、また、その記憶を自分の都合のいいように作り替えてしまっている、ということも考えられる。母親に嫌われていた、と信じたくなければかりに、心が傷つかないように、優しい母親を作り上げたのだと——。いや、臆けながら憶えている。透から視線を背け、口さえ利いてくれなかった母親のことを……。

確か、透が父親の話を聞きたがつた時のことではなかっただろうか。透を生贄として差し出した二度目の父親ではなく、顔さえ知らない本当の父親の——。

「どーして、ぼくには、とーさまがいないの？」

そう訊く度に、母親は決まって口を閉ざした。

そして、幼い透に、その母の心までは、解らなかった。

やっと出来た父親に、何故、邪魔物扱いされるのかも……。
まだやっと五つだったのだ。

パサリ、と目の前のテーブルに、数枚の色褪せた写真が、乗った。ここは、セントラル・パークの東南、五番街に面して建つヨーロッパ風のホテルの一室である。各国の富豪や貴族に愛されるこのホテルは、多分、目の前にいる玲瓏な青年、カインが一番気に入っているホテルでもあっただろう。雰囲気も何もかもが、その優しい青年に似合うのだ。何故、と訊かれたところで判らないが、時間の止まったヨーロッパの空間は、彼にこそ相応しいものであったのだ。目の前のテーブルに乗ったのは、透の母親の写真であった。

「日本へ行って、君の屋敷から持ってきた。緑乃が描いてくれた絵もあるが、一応、写真を見て確認しておこうと思って」

と、古い写真を広げながら、カインは言った。

写真に映る女性は、美しかった。

まだその頃は、三十歳にも満たない年であっただろう。緩やかな曲線を描く黒髪を肩へと垂らし、どこか遠くを見つめるような視線で、四角い枠の中に収まっている。

「君は母親似だな」

と、写真の女性と比べるように、透を見つめる。

「……。比べようにも、ぼくは父親の顔を知らないさ」

透は、自嘲にも似た口調で、唇を歪めた。

「気を悪くしたのなら、謝ろう」

「……いや。ぼくが君に当たっただけだよ。多分、照れ臭かった……」

照れ臭かった……。その感情は、多分、聞いているカインにも解ったであろう。緑翠の瞳も、暖かい。

透は母親を愛しているのだ。自分を愛してくれなかった母親を……。だからこそ、その母親を憎んでいる。人は、愛してもいない人間を憎めるものではないのだ。

なら、カインは……。彼は、愛する人間を持たないからこそ、憎

しみを向ける相手も持っていない、というのであろうか。

「カイン……」

「ん？」

「ぼくは、かーさんのことが好きだったんだ」

写真に映る女性を見つめながら、透は言った。

カインは何も言わず、また、言う必要もなく、黙って耳を傾けている。

「ぼくは……この美しい女性むすめがとても好きで、いつもこの女性むすめに甘えていた。もちろん、我が儘を言って困らせたこともあった。他の子と同じように、とーさまが欲しい、と……。そんなこと、言わなければ良かった……。でも、ぼくはまだ小さかったんだ。多分、三つか四つで……。何も解つてはいなかった……」

「……」

「……おかしいだろ？ ぼくは、自分が望んで手に入れた父親に売られたんだ」

「……。私に君を慰めろ、と？」

震える声での透の言葉に、カインは静かな口調で問いかけた。

「フツ」

と、透は鼻を鳴らして、視線を伏せる。

「ぼくに必要なのは、慰めじゃない。そんなものは要らない。ぼくが今、欲しいのは、この女性むすめが何処どこにいるのか——その情報だけだ」

と、強かな瞳で、カインを見据える。

彼はもう、母親を愛していた頃の幼子ではないのだ。

「私も、考えていたことがあった」

と、カインは言った。

「考えていたこと？」

「ああ。君の父親が——二度目の父親が、何故、君をこのニューヨークへ連れて来たのかを——。君の父親が、十二年前、君をニユー

ヨークへ連れて来たのと、君の母親が、今、このニューヨークに
いることが偶然ではないのなら、二人を結び付けるものが、このニ
ューヨークにあったのではないかと」

「二人を結び付けるもの……」

「言い方を変えれば、二人がこの街を選んだ理由だ。時期や目的は
違って、君の父親も母親も、このニューヨークに訪れている。も
ちろん、ただの偶然、ということもあるだろうが、何か理由があつ
たとしてもおかしくはない。二人がこの街を選んだ理由が……」

確かに考えられることだった。ニューヨークは、透の父親と母親
に取って、何らかの意味を持つ場所であつたから、二人共にこの街
を選んで訪れたのだと――。

「……その理由が判れば、かーさんの居場所も判るんだな？」

透は訊いた。

「少なくとも、手掛かりにはなるだろう。――心当たりはあるのか、
透？」

カインは、いつもと同じ落ち着いた口調で、問い返した。

「急に言われても、何も……」

「たとえば、君の母親が、ニューヨークに関する何かを口にしてい
た、とか、ニューヨークに関係のあるものを持っていた、とか」

「小さい頃の話は、あまり……」

「そうだな。――朱道に代わってくれないか、透？」

「――朱道に？ 朱道は何か知っているのか？」

「私もそれが訊きたい。彼は、屋敷の中を調べ回るのが好きだつた
だろう？ 何か見つけているかも知れない」

彼なら――。そう。朱道なら、何かを知っていてもおかしくはな
い。

透が朱道と入れ替わるのに、そう時間はかからなかった。

そして、透とカインの話を聞いていた朱道が、その問いかけに応
えるのにも。

だが――。

「心当たりがない訳ではないが、もう調べようがない」

朱道の応えは、短かった。

「……^{ダイアリー}日記か？」

カインは訊いた。

「ああ。透の父親の日記帳に、そんなことが書いてあったような気もするが、あれはもう捨てた。前に緑乃が話した通り」

手掛かりはない、のだ。もう十数年も前の話なのだから、当然だろう。

だが、透が母親の姿を見かけたのは、ついこの間のことなのだ。簡単に諦めるには、その真実が手の届くところにあり過ぎる。

「空港の方はどうなんだ？」

朱道の問いかけであった。

「出入国者の名前の中に、透の母親のものはない」

「そんなところだろうな。君のお手並みを拝見、といこうじゃないか、カイン」

「……」

このニューヨークで生きて来た青年のやり方を……。

AREA・3 紐育（ニューヨーク） 2 ？

SCAPEGOAT・2

一九六〇年代初めに出現したディスコが、一九七〇年代、黒人やゲイのクラブからブームとなり、定着を始め、最新の流行の音楽やファッションを、次々と生み出している現代。

薄暗い照明の、スノッブな高級ディスコの中央に、その少年が現れた。——いや、中央ではない。その少年を取り巻くようにして、誰もが一步退いたため、そこが舞台の中央であるかのように、ぽっかりと空間が開けたのだ。

だが、何故、皆が同じように退いた、というのであるうか。それほど恐ろしげな少年では、ない。それどころか、息を呑むほどの壮絶な美貌をしている。

言うなれば、雰囲気が違う、のだ。その美貌のせいだけではなく、ごく限られた者にしか持ち得ない、独特の存在感を有している。

東洋人、ということもあったのだろう。その神秘性は、人々の視線を惹きつけるのに、充分であった。

客たちは皆、チラチラとあからさまな視線を送りながら、流行のステップを踏んでいる。

その中、一人の男が、少年の前に、立った。茶色い髪に、サンダラスをかけた、遊びなれた雰囲気の男である。

「一人かい？」

と、少年を見下ろして、声をかける。

ここには、そんな男たちが集まっているのだ。カップルで来ているものたちも、いる。

どこを見渡しても、男ばかりが集っている。

「……僕としたいのかい？」

少年は言った。

そんな言葉を聞いて、勃たない男がいるだろうか。
声をかけた男の面貌も、体の昂ぶりを示すように、欲望の形に歪んでいた。

「随分、ストレートな訊き方だな」

その言葉も、熱を含むように、上ずっている。

「ここで他の訊き方があるのかい？　僕は紫生。国籍はない。——
あなたは？」

「私はウィリアム——。ビルでいい。皆、そう呼んでいる。アメリカ人だ」

「そう。——行こう。早くやって帰りたいんだ」

そう言つて、紫生は階段の方へと翻つて行つた。

上には、いくつかの個室が並んでいる。

階段の途中でも、廊下でも、絡み合い、繋がりが合っている男たちが、いる。

「帰る？　帰る、つて、恋人の処へかい？」

ビル、と名乗つた男は訊いた。

「……そうだよ」

「恋人公認の浮気？」

「ただの欲求不満の解消さ。彼はしてくれないんだ」

「へエ……。不能者^{インボ}？」

「さあ。確かめたこともない。——もう話はいいだろ。僕が使える時間は少ないんだ。さつさと始めようぜ」

色気も何もない言葉であつた。が、それが誘い文句なら、今までにない興奮をもたらしてくれるものであつただろう。やたらと愛を確かめたがる関係や、ムードを大切にしながら関係は、ここでは滑稽すぎるのだ。そして、哀しくさえ、ある。

紫生の言葉は、ビルに取つては、何よりも刺激的なものであつたに、違いない。

そして、このニューヨークでは、国籍も何も持たない人間がいても、おかしくはない。

だが、『僕が使える時間は少ない』——という紫生の言葉は、ここがニューヨークであっても、不思議なものではなかっただろうか。もちろん、世に並び無き美貌の前では、そんなことは些細な疑問でしかなかったが……。

A R E A・3 紐育（ニューヨーク） 2 ?（後書き）

この度は小生ごときに過分な評価をいただきまして、ありがとうございます。
ございます。

小説など所詮、書き手の自己陶醉、などと斜に構えながらも、目に見える形で示していただけことは、何よりの歓びであると言わざるをえません。

今後とも、どうぞ宜しくお願いいたします。

「君のように美しい東洋人を見るのは、初めてだ……」

薄暗い個室の中へと足を入れ、ビルは、見事な肢体を眺めながら、囁きかけた。

ポウ、と灰白く浮かび上がる東洋の肌は、人の手には余る細工物のように、美しい。きつと、神々の手によって作られたものなのであろう。——いや、神々にそれほどの才はない。彼は、悪魔の手による秀作なのだ。

「おいで……」

と、東洋の麗身を、ベッドへ導く。

そう時間をかけることもなく、互いの肌を貪り合い、欲望の中心を昂め始める。

遊びなれた指先で。

巧みに蠢く舌先で。

ビルが愛撫を深めるごとに、紫生は尻を振って、官能を求めた。

何と淫らな肉体であろうか。

畜生のように四つん這いになり、男を求めるその姿は、官能の女神^{ヌス}のように、魅力的だ。

体は、従順にそれを求めている。

荒々しく貫かれることを。

激しく責め立てられることを。

ビルは、その望みに応えるように、前後に腰を動かした。

その度に、紫生の口から、苦鳴にも似た声が、零れ落ちる。

ビルの手は、紫生の敏感な部分を扱っている。

紫生の呼吸が速くなった。

ビルの呼吸も、また同じである。

達するために、刺激を求めて喘いでいる。それは、指や腰の動きでも、すぐに知り得た。

最後の刹那を促すように、全ての動きが速くなった。

「ああっ！」

紫生の喉が、達したとを、短く告げた。

互いの脈動が、重なり合う。

「……今日限りにするには、惜しい体だな。東洋人というのは、魔物に近い……」

まだ速い呼吸の中、ビルは、そう言いながら、脱ぎ捨てた服の方へと、手を伸ばした。

そのポケットの中から、静かな手つきで、煙草と一緒に、注射器を取り出す。

紫生はベッドに伏せたまま、官能の名残に浸っている。

何と、あどけない表情であろうか。ただ純粹にセックスを求め、満たされた様は、仔犬のように、愛らしい。

ビルは、銜えた煙草に火を灯し、注射器の針を覆うカバーを外した。

プランジャーを押す指に従い、針ニードルの先から、小さな雫が珠を結んで、零れ、落ちる。

「悪く思ふなよ。これも仕事だ」

そう言つて、ビルは、紫生の背中に注射器の針ニードルを突き立てた。プランジャーを押し、中の薬を注入する。

「――。何を――っ！」

振り返つた紫生の瞳に映つたものは、空の注射器を手に持つ、狡猾な男の姿であつた。

「君は最高だつたよ、紫生……いや、一色透。――残念ながら、君を欲しがっている人間がいるものでね。これ以上、君と快樂の世界に浸っている訳にはいかない」

「僕を……透を欲しがっている……人間……？」

紫生の体からは、すでに力が抜け始めていた。恐らく、さっきの薬のせいであろう。

即効性の麻酔薬だ。

「私の仕事は、君を捕らえて、引き渡すことだ。ハーバードでも、ニューヨークでも、中々一人になってくれないので困ったよ。これで一段落だ」

「おまえは……一体……」

言葉はそれ以上、続かなかった。

紫生の意識は、あまりにも悩ましい姿のまま、淫靡な夜に消えて行った。

彼を——透を欲しがっている人間——。それは一体、誰なのであるのか……。

カインがホテルへ戻った時、透の姿は、その部屋の中から消えていた。

夜中、二時を回った時間のことである。

今は、午前四時を回っている。

あれから二時間、まだ透が戻って来る様子はない。

「また、紫生がどこかへ出掛けたのか……」

ポツリ、と眩き、その帰りを待っていたものの、午前四時ともなると、もうじつと待っていられる時間では、ない。

紫生がどこかへ行った、というカインの読みは正しかったであろうが、紫生に何時間も体を使わせておく、ということになると、他の『存在』が黙っているはずがない。

それに今は、透に取って重要なことがあるために、カインが戻って来る時間には――少なくとも一時間以内には、戻って来ていて当然である。透は、何よりも早く、カインからの報告を聞きたがっているはずなのだから。いくら紫生が男と楽しんでいる途中であつても、他の『存在』たちは、その透の意志を尊重するだろう。

カインは厳しく、表情を変えた。

そして、すぐに部屋から翻る。

胸騒ぎ、とも呼べるもののせいであつたかも、知れない。

彼が最初に向かったのは、紫生が足を運びそうな、ゲイの集うデイスコやクラブであつた。男を欲しがっている紫生が、手っ取り早く男を見つけられる場所である。

二、三軒も回っただろうか。

客のほとんどが入れ替わっているせいもあつて、情報は中々手に入らなかったが、一軒のデイスコで、夜十一時頃に、凄まじい美貌を持つ東洋人の少年が訪れた、という情報があつた。店のスタッフからの情報である。

その少年は、三十代後半の遊びなれた雰囲気のもと、店の上にある個室に行き、それから戻って来ていない、という。もちろん、気が合ってそのままどこかへ出掛けた、ということもあるため、その男が紫生を――透をどうにかした、とは言い切れないが、今のところは一番の容疑者であることは、間違いない。

だが、その男の素性となると、どのスタッフも首を振った。店の常連客でもなく、どのゲイ・クラブでも見かけない顔だ、というのだ。恐らく、透を手に入れるためだけに、紫生の後をつけて、店に入り込んで来た男なのだろう。

カインは、それ以上、その男についての手掛かりを追うのを、諦めた。

今のところ、はつきりしていることと言えば、透が十一時までは無事な姿でいた、ということと、姿を消した時に一人ではなかった、ということだけである。

この街では、誘拐や蒸発は珍しくもないが、もし、透の失踪が計画的なものであるのだとすれば、透を攫った人物も、かなり絞ることが出来る。この街で、透のことを知っている人間など、そう多くはいない。

そして、カインのことを知っている人間だ、という可能性もある。カインは薄く、瞳を細めた。

冬のマンハッタンは、切り立ったビルの際間に、冷たい風を誘^{いざな}っていた……。

初老の紳士は、摩天楼を見渡すことが出来るビルの最上階の一室で、その少年を眺めていた。

一色透――。悪魔の申し子のように、美しい少年。

今は、ベッドの四隅にしなやかな手足を革のベルトで固定され、麻酔薬に犯されたまま、昏々と眠りにについている。

全裸である。

ディスコの個室で、ビルと肉欲に溺れたままの、淫らな姿だ。

革ベルトに拘束される四肢も、精液をこびりつかせる肌も、彼には最も相応しい姿であっただろう。

普通の男なら、それだけで射精してしまいそうな、淫靡な匂いを纏っている。

囚われの身、というのは、男たちの興奮を誘うものの一つなのだ。だが、彼を捕らえた初老の紳士は、一体、何者である、というのだろうか。髪に白いものが混じっているとはいえ、まだ六十歳前後だろう。身につけているスーツや時計も、高級としかいえないものばかりである。

判っていること、といえば、彼がウェブスターという名前である、ということと、五番街に聳えるこのビルのオーナーである、ということだけである。

傍らには、ディスコで紫生を捕らえた男、ビルがいた。

「ご苦労だったな、ビル。あの女も余程この少年とは係わりあいになりたくないと見えて、君に一色透を届けさせる、と連絡を寄越したまま、姿も見せん」

初老の紳士、ウェブスターは、ベッドに眠る麗身を見ながら、淡々と言った。

「こんな少年を捕らえて、どうなさる積もりですか、サー・ウェブスター？ 多重人格の研究でも？」

ビルは、皮肉を交える口調で、問いかけた。

「君には関係ないことだ。——ただ一つ言えることは、君が再びこの少年を見る機会があるとすれば、それは、ハドソン川に死体となつて浮かび上がっている姿だ」

「——。この少年を殺すと？ わざわざ手間をかけて、生きたままここへ運ばせておきながら？ 殺すのなら、最初から殺し屋キル・メンを使つて始末させれば、それで——」

「君には関係ないと言つたはずだ、ビル」

「……」

「もう行つていい。目を醒ましたところで、この少年にわしを襲うことなど出来んのだからな」

襲うことなど——。その言葉の意味は、ビルには解らなかったであろう。彼が知っているのは、名門ハーバード大に通う一色透と、デイスコで逢つた紫生だけなのだ。多重人格のことは耳にしていようと、その少年が危険な存在である、ということは、これっぽっちも考えていなかったに違いない。

だが、それなら、透の危険を知っているその初老の紳士、ウェブスターとは、一体、何者である、というのだろうか。

「余計な詮索はせんことだ。君自身がハドソン川に浮かび上がらずに済むように、な」

脅し文句、としか言えないその言葉は、ニューヨークでは、さして珍しくもないものであつた。

ビルは、蟠りを残しながらも、それでも部屋を後にした。

空気が、シン、と静まり返る。

人が一人出て行つただけだというのに、この静まり方はどうであろうか。まるで、氷の女王が永き眠りから目醒めた時のようではないか。

「側にいるだけでゾツとする少年だ……」

ウェブスターは、静か過ぎる部屋の中、呪文でも唱えるかのよう

に、呟いた。

壮絶な美貌の少年は、睫一つ揺らさずに、眠っている。

そうしていれば、本当にただの少年である。

それでいて、触れてはいけない禁忌を感じる。

気配、だ。

呼吸数さえ減らして眠る獣のような鋭い気配が、彼の内側から漂っている。

不意に、漆黒の瞳が、鮮やかに開いた。

たったそれだけのことに、ウェブスターは、ハッ、として後ろに退いた。

普通の人間なら、誰しもがそうであっただろう。

「……『銀嶺^{ぎんれい}』を知っているかい？」

透が言った。——いや、今の彼が誰であるのかは、判らない。

そして、『銀嶺』という言葉の意味も——。

「……『銀嶺』？ 何のことだ？」

ウェブスターも、戸惑いながら、問い返した。

クス、つと笑みが零れ落ちた。そうかと思うと、それは突然、狂ったような笑いに、変わった。

ベッドに繋がれた四肢を振り解こうともせず、透は高らかな笑いを振り撒いたのだ。

狂気——まさに、その言葉が相応しい少年であった。

ウェブスターは、鼓動が速まるのを感じながら、その笑いを呆然と眺めていた。

笑い続ける透の姿も、その透が口にした『銀嶺』という言葉の意味も、理解できる範囲のことではなかったのだ。

「このぼくに、あんな薬がいつまでも効くと思っていたのかい、ジイさん？——いや、サー・ウェブスターだったかな。あのビルとかいう男が後をつけて来ていたのも、紫生はとくに気づいていたさ。あいつは、男の視線には敏感なんだ。そして、ぼくは、人の悲鳴を聴きたくてうずうずしていた……。紅蓮はいつも、恐怖と痛みに歪む人間の顔を見ずに殺してしまうからね。——まあ、いたぶつてもいられない状況の時にしか、あいつは出て来ないんだけど——。幸い、ここには、あんたとぼくの二人だけのようだ。たつぷりと悲鳴を楽しめる……」

鋭利な刃物のような、鋭い瞳が持ち上がった。

その彼の名は——。

「は……ハッ！ このキチガイが！ 薬などもう必要ないわ。おまえはここから逃げることなど出来んのだからな」

笑うことも出来ない様子で、ウェブスターは言った。

「なら、この革ベルトを外せよ、ジイさん。あんたが何者なのか、じっくりと訊いてやるうじゃないか。言っておくが、ぼくの手には掛

かつて喋らなかつた奴なんて、一人もないんだぜ。まア、氣絶して口が利けなくなつた奴は何人かいたけど」

何という楽しい顔付きであろうか。ベッドに縛られ、拘束されているのは彼の方だというのに、彼こそが優位に立っているようではないか。

人が痛みに泣き叫び、恐怖に喚き回る姿は、彼にとって、何よりも興奮できることなのだ。

クックツ、と肩を揺らし、低い笑みを零している。

舌舐めずりさえも。

ウェブスターの表情は、さっきよりもずっと、強ばっていた。美しい少年の四肢が、枷に繋がれていることだけが、彼の足を踏み止まらせている理由であつただろうか。

「どうやら、あんたには『銀嶺』のことを話す必要もなさそうだな」少年は言つた。

銀嶺——さつきも口にした言葉である。それもまた、名前、なのであろうか。

「聞きたいかい？ 聞きたいなら教えてやってもいいぜ。『銀嶺』は、あの『黒都』の——」

ふつ、と刹那、言葉が途切れた。

そして、再び口を開いた時、彼の口から零れ落ちたのは、この言葉であつた。

「余計な話をするな、緋影^{ひえい}。おまえの役目は喋ることじゃない。喋らせることだ。遊んでいないで枷から抜けろ」

と、自分自身を厳しく咎める。

もちろんそれは、他人から見た状況である。

どちらの言葉も同じ少年の口から零れたものであり、初めて目にする者には、奇異としか映らないものであつただろう。

だが、実際に緋影を咎めたのは、朱道である。——そう。朱道に咎められたその少年こそ、真性のサディスト、と呼ばれる、あの緋影であつた。

「これはこれは、怖いことで。『銀嶺』がそんなに大切かい？」

と、緋影はからかうように、言葉を返した。

彼には、遊んでいる時が一番、楽しいのだ。

「……。二度と『銀嶺』の名は口にするな」

それっきり、朱道の声は聞こえなくなった。

彼がわざわざ表に出てまで、緋影の口を封じようとする『存在』、銀嶺——その『存在』は、一体、何である、というのだろうか。

黒都以外にも、まだ口に出してはいけなない人格がいる、とでもいうのだろうか。

「まあいいさ。『銀嶺』の役目を話さなくても、別に何も変わりはない。久しぶりに、心行くまで楽しめそうだ」

ゾクつ、と背筋が凍りつきそうになる瞳で、緋影は言った。

「話に聞いていた通り、気味の悪い少年だ」

ウェブスターは言った。

鳥肌が立っているところを見ると、その言葉に嘘はないのだろう。

「わずか八つで、大人たちを惨殺したという話もうなずける」

と、言葉を続ける。

彼は、十二年前のあの日のことを知っているのだ。

「ヘエ……。一応、ぼくことは調べてあるんだな。——でも、これまででは知らなかっただろ？ 手の内を明かすと不利になるから、滅多に人には見せないんだけど、朱道が苛ついてるから見せてやるよ」

と、緋影は両手足を拘束する革ベルトから、するり、と抜けた。

「な……っ」

ウェブスターの表情が、強ばった。

緋影はいとも容易く、丈夫な革ベルトから抜けたのだ。引き千切る訳でもなく、関節を外して、呆気なく。

今は、ベッドの上に体を起こし、手足に異常がないか、慣れた手つきで調べている。

「さて。冬の夜明けには、まだ充分、時間がある。いい叫びを聴か

せてくれよ」

異常、という言葉が最も相応しいのは、彼であつたに違いない。
夜明けを呼ぶ白い光は、まだマンハッタンには届かなかつた……。

AREA・3 紐育（ニューヨーク） 2 ？

SCAPEGOAT・3

ショー・ウィンドウ一杯に、怪しげな安物が並んでいる。奇妙なものではない。あまりに安すぎるために、怪しい、のだ。

店に入って訊いてみると、商品の一部分は別売りで、法外な値段がついていたりする。

ここは、タイムズ・スクエア。本物とまがい物が交差する広場である。

そして、ニューヨーク・マフィアのドン、シルヴィオ・スパーロのクリスマス・パーティの翌日、カインと藍香が、一人の女を見かけた場所でもある。

カインはその広場から、あの日と同じ道順で、静かな一角へと向かっていた。

まだ夜明けには間がある時間。冬のマンハッタンは、厳しい寒さに犯されている。

新年を迎えた時には、人々の秒読みの声で賑やかな熱気に包まれていたというのに、今は、そんなことさえ遠い昔の出来事のように忘れ去られている。

もともと、アメリカでは、正月は元旦の一日だけで、日本のように何日も正月気分に入る、という習慣がないのだ。二日目からは、何事もなかったかのように、当たり前の日々が始まっている。

風が、凜いだ。

あの日、ジーンが姿を見せたビルの前で足を止め、カインは気配を窺うように、静寂に浸った。

その彼の姿は、月の光を浴びる罪人つみひとのようでもあっただろうか。

カッン——、と高いヒールの音が、ビルの谷間に跳ね返った。
茶色い巻き毛の、妖艶な美女が姿を見せる。

「あなたの方から私のことを探してくれるなんて、珍しいわね、カイン」

建物の陰から姿を見せた女——ジーンが、皮肉な口調で、唇の端を持ち上げた。

「……透をどこへ連れて行っただろう、ジーン？」

カインは無表情に、問い返した。

コートの裾が、吹き付ける風に、大きくはためく。

「連れて？ 私が？ 私があの子に近づかないことは、あなたが一番よく知っているでしょうに」

確かに、その言葉に嘘はなかっただろう。彼女は透に近づかないに違いない。

だが——。

「私のことを、いつからそれほど甘く見るようになった？」

霜をきらめかせるよりも冷たい口調で、カインは言った。

ジーンが表情が、刹那、強ばる。その額には、この寒さの中、うつすらと汗さえ滲んでいた。

「……。解ったわ。——でも、私にも一つ、条件があるわ」

と、息を呑むように言っただけで、カインの前に足を進める。

「断る」

カインは言った。静かなだけの口調であった。

ジーンは足も、そこで、止まった。

それでも——。

「……私を愛している、と言って欲しいのよ。以前のように、また二人で暮らしたいだけだわ」

と、人間らしい眼差しで、訴える。

カインは無言のままであった。

「カイン……。愛していると言って欲しいのよ。また、あなたに抱かれないわ。他の男では満足できない。どんな男と寝ても、あなた

との時以上に熱くなれないのよ」

「……」

「あの少年のことは忘れてちょうだい。彼はもう助からないわ」

その言葉に、カインの表情が、わずかに変わった。

だが、それは、何を意味しての変化であつたのだろうか。

「……彼、とは透のことか？ それとも、透を捕らえた人間のことか？」

と、危険を匂わす言葉で、問いかける。

そう。危険なのは透ではなく、透を捕らえた人間なのだ。下手をすれば、また黒都が現れることさえ考えられる。その結果、相手は死ぬことになるだろう。もちろん、透の精神も蝕まれる。

両刃の剣なのだ。

「いくらあの子でも、あの部屋からは逃げ出せないわ。——この間の防弾ガラスを覚えているでしょう？ 彼はその中に閉じ込められているのよ」

ジーンはそう言つて、青い瞳を薄く細めた。

その言葉の通りなら、たとえ黒都が出たとしても、透が逃げ出すことは、不可能ではないだろうか。

「——場所は？」

カインは訊いた。

「そんなにあの子が大切だと言うの？」

「ああ。大切だ」

わずかの淀みもないその言葉に、ジーンの表情が、きつく変わった。

未だかつて、カインの口からそんな言葉が零れたことがあっただろうか。

少なくとも、ジーンが知る限りでは、一度も、なかった。

「さあ、場所を言え、ジーン」

カインは、ただ淡々とした口調で、同じ言葉を繰り返した。

「……あの子は、あなたの何？ あの子の境遇に同情している訳ではないでしょう？ あの子よりも酷い目に遭っている子供は、世界中に山ほどいるわ。あなたたちが殺したスパーロだって、そんな子供たちを売り買いしていた人間の一人で——」

不意に、何かに行き当たったように言葉を止め、ジーンは青い瞳を見開いた。己の考えを信じられない様子で、茫とカインを見上げている。

「まさか……あなたたち、たった二人で、そんな子供たちを助けようとしている、とも言うの？ 世界中のマフィアや人身売買組織を敵に回して、あの子と一緒に戦っている……？」

「……。透の《友だち》がしていることだ。私にも透にも関係はない。——彼らに手を貸していることを、共にやっている、と見るのなら、間違いではないが」

「……」

「透の居場所を言う積もりがないのなら、もう君に用はない。二度と君を探すこともしないだろう」

そう言つて、カインは通りの方へと翻った。

月明かりのような優雅な姿が、冬のマンハッタンに、美しくきらめく。

「……今から探しても無駄よ、カイン。ガラスの中の酸素は、あなたがあの子を見つけるまで持ちはしないわ。あの子は苦しみながら死んで逝くのよ。ある男の望み通りに」

「——ある男？」

ジーンの言葉に、カインは足を止めて、振り返った。

「そうよ。悪く思わないでちょうだい。私もこういう生き方を選んで来た人間なのよ。このニューヨークで——」

言葉と共に、サツ、と白い手が持ち上がった。

刹那、パシュ——っ、というぐもった音が、駆け抜ける。薬莢が飛び出すにも似た音であった。消音銃、なのであろうか。

「く——っ」

と、喉を鳴らしたのは、カインであった。

その背には、プランジャーの沈んだ、一本の注射器が、突き立っている。今のくぐもった銃声と共に、撃ち込まれたものである。

だが、それを撃ったのは、ジーンではなかった。

建物の陰から、麻酔銃のようなものを持つ男が姿を見せた。ディスコで紫生に、ビル、と名乗った男である。

「……何の薬だ、ジーン？」

衝撃に面を歪めたものの、もういつもと変わらない表情で、カインは訊いた。

「あなたにドラッグが効かないことは解っているわ。——でも、毒

薬はどうかしら？」

「……毒？」

「そうよ。あなたに残された時間は、一時間。解毒剤は私が持っているわ。ここにはないけど、すぐに用意できる場所に……。あの少年を探しに行ってもいいのよ、カイン。あなたが私のものにならないのなら、殺した方がマシだわ」

女であるが所以の残酷さ、であっただろうか。ジーンの表情は、たった今『愛して欲しい』と、カインにすぎた女のものとは思えないほどに、輝いている。——そう。女は男よりも、さらに厄介な存在なのだ。瞬きする間に心が変わり、ネズミ以上に小賢しくなる。カラン、と空の注射器を放り投げる音が、した。

路上に放ったその注射器に、カインは一瞥もせず、ゆっくりと一度、瞬きをした。

「……生きていたと思ったことなど、一度もない。もちろん、死に方を選ぶ積もりも……。マンハッタンの摩天楼が墓標なら、私には似合いの死に方だ」

あと一時間、という期限をつけられながら、彼は何故、そんな表情が出来る、というのだろうか。

己の死さえ、まるで他人事、とでも言うような不敵さではないか。踏み出す足も、今までと少しも変わってはいない。

「カイン——っ！」

ジーンは、遠ざかる背中に、言葉を放った。

「あなたは必ず私の元へ戻って来るわ！ ビルの腕は、あなただつて知っているでしょう？ 彼が調査する薬は、いつだって最高のものばかりだわ。あなたは私のところへ来る以外、助かる道はないのよ。あなたはきっと戻って来るわ。必ず私の元へ……。カイン！」

月のような麗身は、夜の中に紛れて行った。

振り返ることは、一度もなかった。

彼は、本当にジーンの元へ戻って来る、というのだろうか。

「あんな男のどこがいいんだ、ジーン？ 女みたいな面^{ツラ}をして、そ

のクセ、体だけは凄まじく繊細に鍛えられている。それだけじゃない。あいつの目を見てみる。この世のものなど何一つ見てはいない。

——男を見る目のある女なら、とっくの昔に諦めてるぜ」

ジーンの傍らへ来て、ビルが言った

「……。愛している——それだけでは殺す理由にならないかしら？」

「——。フンッ。勝手にしろ」

時計の針は、刻々と時間を刻んでいた……。

ベッドから降り立ち、初老の紳士の方へと足を進める中、緋影はわずかに眉を寄せた。

空気の流れの違いを感じた、とでも言えはいいのだろうか。

その不審に、片手を持ち上げ、前方を探る。

そのまま足を進めると、透明の壁に行き当たった。

ガラスだ。しかも、強化ガラス——。恐らく、ブロードウェイでのミュージカルの帰りに、カインや紅蓮が見たのと同じものであっただろう。ジーンという女を守っていた、あの壁である。

それは一方だけでなく、ベッドを中心に、緋影の四方を固めていた。

「四方だけではない。上も下も、全てその強化ガラスで塞いである」額の汗を拭うように、ウェブスターが言った。

ガラスの壁は、緋影を閉じ込める箱になっているのだ。その箱があるせいで、ウェブスターも、透の危険を知らながらも、安心してこの部屋に一人、残ったのであろう。

「どれほど足掻いても無駄だ。足掻けば足掻くほど、死が近づく」と、やっと笑みらしきものを見せて、言葉を続ける。

緋影の表情が、今まで以上に鋭く変わった。

「形があるなら、必ず壊れるさ。貴様の体も、後でゆっくりと刻んでやろう。このガラスの破片でな」

と、ベッドの方へと翻る。

彼が最初に破壊したものは、モダンな造りのベッドであった。華燭な装飾など何もない、シンプルなスタイルのベッドである。

透を捕らえておくために、丈夫なものを選んだことが、かえってウェブスターの首を絞めることになるのだろうか。

緋影は、頑丈なスチール材の骨組みを手に、目の前の強化ガラスを殴打した。

ガラス、というよりも、プラスチックの壁を叩いた時のような、
ビーン、と震えるだけの衝撃が伝わる。

「く……っ」

手の痺れに、緋影の面は苦しげに歪んだ。

「無駄だと言っただろう。——まあ、私は君が足掻いてくれた方が
楽しめるが」

壊れなかったガラスを見て、さらに安堵が広がったのか、ウェブ
スターは、すっかりと汗の引いた面で、そう言った。

緋影は、それを気に留める様子もなく、四方の壁を力任せに叩い
ている。

呼吸の速さは、見ているだけで充分、知り得た。動き回っている
せいで、酸素の消費が激しいのだ。静かに眠っていた時と比べ、急
速にガラスの中の酸素が減り始めている。

だが、何故、誰もその緋影の行動を止めないのだろうか。動けば
動くほど死が近づくことは承知しているであろうに、朱道も、夏黄
も、青華も、紅蓮も……誰一人として、その緋影の行動に文句を唱
えない。

「クツクツ。ついに発狂したか。死を前にした時の恐怖は、正気を
保っていられるようなものではないだろうからな」

スチール骨を振り回す緋影の姿を眺めながら、ウェブスターは言
った。

確かに、呼吸を荒くしながらスチール骨を振り回す緋影の姿は、
狂人のようにも見える。

だが、それ以前の彼の方が、もっと恐ろしい狂人に見えなかった
であろうか。

全裸の体躯が、力を失うように、少し、傾^{かし}いだ。それでも、肩で息
をつきながら、緋影は四方のガラスを叩き回っている。

ピシ——っ、と今までとはわずかに違った音が、した。

割れた、というのか。銃弾さえも通さない強化ガラスが。

目を凝らして見ても、ガラスの面にはヒビなど一つも入ってはいない。入るはずがないのだ。

なら、さっきの音は何であつた、というのだろうか。確かに異常が発生した音だつたのだ。

緋影の唇が、不敵な形に持ち上がった。が、それと同時に、体も限界に達したのか、弧を描くように崩れ落ちる。

体中に滲む汗と、速い呼吸が、そのたとえようのない苦しみを告げていた。

頭痛や耳鳴りもするのか、壮絶な美貌が、痛みの波動に歪んでいる。

「どうやら最後のようだ。それだけ暴れ回れば、当然のことだろうが。——いや、今まで持ったのが不思議なくらいだ。ベッドでおとなしくしている時間が長かつたことも幸いしたのだろう。——どうだね、今の気分は？」

ウェブスターは、満足げな表情で、問いかけた。

緋影は床に横たわつたまま、浅い呼吸を繰り返している。

もう酸素も残っていないのだ。後は、窒息死するのを待つだけである。動くことも、口を開くことも出来ないままに。

「苦しいだろう？ どれほど呼吸をしたくとも、もうその君の望みを適えるものは残っていない。君にあるのは、死を前にしての恐怖だけだ。あの時の私の弟のように……」

弟——それは、誰のことなのであろうか。

ウェブスターの言葉に、緋影は微かに、瞳を開いた。それだけの動作にも、凄まじい重さの負担がのしかかる。

だが、彼はまだ正気である。その証拠に、黒都は眠りから目醒めていない。

「死の間際に、狂人である己が身を呪うがいい。十二年前、その狂気の元に遂行^{おこな}った残虐な殺人も含めて、全て――。あの殺人鬼の正体が、わずか八つの幼子だったとは、な。あの女に言われても半信半疑だったが、君が人格を変えてあの女に襲い掛かるのを見せられ
ては、さすがに信じざるを得なくなった。上品で可憐な少女から、突然、荒ぶる神の如く、鞭を奮う狂人に変わったのだからな」

それは、ブロードウェイでのミュージカルの帰りに、藍香から紅蓮へと変わった透が、ジーンという女を前に、鞭を放った時のことであっただろうか。

だとすれば、彼も――ウェブスターも、あの時、どこかで、その場面を見ていたのだ。

そして、十二年前のあの事件――。透の父親が、幼い透を男たちの餌食として差し出し、黒都を目醒めさせた時――それにも彼は係わっていた、というのだろうか。

あの日……。

透が犯されるのを見て目醒めた黒都は、透を弄んだ男たちを、惨殺した。透の口を汚した男の男根を噛みちぎり、その男がのたうち回る中、それを呆然と眺める男たちを、次々に残虐な手段で殺していった。

加減を知っている大人たちと、加減を知らない無垢な黒都とでは、全ての面で差があり過ぎた。幼子とはいえ、無垢、という何にも勝る驚異的な力を持っていたことが、彼を魔人として仕立て上げた要因であったのだ。

黒都はためらいもせず、恐怖も持たず、また、殺意さえ持たず、動くものがなくなるまで、手当たり次第に、周りの大人たちへと襲い掛かった。その様は、宛ら地獄絵のようでも、あっただろうか。

男たちの顔は恐怖に歪み、狂気に犯され、誰一人として、正気のある者などいなかったのだ。黒都と、そしてもう一人、銀嶺の二人を除いては――いや、正確に言うなら、一番最初に正気に戻った銀嶺の二人を除いては、というべきだろうか。

銀嶺——。黒都が純粹無垢な魔人であるなら、その存在——銀嶺のことを、どう表現すれば良いのだろうか。あれ以来、懸命に己の役目を果たそうとしているその存在のことを……。

「ベラベラと……よく喋るジイさんだな……。それくらいに……しておけよ……。ぼくの楽しみが……。全部なくなる……。」

途切れ途切れの口調で、それでも、少しも輝きを失わない漆黒の瞳で、緋影は言った。

まだ喋れる、のだ。すでに限界と思える容体でありながら、彼は、まだ——。

何という少年であろうか。まさに、魔人ではないか。

「楽しみだと？ まだ自分のおかれている状況が解っていないようだな。君には楽しみなど残ってはいない。目の前にあるのは、死、のみだ。あの日、君に喰い殺された私の弟と同じように――。よくも、あれほど酷い殺し方を……」

怒りに声を震わせながら、ウェブスターは言った。

もう、彼が誰であるのかは、緋影にとって、何の疑問でもなかっただろう。

彼は、あの日――十二年前に、透を弄んだ男たちの一人の兄なのだ。だからこそ、透に恨みを持ち、透を捕らえて殺そうとしている。緋影は、フツ、と鼻を鳴らした。

「何がおかしい？」

ウェブスターは、眉を寄せて厳しく言った。

「あんた……自分の弟が何をしていたのか……知らない訳じゃないだろう……？ いたいけな子供を弄んで……楽しんでいたんだよ……。もちろん、遊び終わったら殺す積もりで……」

「――」

「親に捨てられた子供なら……身よりのない子供なら、誰も哀しむ者がいないから、犯そうと殺そうと構わないと……。何をしても、構わないと……。狂うほどの凌辱を受けて、何の幸せも知らないままに死んで逝く子供がいても……その子供の運が悪かっただけだと……。生まれて来た意味すらなかったのだと……。あんたの弟は、そう言って笑っていたんだよ」

緋影は、夜空の星を全て消してしまうような眼差しで、ウェブスターの面を冷ややかに見据えた。――いや、彼は緋影なのであるうか。その表情は、さつきから別人のものに変わってはいないか。

「やめとけよ、朱道……。こんなジイさんに……人間並の説教をしてやることなんかないさ……。それとも、このジイさんの全てを調

べてからでなければ……殺す気も起こらない、って言うのかい？」

そう言ったのは、真正正銘の緋影であつた。

さっきの言葉は、緋影が言ったものではなく、朱道が吐き捨てたものであつたのだ。

「目の前で見える多重人格ほど、気味の悪いものもないな。——まあ、こういうものを見るのも、今日が最後だろうが」

ウェブスターは言った。その時だった。

「確かに今日が見納めだ。あんたの目は、すぐに見えなくなるんだからな」

と、緋影がまだフラつきながらも、立ち上がった。

「な……っ」

立ち上がれるはずがないのだ。人間は、酸素なしで生きていられる生物ではない。

それとも彼は、人間ではない、というのだろうか。

ウェブスターは、思いがけない出来事を前に、言葉もなく立ち尽くした。

「驚くことはないさ。あんたと話をしている間に、酸素は充分、回復した」

そう言つて、緋影が視線を向けたのは、四方を囲む強化ガラスの一面であつた。そこには……。

そこには、指を近づけて風の流れを確かめてみなければ判らないほどの、わずかな隙間が開いていた。緋影がスチール骨を振り回している時に聞こえた音——あれが、隙間を造った音だったのだ。

「まさか……っ！」

ウェブスターの驚愕、であつた。それも無理のないことであつただろう。銃弾さえも跳ね返す強化ガラスが、あれだけのことで割れるはずもないのだ。——いや、現実には、強化ガラスは割れてはいない。ヒビも入っていないければ、傷痕一つ、見当たらない。

それなら——。

「確かに、ガラスの強度は立派だよ。鉄球を打付けたところでビクともしないだろう。——だが、その繋ぎ目は役不足だな。ぼくを閉じ込めてから慌てて塞いだのか——。どっちにしろ、完璧でない人間が造ったものが、完璧であるはずがないんだよ」

何という強かさであろうか。

彼は、最初から、人を出し入れするための《扉》があることを知って、スチール骨を振り回していたのだ。必ず、どこかの繋ぎ目が綻びるであろうと——。そして、見事に一辺が綻びた。

「なるほど——。だが、君はそこから逃げることなど出来ん」

「だといいがな。あんたのためにも……」

「——」

ウェブスターの背に走ったものは、間違いなく戦慄であつた。

緋影の手には、スチール骨がある。それは、ガラスの綻びを、容赦ない力で攻め始めた。

今度は四方八方ではなく、その一か所だけを攻めればいいのだ。激打に合わせて、ビーン、ビーンとガラスの震える音がした。それは、ウェブスターの恐怖心を煽り立てるものでもあつた。

疎む足で、どうすることも出来ないように、後ずさる。その手に、カタ、っと触れたのは電話であった。

ウェブスターがその電話を取るまでに、そう時間は掛からなかった。

だが、プッシュ・ボタンを押して、相手に繋がるまでの時間は長かった。

「私だ！ ウェブスターだっ」

と、やっと繋がった相手に、叫ぶように名前を告げる。

「電話での連絡はお断りしたはずですよ、サー・ウェブスター」

聞こえて来たのは、冷やかな女の声であった。

「緊急の用だっ！ あの少年が——」

「彼に係わるのは、もっとごめんです。それに……カインが私のところへ来ましたわ」

「カインが？ わしのことを話したのか？」

女の言葉に、ウェブスターは目を瞠って問いかけた。

彼にとっての係わりたくない人間は、その玲瓏な青年なのだ。

「いいえ。——ですが、この電話は盗聴されているかも知れませんわよ」

「——。何だと……」

「そう申し上げたはずですよ。電話での連絡は盗聴の危険性があるから、どんな場合でも使わない、と——。特に、携帯電話は」

「そんな……。それでは私は……」

ウェブスターは、呟くように言葉を零した。

「今、ヘリをそちらへやりますわ」

「——ヘリ？」

「ええ。逃げるのが、今の地点での最良の策かと思えますから。——他に手がありましたか？」

「……。解った」

「では、屋上のヘリ・ポートで」

それだけを告げて、電話は切れた。もちろん、それだけで充分な

のだ。迅速に事態を判断して、答えを出せない手足など、足手まといでしかない。

ウェブスターは、手のひらに滲む汗を感じながら、電話を置いた。拭ってもまた溢れて来るその汗は、『カイン』の名前を聞いたせいであったろうか。

人類最初の殺人者の名を持つ、あの美しい青年――。

A R E A・3 紐育（ニューヨーク） 2 ??（後書き）

大変申し訳ありません。

別途、連載開始した『喰らう霧』のa c t 2を、誤ってこちらに掲載していました。話が判らず、混乱されたことと思います。
深くお詫び申し上げます。

目の前にいる少年だけなら、銃の引金を引けば、始末できる。――そう。始末できるのだ。電話を取る前に、何故そのことを考えつかなかったのであらうか。恐れずとも、迎え撃つ手段はいくらでもあるというのに。ボディ・ガードを呼ぶことも然り、己の手で引金を引くことも、また然り――。恐怖で我を失うほどのことなど、何もない。

ウェブスターは、今、やっと肩の力を緩めて、いつもの落ち着きを取り戻した。

その音はいつから聞こえなくなっていたのだろうか。ウェブスターが気づいた時、ガラスを叩くあの音は、鈍い響きと共に消えていた。

胸の鼓動が、再びの不安に、速くなる。

ウェブスターは、ゆっくりとベッドの方を振り返った。

ガラスの箱の中には、もうあの少年の姿は見当たらなかった。

汗が吹き出す刹那、であった。

膝もガクガクと震えている。

歯の根が合わなくなるのにも、それ以上の時間はかからなかった。ウェブスターは、小刻みに震える手で銃を抜き、慌ただしく視線を巡らせた。

グロック17の黒身が、狙いも定まらずに、揺れ動く。

モダンな家具調度が、アーティスティックに並ぶ部屋の中には、わずかな音さえ落ちていない。誰もいないのか、と思えるほどの静けさだけが、存在している。

クス、つと一つ、笑みが零れた。

それが、どれほどの恐怖をもたらすものであったのかを、果たして、何人の者が理解し得たであろう。

引金に掛けた指さえも凍りつかせ、ウェブスターは、声の聞こえ

た方へと視線を向けた。

刹那であった。

ソファの陰から、ひらり、と何かが舞い上がった。

ウェブスターは、考える間もなく、引金を引いた。それが何であるのかも確認せず、続けざまに銃弾を注ぐ。

全ての弾を撃ち終えた時、床にフワリと落ちたのは、焼け焦げた丸い穴を残すシートであった。

「クツクツ……」

また、低い笑みが零れ落ちた。

楽しんでいる、のだ。人の恐怖を、心の底から楽しんでいる。

ウェブスターは、震えて俣ならない手を動かしながら、新しい弾を銃に込めた。——いや、込めようとしていた。

だが、カタ、つと音が聞こえる度に弾を落とし、クス、つと笑みが零れる度に身を縮め、弾は一向に銃に収まらなかった。

「どうしたんだい、ジイさん？ 銃を使えば、ぼくを殺すことが出来るだろ？ 狂っていても、ぼくは人間だ。鉛弾を喰らって、立ってられるはずもない」

嘲笑のような言葉であった。そして、退屈げでも、ある。

ウェブスターの手は、ますます震えた。——といって、彼が決して人一倍臆病な人間、という訳ではない。相手にしている少年が、恐ろし過ぎるのだ。

だが、これはまだ始まりであっただろう。緋影の本当の楽しみは、人を傷つけ、その苦痛を眺めることなのだ。

「さあて。そろそろぼくを絶頂に導いてもらおうか。——目は最後まで見えている方がいいかい？ それとも最初に潰しておくかい？ ぼくとしては、最後まで見届けて欲しいけど。——あんただって自分の体がどうなっていくか、見たいだろ？ 人間は皆、醜いものを見たがるんだよ。どんなに悍ましいものであっても、それが自分を興奮させてくれるものであるなら、息を殺しながらも、それを見つめる。——たとえば、血。ナイフの切っ先でゆっくりと肌を傷つ

ける時、そこから滲み出る血は、ぼくが一番、好きなものだ。肌を裂かれる人間は、誰もが呼吸さえ止めて、瞳に恐怖を焼き付けている。爪先を伸ばし、ピクリともせず、その切っ先が離れるまで、じつと痛みを堪えている。声も出さない。気を失ってしまえるほどの痛みでもないから、ナイフを滑らせている限り、ずっとその表情を見ることが出来る。ナイフで付けた傷の跡に、ぼくが爪を食い込ませると、やっと声を上げて——啼いてくれる。そのまま爪を滑らせると、体を擦って悶え苦しむ。体を感じる痛みよりも、頭で感じる痛みの方が大きいんだ。口を閉じること出来ずに涎を垂らし、なりふり構わず、容赦^{ゆる}しを乞う。——聞いただけでゾクゾクするだろ？」

真性のサディスト——彼は、まさにその通りの少年であった。ウェブスターの手は、もう弾を込めることさえ忘れたように、彫刻にも似た形で、固まっている。

この夜は決して明けない——そう思える時間であった……。

AREA・3 紐育（ニューヨーク） 2 ??

SCAPEGOAT・4

通りで待つ黒塗りのロールス・ロイスのリムジンにカインが戻ると、運転手が、前後の座席を切り離す、黒いセロハン張りのシールドを降ろし、リア・シートの方を振り返った。

「つい今し方、あなたの名前の出た電話を傍受いたしました」と、戻って来たカインへと、その会話を録音したICレコーダーを渡す。

「ジーンか？」

リア・シートで、受け取ったレコーダーを操作しながら、カインは訊いた。

「はい。電話を掛けて来た男は、ウェブスターと名乗っていました」
「ウェブスター？ ウェブスター財団の、ジョン・H・ウェブスターのことか？」

「恐らく」

ニューヨークの実業界では、その名を知らない者などいない実業家である。

「なるほど……。十二年前の事件で死んだ男の中には、彼の弟もいたな。——五番街へやってくれ。彼の城——昨年、ウェブスターが建築したインテリジェント・ビルだ」

「かしこまりました」

車は滑らかな動きで走り出した。

スピーカーから、ジーンとウェブスターの会話が聞こえて来る。それを聞くカインの面は、いつもよりわずかに、色薄い。

毒薬の効果、なのであろうか。

あれからすでに、四〇分が経過している。あと二〇分しか残されてはいないのだ。

今から透の元へ行き、その後、ジーンの元へ行って、解毒剤を手に入れることが出来る、というのだろうか。

それとも彼は、本当に自分の命など、塵ほどにも思っていないというのだろうか。

人類最初の殺人者の名を持つ青年、カイン——彼には、過去も未来もないのだと……。

車が五番街に差しかった時、上空から、パラパラとヘリのプロペラ音が近づいて来た。ウェブスター財団のヘリである。

乗っているのは、ジーンか、もしくは、その命を受けた者であるう。

そして、カインがそのヘリに興味を持っていないことは、確かであった。

モダンなビルの前で、車が止まった。

ヘリも、屋上のヘリ・ポートへと降りている。が、すぐに人を乗せて飛び立つ、という様子はない。

ウェブスターは、まだ屋上には行っておらず、ビルの中にいるのだ。

そして、透も……。

カインは、二四時間完全セキュリティのビルの方へと、車を降りて歩き始めた……。

息を殺すような時間が続いていた。その中、ウェブスターは、心を決めたように、ドアの方へと駆け出した。

ボディ・ガードを呼ぶことを考えていなかった訳ではない。そのことの方が——ボディ・ガードを呼ぶことの方が、怖かったのだ。彼らがここへ駆けつけて来る前に、美しい狂人に殺されてしまうのではないかと。

あと少しでドアのノブに手が届く——と、そう思った時、不意に、足に何かが絡まった。

「うわっ！」

ただでさえガクつく足を搦め取られ、ウェブスターは、勢いのままに、床の上に突っ伏した。

ダン——っ、と激しく倒れ込み、その衝撃に体が痺れる。

足に絡まっているのは、さっきウェブスターが銃で撃った、あのシートであった。

そして、その向こうには……。

「人間、恐怖を前にした時には、足が竦んで逃げられない、と思っていたけど、さすが、ウェブスター財団のプレジデントともなると辛うじて足は動くらしい。生憎、すぐに捕まっちゃったけどね。——痛かったかい？ 今は痛みなんか感じないだろ？ こういうのも、ぼくの好みなんだ。——でも、逃げようとする足は、最初に潰しておいた方がいいかも知れないな」

緋影は、牙を研ぐ吸血鬼のように、楽しげに言った。

ガラスを破ったスチール骨を握り締め、ウェブスターの前に足を進める。

「や、やめてくれ……っ！」

ウェブスターは、目を見開いて、声を上げた。

だが、その願いは聞き入れられることは、なかった。

スチール骨が、風を切つて、垂直に落ちる。振り下ろしたのではなく、緋影は長い棒を縦にして、ウェブスターのふくら脛に突き立てたのだ。

ガツつ、と鈍い音が、骨を砕いた。

「わああああ——っ！」

喉が千切れんばかりの叫びが、上がった。

ウェブスターの足には、ベッドの骨組みの一つであったスチール骨が、意味のないオブジェのように、悍ましい形で食い込んでいる。皮膚もはち切れ、血飛沫には肉片も混じっている。

それを眺める緋影の表情の、何と満足げなことであるう。

美しい、のだ。

彼は、狂えば狂うほど、美しくなる。

「体が熱い……。とても疼いて……。勃起して行くのが判る。人の苦痛は、他のどんな愛撫よりも、ぼくを興奮させてくれる。——ほら、こんなに硬くなってる」

自らのものを手で包み、緋影は慰めるように、優しく撫でた。

全裸である彼の肢体のその変化は、誰もがすぐに見てとることが出来たであろう。苦痛の中にいるウェブスター以外は。

「見ないのかい、ジイさん？ 触ったっていいんだぜ。みんな、ぼくの肢体を見たがる。撫で回し、声を上げさせ、溢れ出る雫を舐めたがる。ケツには勃起したペニスをぶち込み、ぼくの顔が苦痛に歪むのを見たがるんだ。——それを見てみんな、興奮する。——あんたもそうだろう？ ぼくだって同じだ。苦鳴を聴き、苦痛に歪む表情を見れば、興奮する。どんどんエスカレートして行く。また次の悲鳴を聴きたくなる。こんな風に——っ！」

と、緋影は再びスチール骨を、振り上げた。

ガツつ、と鈍い音が、血を弾く。

今度は、ウェブスターのもう一方のふくら脛であった。

「うああああ——っ！」

気が狂わんばかりの叫びが、上がった。

飛び散った血が床を濡らし、剥き出しになった骨さえ、震わせている。

口の中が錆びて行くような、血、独特の匂いが広がった。

「やっぱり、女の悲鳴の方がいいな。これが女なら、ぼくのペニスは今頃、射精寸前になっている。——知ってるかい？　どんなにきれいな女でも、恐怖の前には、滑稽なほどに醜い顔に変わるんだ。」

「愚か」の具現のように媚び諂い、発情したメス犬のように、尻を振って哀願する。そんな女に愛を囁く男がいるんだから、大笑いだよ。——さあて。次はどこがいい？　腕かい？　それとも、もう役に立ちそうにないフニャフニャのペニスを切り落としてやるのか？」
緋影がそう言った時だった。部屋の明かりが、パツ、と消え落ち、瞬時に辺りが闇に堕ちた。

「……停電か？」

いきなり幕が降りたように、最高の舞台を遮られ、緋影は、辺りを見渡しながら、呟いた。

それに応えたのは、朱道であつた。

『停電ではない。窓の外をしてみる。どのビルにも明かりが灯っている』

と、舞台裏から、様子を告げる。

その言葉の通り、窓の外は、何の変わりもなく、摩天楼の明かりがきらめいていた。このビルだけが、闇の世界に閉ざされているのだ。

「カインが迎えに来た、という訳か」

緋影は言った。

『もしくは、あの女——ジーン・ライナーだ』

と、朱道は応える。

「ちえっ。楽しみはこれからだ、っていうのに」

『遊びはそのくらいにしておけ。その男には、まだ訊くことがある』

「訊くこと？ もうこのジイさんが誰なのかは判ったぜ」

『そんなことはどうでもいい。その男は、カインのことを知っているはずだ。電話での会話からしても……。それを訊き出すんだ、緋影。口が利ける程度になら、どれほど痛め付けても構わない』

「魅力的な言葉だな。紅蓮が『さつさと殺せ』と言ってるのが聞こえてるけど」

『早くしろ。時間がないんだ』

その会話が続く中も、ウェブスターは、涎を垂らしながら、呻いていた。

恐怖に取り憑かれ、足を潰された今、もう彼には、逆らう気力もないのであろう。

「さあ、時間がないんだとさ。ぼくがガラスの中にいる間に、あんたが掛けた電話のせいで——。あんた、カインのことを知っているのかい？」

緋影は、ウェブスターの苦しみなど全く見えていない様子で、淡々と訊いた。

部屋の照明は消えているとはいえ、外からの明かりで、人の顔が見えなくなる、というほどではないのだ。

「う……う……」

ウェブスターの口から零れるのは、声とも言えない呻き声、だけであった。

「口が開かないのなら、ナイフで広げてやってもいいんだぜ」

その言葉を聞いて、口を開かない人間がいるだろうか。

「う……。やめ……。っ！ カインは……。カインのことは、知っている……。いや、最近のことは……。あまり……。知らない……」

「それでいいんだよ。——カインは一体、何者なんだ？」

「……？ 知らないのか……。？ 今まで……。彼のことも知らず……。一緒に……。？」

戸惑うような瞳が、持ち上がった。

「どうやら、耳も悪いようだな。ぼくの質問が聞こえていないらしい」

ハッ、と表情が強ばった。

「やめ……。！ カインは……。ローウェルの養子だ……。っ」

「そんなことを訊いてるんじゃない。何者か、と訊いているんだ。ただ金持ちの養子、っただけで、ニューヨークを牛耳れるはずが――」

緋影が言いかけた時だった。

『伏せろっ、緋影！』

と、舞台裏から、朱道の声が閃いた。

防弾扉さえ貫く機関銃の銃弾が、部屋の中に飛び込んで来たのは、緋影が床に伏せてすぐのことだった。

見る間にドアが千切れ飛び、火薬の匂いが充満する。

壊れたドアの向こうから現れたのは、五、六人の黒いシルエットであつた。

そして、そのシルエットが部屋の中へと入って来た時、緋影の姿は、床の上にはもうなかった。

「どうやら、命だけは無事だったようですわね」

床に転がるウェブスターを見て、シルエットの中の一人が言った。女である。

「う……。あ……。無事では……。っ。ここに、まだ……」

「カインも、もうこのビルの中にいるはずですね。エレベーターも

止まっていますから、この最上階まで上がって来るには、まだ時間が掛かるでしょうが」

と、女は言い、

「——早く、サー・ウェブスターを屋上のへりに運びなさい」

と、残りの五人のシルエットを振り返った。

その言葉に従い、残りの五人が、ウェブスターの体を抱え上げる。呻きが上がった——が、今はそれを気遣っている時間もない。

その五人——ウェブスターも含めて六人に続き、女も床の上に何かを置いて、すぐに部屋から翻った。

「……爆弾か？」

そう言ったのは、緋影であつた。遠ざかる足音を聞きながら、ソファの陰から顔を出す。

『おれに代われ、緋影。爆弾なら、屋上のへりが飛び立つまで起動しない』

それは、灰裂の言葉であつた。機械のことなら、時限装置であれ何であれ、彼——灰裂の専門なのだ。

二人はすぐに入れ替わった。

舞台裏では、皮肉と非難が飛び交っている。

『——ったく。だから、さっさと殺しておけば良かったんだ。逃げられた上に、爆弾まで仕掛けられやがって』

紅蓮が不機嫌を露に、悪態づく。

『あの男は元々、我々の目的ではなかった』

『ハッ！ おまえは、カインのことを知りたいがために、あの男を生かしておきたかったただけだろうが、朱道』

『……』

『二度と私情で足を引つ張るなよ。黒都が怖ければ、な』

険悪な雰囲気立ち込める中、足音さえも立てない気配が、この部屋へと近づいていた。廊下の右手の方からである。

「カインか？」

灰裂が訊いた。

「……ああ」

と、短い言葉が返って来る。階段を駆け上がって来たから、という理由だけではなく、そのカインの息遣いは辛そうだった。

「ウェブスターは？」

そう問いかける声も。

「女が連れて逃げた。緋影の玩具になっていたから、五体満足、とはいかないが」

「そうか……」

「どうかしたのか？」

と、普段なら灰裂も問いかけていたであろう。

だが、今は女——ジーンが残して行った小さな箱の方が、カインの容体よりも、灰裂には気に掛かることであつたのだ。

慎重に箱を持ち上げ、蓋を取る。

開いた箱の中身は、ビンであつた。

「それは？」

カインも、そのビンを見て、問いかける。

「さあな。女が置いて行った。二トロとも思えないが」

クン、とビンの外側から匂いを嗅いで、灰裂は言った。

「時限装置もついていないし……」

と、眉を寄せる。

フツ、と笑みが零れ落ちた。

鼻を鳴らすだけの、ごく皮肉な笑みである。それは、カインが零したものであった。

「どうかしたのか？」

灰裂は訊いた。

「いや……。神も悪魔も、私を歓迎してはくれないようだ」

「二トロなら良かった、って？」

「……。行こう。君は……。灰裂か？」

「ああ」

「私の上着を着るといい。先に車に戻っていてくれ」

そう言っ、カインは灰裂の肩に上着を羽織らせ、代わりにビンを受け取った。

「中身が判ってるみたいだな？」

灰裂が訊く。

返事は優しい笑みであった。

タイムリミットまで、あと一分――。

たとえこの街がニューヨークであっても、朝は必ず巡り来る……。

AREA・4 紐育（ニューヨーク）・加奈陀（カナダ）？

AREA・4 ニューヨーク カナダ
紐育・加奈陀

戦うために創られた男の体は、何故、これほどまでに美しいのであろうか……

SCAPEGOAT・1

何故、その女性^{ひと}は、そんな風に顔を背けるのだろうか。口さえ利いてはくれず、白い指先を握り締めて。

怒っている。——そう。怒っているのだ。

いつもそんな風であつた訳では、ない。

いつもは、優しい笑みを返してくれる。

「さあ、いらつしやい、透……。ちゃんと帽子をかぶってね。外は陽差しがとても強いから」

さっきはそう言つて、透のことを気遣つていてくれた。

今日は、何日も前から楽しみにしていた、海に行く日なのだ。それなのに、何故——。

「……とーさまがいたら、とーさまの車で行けたのに」

心の中で思ったことを、素直に口に出したただけだった。ただ帽子をかぶるのが厭で、家から車で出掛けたかっただけなのだ。だが、その言葉に、その女性ひとの顔は、強ばった。

それからずっと、怒っていた。

何を言っても、返事を返してはくれなかった……。

テレビや絵本で見る父親は、寡黙で頼りがいのある人物だった。そこにいるだけで、家族が安心できるような、存在。

その父親が、透にもやっと、出来ることになった。

「あ、あの……。はじめまして、とーさまっ」

目一杯の笑顔で、そう言った。

今日のために、蝶ネクタイのついた、半ズボンのスーツを着せてもらっていた。

その男性ひとは、テレビや絵本で見るようには、透を抱き締めてもくれず、チラ、っと一度垣間見ただけで、無口にどっしりと構えていた。

それでも、透は、わくわく、した。これから、その男性ひとと送る生活に、さまざまな期待を寄せていた。

「透……だったかな？」

煙草を銜えて、その男性ひとは言った。そんな姿は、テレビの中と一緒だった。

「は、はいっ」

緊張しながら、それでも嬉しさを胸に、透は言った。

男の人から、そうして名前を呼ばれるのは、初めてだった。

力強い腕で、天井に届きそうなくらい、高く抱え上げてもらえる

かも知れない、と思っていた。

だが――。

「これだけは言っておく。勝手に私の部屋に入ったり、屋敷の中の物を触つて、壊したりしないことだ。子供はすぐに壊したり、散らかしたりするからな」

それが、その男性^{ひと}からかけてもらった、最初の言葉であつた。

「……はい」

少し消沈して、そう応えた。

それでも、いい子にして、言われたことを守っていれば、いつかは抱き締めてもらえるようになる、と思っていた。

父親とは、そういう存在なのだから……。

「よく眠れたかい、透？」

目を醒ますと、ベッドの傍らには、カインがいた。

ここは、ニューヨークのホテルの一室。

明け方に、ウェブスターのビルから戻って来て、シャワーを浴びるなり寝入った日の午後であった。

「……夢を見ていた」

透は言った。

だが、彼が見たものは、本当に夢であったのだろうか。あれは、胸が詰まるような現実ではなかったか。

カインはベッドの上に腰を下ろし、透の髪を、静かに、撫でた。

彼は、透が欲しいものを知っているのだ。幼い日、透がどんなに望んでも得られなかったものを。

「……ありがとう」

透は、優しい手を見つめるように、礼を言った。

決して近づき過ぎず、離れもしない彼ら二人の関係は、誰もが望むものであっただろう。——いや、それは彼らだからこそ、成し得るものであっただろうか。

美しい、のだ。

彼ら二人の触れ合う姿は、ただ穏やかで、美しい。

「ぼくは何か寝言を言っていたかい、カイン？」

光に背を向けるように寝返りを打ち、透は表情もなく、そう訊いた。

「いや。聞き取れなかった」

「そう……。小さい頃の夢を見ていた。十二年前の夢じゃなく……もっと前の……。ぼくがまだ、とーさまとかーさまを愛していた頃

の

「……」

「君は夢を見るかい、カイン？」

夢を見ない人間などいるのだろうか。——いや、その青年なら、夢など見ないのかも知れない。存在自体が夢のような玲瓏な青年なら……。

「小さい頃の夢は……見ない」

カインは言った。

「何となくそんな気がしていた」

一日が始まったのは、シャワーを浴び、コンチネンタルの朝食——昼食を済ませてからのことだった。

それから、透が一番初めにしたことは、母親の所在を尋ねることである。

昨夜、カインは何らかの情報を手に入れ、それを調べに出かけていたのだ。

だが、その間に紫生がデイスコへ出掛けてしまい、余計なことに巻き込まれてしまったために、結局、訊くことが出来ないままになっていた。

「あれから、原点に戻って——君が母親を見かけたパンナム・ビルの前に戻って、調べ直していた。あの日、君の母親がどこに出掛けていたのかを……」

クリスマス・イヴの宵に、用もなく、あんなところをうろついていたはずもない。

そして、女性ならまず、買い物をしていた、と見るべきであろう。駅のコncourseや地下には、商店街やカフェ・テラスがあり、南に行けば、ニューヨーク高島屋がある。そして、パンナム・ビルの近くには、ポール・スチュアートや、ブルックス・ブラザーズ、といった、紳士用品専門店がある。

もし、透の母親が男と一緒にいるのなら、そういった店に、その男へのクリスマス・プレゼントを選びに——もしくは、注文しておいたものを取りに行っていた、ということが考えられる。

そうでなくとも、パンナム・ビルには、多くの日本企業が事務所

を構えており、その中に、透の母親の男がいる企業がある、ということも考えられる。

そういった可能性を調べていた中、一軒の店で、透の母親のものではないか、と思えるカードの利用票が見つかった、という連絡が入ったのだ。

その店は、洗練されたデザインと、伝統的イメージに新しい個性を加えた紳士用品専門店、東部名門八大学出身の人々に人気があり、著名人も多く訪れる、という、ポール・スチュアートだった。

「カードの名前は、君の母親のものとは違っていたが、その店に訪れた女性の年格好は、あの日、パンナム・ビルの前で君が見かけた女性の年格好とそっくりだったそうだ。それで、カードの持ち主の所在を当たってみた」

淡々とした口調で、カインは言った。

「…… ばくの見間違い、か？」

順序立てて説明をして行くカインに、透はその結論を問いかけた。カードの名前が違っていた地点で、すでに答えは出ているのだ。

「ああ。君の母親ではない。その女性の家に行つて、身分証明証も確かめてみたが、別人だ。——君がパンナム・ビルの前で見かけた女性は、宇佐川蓉子——。ニューヨークで名を上げた彫刻家、宇佐川恭一の夫人で、もう二〇年以上、このニューヨークで暮らしている」

「そうか……」

二〇年以上、というのなら、間違いなく別人なのだ。透が母親に捨てられたのは十五年前であり、それだけで五年以上の空白が生じている。

パンナム・ビルの前で見かけた女性は、透の母親ではなかったのだ。

十五年もの歳月が経っているのだから、透や緑乃に母親の顔の区別がつかなくなっているにしても、仕方がなかっただろう。少し似ている女性を見ただけで、その女性を母親だと思い込んでしまったのだ。

だが、カインの言葉は、まだ続いた。

「君は、母親の姉妹について、何か聞いたことはないか、透？」
優しい面貌での問いかけであった。

「……姉妹？」

「ああ。親戚付き合いや何かをしていただろう？」

「……わからない。ぼくはまだ小さくて……。でも、そういう付き合いはしていなかったと思う。——そのことが、その女性と関係あるのか、カイン？」

カインが何を言わんとしているのかは、透にも何となく判りかけていた。——いや、はっきりと判っていた。

だが、期待を打ち碎かれることを避けていたのだ。だからこそ、そう問い返した。

「君がパンナム・ビルの前で見かけた女性は、恐らく、君の母親の姉妹だ。彼女の部屋には、日本からのエア・メールがあった。久世房子という女性からだ」

「久世……」

「君の母親の旧姓だろう？」

確認、というよりも、手順、という口調で、カインは訊いた。

「ああ。——でも、久世房子という女性は知らない。かーさんの名前は——」

「久世綾子——。それは知っている。——部屋にあったエア・メールは、母親から娘への手紙だった。つまり……君のお祖母様おばあさまからの手紙だ」

「おばあさま……」

「もちろん、宇佐川蓉子が、君の母親の姉妹だとして、の話だが」
全てが一つの線で繋がりはじめた。

だが、まだ曖昧な部分も多くある。

透の母親が、何故、親戚付き合いさえしていなかったのかも、家

族の話すら透に聞かせたことがなかったのかも……。そして、透の本当の父親。

カインの話では、宇佐川蓉子の部屋には、実家からの手紙はあっても、透の母親からの手紙は一通もなかった、という。姉妹間でも、全く連絡を取り合っていないのだ。

考えられること、といえば、以前に何か揉め事があって、透の母親は、家族や親戚との付き合いをしなくなった、ということである。そして、その理由が透のことであった、ということは充分に考えられるだろう。だから、透には何も話さなかったのだと……。

「私は日本へ行つて、もう少し詳しいことを調べて来る。それで、宇佐川蓉子が君の母親の姉妹かどうか、はつきりするだろう。もしかすると、君の本当の父親のことも……」

透の本当の父親——。二度目の父親が出来るまで、ずっと空白であつた戸籍に当てはまる人物。

その人物が誰であるか、明かされる日が来る、というのであろうか。

「……ぼくにはもう、父親なんか必要ない。そんなもの、二度と望んだりはいしない」

壮絶な美貌が際立つ瞳で、透はカインの言葉を鋭く見据えた。

狂気の奈落へと堕ちた美貌の少年、一色透——。

彼にはもう、そんなものなど必要ないのだ。——いや、信じてはいない。絵本に出て来るような優しい父親も、テレビに出て来るようなカッコいい父親も、この世には存在していないのだから。

「……今の君は、ある意味では無敵だ。たとえ、真実の黒都の力が目醒めなくとも」

カインは、皮肉とも受け取れる口調で、静かに言った。もちろん、それが何を意味しているのかは、解らない。——いや、透には解つたであろうか。漆黒の瞳は、カインの緑翠の瞳と同じように、ゆっくuriとした瞬きを刻んでいる。

「銀嶺、か……。ぼくが透であるための『存在』だ」

「私が逢ったことのない一人でもある」

「ぼくも、知らないさ……」

真実の黒都と、銀嶺――。透の《友だち》ならば、その正体を知っているのだろうか……。

彫刻家、という肩書に相応しく、その屋敷には、何体もの彫刻が並んでいた。ギャラリー、とも呼べる廊下や、ドア・ノブに施された凝った装飾、それは、その屋敷自体を美術館のように彩っていた。屋敷の当主、宇佐川恭一は、妻の蓉子と結婚してすぐにニューヨークへ移り住み、この屋敷で暮らしていた。息子はアイビー・リーグの各校、コロンビア大学の院生で、もう一人、^{ハイスクール}高校生の娘がいる。カインから聞いたその情報を思い出しながら、朱道は屋敷の一室に忍び込んでいた。

『どういう積もりなの、朱道？ この屋敷はもうカインが調べたわ。——カインが言ったことを信用していない、とでも言う積もりなの？』

内側からのその声は、モデルである青華のものであった。

朱道は何も応えずに、アトリエをゆつくりと見回している。

彫刻家、宇佐川恭一のアトリエである。

地下から二階分の吹き抜けになったそこは、かなり広々とした空間になっている。

『ねエ、朱道！ 透に内緒でこんなことをするなんて——』

『透には後で話す。捜し物が見つければ、だが』

『捜し物？ それこそ、カインが全部、捜したわ。透のお母様に関するものは、ここには何も——』

『カインが捜したのは、宇佐川蓉子の持ち物だけだ。宇佐川恭一の方は調べていない』

『当然でしょう。宇佐川蓉子は透のお母様の姉妹だけど、宇佐川恭一は他人ですもの』

『確かに他人だが、彼は『男』だ』

『——。まさか……』

意味を含む朱道の言葉に、青華の声は、凍りついた。

『朱道、あなた……まさか、宇佐川恭一が透の父親だと思っている訳ではないでしょうね？』

と、信じられない様子で、問いかける。

「その疑問を持ったから、ここへ来たんだ。——思い出さないか、青華？ 透の父親の日記帳に書いてあったことを……。我々が皆で決めて、透が読まない内に、と捨てた日記だ」

朱道は淡々とした口調で、それを語った。

その間も、アトリエの搜索は続けている。

『あの日記は……読めない字がほとんどだったわ。内容だって、そんなに覚えてはいないし……』

「私は覚えている。——いや、思い出した。あの日記には、確かに『ニューヨーク』という文字が書いてあった。同じページに、綾子と——透の母親の名前も」

「それだけで、宇佐川恭一が透の父親だと決めつけるなんて——」

「もちろん、それだけで決めはしない。確かなことを掴むためにここへ来たんだ。——妹が、姉の夫とデキて、子供を産んだ……そういう筋書きなら、透の母親が家族と連絡を取り合っていないかったことの説明もつく。もちろん、透に本当の父親のことを話せなかった理由も——。自分の姉の夫が、透の父親だとは言えないだろうからな」

確かに、朱道の言葉の通りであった。

だが——。

「そんな……そんなことって……。本当の父親が判っても、その人のことを父親と呼べないなんて、透が可哀想だわ」

姉が産んだ子供は、父親の元で幸福に暮らし、妹が産んだ子供は、幸福に裏切られながら一人で育ち——。同じ父親を持っているというのに、これほど違った運命があるだろうか。——いや、あってもいいのだろうか。あれほど父親に憧れ、父親を求めていた透の想いは、どこで昇華すればいいというのだ。

『俺は父親捜しには賛成できないな』

そう言ったのは、夏黄であつた。普段、現実的な彼の言葉にしては、その現実から逃避しているようにも、聞こえる。

『今の透は、父親なんか望んでいないんだ。そんなものを捜してどうしようって言うんだ、朱道？』

と、非難するように言葉を打付ける。

「決めるのは私ではなく、透だ。そして、これは父親捜しではなく、母親捜しだ。宇佐川恭一が透の父親なら、透の母親と連絡を取っていた可能性もある。事実、透の二度目の父親の日記帳には、ニューヨークという文字が出て来ている。透の二度目の父親は、透の母親がニューヨークにいる男と浮気をしている、と思い込んでいたんだ」

『……もし、宇佐川恭一が透の父親だとして、今も透の母親と関係が続けているとは限らないだろう？ 第一、それなら、透の母親が透を捨てて家を出る理由もない』

夏黄の言葉は、もつともであつた。

「全ての疑問は、情報を集めれば自然と解けるものだ。答えは『出すもの』だが、事実は『知るもの』——。何も知らない内に疑問を解くことなどできはしない」

『……』

「ここには何もないな。――盗聴器をいくつか仕掛けて置けば、拾い物もあるだろう。後は、週末毎に見に来ればいい」

果たして、どんな真実が浮かび上がって来るのだろうか。

朱道がアトリエに盗聴器を仕掛ける中、誰もが、長い間隠されていた真実に、沈黙していた。

宇佐川恭一のアトリエに、透の母親との繋がりを示すものは何もなく、また、書斎の方にも何もなく、それでも二人が特別な関係であった、ということがあるのだろうか。――いや、だからこそ――関係を裏付けるものが何もないからこそ、二人は関係があった、とは思えないだろうか。

「さて。これでいいだろう」

アトリエの電話、書斎の電話、そして、玄関にも一つ盗聴器を仕掛け、朱道は時計の針を垣間見た。

あと少しで午後六時になろう、という時間である。もちろん、まだ誰も帰って来る時間ではない。

宇佐川と夫人は、今、宇佐川が開いている年明け最初の個展に出掛け、息子は大学の学寮に――いや、週末のパーティやコンサートに出掛けて羽根を伸ばしているかも知れないが――娘もまた、高校のクラス・メイトと共に出掛けている。

夜中よりも、よほど安全な時間なのだ。

『受信機はどうする積もりだ、朱道？ 透はまた明後日から大学がある。レコーダーの許容が一杯になったら、カインに取り替えてもらう積もりか？』

そう訊いたのは、灰裂であつた。

「いや……。君にそれを頼みたい、灰裂。電話回線を使って、マサチューセッツから録音内容を聞けるようにしておいてくれないか？ もちろん、聞いた後は消去できるようにして、だ。明日の午後ま

で——。出来るか？」

朱道は訊いた。

『個人的には、透やカインに黙ってこんな調べ方をするのは反対だ』

「透の母親を見つけるためだ」

『フツ。そう言うつ思っていたよ』

「後は任せる」

そう言つて、朱道が玄関のドアを開いた時であった。

「キャッ」

と、目の前に立つ少女が、驚いたように声を上げた。可憐で、瑞々しい、十六、七歳の少女である。手には、ドアの鍵らしきものを持っている。家に入ろうとしていたことは、間違いなかった。

灰裂と話をしていたために、朱道も、ドアの外に近づく人の気配に気がつかなかったのだ。

考えるでもなく、その少女が宇佐川の娘、宇佐川茉莉^{まり}であることは、容易に知り得た。

似ている、のだ。その少女は、どこか透に似た容姿を備えている。従兄妹——いや、もしかすると腹違いの兄妹なのかも知れないのだから、当然である。

朱道は、どうすることも出来ずに、突っ立っていた。すると、茉莉が胸を撫で下ろすように、こう言った。

「やだ、にーさま。驚かさないでよ。そんな髪形をしてると別人みたい。それに、今日帰って来るなんて、一言も言つてなかったじゃない。パパもママも個展に出掛けていていないわよ。わたしも、またこれから出掛けるところ」

と、屈託のない笑みを見せる。
間違えている、のだ。

だが、そう長くは続かないだろう。彼女もすぐに、目の前にいる少年が、兄ではなく全くの別人だと気づくに違いない。もう瞳も戸惑い始めている。

「玲^{れい}にーさま……じゃない……。あなた、誰……？」

と、顔立ちの違いに気づいて、朱道を見上げる。

いきなり、自分の家から兄とよく似た少年が出て来たのだから、戸惑うのも道理だろう。

朱道は、少女の瞳をじっと見据えた。

「……私は、朱道」

とだけ、受け応える。

「朱道……？」

「それ以上のことは訊かない方がいい。君のためだ」

と、間髪入れずに、こぶしを突き出す。

「ぐ——っ」

鳩尾に入った衝撃に、茉莉は為す術もなく体を折った。

もう意識もなかったであろう。

「透も……君のように幸せに育って当然の優しい子だった。他のどんな子供よりも素直で、愛らしい……皆に愛されて当然の子だったんだ。——次は容赦しない。透が君を憎むなら、私は君を殺すだろう……」

その日の夜、マンハッタンに、雪が、降った……。

SCAPEGOAT・2

ぼんやりと開いた瞳に映ったものは、見慣れた部屋の天井であつた。

さつきからずっと、同じ声が聞こえている。

「茉莉。——茉莉？ どこか具合が悪いの？」

また同じ声である。

見れば、ベッドの傍らに、母親がスーツ姿のままで、立っている。外から戻つて来たままの格好なのであろう。——そう。目醒めた場所は、自分の部屋の、自分のベッドの上であつた。

「……ママ？」

茉莉は、まだ茫とする頭で、喉を開いた。と同時に、鳩尾に鈍い痛みが駆け抜けた。腹筋を使ったせいだろう。声を出したただけであつたために、呻きを上げるほどの痛みには、ならなかった。

「どこか痛いのか、茉莉？ こんな時間からベッドに入っているなんて」

母の蓉子が心配そうに、眉を落とす。

その頃には、茉莉も夕刻に起こつた出来事のことを思い出ししていた。見知らぬ少年が、この家から出て来たのだ。——いや、最初は兄の玲かと思つたほどに、似た顔立ちをしていた。どこか、という訳ではないが、パツと見た時は、似てる、と思つたのだ。髪形が違つていたせいで、余計に似ていると思つたのだらう。もし、あの少年が兄と同じ髪形をしていたのなら、顔立ちの似ていない部分が目についたに違いない。第一、家から出て来た少年は、玲よりも四つか五つ年下で、見上げた時の身長も、明らかに別人であることを示

していたのだ。

そして……何故か、人間ではない、と思える雰囲気を用意していたあの壮絶な美貌のせいであつたかも、知れない。この世には存在していないものだ、という気がしたのだ。

もちろん、そんなことを他人に話せば、笑われるだけだろうが。

茉莉はそう思ったのだ。

「——茉莉？　どうかしたの、茉莉？」

じつと黙り込む茉莉の様子に、また、蓉子が首を傾げた。

「あ、ううん、何でもないの。——ママがベッドに運んでくれたの？」

取り繕うように首を振って、茉莉は訊いた。

夕刻、鳩尾を突かれて気を失った場所は、玄関であつたはずなのだ。

「何を言っているの。ママが帰って来た時、あなたはここで寝ていたじゃないの」

「え……？」

「クラスの子と、お酒でも飲んだの？」

「……」

あの少年が、茉莉をベッドまで運んでくれた、というのだろうか。寒い玄関から、暖かいベッドの中に……。いや、それ以前に、あの少年は一体、何者であつた、というのだろうか。他人の家に勝手に入り込んでいるなど、まともな人間とは思えない。

だが、ギャングや泥棒、といった雰囲気ではなかったのだ。それに、茉莉をじつと見つめていたあの視線……。どこか、懐かしいと思える視線だつた。

「あのね、ママ。朱道、っていう人を知ってる？　十八、九歳の男の子だけど」

茉莉は訊いた。

「シウドウ？　変わった名前ね。どこの国の名前なのかしら」

「え？　日本人の名前じゃないの？」

ニューヨークで産まれ育った茉莉には、日本人の名前など、そう縁のあるものではないのだ。

「さあ……。聞いたことのない名前ね。お父様のモデルかしら。――その子がどうかしたの?」

「……。この家に勝手に入り込んでいたわ。最初、玲に――さまかと思つたの。何となく顔立ちが似てたから――。でも、玲に――さまじやなくて、その名前だけを名乗って……。私を殴って気絶させたわ」――

茉莉の言葉に、蓉子の面がこれ以上はなく強ばつた。ニューヨークが危険な街であることは誰もが承知しているだろうが、蓉子の動揺は、それだけではないような気も、した。

「……。玲に似ていたの、その子?」
と、問いかける表情も。

「ん……。今から思えば、そんなに似ていなかったかも知れないでも、パツと見た時は、本当によく似ているように見えたの。――もしかして、パパの隠し子だったりして」

「――。馬鹿なことを言わないでちょうだい!」

強すぎる、と思えるほどの口調であつた。

蓉子の唇は小刻みに震え、瞳は瞬きすら忘れたように、凍つている。

「……。ママ?」

茉莉は、初めて見る母親の取り乱しように、驚きと戸惑いで問いかけた。

蓉子が我に返つたように、ハツとする。

「……お父様を侮辱するような言葉は許しませんよ。お父様の子供は、あなたと玲だけです」

と、落ち着きを見せようとする口調で、言葉を継ぎ足す。

だが、本当に落ち着いていたのであろうか。その肩は震えてはいないだろうか。

「やだわ、ママったら。そんなこと解っているわよ。ちょっと冗談

で言っただけじゃない。——きっと、その朱道っていう子は、パパの新しいモデルだったのよ。ほらっ、パパったら、よくモデルの子を呼んでおいて忘れたりするし——。わたしが騒ぎそうになったから、あの子、慌ててわたしを気絶させたのよ」

茉莉は、明るい口調で、軽く言った。

「——そ、そうね。お父様に訊いてみるわ。あの人ったら、本当に忘れっぽくて——。体は大丈夫なの、茉莉？」

蓉子はぎこちないながらも、安心した様子で、そう訊いた。

「平気よ。そんなに酷く殴られた訳じゃないの。——ホラ、痕だつて残ってないし」

セーターを捲った鳩尾は、アザ一つなくきれいなものだった。

「そう……。もう少し休んでいなさい。そんな乱暴な子、いくらモデルでも、お父様にお断りしていただくわ。もし、その子がまた来るようなことがあっても、相手にしては駄目よ、茉莉。——いいわね？」

「OK、ママ」

——その子がまた来るようなことがあっても……。

茉莉は、部屋から出て行く母親の姿を黙って見送り、大きな瞳を、少し、細めた。

何がある、というのだろうか。

あの朱道という少年は、父親のモデルでもなければ、ギャングでもない。もっと別のところで繋がっている少年だという気がしていた。そして、もう一度、あの少年と逢ってみたい、というような気が……。

天井を見上げながら、茉莉はそんなことを考えていた。

冷たいほどの漆黒の瞳をした少年——彼は一体、何者であるというのだろうか……。

宇佐川恭一は、寝室で着替えをしていた。

若い頃からアーチストとしての夢をみていた宇佐川は、資産家である久世家の娘、蓉子と結婚し、ニューヨークでその名を上げた。もちろん、財産目当ての結婚だ、と言われないために努力をし、愛し合つての結婚だった。

久世の両親も、宇佐川の才能と情熱を認めてくれ、身分違いだ、などという古い言葉は使わなかった。宇佐川の夢を適えるための援助も惜しまない、とまで言ってくれたのだ。

もちろん、宇佐川は断った。若さのせいもあったのだろう。そして、そんなことが余計に、久世の両親に気に入られた理由でもあった。

それから二十数年……。

宇佐川は、このニューヨークで認められる、本物のアーチストとなっていた。

「あなた、少しお話ししたいことがあるのよ。今、よろしいかしら？」

そう声をかけて寝室へと入って来たのは、蓉子であった。

「ん……。明日にしてくれ。今日は疲れた」

「今、茉莉の様子を見て来ましたの」

と、宇佐川の言葉も無視して、話を始める。

「どうやら、さっきの『今、よろしいかしら』という問いかけは、夫婦間では、『今から話を始めます』という予告のようなものであったらしい。」

となると、宇佐川の『明日にしてくれ』という言葉も、少しくらいなら聞く、という意味であつたのかも知れない。もちろん、本心から『明日にして欲しい』という言葉であつたのかも知れないが。「そうか。週末に早く帰っているところを見ると、ボーイ・フレンド

ドとケンカでもして塞ぎ込んでいるんだろう」

宇佐川は言った。無関心な口調である。

ボーイ・フレンドとケンカをして、そのショックで何処かへ行ってしまった、というのなら心配だが、家に帰って来ているのなら、心配もない。

「……。今日、この家に十八、九歳の少年が入り込んでいたそうですわ。玲によく似た」

「——玲に？」

その言葉には、さすがに宇佐川も関心を示さずにはいらなかったのだろう。蓉子は何を言わんとしているのかは解っていないくとも、蓉子が何か言いたげであることは、解ったのだ。

そして、娘を持つ親なら、誰もが心配すること——。

「何か……あつたのか？ 茉莉はその少年に——その……何かされたのか？」

と、顔を強ばらせて、問い返す。

「殴られて気を失ったとか……」

「何……。すぐに警察に——い、いや、そんなことをしては茉莉が……。もし、こんなことが噂になったら、茉莉が厭な思いをする。

そ、そうだ、弁護士に——」

「あなた——」

「電話番号は覚えているか？ ウェイン弁護士の電話番号だ。——いや、いい。自分で捜す。アドレス帳は——」

「あなた。聞いてくださいな、あなた」

蓉子は、取り乱してアドレス帳を捲り出す宇佐川を見て、その背中をかけた。

「弁護士が先だ」

「あなた——。茉莉は大丈夫ですわ。気を失っただけで、それ以外は何も——。私がお話したいのは、その少年のことですよ。茉莉の話だと、その少年は日本人だったとか」

「……日本人？」

それから、蓉子が茉莉の話を宇佐川に伝えるまで、張り詰めるような時間が続いていた。個展の評判が悪かったとしても、二人の顔がそんな風に重々しくなることなど、あり得なかったであろう。それだけの理由があったのだ。

「まさか……」

話を聞き終え、宇佐川は言った。蓉子から聞いた言葉に対する否定——いや、驚愕である。

「考えられないことはありませんわ」

蓉子は言った。

だが、蓉子自身、まだ半信半疑であつたに違いない。茉莉の言葉に、ハッ、としたものの、昔のことを現実のものとして思い出すには、もう時間が経ち過ぎていたのだ。

「そんなことがあるはずはない。第一、綾子は——」

言いかけ、宇佐川はそこで言葉を切った。

声が高くなっていることに気づいたのだろう。

「綾子——さん、彼女は……昔のことなど子供に何も話していないはずで。第一、彼女は何も……」

と、声を低くして、言葉を続ける。

「私は、あの子のことが……小さい頃から嫌いでしたわ」

「——蓉子？」

「おとなしいクセに、妙に人目を惹く子で……。私はいつもそんなあの子に嫉妬して……。きれいな子で——でも、それだけではなく、独特の雰囲気があつて……。誰もがあの子のことを好きになつて……。あなたにも、本当は会わせたくありませんでしたのよ」

「……」

「思った通り、あなたはあの子に惹かれて——」

「蓉子。彼女はただのモデルだ。そのことは何度も話したはずじゃないか。彼女が身ごもつた子供は——」

「聞きたくありませんし、口に出したくもありませんわ」

「……」

「私、一度、綾子のところへ行つて、あの少年のことを確かめて来ますわ」

蓉子は言った。

彼女は、透の母親がどこにいるか知っている、というのであろうか。

「しかし、彼女はもう――」

「あれから随分、経ちますのよ。もしかしたら、あの子もまともに話が出るほどに回復しているかも知れませんわ」

「……」

部屋の中に残ったものは、長い沈黙だけであつた。

だが、最後の蓉子の言葉は、どういう意味であつたのだうろか。そして、透の母親はどこにいるかというのであるうか。

長い星霜の沈黙が、今、破られようとしている……。

AREA・4 紐育（ニューヨーク）・加奈陀（カナダ）？

日本へと向かうジェット機の中、カインはスーツの内ポケットから、一枚の領収書を取り出した。

《St. Miller A MENTAL HOSPITAL》

それが、領収書を切った人間——施設の名称であった。

聖ミラー精神病院。

アメリカ人が精神分析に凝っているとはいえ、領収書に記された金額からしても、単なるカウンセリングの料金だとは思えない。誰かがそこに入院しているのだ。その精神病院に——。

そして、その領収書は、カインが宇佐川の屋敷から持ち出して来たものであった。

だが、そこに入院しているのは、一体、誰だ、というのであろうか。

そして、カインは何故、そのことを透に話さなかったのであろうか……。

雪が全てを覆い隠して、行く。

ここは、ヨーロッパの伝統とアメリカの誇りを息づかせる街、東部エスタブリッシュメントを輩出するケンブリッジ——。

木々と古い建物に形作られるハーバード・ヤードは、今日も美しい調和の元に、その知性を見せつけていた。

週末も終わり、また勉学に勤しむ日々が続く週明け——。透も、いつもと変わらず、自分のクラスに出席していた。

世界中から優秀な教授や生徒を集めるこの大学は、今も昔も変わ

りなく、アメリカの最高権威であり続けている。

その中でも、透が気に入っている場所は、マーク・トウェエインの私書簡の宝庫であるワイドナー・ライブラリーであった。

英文学の分野を研究テーマに博士論文を作成し、文学博士号を取る、とカインに話したこともあるほどののだ。

自分がどれほどの人間であるのかを知るために。

そして、いつか母親が、その透の名前を目に止める日が来るように。

だが、もうその日を待つ必要はないかも知れない。透の方から、母親を見つげ出せる日が来るかも、知れないのだ。あの日以来、憎み続けて来たその女性を……。

クラスを終え、透がワイドナー・ライブラリーでマーク・トウェインを開く中、その内側では、『友だち』たちの囁き合いが続いていた。

『どうする積もりだ、朱道？ 宇佐川の細君は、今日、カナダへ発つんだろう？ おれたちは、カインに事情を話す以外、勝手に後を追って行き先を確かめることは出来ないんだぜ』

そう言ったのは、灰裂であった。

『灰裂の言うとおりよ。透の体を勝手に使って盗聴器の記録を聞いている今だって、気が咎めているのに——。私たちは、透が大学にいる間は勝手に体を使わない、って決めていたじゃない』

と、青華も灰裂に加勢する。

『……もう一つ決めていたことがある。何よりの優先事項だ』

朱道は言った。

『何よりの？ それは、透に迷惑をかけないことだわ——』

『違う。私たちが透の身代わり（スケープゴート）になる、ということだ。透が負うはずの苦しみを——痛みを、我々が代わることで少しでも透を楽しにしてやろうと。そう決めた。透がこれ以上傷つくことがないように、と……。事実を確認してから透に告げた方が、不必要な不安や期待を与えずに済む。——そうだろうか？』

『それは……』

『フッ』

と、鼻先で笑うような嘲笑が、聞こえた。

大人びた雰囲気を持つ少年、茶京が、涼やかに瞳を細めている。

『何がおかしい、茶京？』

鋭い瞳で、朱道は訊いた。

『いや——。これは失礼。笑う積もりはなかった。ただ、君が抱えているカインへの対抗意識が丸見えだったもので、ね』

『……』

『自慢の情報収集の腕で、カインのことを調べることが出来ないのが、そんなに腹立たしいのかい、朱道？』

ゆつるりとした口調であった。

『……調べる事が出来ない訳ではない。調べていいものかどうか決めかねているだけだ』

『——で、そのカインに、自分の調べた情報を渡すのは癪に障る、つて？』

『……』

『はつきり言わせてもらう、朱道。君は図に乗りすぎだ。緑乃のことがあつてからは、特に』

舞台裏の片隅で、藍香に守られながら眠る緑乃を見て、茶京は言った。

以前、スパーロに無理やり犯されてから、緑乃はすっかり、外に出ることを恐れているのだ。また犯されるかも知れない、という不安からではなく、自分が出て、またあの時のようにパニックを起したら、今度こそ黒都が目醒ますかも知れない、という不安のため。

『……君がそう思うのなら、否定はしない。カインに全てを任せておいては、また緑乃の時のようなことが起こる、と私が思っていることは事実だ。あの男は信用できない。今に、緑乃のように、我々も全員、潰される』

『根拠は？』

『君に、私の考えを解ってもらおうとは思っていないさ。カインに話したければ、話すがいい。あの男もきつと、私と同じように、透に話す前に、自分で真実を確かめようとするさ』

確信に満ちた口調で、朱道は言った。

『たとえそうでも、私は今週末、カインに全てを話す。私は君の味方ではない、朱道。況してやカインの味方でもない。ただ透のスケープゴートでありたいだけだ』

幼い日、生贄として傷つけられた少年の身代わり（スケープゴート）として……。

こんなにも彼らの心が乱れるのは、透の心が乱れているからなのであろうか……。

AREA・4 紐育（ニューヨーク）・加奈陀（カナダ）？

SCAPEGOAT・3

幾重にも連なる白銀の峰が、ある。

エメラルド・グリーンの湖も、ある。

繊細で、雄大——その言葉が最も相応しい地であつただろう。

緯度が高いために気温が低く、冬が長いとはいえ、太平洋岸の黒潮の影響と、寒風を遮ってくれる背後の山脈のお陰で、その地は比較的温暖な、過ごしやすい地となっていた。

加奈陀——。

夏は涼しく、冬でも雪の少ないブリティッシュ・コロンビア——その都市圏を離れた静かな地は、観光客も訪れず、心を惑わす何物もない、自然に満ち溢れた世界であつた。

目の前には、近代的な白い建物がある。葉を落とした木々に囲まれ、静寂のみを息づかせている。

その建物には、《St・Miller A MENTAL HO SPIITAL》の文字が刻まれていた。

今、そこに訪れた青年がいる。

きれい、と形容するに相応しい容姿の青年である。二七、八歳であろう。長い金髪を緩やかに束ね、その長身を際立てている。瞳の色は、フィヨルドのような緑翠珠色で、エメラルドグリーン優しげな面貌は、月の精霊のようでもある。

人類最初の殺人者の名を持つ青年、カイン——。

その足取りは、この世に存在していないもののように、限りなく優美だ。

今、院内へと、足を入れる。

ここでは、誰もが異なつた時間の中で生きている——そんな気がしないだろうか。

広く切り取られた窓から差し込む光は明るく、気ままに並べられた趣味のいいソファは心地よく、それでいて、ここが別の世界である、ということを感じさせている。

「失礼……」

前を横切ろうとする看護師を呼び止め、カインはスーツの内ポケットから、一枚の紙切れを取り出した。

呼び止められた看護師は、今、やっとカインの存在に気づいたように、ブラウンの瞳を見開いた。

気づいていなかった、というのであろうか。その美しい青年の存在に——。

だとすれば、人を惹きつけるものは『美』ではなく、雰囲気——周囲を取り巻く『華』とも呼べるものであつたかも、知れない。

「あ、は、はい。何か？」

看護師は言葉に詰まりながら、そして、目の前の青年の美しさに見惚れながら、ポツ、と頬を染めて、そう訊いた。

「以前、タクシーの中でこの領収書を拾ったのですが、中々届ける機会がなく……。もし、この方がもうこの病院にいらっしゃらないのなら、ここへ持って来ても仕方がないとは思つたのですが、何かトラブルがあつては申し訳ないので……」

カインは、取り出した領収書を見せながら、静かに言った。

「ヨウコ・ウサガワ……。ああ、この方のご友人なら、まだ入院しておいでですよ」

と、看護師は名前を確認して、受け応える。

「友人？」

「ええ。もう十年以上になるかしら。ここはこういう病院ですし、長く入院していらっしゃる方や、入退院を繰り返していらっしゃる方も多くて——。それに、景色のいい、自然に満ち溢れた土地でしょう？ そうついう長期入院の方には人気がありますのよ。ご本人、と

いうよりも、お身内の方に――。遠方から見える方もいらして、ミセス・宇佐川もそうですね。わざわざニューヨークから、ここまでいらして。――ああ、今、ちょうどあそこに」

そう言つて、看護師が指さした先には、プラチナ・ブロンドの女性が、いた。背中向きに、ソファの一つに腰掛けている。

宇佐川蓉子ではなく、入院している当人だろう。

だが、その女性が透の母親でないことは、確認するまでもなく、容易に知れた。透の母親なら、黒髪の日本人であるはずなのだ。

「あの――。彼女は、ミセス・宇佐川の友人ということでしたが――」

カインが問いかけようとした時だった。

「まあっ。ミセス・宇佐川までお見えになったわ。何てタイミングがいいのかしら」

と、看護師が正面の入り口へと、視線を向けた。

見れば、四十代後半のプライドの高そうな日本人女性が、院内へ入って来るのが目についた。十年以上も出入りしているのだから、その足取りにも、迷いがない。

だが、このタイミングの良さは、本当に偶然であつたのだろうか。カインと宇佐川蓉子が時同じくしてこの病院に訪れたのは、カインと同様、宇佐川蓉子にも、ここへ訪れなくてはならない出来事が起こつたせいではないのだろうか。

そう思える偶然、であつた。

「お久しぶりです、ミセス・宇佐川。今、この方が――」

そう言つて、看護師が振り返つた時、カインの姿は、もうそこから消えていた。

「え……？ あら、どうしたのかしら。さっきまでここに……」

と、辺りを見渡しても、姿はない。

「どうかして、ジェシー？」

そう問いかけたのは、宇佐川蓉子であつた。

「あ、いえ……。今、男の方が、この領収書を届けに見えて……」

看護師は、カインから受け取つた領収書を、蓉子に示した。

「領収書？」

「ええ。以前にタクシーの中で拾つたとか」

「変ね。私は領収書など落としたことがなくてよ」

「え？ ですが、この領収書は確かに当院で切つたもので――」

「入院費用はいつも振り込みのはずよ。ここで領収書を切つてもらつたことも、数えるほどしかないわ。それは全部自宅に――」

そこまで言い、蓉子は、ハッ、と何かに気づいたように、言葉を

止めた。ついこの間、自宅に入り込んでいた少年がいるのだ。

「その男性——領収書を届けに来た男性は、日本人ではなかった？
二十歳前後——いえ、もっと幼く見えるかも知れないけど、きれいな顔立ちをした……」

と、少し早口に、問いかける。

「いいえ、ミセス・宇佐川。長い金髪に緑翠みどりの瞳の素敵な青年でしたわ。年は……二七、八歳かしら。背が高く、優しげで——。国籍はどうか知りませんが、外見は日本人ではありませんでしたわ」

「……そう」

屋敷に忍び込んでいた少年ではないのだ。

看護師の言葉に、蓉子は訝しげにしながらも、言葉を閉じた。

「その領収書、いただきわ。きつと私の勘違いだったのよ。——何か変わったことはあつて？」

と、それ以上拘ることはせずに、話を変える。

「発作は治まっていますわ。お人形にお菓子をおげたり、ジュースをおげたりするのは相変わらずですけど……。私たちがお人形を洗ってあげる、と言っても手放してくれませんのよ。いつも彼女が一緒に風呂に入れて——。無理やり取り上げると、発作を起こしますでしょう？ 本当は、人形から離れてくれることが治療の一步なのですけど、中々……」

「無理はしないでちょうだい。お人形で彼女の心が休まるのなら、きつとその方がいいのよ。もちろん、早く回復して欲しいのは山々ですけど……。もうすっかり気が長くなってしまったわ。——会えるかしら？」

「ええ。今、あそこに……」

プラチナ・ブロンドの貴婦人に近づいて行く宇佐川蓉子の姿を、カインはホールの陰から見据えていた。そう長い時間ではない。すぐに、廊下の奥へと翻り、裏口の方へと歩き出す。

ニユーヨークへ戻り、朱道に確かめてみなくてはならないことがあるのだ。

同じ目的を前に、双方がバラバラに動いていては、今日のように、互いの首を絞めることになりかねない。透の母親捜しを引き受けたのはカインであって、朱道には朱道の役目があるはずなのだ。他の《友だち》と同じように、透のスケープゴートとして振る舞う役目が――。

「相変わらず、私は彼に嫌われているようだ……」
自嘲のような呟きでも、あった……。

暗く重い空が、真つ二つに、割れた。

白い閃光が大地へと駆け抜け、地球の咆哮の如き雷鳴を、轟かせる。

日本なら、雪おこし、とでもいうのであろうか。

雪を呼ぶ重い響きは、勇壮な神々の騎行のようでも、あった。

しかし、このニューヨークの空を騎行する神々とは、一体、何を司る神なのであろうか。

殺戮と恐怖、狂気と悪夢を司る神であつたかも、知れない。

これは、兆し、だ。良かれ悪しかれ、神々は何かを落として行く……。

雪が降り始めたのは、茶京が、朱道の独自の搜索のことをカインに告げ、また、カインが日本での調査結果と、カナダの精神病院でのことを、茶京に話し終えた頃のことであつた。

「フツ……。朱道の言っていた通り、だった訳だ。彼はこう言っていたよ。自分だけでなく、あなたも透には何も話さず、自分勝手に動き回る、と」

金曜の夜、先週と同じホテルの一室で、茶京は、緩やかな水の流れるように、そう言った。

カインは黙って、朱道が盗聴していたテープの内容を聞いている。——いや、少して、驚くように表情を変えた。わずかな変化でありながら、それは、はっきりとした変化であつた。

テープの会話は、宇佐川邸の玄関での、宇佐川恭一と蓉子のものではあつた。恐らく、蓉子がカナダへ発つ前のやり取りだろう。その中で、蓉子は宇佐川にこう言っていた。

『あの子の様子を見たら連絡を入れるわ』
と……。

あの子——それは、何故か心に引つ掛かる言葉であつた。普通、

友人のことを『あの子』とは呼ばないだろう。

蓉子が『あの子』と呼べる相手は、自分の娘か、もしくは妹くらいのものである。

「どうかしたのか、カイン？」

それは茶京の問いかけであつた。——いや、少なくともカインは、そう思つていた。

「透の……あれは、透の母親だ……。あの女性は……」

「え？」

「病院にいたプラチナ・ブロンドの女性……彼女が、久世綾子だ」

カインは、その日のことを思い起こすように、薄い声で言葉を綴つた。

「か……さん？」

漆黒の瞳が、戸惑うように、揺れ動く。

果たしてそれは、茶京なのであろうか。——いや、茶京ならば、久世綾子のことを『かーさん』と呼びはしない。

なら、彼は——。

カインは、ハツとするように、口を噤んだ。

「……君は、透なのか？」

と、目の前の美しい少年を見て、問いかける。

「さつき、茶京と代わつた。もう話は終わったから、と——。ぼくが出ては都合が悪いのか、カイン？」

透は、鋭い視線を突き刺した。

何という眼差しであるうか。さつき、空を真つ二つに割つた閃光よりも、さらに、鋭い眼差しである。

「どうなんだ、カイン？ 茶京と何を話していた？ ぼくのかーさんが病院にいたとはどういうことなんだ？ ぼくに黙って何をしている？」

あからさまな怒りを含む口調であつた。言葉だけでなく、カインの胸倉さえつかみかねない勢いを、持っている。

「君に黙っていたことなら、謝る。だが——」

言葉の途中、パシーン——っ、と激しい衝撃音が駆け抜けた。

「く——っ！」

カインは椅子の上から吹き飛ばされた。

カセット・デッキを置くテーブルが、派手な音を立てて、床に倒れる。雷鳴でさえ、これほど人を威圧する音ではなかっただろう。

半身を起こしたカインの唇には、朱い血が伝っていた。透の平手打ちを喰らって、口の中が切れたのだ。

「ぼくは、謝れと言った覚えはない。ぼくに黙って何をしていたのか、と訊いたんだ」

冷やか、としか言えない口調で、透は言った。

カインは唇の血を拭って、立ち上がった。それから、透の頭に手を伸ばし、優しい指先で髪を撫でた。

慰め、であつただろうか。

写真で見た透の母親も、透と同じように、艶やかな黒髪をしていたのだ。

「触るな！」

髪を撫でるカインの手を、バシ、っと叩いて振り払い、透はきつい視線で睨みつけた。

「……ぼくを思つてのことだ、とでも言う積もりか？　ぼくに不安を与えないように、全てがはつきりしてから話す積もりだったとでも？」

「……」

「ぼくは君に憫れみをかけられる覚えも、優しくされる覚えもない。ぼくは……人の優しさなんか信じたりしない。あの日から二度と……二度と信じないと誓ったんだ。君はそれを理解してくれた人間のはずだった。だから、ぼくは君を信じていたんだ。君は決してぼくを裏切りはしないと……。お義父さまのように、優しい言葉でぼくを騙して、陰で何かを企んだりしないと……。それなのに……。が

っかりしたよ。君も普通の人間だった訳だ」

十数年間の信頼関係の中に、確かに亀裂が入り込んだ。これが、さっきの神々の騎行の兆しであつたのだろうか。空を真つ二つに割つた閃光は、二人の信頼関係を引き裂くものであつたのだろうか。

「君には感謝している、カイン。だが、余計なことはいしないでくれ」
そう言つて、透はドアの方へと翻つた。

カインは、不憫さを募らせるような表情で、それを見ていた。――いや、それは見間違ひであつただろうか。彼の表情のどこが、普段と違う、というのだ。

それでも……彼が確かに人間である、と思える表情ではなかつただろうか。

「どこへ行く積もりだ、透？」

と、透の身を案じて、問いかける言葉も。

「ぼくの目的は君にも話した通りだ。たとえ、あの女性^{ひと}が病気で苦しんでいようと、ぼくの心は変わらない。ぼくはあの女性^{ひと}を――かーさんを殺す」

殺す――。殺せる、というのだろうか。透を捨てた人間とはいえ、あんな姿になつてしまつた母親を前にして――。

「透――っ」

「君から訊くことは、もう何もない、カイン。茶京に訊けば済むことだ。――代わってくれ、茶京。行き先は、かーさんのいる病院だ」
そう言つて、透はドアのノブに手を掛けた。

そのドアを開く頃には、彼はもう透ではなくなつていた。

「透に代わつたタイミングが悪かつたようだな、カイン。だが、それは私の責任ではない。透に隠し事をしたあなたの責任だ。――失礼させてもらふよ」

パターン、とドアが閉じ、茶京の姿も、廊下へと消えた。

カインは、雪の中に立つように、しばらくドアを見つめて立っていた……。

『行っちゃ駄目だ、茶京っ。透はカインと離れちゃ駄目なんだ……』

「……」

『茶京——』

『やめておけ、緑乃。茶京は感情で動いている訳じゃない。ここで茶京が透に逆らったところで、余計に拗れるだけだろう？』

舞台裏で、そう言っただけで緑乃を止めたのは、灰裂であつた。

『でも、ぼく……。きつと、ぼくのせいだから……。ぼくがスピークの屋敷であんな失敗をしたから……。だから、みんなカインのことを誤解して……。』

緑乃は、涙すら溜めて、訴えた。

だが、それは少し、ズレていた。

『へ？ 一体、いつの話を——』

『あれはカインが悪いんじゃないんだ……。ぼくが、せつかくカインに任せてもらったのに、うまく出来なくて……。』

『カインをかばうのは結構だが、ワン・テンポどころか、年号さえも遅れている。今日のことは、そんな昔のことが原因じゃない。君以外の人間の時間は、もつと速く進んでるんだよ、緑乃』

呆れ顔での言葉であつた。いつものこととはいえ、浮世離れた緑乃の時間は、現実の世界では生きていけないほどに、ゆっくりゆつくりと進んでいるのだ。その緑乃に呆れもせず、話相手になつてくれるのは、カインだけであつただろう。

『……え？』

と、今頃気づいた様子で、首を傾げる。

『君がほんの少しの間、落ち込んでいる内に、透の母親が見つかったのさ』

この言葉に反応するまでも、数秒、かかった。緑乃にしてみれば

ば、速い方だっただろう。

だが、それ以上のことは誰も説明してくれる気がないらしく、話相手が欲しくてたまらない幼い白亜を相手に、事情を訊く緑乃の姿だけがあった。

『どうする積もりだ、茶京？ 本当にこのまま透を母親のところへ連れて行く気か？ 透は、母親が入院しているのが精神病院だとは知らないんだぞ』

灰裂は言った。

だが、茶京は何も応えない。

何が正しくて、何が間違っているのか――。そんなことは、透にも彼らにも関係ないのだ。この道を選んだ時から――目的のためならどんなことでもする、と決めた時から、世のルールなど捨てている。

『あの……あの、やっぱり、カインの処へ戻った方がいいと思う。』

透はお母さまの話が出たせいで、きっと冷静じゃなかったと思うから……』

白亜から事情を聞き、緑乃がやっと口を開いたのは、バンクーバーへと向かうジェット機の機内でのことであった。訊く方が緑乃なら、話す方も白亜であったために、これほどの時間が掛かってしまったのだ。

『状況を見てから言えよ。もうニューヨークを発って、空を飛んでるんだ』

夏黄の言葉が面倒臭げであったのも、仕方のないことであっただろう。彼らの乗っている機は、二十分も前にケネディ空港を飛び立っているのだ。カインの持つ専用機の一つで――。その機内は、大統領専用機など比ではない豪華さで、バス・ルームもベッド・ルームも、全て文句のつけようがなく整っている。ソファの座り心地も、一流ホテルのものに勝るとも劣りはしなかっただろう。

その中、茶京は、透宛の手紙を書いていた。――いや、書き終えていた。

「目を醒ませ、透。後は君がやるべきことだ」

と、ソファに凭れて、目を瞑る。

その瞳が開いた時、彼はもう茶京ではなかった。

「……ボストンからニューヨークへ着いた四時間後に、またジェット機に乗ることになるとはな」

窓の外を眺めながら、透は、ポツリ、と呟いた。そして、茶京の残した手紙を持ち上げる。

文面を読み、その漆黒の瞳は、戸惑うように揺れ動いた。

「……カナダの聖ミラー精神病院？」

一体それは、何を意味する言葉であつたのだろうか……。

SCAPEGOAT・4

車は、明け方近いマンハッタンを走っていた。黒塗りのロール・スロイスのジムジンである。

「透様が一人でジェット機に乗られた、と聞きましたが、宜しいのですか？」

運転手が、ミラー越しにリア・シートの美しい青年へと問いかける。

「彼の心配をしろ、と？」

「……。もう十年以上、この車の運転手を努めさせていただいてありますが、あなたと透様が一緒にいる時は、とても穏やかなものを感じておりました。透ぼっちゃまは——透様は、小さい頃から本当に愛らしくて、お優しく……私にもよくお菓子をくださいました」

と、瞳を細めて、暖かげに言う。

「甘いものは嫌いだっただろう？」

「透様がくださるものですから——。不思議なことに、どれほど甘いお菓子でも、あの方からいただくとは厭ではないのですよ。ですから、喜んでいただきました」

フツ、とカインの表情が緩んだのは、気のせいではなかっただろう。

「彼は……私よりも、よほど強い。私はもう、人間であることをやめてしまったが、彼はまだ人間であろうとしている……。たとえばそれが、憎しみを向ける相手を持つ、という形であろうと、彼は確かに生きている」

「ケイン様……」

運転手は、憫れむように、眉を落とした。

「その発音で聞くと、他人の名前のようだな」

「……」

目の前の夜が、裂けて、行く。

舞い上がる雪が、窓の外を美しく変える。

「独りで生きられるのは、辛くはありませんか？」

辛くは……。

何故だろうか。妙に耳に残る言葉であった。

——独りで生きられるのは、辛くはありませんか？

石に刻むように胸に残り、澄んだ水面に映すように、はつきりと見える。

カインは黙って、瞳を閉じた。

運転手も、もうそれ以上は何も言わず、黙ってアクセルを踏み続けていた。

車は、つい先日通った道を辿り、目的地へと進んでいた。

「そこでもいい。後は歩いて行く」

一つの屋敷を一〇〇メートルほど前に見る場所へ来て、カインは言った。刹那であった。

地の底から沸き上がるような爆音が、震動と共に響き渡った。

「ケイン様——」

「前だ！」

凄まじい勢いで吹き飛んだのは、カインが向かおうとしていた屋敷であった。透の叔父——もしくは父親であるかも知れない男、宇佐川恭一と、叔母である蓉子、そして、娘の茉莉が棲む屋敷が爆破されたのだ。

オレンジ色の炎を吹き上げながら、辺りに瓦礫を撒き散らすその

様は、花火のように、突然、砕け散ったとは思えないものであった。

「一体、何が……」

「救急車を呼べ。助かるとは思えないが、周囲の屋敷にも被害が出ている」

「は、はっ」

雪が炎に煽られ、舞い上がって行く。

この街では、雪さえ静かに降ることが出来ないのだ。

だが、一体誰がこんな真似をした、というのであるうか。カインが向かおうとしていた屋敷が、偶然ガス爆発を起こして吹き飛ぶ、などということは、考えられない。誰かが、何らかの目的があつて、爆破したのだ。

「ケイン様……」

「空港へ行け。それから、ジェット機の用意だ。行き先はバンクーバー——透の後を追う」

「——。透様が、この爆破に関係しているとおっしゃるのですか？

あの愛らしい坊っちゃんが……」

「……私は何も言っていない。そして、透であろうとなかろうと関係ない。あの日……透が伸ばして来た小さな手を握り返した時から、私は彼の側にいることを決めた。もう人間ではなくなっていたというのに、彼の手を振り払うことが出来なかった。——いや、きつと血まみれの彼を目の前にした時から、私はそう決めていたのだろう。——彼は、親とはぐれた小鹿のように惨めで……とてもきつい瞳をしていた」

道行く全ての人間が敵である、というような、きつい瞳を……。

カインが日本で調べて来た結果、宇佐川蓉子は、やはり透の母親の姉であることが判っていた。

久世家には三人の子供があり、一人は家の跡取り息子である圭介、そして、長女の蓉子と、透の母親たる綾子――。

跡取り息子である圭介が両親に可愛がられていたことは言うまでもないが、綾子もまた、圭介に劣らず、両親に可愛がられていた子供であったという。

その綾子が、久世家から締め出されるほどの大きな揉め事が、二十年前に起こったのだ。

久世の家で働いていた使用人の話では、綾子の妊娠が原因であつたらしい。

だが、綾子は子供の父親が誰であるかは、決して言わなかったという。結果、久世の家から締め出され、久世の別荘の一つで、透と二人、暮らしていたのだ。

そして、透は今、その久世綾子がいるはずの、精神病院を前にしていた。

車のエンジンを切って、サングラスを外す。

朝――。

風と雪がないせいで、冬のカナダは、ニューヨークよりも暖かく感じられた。もちろん、

広大な国土を持つカナダとはいえ、この地のように穏やかな気候に包まれる場所は、そうそうないであろうが。

病院の白い壁の眩しさに、漆黒の瞳を細めながら、透は院内へと足を入れた。

母親が何故、この精神病院に入院しているのかは、知らない。それでも、その母親に同情するには、透自身、気の狂いそうになる過去が多過ぎた。一緒に逃げた男に捨てられたにせよ、慣れない土地

での生活に疲れてノイローゼになったにせよ、それは、彼女の自業自得でしかないのだ。

透の足は震えもせず、母親への愛情も、憎しみに勝ることは、決してなかった。

人々のざわめきが、聞こえる。

病院とは、もっと静かなものだと思っていたが、絶えず何かの音が聞こえ、人々がざわめき合っている。

受付の看護師も、忙しそうに受話器を耳に押し当てていた。

その電話が終わるのを待ち、透は受付へと足を運んだ。

「失礼。久世綾子の病室は……」

と、前に立って、問いかける。

「クゼ？ ミセス・久世？」

「ええ……」

「あなたのお名前は？」

と、片手間のように訊いてから、看護師は事務処理的に顔を上げた。

その表情が瞬時に変わったのは、目の前に立つ美しい少年のせいであっただろうか。今の彼は、人のものとは思えないほどの、妖しい雰囲気漂わせているのだ。

「ぼくは、久世透……。彼女の息子です」

その声も、どこか体の内側から響いて来るもののようにであった。

「……息子？ でも、彼女の息子さんは亡くなったと――」

「ええ。ニューヨークで死にました。欲望を漲らせる男たちの餌食になって……。ぼくは、父の元に引き取られていた息子です」

静かな口調であることが、今の彼には相応しいものであったのかも、知れない。

己の死を告げられても、もう彼の心は傷つきもしないのだ。

父親に生贄にされ、母親にさえ死んだことにされてしまった子供は、人として生きて行くことも出来ないのかも、知れない。

「……久世綾子の病室はどこですか？」

まだ少し夢見心地の看護師に、透は同じ問いを繰り返した。

「え、あ……そうだったわね。部屋は二階よ。少し待っていてちょうだい。今、ジェシーに案内させるわ。——彼女は、看護師の中で、ミセス・久世と一番仲が良いのよ。やっぱり、日本語が出来るせいかしら。ミセス・久世は——」

喋りながら受話器を取り、看護師が再び正面を向いた時、そこから透の姿は消えていた。

「え、あら？ あの子、どこへ行ってしまったのかしら？」

辺りを見渡して見ても、その姿はどこにもない。

「変ね……」

あれは白昼夢だったのだろうか、という考えが過つたのも、あまりに神秘的な東洋の美のせいであっただろう。

だが、ごく最近、似たようなことがなかったであろうか。少し目を離れた際に、もういなくなっていた美しい青年の話を、誰かがしていたのだっただろうか……。

その思いに、看護師が首を傾げていた時、電話で呼ぼうとしてたジェシーが、受付の前を通りかかった。

「ああ、ジェシー。今、十五、六歳の男の子が、ミセス・久世の面会に来たのよ。彼女の息子さんらしいんだけど——。あなた、見なかった？」

と、彼女を呼び止めながら、問いかける。

「ミセス・久世の息子？ でも、彼女の息子さんは——」

「父親に引き取られていた方の息子ですって。ちよっと驚くくらいにきれいな子よ。幻かと思うほどに」

「本当に幻じゃないの？ 誰も見なかったわよ」

「そう……。おかしいわね」

「一応、ミセス・久世の病室へ行ってみるわ」

「ええ、お願い」

冬のカナダへ訪れた東洋の精霊——彼は一体、何を運ぶ精霊であつたのだろうか……。

《208 MRS・AYAKO・KUZÉ》

そのプレートがはめ込まれたドアの前に立ち、透は指先を手のひらに食い込ませた。その表情は、死を告げる嘆きの精霊バンシーのように、罪深い。

十五年の歳月が、今、ここで清算されるのだ。透を捨て、男と一緒に逃げたその罪が――。

「ぼくは、あなたを可哀想だとは思わない……。ぼくのことを忘れて過ごしていたあなたよりも、憎しみながらも、あなたのことを忘れずに過ごしていたぼくの方が、人間に近い……」

透は、握り締める指を開き、ドアのノブに手を掛けた。金属の冷たい手触りは、そのまま、母親の手の冷たさを示すものでもあっただろうか。

ゆっくりとドアが開いて行く。静かに、静かに、今までの沈黙を慈しむように。

その女性は窓際で、外の景色を眺めるように、立っていた。――いや、女性ではない。趣味のいいジャケットを羽織る、遊び慣れた雰囲気の人である。褐色の瞳が光に透けて、琥珀色に近くなっている。

「あなたは……？」

見知らぬ男を前にして、透は訳が解らず、問いかけた。ここは、透の母親、久世綾子の病室であるはずなのだ。

だが、その綾子の姿は部屋にはなく、見知らぬ男だけが立っている。――いや、ベッドには誰かが眠っていた跡がある。そして、それは、その男が眠っていた跡ではないだろう。

「私のことを忘れたのかい、紫生？ それとも、君は別の人格なのかな？」

皮肉げに唇を歪めて、男は言った。

「……紫生の遊び相手か。生憎、ぼくは紫生じゃない。そして、ぼくは君とは寝ない、ミスター・ウィリアム。今度はどんな薬を打たれるか判らないからな」

そう……。目の前にいる男は、ニューヨークのディスコで、紫生に声をかけて来た男であった。そして、紫生を薬で眠らせ、ウェブスターの元へと連れて行った男——そのことは、透もカインから聞いている。

「私のことはビルで結構。今日は、君を招待するために待っていた。——一緒に来てくれるかい、ミスター……」

「透」

「ミスター・透」

ニヤ、っと褐色の瞳が、持ち上がった。

「サー・ウェブスターが、またぼくに会いたがっているとは驚きだよ。二度と会いたがらないかと思っていたけど」

「二度と会わなくて済むようにしたいそうさ」

「……。ぼくは彼に用はない。もう会うこともないだろう。紅蓮が出ない内に、さっさと失せる。彼らがぼくのことを優先するとはいっても、ぼくの危険には敏感だ」

敵意すら向けない冷たい瞳で、透は言った。——そう。彼は、ビルやウェブスターなど相手にもしていないのだ。それに、今はもっと重要なことがある。

久世綾子——。彼女が病室にいないのなら、透もこの部屋には用がない。

ビルの招待をすげなく断り、透はドアへと翻った。その時だった。「この部屋にいた女性——久世綾子に逢いたかったのではないのか？」

と、ビルが言った。確かに彼は、そう言ったのだ。目を見開き、透はゆっくりと振り返った。

「……どういう意味だ？」

と、ビルの言葉を見据え返す。

「言った通りだ。彼女は私が先に招待させてもらっている。君の母親だと聞いているが……とても信じられないな」

「え……？」

「どう見ても彼女は——」

ビルが言いかけた時だった。ノックが届き、当然のようにドアが開いた。

久世綾子が戻って来た訳ではない。姿を見せたのは看護師——ジエシーと呼ばれていた看護師であった。

「あら、やっぱりここだったのね。あなたがミセス・久世の息子さんでしょう？ 受付で聞いたわ。——本当は、勝手に病室に入られては困るのよ。いくら家族の方でもね。ここにいる患者さんたちは目に見える病気で入院している訳ではないんだから。どんなことが原因で発作を起こすか判らないのよ」

と、透を前に、眉を顰める。そんな表情にも、女特有の媚びが入っている。

だが、すぐに窓際に立つビルの存在にも気づいたのだろう。その媚びも、淡く、消えた。

「そちらの方は……？」

と、瞳を戸惑わせながら、問いかける。

「これは失礼。私も勝手に入り込んでしまった一人です。彼女の子息に用があつたので」

ビルは、何食わぬ顔で受け応え、ジェシーの前に、手を差し出した。

二人の手が、握手で繋がる。

透はわずかに、瞳を細めた。

もう一方のビルの手が、素早い動きでジェシーの首筋へと、針を射す。

ビルが手を放すと同時に、ジェシーは目眩でも起こすように、フラついた。

「おっと、危ない」

倒れようとするジェシーを受け止め、

「働き過ぎは体に毒だ。休んだ方がいいですよ」

と、ジェシーの体を抱え上げ、そのままベッドへ眠らせる。

「……殺したのか？」

透は訊いた。

「いや。眠っているだけだ」

「ハッ。親切だな」

「ああ。私は殺し屋ではない。ただの薬師だ。^{トラッギスト}——招待を受けてくれるかい、透？」

小気味よい不敵さでの問いかけであった。

「いいだろう。母の——久世綾子の命が無事だ、という保証があるのなら」

「彼女の命は私が守ろう。——それでいいかい？」

「ああ」

「しかし……子供というのは、自分を捨てた母親でも大切らしい」
そのビルの言葉に、フツ、と鼻で笑うような笑みが、零れ落ちた。

透が零したものである。

「大切？—— ああ、とても大切だ。ぼくが殺す前に、死んでほしくはないからな」

「——」

何という少年であろうか。そこまで母親を憎まなくてはならない彼は、不憫ではないだろうか。

「…… なかなか興味深い言葉だな。ジーンは君の連れ——カインにしか興味がないようだが、私はあの物静かな男よりも、君の方に興味がある」

「……」

ビルの言葉に、透は冷ややかな視線を持ち上げた。

「ぼくに興味を持った人間はたくさんいたさ。男も女も……」

「それで？」

「ぼくはその人間を、二度見たことがない」

「——。フツ……。行こう。カインが来ると厄介だ」

「彼は……」

何を言おうとしたのであろうか。ビルが問い返しても、透の口からそれ以上の言葉が続くことは、なかった……。

院内に入り、カインはわずかに眉を寄せた。

朝の病院は、不自然なほどにざわついている。

明け方、ニューヨークを発ち、バンクーバーについてから、そのまま真つすぐにやって来た、《St. Miller A M E N T A L H O S P I T A L》の院内であった。

だが、この不自然なざわつきは、一体、何である、というのだろうか。――いや、カインには一つ、心当たりがあった。

透が母親を殺したのだ。

刹那、その考えが、脳裏を過った。

だが、院内には警官はおるか、私服の刑事の姿さえ見当たらない。もちろん、病院側が事実を警察に伏せている、ということも考えられるが、殺人事件となれば、話は別だ。否が応でも、警察を呼ばなくてはなくなるだろう。それでいて、警官の姿が見当たらないとなると、病院側もまだ、その出来事が犯罪なのか、自分たちの管理ミスなのか、判断できていないのだ。

その推測の元、カインが情報を集めるのに、三十分も掛からなかった。

集めた情報では、患者が一人、いなくなったという。もちろん、今も行方は判っていない。誰かに連れ去られたのか、自分から何処かへ行ってしまったのかも――。

いなくなった患者の部屋には、看護師が一人倒れていたが、その看護師は、目を醒ました時、そこで何があったのか、何も覚えていなかったという。意識を失う前、数分間の記憶が喪失しているのだ。透の名は、カインの頭にすぐに浮かんだ。

だが、それは飽くまでも推測であり、看護師が倒れていたのも、自分で足を滑らせただけかも知れないし、記憶が失いのも、倒れて頭を打った時のショックで、失くしたものなのかも知れない。

だが、病室から消えた患者は、透の母親、久世綾子なのだ。その看護師が、綾子に関する何かの揉め事に巻き込まれた、ということは、否定できないことであつた。

カインは病院を後にした。

車に戻り、すぐに一本の電話をかける。

「私だ。透が乗って来たジェット機は、まだそこにあるのか？」

と、バンクーバー国際空港で待つ操縦士に、問いかける。

「はい。透様の姿はありませんが」

「透が姿を見せたら、私に知らせる。彼は一人ではない。多分、女性と一緒にだ。プラチナ・ブロンドの——いや、白髪の……」

「お引き留めすれば宜しいのですか？」

「……。透を引き留めておくことなどできないさ。私に知らせるだけがいい」

「かしこまりました」

操縦士は、きびきびとした口調で、受け応えた。

だが、透は空港に姿を見せるだろうか。病身の母親を連れ出し、どうする積もりなのかさえ、判つては、いないというのに。

殺せるのか、殺せないのかすら——。

それに、明け方近くにニューヨークで起こった爆破事故のこともある。

原因は、ガス漏れ。

寝室で眠っていた蓉子は重体で病院に運ばれ、アトリエにいたと思われる宇佐川恭一の生存は、絶望的だと言われている。まだ瓦礫の下に埋まっついて、救出されていないのだ。

宇佐川がアトリエにいるかも知れない、と言つたのは、無事助かつた茉莉であつた。彼女は、週末ということもあつて、クラス・メイトの家に泊まりに行っており、爆破に巻き込まれずに済んだのだ。大学の寮にいた玲も、また同じである。

「手際が良すぎるな……」

カインは、ポツリ、と呟いた。

誰かがカインの行動を見張っていた、としか思えないのだ。そして、カインが宇佐川の屋敷に入り込む前に、先回りをして爆破したとしか……。

そして、それはカインだけではなく、透にも言えることであつた。透の方も、誰かに見張られていた、という可能性がある。

その日、バンクーバー国際空港を初めとする全ての交通機関に、透が姿を見せることは、なかった……。

A R E A ・ 4 紐育（ニューヨーク）・加奈陀（カナダ） ？ ？ （後書き）

次回は『A R E A ・ 5 曼谷^{バンコク}』になります。

AREA・5 曼谷（バンコク）？

AREA・5 曼谷バンコク

魔窟と化したその街を、それでも人々は、
天使の都クルンテープと呼ぶ……

SCAPEGOAT・1

人々は、本気でこの街を《天使の都クルンテープ》と呼ぶ積もりなのだろうか。
確かに、チャオプラヤ河から臨む夕映えの暁の寺は、美しい。
紫色をした朝焼けの中の暁の寺も、美しい。
ワット・アルン

だが、この街が水の都、東洋のベニスと謳われていたのは、過去のことではないか。

それでも人々は、立ち並ぶ高層ビルの高さだけを見上げ、下を見ようとは、しない。

アジアを代表するメガロ・ポリス——その名を手に入れ、三〇〇以上の寺と、二〇〇以上のスラム、東西の文化と、南北の歴史、それらを混然とせめぎ合わせ、混在させている。

微笑の国、タイ 泰国——。

人々は、どんな時でも、マイペンライ（大したことはない。何と

かなるさ」と言いながら、その場の一時をやり過ごす。

その首都、曼谷——。

土地の子は、その繁栄の都を、天使の都、と呼ぶ……。

「汚い街だ。この街のどこが美しいというのだ？ 下品で騒々しく、危険で臭い。黄色い大地は肌に合わん。チビで小賢しいアジア人の住む街など、吐き気がする」

「ですが、ロンドンではカインが追って来る可能性があります。ミスター・陳チェンのご好意に甘えて、こちらにいらした方が——」

「そんなことなど解っておるわ。だからこそ、この足の痛みを堪えてまで、ここへ来たのだ。あの少年の最後を見るために……」

スクムビット通りに聳える屋敷は、高級住宅地に相応しい威厳を備えるものであった。全てが中国様式で整えられ、広い庭に囲まれている。

そこに、彼らはいた。ウェブスターと、そのボディ・ガードである。

先週末、五番街のビルで緋影に足を潰されたウェブスターは、今の会話の通り、ジーンの手引きで英国に渡り、ロンドンの病院に入院していたのだ。

手術は成功したが、足の状態は悪く、傷が回復しても、車椅子の生活になるだろう、と言われている。

だが、その恨みだけで、これほど早急に一色透を殺そう、と思いついた訳では、ない。

不安なのだ。その少年が生きている、というだけで恐ろしく、夜もロクに眠れない。

そんな日々が、海を越えた英国にいてさえ、続いていた。

だからこそ、まだ傷も癒えていない内から、透を捕らえることに踏み切ったのだ。

そして、ロンドンに訪れていた華僑財閥の総帥、陳有健ちんゆうけんに連絡を取り、今、こうしてバンコクにいる。

もつじきこの街に、あの壮絶な美貌の少年、一色透が訪れること

になっているのだ。

「防御は完璧だろうな？」

ウェブスターは、ベッドの脇に立つボディ・ガードに、何度目かの同じ問いを投げかけた。

「はい。あの少年は、あなたに近づくことなど出来ません」

「フンっ……。誰がそんな言葉など信用するものか。今度、あの少年がわしの前に姿を見せたら、わしがこの手で止めを刺してやる」と、手の中の銃を握り締める。

完璧な防御に守られていてさえ、安堵できないのだ。

確かなことは、ただ一つ――。銃で撃たれれば、あの少年も生きていられない、ということだけ……。

AREA・5 曼谷（バンコク）？

「お元気そうですね、ミスター・ウェブスター」

その声は、ドアの方から不意をつくように、部屋の中へと紛れ込んだ。どこか皮肉に彩られた、流暢な英国英語である。キングス・イングリッシュ

見れば、いつの間にか、開いたドアの脇に、秀麗な青年が立っている。三十歳前後だろうか。真つすぐの黒髪を顎の下で切り揃え、高級なスーツをいとも容易く着こなしている。冷たい印象を与える面貌も、朝焼けに浮かぶ暁の寺のように、人々が感嘆を零す形に整っていた。

「君は、確か……」

「グリフィス・チェン……。さつき、香港から戻って来たら、あなたが見えていると聞いたので、ご挨拶に」

伶俐な面貌を持つ青年、グリフィスは、洗練された物腰で、淡々と言った。

「ああ、そうだ。すっかり立派になって見違えたよ。確か、ロンドンへ留学する前に、父君と一緒に会って以来だ」

ウェブスターは、警戒の必要のない相手を前に、今までの厳しい表情を解きほぐした。

その青年は、この屋敷の当主、陳有健の子息で、世界中を飛び回っているという若き実業家である。香港、英国で教育を受け、バンコク銀行グループの後継者として、また、香港商業銀行の代表として、目覚ましい活動が続けている。

ニューヨーク、ロンドン、東京、台北、香港、シンガポール、ジャカルタ、クアラルンプール……と、世界的な金融活動を行うバンコク銀行グループは、東南アジア最大の大富豪たる陳系財閥の民間商業銀行グループであり、世界でも三本の指に入るといふ巨大グループなのだ。ハッカ客家系華僑の成功のシンボルでもある。

貧富の差の激しいこの国では、富を持つ華僑と、貧しい土地の子

に、はつきりと色分けされている。

この国は、タイという名を借りた中国――。

そして、中国の中でも、客家。

客家人はもとも中国北方の漢民族であり、同じ中国人の中でも革命的な民族で、顔立ちも、普通の中国人のように丸顔に団子っ鼻という風貌ではなく、鼻筋の通ったきつい輪郭をしている。

日本ではあまり知られていないが、中国の元最高実力者、？小平や、台湾の総統、李登輝、シンガポール自治発足時の首相、李光耀^{リークワンユー}、第二代首相、呉作棟^{ゴーチョクトン}……などが客家人であり、世界のトップに多く君臨している。政治だけでなく、経済にも――。インドネシア最大の財閥の総帥も、台湾最大の財閥の総帥も、そして、このバンコク最大の財閥の総帥も、皆、客家人なのだ。

彼ら客家人は、その莫大な富の元で、国家以上の組織力と団結力を持ち、血のネットワークを広げている。

「その足はどうなさいました、ミスター・ウェブスター？ 先ほどの言葉の勢いとは違って、不自由そうですね」

その言葉は、ベッドの上から降りることも出来ないウェブスターを見ての、問いかけであった。

「あ、いや、これは……」

「失礼。余計なことを訊いてしまったようで。今の言葉は忘れてください。――では、ぼくはこれで」

世界三大銀行の一つに数えられる財閥銀行グループの後継者ともなると、その器も違うのだろうか。ウェブスターの胸の内など、直ぐさま読み取ってしまうように、グリフィスは部屋の外へと翻って行った。

パタン、とドアが閉じる。

「喰えん若者に育ったものだ……」

そのウェブスターの呟きは、眉を顰めてのものであった……。

AREA・5 曼谷（バンコク） ？

「ウェイ
尉」

部屋を出て、グリフィスは、廊下で待つ秘書を呼び付けた。
細身で、長身の、四十歳前後の男である。

鋭い目付きを、している。身につけているダーク・スーツのせい
だけでなく、どこか不敵な印象を与える。恐らく、ビジネスだけの
秘書ではなく、ボディ・ガードも兼ねているのだろう。

「彼の——ミスター・ウェブスターのあの傷は何だ？」

と、廊下を渡りながら、問いかける。

「何も伺ってはおりませんが——。どこか不審な点でも？」

「いや……。両足同時に怪我をするなど、気の毒に、と思っただけ
だ」

本心とも思えない口調であった。

「ニューヨークは物騒な街でございますから」

「ボディ・ガードは傷一つ負わずに、彼だけが重傷、か？」

チラ、っと瞳が持ち上がった。

それだけで心を知り得る眼差しである。

「興味がありなら調べますが、彼は父君の客人で——」

「調べる。これは命令だ。厄介事を持ち込まれては困るからな」
「かしこまりました」

大企業やオフィスが集中するビジネス街、シーロム通りの上空に、
一機のヘリが近づいて来た。

多くのデパートや航空会社、ホテル、レストラン……それらが立
ち並ぶこの通りでは、さして珍しくもない光景であったかも、知れ
ない。

だが、時刻は深夜――。

すぐ傍らに隣接する歓楽街、パッポン地区には、賑やかなネオンがきらめいて、いる。

ヘリは、その賑わいを見るでもなく、一つの建物のヘリ・ポートへと降り立った。

《Bangkok Bank》

建物にはそう記されている。

「バンコク銀行本店？ ウェブスターはこんなところにいるのか？」
ヘリを降り、透は眉を寄せて問いかけた。

カナダからヘリでシアトルへと国境を越え、そこから空路でバンコクへ、そして、またヘリでこのバンコク銀行本店の屋上までやって来たのだ。

二月とはいえ、熱帯であるタイは、この季節の夜でも、日本の秋ほどの暖かさである。――いや、涼しさ、と言うべきだろうか。

「さあな。それは君が確かめることだ。私の仕事は、指定された場所へ君を連れて行くこと――。まあ、君に足を潰されて――いや、その時の君が誰であったのかは知らないが、その君に足を潰されて不自由な体になったウェブスターが、ここへ来ているとは思えないが」

天を仰ぐように、ビルは言った。

彼が目を見開いたのは、そのすぐ後のことであつた。

「……何の真似だい、これは？」

と、透が背中に押し付けるものを感じて、ゆっくりと訊く。

透の手には、ナイフがあつた。

「ぼくが久世綾子を殺す積もりだったことを知っているのなら、身体検査くらいはしておくべきだったんだよ」

と、冷ややかに、言う。

「なるほど……。本来の君も、ただの少年ではない訳だ」

「ぼくはウェブスターに用はない。このまま久世綾子のいる場所へ案内してもらおうか」

ナイフの切っ先を、グツ、とビルの背中に押し付ける。

これが、わずか二十歳の少年のやり方であろうか。冷酷で、強かで、見惚れるほどの鮮やかさではないか。カナダの病院で紅蓮が出て来なかったのも、このためであったのだろう。《友だち》たちは、透が、ビルの口から母親の行方を訊き出すのを待っていたのだ。

ビシ——っ、と刹那、激しい音が駆け抜けた。

見れば、ヘリの操縦士が、紅の一線を受けて、倒れている。その手には、無線機がしっかりと握られていた。ウェブスターへ連絡を取ろうとしていたのだ。

「助かったよ、紅蓮」

透は、腰に戻っている鞭を見るでもなく、その鞭を放った《友だち》に礼を言った。

「さて、行こうか」

と、ビルの背中を押し進める。

透に背中を向けているとはいえ、そのビルの表情が強ばっていることは、容易に知れた。

透は一人ではないのだ。常に複数の《友だち》に守られている。

「ジーンが君に近づくのを厭がっていた訳が、やっと解ったような気がするよ」

苦笑にもならない言葉であった。

AREA・5 曼谷（バンコク）？

二人は、屋上の重々しい扉から行内へ入り、地下へと階段を降り始めた。

ただの地下では、ない。限られた人間だけが出入りを許されている空間である。一般行員は、こんな地下室が存在していることさえ、知りもしないだろう。

透もまた、同じであった。

「銀行の地下にこんな部屋があるとは、な」

と、無気質なコンクリート壁の空間を、ぐるりと見渡す。

奥には、覗き窓のついたドアがある。頑丈そうな——まるで、牢獄のような造りのドアである。

「ここは、ブラック・マネーを扱うための部屋だ」

ビルが言った。

「ウェブスターも、そっちの方の知り合いかい？」

「関わっていないかもしれないが——。これは、客家のネットワークが築いているものだ」

「客家のネットワーク？」

透はその言葉に、眉を寄せた。

「俗な言い方をするなら、チャイニーズ・マフィアだ。世界中の客家系華僑のために、革命の資金を集めている。タイ・ラオス・ミャンマーに跨がる芥子畑——黄金の三角地帯から得るドラッグ・マネーゴールデン・トライアングルや、金融の中継地点である香港に、台湾から流れ込む巨額のアングラ・マネー……。その昔、『反清復明』を掲げて台湾を中心に拡大された客家系組織の末裔だ。——天安門事件、と言えばまだ耳に新しいだろう？」

天安門事件——世界を驚愕させた一九八九年六月四日の失敗である。

「辛亥革命で倒清の目的を果たした彼らは、その後も次々に活動を

起こし、世界中に散らばりながら、巨大なネットワークを築き上げている。もちろん、天安門での失敗からは、慎重に……。その彼らが今、一番嫌っていることは、揉め事だ。当局に立ち入られることは、命取りになりかねないからな」

淡々とした口調で、ビルは言った。

その言葉の通りなら、ここで透とウェブスターが揉め事を起こすことは、彼らに取って、最も避けたいことであるに違いない。

だが、それなら何故――。

「……何故、ぼくにそんな話をする？」

訝しさを込めて、透は訊いた。

「さて。君を気に入ったからかも知れない。ここで君がウェブスターを殺そうとして揉め事を起こせば、チャイニーズ・マフィアは君を危険分子と見なして、全ネットワークを使って、君を始末しようとするだろう」

「……」

「私と手を組む気はないかい、透？ 私なら君を助けてやれる」
チラ、っと褐色の瞳が持ち上がった。

「……あの看護師にしたのと同じように、ぼくを殺そうとするウェブスターの記憶を消す、ってか？」

「フツ」

「見返りがなく、ただの好意ならそれもいいだろうが、ぼくは誰とも組む気はない。――さっさと久世綾子の処へ案内しろ」

ナイフの切っ先を、グツ、と突き出し、透は言った。

「悪いが、それは出来ない。私はそれでもプロだね。こういう風に育てられている。カインやジーンと同じように――」

「え？」

透が戸惑った刹那であった。

ビルが上着の内側に手を差し込み、一つのカプセルを取り出した。
「それは――っ」

止める間もなく、ビルはカプセルを口に含んだ。

嚥下したことは、すぐに、判った。

「毒……なのか？」

透は訊いた。

「これが私の棲む世界だ。——いや、私自身のプライドを守るため、かな」

「……」

「こんなカツコイ言葉を信じるかい？」

持ち上がった瞳は、不敵でさえ、あった。

「……。代わってくれ、赤樹^{せきじゅ}」

透は言った。

外見には何の変化もなく、伶俐な少年が、透と代わる。

赤樹、と透が呼んだ《友だち》である。

その彼の役目は——。

「来い。死にたいのなら、透の母親の居場所を吐いた後で殺してやる。まずは胃洗浄だ」

と、ビルの手を引いて、階段へと向かう。

確か、赤、という色には、治癒能力を高める作用がある、とされてはいなかっただろうか。

昔の人々が赤い肌着を付けていたように——。今では、そんなことなどすっかり忘れ去られているが。

「私を助けると？」

ビルは訊いた。

「それが透の意味だ。——だが、透の目的はあなたではない。もちろん、ウェブスターでもない。久世綾子——彼女だけが、透の目的だ」

「……つまり、私は相手にもされていない訳だ」
「……」

赤樹は何も応えずに、階段を上がった。

行員用の休憩室へ行けば、水道がある。

そこでビルの胃を洗えば、まだ間に合うはずであった。

だが――。

「残念だよ。そこまで見くびられていたとはね」

それはビルの言葉であった。

同時に、赤樹の首筋に、銀色の針が突き刺さった。

「何を――っ」

ハッ、として振り返った時には、遅かった。

赤樹は、停止した呼吸に目を瞠った。

自発呼吸が適わないのだ。呼吸は呼気の状態で停止し、手足も石膏で固められたように、ピクリ、ともしない。口を開くことも――いや、閉じることも出来ない状態であった。

「生憎、私は毒では死ねない。解毒剤も一緒に持ち歩いているものでね。これが、私が教えられて来た生き方だ。少しは私のことを気に留めてもらえることを祈っているよ……」

彼は、正面切ってその少年を敵に回す、というのだろうか。それとも、ただ自分の生き方に忠実であるだけなのだろうか……。

AREA・5 曼谷（バンコク）？

宵から降り始めた雨が、夜中に雪へと変わり、摩天楼を美しく飾った。

ニューヨーク――。

カインは、カナダから再びこの街へと戻っていた。
結局、カナダから透が出国したという手掛かりは得られず、闇雲に捜し回れるほど小さな国でもなく、全ての発端であるこの街、ニューヨークでその手掛かりを追うことにしたのだ。

あの爆破事件が、誰の仕業であったのか、ということから……。

今、カインの前には、《ICU》と記された部屋があった。

中には、重体で運び込まれた宇佐川恭一が眠っている。人工呼吸器^{レスピレ}で命を繋かれ、心電図やその他の医療器具に取り囲まれ、生死の境を彷徨っている。

包帯だらけの顔や体は、あの爆破の凄まじさを物語っていた。

地下のアトリエで発見された宇佐川恭一の遺体も、身につけている遺品でやっと見分けがつく、という悲惨な状態であったという。

誰かが、カインや透の捜査を妨害するために、あの屋敷を爆破した――そうとしか思えない、タイミングの良さであった。

だが、なぜ妨害する必要があった、というのだろうか。

透やカインが調べていたのは、透の母親のことであり、それを調べられて困る人間などいないはずなのだ。――いや、事件の被害者たる宇佐川恭一や蓉子なら、調べられては困るだろうが、そのために彼らが自殺したとは思えない。

もちろん、警察が発表した通り、透やカインには何の関係もないただのガス漏れによる事故であった、ということも有り得るのだろうが……。

《ICU》の前には、カインだけでなく、二四、五歳の青年と、十六、七歳の少女がいた。

少女は、茉莉。

青年の方は、茉莉の兄の玲である。

もともとクセ毛なのか、玲はウェーブを描く髪を肩ほどに伸ばし、前髪の半分を垂らして、あとは後ろで結んでいる。顔立ちは、透の従兄弟であることを裏付けるように、さすがに端麗に整っている。

だが、雰囲気は、違う。それは絶対的な違いであった。

「先生、ママは……ママの意識はまだ戻らないんですか？」

カインを見上げ、そう訊いたのは、茉莉であった。

訊く相手を間違えている訳では、ない。今のカインは白衣を身につけ、医師としか見えない格好をしているのだ。

「……。どんなお母さんだったか話してくれるかい？」

回復する見込みはない、と告げる代わりに、カインは訊いた。

「優しくて……ううん、本当は少し口煩いところがあって、厳しいところもあつたけど、自分にも厳しくて……いつもきちんとしていて……きれいで……」

茉莉は涙ながらに、話を始めた。

玲は、そんな茉莉の肩をしっかりと抱き、兄らしく気丈な面持ちで立っている。

「本当は……クラス・メイトのところに泊まりに行くのにも厳しいんだけど……あの日はママから……ママが『週末だから羽根を伸ばしていらっしやい』って……」

「え？」

「きつと、パパの個展がうまく行って……だから、機嫌が良くて……。でも、行かなければ良かった……。わたしが行かなければ、ガスが漏れていることに気がついたかも知れないのに……」

「……」

茉莉の言葉に、カインはわずかに眉を寄せ、《ICU》のベッドに眠る宇佐川蓉子の姿を、じっ、と見据えた。

包帯だらけで——そうでなくとも、全身に酷い火傷を負っており、その顔を確認することは不可能な状態である。

だが、そんなことがあるだろうか。今、《ICU》にいるのは蓉子ではなく、全くの別人だ、ということが……。

「失礼。私はこれで――。君のお母様はきつと無事だ」

カインは謎めいた言葉を茉莉に残し、《ICU》の前から翻った。《ICU》にいる人物が蓉子でないのなら、遺体で発見された宇佐川も、きつとどこかで無事でいるはずだ。そして、それはこのニューヨークだろう。子供たちの様子を見ることが出来ない場所へ行くはずがないのだ。

そして、宇佐川と蓉子だけで、こんな手の込んだ爆破事故を起こせるはずがない。爆弾を手に入れることもそうなら、容姿の似た身代わりの人間を用意するのも、彼らには無理なことだ。

誰かが裏で糸を引いている。

そして、その人物は……。

冬の夜は、墓地のように静かであった。

カインが病院を後にすると、黒塗りのリムジンが、前に止まった。「ウェブスターの所在を確認しろ。それから、ジーンだ。ビルでもいい。話を訊きたい」

カインは、運転手に声をかけ、それから車に乗り込んだ。透の行方が途絶えてから、すでに四日が経っていた……。

AREA・5 曼谷（バンコク）？

SCAPEGOAT・2

魔窟——その名が最も相応しい街ではないか、ここは。

世界中にあるチャイナ・タウンの中でも、ここほど不気味な場所
は、存在しない。

バンコク中央駅の西側に広がるヤワラート（チャイナタウン）。

漢字とタイ語で併記された看板が続き、独特の雰囲気を持つこの
地区は、タイ経済を発展させた中国人の活動拠点である。

昼間は、その活気に満ち溢れた顔を持っている。

だが、夜になると、その顔つきは一転する。

異様な雰囲気を放つ魔窟と化するのだ。

小路には、客を待つ街娼たちが溢れ出し、怠惰な姿で夜を過ごす。
地方から売られて来たような少女少女たちである。そんな子供たち
が、わずかな金で体売る。

買う男たちがいるのだ。世界中から、そんな男たちが、あどけな
い少女少女の未成熟な体を求め、精液を放ちにやって来る。

駅の近くには職業斡旋所があり、出稼ぎに来た子供たちを食い物
にする。

七、八歳の幼子や、初潮もまだの少女でさえ。

麻薬中毒者も、いる。

アルコール中毒者も、いる。

豊かな生活を夢見てやって来た天使たちを、墮天使へと変えてし
まうのだ、この魔窟は。

そこに、一人の少年が姿を見せた。

壮絶な美貌の少年である。土地の子ではないのだろう。漆黒の髪

は夜の中でもさらに黒く、射干玉の瞳は、夜に浮かぶドーム型のフ
アランポン駅よりも、さらに、人々の視線を惹き付けている。

だが、その表情は、コンクリート壁のように、殺風景ではないか。
糸に操られている美しい傀儡かいらいの如く、人の血さえ通っていないよう
に、見える。

それでも、街娼たちは、興奮、していた。

少女たちは葩はなを疼かせ、少年たちはズボンの前を膨らませ、美し
い少年が、自分を買ってくれることを望んでいる。

ゲイでない少年たちでさえ、股間を猛り狂わせていたであろう。
だが、その美貌の少年は、誰に関心を向けるでもなく、《金行》
と看板を掲げる一つの店へと入って行った。

金を売買する店である。

もちろん、今はシャッターも降り、営業時間を終えている。

少年も、表から入って行った訳ではなく、裏口へと回り、そこか
ら店内へと入っていた。

カギは掛かっていたはずだったが、少年がてこずる様子は見えな
かった。

上の階には明かりが灯り、人がいることを告げている。

話し声も、微かに下へと届いていた。

少年は、ためらう様子もなく、階段を昇った。

「誰だ！」

二階のドアの前に立っていた見張りの男が、それに気づいて声を
上げた。

だが、少年は足を止めず、相手にもしていない様子で、ただ階段
を上がっていた。

彼には男の声など聞こえていないのだ。

そんな気が、した。

「おい——」

無視して足を進める少年を見て、男が立ち塞がった時だった。少
年が、ゆっくりと面を持ち上げた。

その面貌の、何と神秘的なことであろう。辺りの全てが霞んで行くほどの玲瓏さである。

美しさ以上に、常人には持ち得ない雰囲気漂わせている。

「^{ジアン}蔣は……蔣がここにいます……」

少年は言った。薄く、それでいてはつきりと聞き取ることが出来る声で、あった。

「^{シンサン}蔣先生（ミスター）？ 蔣先生に何の用なんだ？ そのきれいな顔立ちからすると、高級男娼、つてところか。いつの間にこんな上玉を仕入れたんだか。——用があるんなら明日にしな。今日は蔣先生は忙しいんだよ」

まだ十代のような華奢な少年を相手に、男は鼻先であしらうように、手を振った。

だが――。

「ぼくは……ぼくは、一色透……。ミスター・蔣を殺しに来た……」

AREA・5 曼谷（バンコク）？

「え？」

「ミスター・蔣を……殺す……。殺しなさい……。殺しなさい……ミスター・蔣を……」

聞き間違いでは、ない。彼は確かにそう言ったのだ。蔣を殺す、と。

それだけではなく、自分は、一色透、であると。もちろん、男には聞き覚えのない名前であっただろう。だが、対処の仕様は心得ている。

「き、貴様——っ」

と、スーツの胸に手を差し込み、使い慣れた銃を抜く。

タン、と短い銃声が、駆け抜けた。映画に出て来るような劇的な音ではなく、呆気ないほど乾いた音が。

そして、それは男が放ったものでは、なかった。男の手中的銃は、まだ引金^{トリガー}すら、引かれては、いない。

それなら——。

「殺す……。殺しなさい……。ミスター・蔣を……」

透の手の中には、撃ち終えたばかりの銃が、あった。引金^{トリガー}を引いたのは、彼なのだ。

マット・ブラックの銃身が、鈍い光を放っている。

ベレッタM92Fの美しいフォルムは、その漆黒の少年に最も相応しいものであっただろう。

「き……さま……一体……」

男の言葉は、続かなかった。前のめりに倒れ、階段の下へと転がり落ちて行く。

胸には、真紅の薔薇が咲いて、いた。

だが、これは一体、どういうことなのであろうか。

その美貌の少年は、本当に透だというのだろうか。見間違えよう

のない美貌であろうと、あまりに彼らしくもない殺人ではないか。
第一、彼に蔣という人物を殺す理由があるのかどうかも、定かではない。

彼の目的はただ一つ——久世綾子を捜し出すことであつたはずなのだ。

ボタン、とドアが開いた。

「何の騒ぎだ？」

今の銃声と、見張りの男が階段を転がり落ちて行く音を聞き付けたのだらう。部屋の中から、二人の男が飛び出して来た。銃を構えてはいるが、すぐに引金トリガーを引く様子は、ない。目の前に立つ美貌の少年の姿を訝しげに見つめ、互いに眉を寄せている。

明らかに対抗組織の手の者だと判る人物なら、彼らも戸惑うことなく引金トリガーを引いていただらう。

だが、目の前に立っているのは、まだほんの華奢な少年なのだ。それも、随分きれいな顔立ちをした、少女のような——。おまけに敵対心も見せてはいない。

「おい、どうかしたのか？」

部屋の中から、また別の声が、聞こえて来た。

「あ、蔣先生。それが、見たこともない少年が——」

再び銃声が渡ったのは、その時であつた。

「うわっ！」

「くっ！」

二人の男が呻きを上げて、体を折る。

「殺……しなさ……い……。ミスター……蔣を……」

また、同じ呟きが、零れた。

漆黒の瞳は、部屋の中の人物を見据えている。

口ひげを蓄える、でっぷりとした中国人である。

「あなたが……ミスター・蔣か……？」

透は訊いた。

「なっ、何だ、貴様は——っ」

「あなたを殺す、ミスター・蔣」
それは、夜の魔窟での出来事で、あつた……。

AREA・5 曼谷（バンコク）？

《昨夜、有限会社・蒋大金行の代表、シアンリアン蒋宏量氏が、何者かに銃で撃たれて死亡しました。氏は、バンコクに出稼ぎに来た少年少女を騙して売春をさせていた疑いも持たれており、当局では、氏が何らかの組織に関わっていたのではないかと……》

ニュースはまだ続いていた。

朝――。

「どうですか、サー・ウェブスター？」

高級住宅街に建つ屋敷の中、ビルは、ベッドに半身を起こす初老の紳士へと視線を向けた。

「あれが一色透の仕業だと、何故わかる？ 警察では、犯人のことなど何も掴めていないではないか」

ウェブスターは、不機嫌を露にその言葉を投げ付けた。

「警察もその内、掴みますよ。そして、チャイニーズ・マフィアは、すぐにも彼を見つけ出す。何しろ、組織の資金源の一つである人身売買を担っていた男、蒋を殺した犯人ですからね。チャイニーズ・マフィアの機動力と組織力は、シシリー・マフィアにも劣りませんよ。彼の――一色透のせいで、危うく組織に当局の手が入るところだった、となれば、尚更。チャイニーズ・マフィアは、必ず彼を始末しますよ」

「……」

少しは納得したのだろう。ウェブスターは反論することもなく、じっと画面を見据えている。

「実際、彼に言うことを利かせるのは苦労しましたからね。幼い子供とは違って、はつきりとした自分を持っている。それも、複数の……。私の腕と薬でも、一週間も掛かりましたよ。――まあ、彼には元々、殺しの技術があった訳ですから、そちらの方を教える手間は省けましたが」

「……君やジーンとは逆のパターンだった、という訳か」

「フツ……。そうなりますね」

彼やジーン——そこには、カインも入るのであるのか。あの玲瓏な青年も——。だとすれば、その言葉の意味は、何を示していると言っただ。

「あの少年……本当に何も覚えていないのか？」

ニユースが別の話題に切り替わると、ウェブスターが確認するよ
うに、ビルを見上げた。

「覚えていませんよ。彼はただの『殺人兵器』です。私が彼に与えたのは、一色透の名前と、殺す相手……。もっと時間を掛けて教え込めば、私たちの仲間にもなりますが」

「要らぬことだ。兵器の使用回数は一回でいい。一度使った兵器を何度も繰り返し使うような真似をすればどうなるか、結果は見えている」

「ミスター・ローウエルのように、ですか？」

「ああ……。カインはすぐに殺しておくべきだったのだ。あそこまで力を持つ前に——。それを、ローウエルの奴は、すっかりあの子供を気に入って、自分の養子にまでして育ておって——。だから寝首を掻かれるようなことになるのだ」

「……。彼は……。カインは、何も喋らない子でしたよ……」

ビルは、昔を思い出すように、呟きを零した。

人類最初の殺人者の名を持つ青年、カイン。

ビルが彼と初めて逢ったのは、今からもう二十年近くも前になるだろうか。

当時、十三、四歳であったジーンが、どこからか傷だらけの幼子を連れて来たのだ。淡い金色の髪をした、きれいな子供であった。

それが、カインであったのだ。

その時、ビルは十八歳くらいで、もう、ローウエルの——いや、権力者たちの手足として働いていた。

小さい頃からドラッグのことを教え込まれ、ファースト・クラス上流階級の紳士淑女

が集まる社交界へ流す幻覚剤や、新種の麻薬を調合することが、ビルの仕事だった。

ジーンは《耳》として育てられていた。女であることを利用し、相手のベッドに潜り込み、情報を引き出す仕事である。

ビルもジーンも同じように孤児であり、ニューヨークで生き残るために、共に選んだのが、この道であった。

もちろん、自分たちを拾ってくれた権力者たちへの恩返しの意味も、あった。

カインもその一人であったのだ。——いや、彼の場合は、ビルやジーンとは、少し、違った。記憶を持っていなかったのだ。傷だらけの姿で意識を取り戻した時、カインは自分の名前さえ、口にすることが出来ない状態であった。

その真つ白なカインの頭の中に、ローウェルが最初に教え込んだのが、人を殺す術だった。

彼に、人類最初の殺人者の名を与えて——。

そして、カインはその名に相応しい少年に、成長した。

「今の一色透を見ると、あの頃のカインを思い出しますよ……。彼は、ローウェルに言われるままに、その小さな手で人を殺していた……」

自分が何者であるのかも知らないまま、カインという名だけが全てであるかのように……。

A R E A ・ 5 曼谷（バンコク） ？

「おまえの名は、カインだ」

見知らぬ紳士が、太い声で、そう言った。

「カ……イン……？」

「ああ。おまえはこれから、このニューヨークでの生き方を、学ぶ。戦い方だ」

「……？」

「この男が君に、戦い方を教える。マックスと呼ばばいい」

「……あなた、だれ？　ぼくは……？」

「私はローウエル。君に必要なものは、全て私が与えてやる。君はここで学ばばいい。マックスは優秀な男だ。必ず君を優秀な兵器に育て上げるだろう」

「……兵器？」

「このニューヨークには、ルールがある。敵を倒すか、黙って犠牲者になるか、だ。君は戦うことを選べばいい。それが賢い生き方だ」
それが、賢い生き方——このニューヨークで生きて行くための、ルール……。

ニューヨーク——。

「ケイン様。——ケイン様？　じきにホテルに着きますが」

運転席から、声が届いた。

カインは緑翠の瞳をゆっくりと開き、頬杖の上から、顔を上げた。
「……眠っていたのか、私は」

と、静かな声で、ぽつり、と呟く。

「もうずっと眠っておられないのではございませんか？　一度、ホテルの方へお戻りになって、ゆるりとお休みください」

「……。あれは、夢ではない」

「は？」

「私も透も……幼い日の夢は見ない」

彼の表情が寂しげに見えたのは、見間違いであつただうろか。

だが、哀しげで、口惜しげで、息が詰まりそうになる雰囲気、確かに、感じる。

彼は人間なのだ。

世の中のどんな人々よりも、人間らしい雰囲気、持っている。

ホテルの前で、車が止まった。

運転手が先に降りて、ドアを開く。

「ローウェルのお屋敷へ戻られる積もりはございませんか？」

車を降りるカインへ向けての、問いかけであつた。

カインは無言で、運転手の言葉を見据え返し、そのままホテルの方へと翻つた。

冷たい、とも言えない眼差しであつた。

「――。明日、またお迎えに上がります……」

夜が風を抱くように、余韻が留まる。

カインの面は、いつもと変わらず、美しく、優しく、澄んでいる。たとえ一時、人の心を持ったとしても、彼にはもう、それは捨てたものでしかないのだろう。

それを「哀しい」という言葉で表現するほど、浅はかな人間はいはしない。

それは、彼が選んだ道なのだ。

エレベーターが上昇する中、摩天楼の幻想的な輝きは、彼の美しさに焦がれるよう、一層見事に、夜の街を飾っていた。

あれから――。透の消息が途絶えてから、まだ行方は掴めておらず、ジーンの所在も判つてはいない。ただ一つ判ったことは、ウェブスターがロンドンの病院に入院していた、ということだけであつた。

だが、今はもうそこにはおらず、そこからの行き先も判つては、

いない。

宇佐川恭一と蓉子の所在も、また同じである。

完全に手詰まりに追い込まれている状態であった。

元々、情報を専門に扱っているジーンの方が、カインよりも早く情報を手に入れることが出来るのだ。カインの手の届かないところへ、ウェブスターや宇佐川を逃がすことも容易であったろう。

彼女はそういう風に育てられている。

AREA・5 曼谷（バンコク）？

カインは薄く瞳を細め、ルーム・フロアでエレベーターを降りた。歩き出す前に、一度だけエレベーターの中を振り返る。

何を思っているのかなのかは、解らない。何かに気づいたのかも知れないし、昔のことを思い出していたせいだったかも知れない。理由もなしに、振り返りはしないだろう。

だが、それ以上エレベーターを気にする素振りもなく、カインは部屋へと歩き出した。

ヨーロッパの雰囲気が漂う館内は、彼の優雅な足取りにこそ、相応しい。

長い指先で、ドアを開く。

部屋には、別の匂いが立ち込めていた。エレベーターに微かに残っていた香水の残り香と同じものである。——そう。彼がさっき、エレベーターを振り返ったのも、その匂いのためであった。

ほんのりと漂う魅惑の匂いは、部屋に誰かがいることを告げていた。

ソファの上には、女物の衣服が、脱ぎ捨てたままの形で、掛けてある。

カインは、奥のベッド・ルームへと足を向けた。パチン、とベッド・サイドの明かりが灯った。

「今、ロンドンから帰って来たところなの、カイン？ 随分、疲れしているようね」

と、ベッドに横たわる女が、言う。全裸である。

妖艶な肢体を隠しもせず、悩ましげに片膝を立てている。形のいい乳房も、肉欲を誘う尻も、男を虜にするには充分なものであった。

「思い出すでしょう、カイン？ あなたに女の抱き方を教えたのは、

私だわ。指の使い方、舌の使い方……。どうすれば女が歡ぶか、どうすれば淫らな啼き声を上げて縋りつくか……。この体であなたに教えたわ」

「……」

「どんなに用心深い女でも、無防備になる時間……。あなたが女を殺せる時間——。それを教えたのは、この私よ。この乳房で、この葩の中で——」

しなやかな両足を大きく開き、ジーンは蜜を含む葩の中心を、カインの前にさらけ出した。

その玲瓏な青年に見られる快感だけで、肌はしつとりと潤っている。

「……透はどこだ、ジーン」

視線を背けての問いかけであつた。

「いつからそんなに情けない男になつたの、カイン？ あなたに抱かれれば、私は何もかも喋るかも知れないわよ。それが——女の体から視線を逸らすですって？ そんなあなたを見ることになるなんて、思つてもいなかつたわ」

「……。もう一度、訊く。透はどこだ、ジーン」

顔を背けたままで、カインは言つた。

抑揚のない口調も、変わつてはいない。

「あんな子……。あの子も今度は逃れようがないわよ。私とビルは確かに殺しのプロではないけど、情報を集め、種を植え付け、獲物に罠を仕掛けることは出来るわ。——今頃はきっと、人間狩りが始まつているでしょう」

「一度逢えば、透の危険は解るかと思つていたが」
動じもせずに、カインは言つた。

ウェブスターの力で透を狩れるはずがないのだ。

だが、ジーンの口元には、不敵な笑みが浮かんでいる。

「解っているわよ。ビルも充分、ね」

と、自信たつぷりに、腰をくねらす。

「――透に何をした？」
厳しい口調で、カインは訊いた。

AREA・5 曼谷（バンコク）？

「ここで聞いたところで仕方がないでしょう？ もうあの子は助からないのよ。――考えようによつては、あんな母親を見ることなく死ねて幸せだわ」

「……爆破事件のことだけでなく、透の母親を連れ去つたのも君か」
「正しくは、ビルよ。あんな女が、あの子の母親だなんて驚いたわ。――〇〇歳の老婆のような白髪で、人形を抱き締めたまま離しもしないんですもの。母子同様、気味が悪いったらないわ」

「……」

「爆破事件の方は、もうじき奇跡を起こしてあげるわよ。死んだはずの人間が生きて戻る、という形で、ね。もうあの二人からは、必要なことは全て訊き出したことだし――。記憶の全てを返してあげる訳にはいかないけど」

何という不敵さであろうか。

これが、女、なのだ。

女は美しければ美しいほど、小賢しくなる。

「爆破で消えた家を見れば、何かを思い出すかも知れない。君らしくもない生ぬるいやり方じゃないか」

カインは言った。

宇佐川と蓉子がジーンの記憶を取り戻さない、という――〇〇パーセントの保証など、どこにもない。

「別に思い出しても構わないわよ」

軽い口調で、ジーンは言った。

「あの家は、一色透が爆破したんですもの」

と、得意げに瞳を持ち上げる。

「……そう吹き込んであるのか？」

「ええ。『あの子があなたたちを殺そうとしているから、どこかにしばらく身を隠していた方がいい』と言ってあげたの。二人はすぐ

に信用してくれたわ。あの子に恨まれる覚えがあつたのでしょうね。娘をクラス・メイトの家へ泊まらせて、私の言う通りにしてくれたわ。——誰だつてあの子が気味悪いのよ」

全て計算ずくのことなのだ。

情報を多く持てば持つほど、より綿密な、そして、どんな事態にも対処できる計画を練ることが出来る。それが、彼女のやり方なのだ。

「あの子の父親が誰だか知っていて？」

思わせ振りの問いかけであつた。

「私が知りたいのは、透の居場所だ」

カインは冷ややかな口調で、繰り返した。

「クス……。聞いておいた方がいいわよ。あの子は、血の繋がった兄妹の間に生まれた子供なんですよ」

「——」

それは聞き間違いではなかっただろうか。

そう思いたくなるような言葉であつた。

血の繋がった兄妹の間に生まれた子供——久世綾子と、その兄である圭介の間に産まれた子供だ、と言つたのだ。透の血は、久世の血だけで創られていると。

「あなたがそんな顔をするなんて、ね。そんなにショックだったのかしら？ あの子の異常性を考えれば、そっちの方がずっと真実味があるでしょうに」

微笑を含む瞳で、ジーンは言つた。

「……嘘、なのか？」

「さあ、どうかしら。少なくとも、久世綾子はそう信じていたわ。だから、狂人になったのよ。血の繋がった兄の子を産んだ、と思ひ込んだのですもの、当然のことでしょう？」

「……」

確かに、兄の子を産んだと思えば、気が狂いもするだろう。

だが、それならもっと早く狂つていても良さそうなものではない

か。
透が四つ五つの頃まで、
彼女は正気だったはずなのだ。

「……久世綾子にそのことを吹き込んだのは誰だ？」

カインは訊いた。

「応える必要があつて？」

楽しむように、ジーンは言った。

「宇佐川恭一と蓉子か？」

「クス……。あなたの調べ方は甘いよ、カイン。《耳》として育てられて来た私に敵いはしないわ。今頃気づくなんて、敵陣なら手遅れもいいところよ。助けられる人間まで、助けられなくなるわ」

「……。透の本当の父親は、宇佐川恭一か？」

「どうかしら。それは私にも解らないわ。宇佐川恭一と久世圭介は、血液型が同じですもの。それに、彼女——久世綾子は、一色透の父親が誰なのか知らなかったのよ」

「……どういう意味だ？」

「強姦、と云えばいいのかしら。ある日、彼女が眠っている間に、誰かが部屋の中へと忍び込み、彼女を犯して、妊娠させた。——彼女は誰にも言えず、一人で悩み、その内に、おなかの子供は墮ろせないほどに成長した。——母親、っていうのは不思議なものよねエ。誰の子なのかも解らないのに、自分が産んだ、というだけで、それなりに愛することが出来るのですもの。そうかと思えば、私やビルのように、犬猫みたいに捨てられる子供もいるし」

「……」

「でも、さすがに血の繋がった兄の子だ、と言われては、正気ではいられなかったようだけど」

多分、それ以前からの悩みも、彼女の精神に追い打ちをかけていたのだろう。

「宇佐川恭一はね、彼女のことを好きだったのよ。だから、彼女を強姦したのが自分だ、と思われなくなかった。——いえ、焚き付け

たのは、蓉子かしら。日本で個展を開いた時に、宇佐川の様子がおかしいことに気づいたのよ。自分の夫が他の女を——しかも、自分の妹を想い続けているなんて、プライドの高い彼女には許せなかったでしょうからね」

「……」

男も女も、その醜さでは、さして変わりがないのだ。

そして、ジーンの言葉は、容易く打ち崩せるほどに辻褃の合わないものでも、なかった。

だが、それなら——。それなら透が、久世綾子を殺そうとすることは間違っているのではないだろうか。透が彼女を恨む理由など、何一つないのではないだろうか。

「……透はどこだ、ジーン？」

カインは、最初の問いを繰り返した。

その眼差しに、ジーンの肌が、凍りつく。

それほどの雰囲気があったのだ。

静かな言葉だけで、相手を怯ませる雰囲気が。

得体の知れない恐怖を、相手に植え付ける雰囲気が。

「私……は……」

声も細かく震えている。

それは、確かに恐怖であった。

「もう、私には……何も出来ない……。あの子はチャイニーズ・マフィアに……」

「チャイニーズ・マフィア？」

「いくらあの子でも……世界中に散らばる華僑組織の手から逃げ切ることは出来ないわ……」

透に仕掛けられた罠——それを訊き、カインは部屋から翻った。

だが、チャイニーズ・マフィアの機動力を前に、何か打つ手があるというのだろうか。

そして、今からニューヨークを出て、透の危機に間に合うというのだろうか。

黄色い大地は、世界の果てに位置しているというのに……。

AREA・5 曼谷（バンコク） ??

SCAPEGOAT・3

世界最悪の交通渋滞——その言葉にも、微笑を浮かべて甘んじているのだ、この街は。

回り道をしようにも、一方通行ばかりで、地図通りに走れる道など何処にもない。

歩行者は、横断歩道を気にせず、どこでも車を横切って渡ってしまふ。

マイペンライ、だ。

どんな状況でも、全て『マイペンライ』と言って、やり過ごす。彼ら特有の、人懐っこい笑みで。

バンコク——。

黒塗りのロールス・ロイスのリムジンが、歩行者を威嚇するように、クラクションを鳴らした。

その車なら、通行人も怯むであろう。だが——。

「よせ。時間には余裕を見てある」

それは、リア・シートに腰掛ける秀麗な青年の言葉であった。

「——あなたが『マイペンライ』ですか？」

運転席の秘書が、皮肉な口調で、ミラーを覗く。

「フツ……。私は華人であり、タイ国民であり、タイに忠誠を誓っている。そして、本土の繁栄も願っている。世界一優れた民族、客家人として」

彼に相応しい、強かな眼差しではないか。

アジアのトップ、いずれは世界のトップに立つであろう青年とも

なると、わずか三十歳という若さでありながら、桁違いの器を持っているのだ。

グリフィス・チェン――。

「ですが、その我々の目的の前に、厄介な陰が差しております。先の事件では、危うく当局の手が入るところでした」

「蔣、か……」

「天安門の時とは比べものになりませんが、今はどんな小さな芽をも摘んでおかなくてはならない時期です。犯人を生かしておく訳には参りません」

「承知の上だ。ベトナム戦争以来、反共を国是として来たこの国が、赤い政府に屈する訳には行かない。そして、戦で故郷を追われた祖のためにも、我々は必ずその大陸に戻らなくては――」

グリフィスが言いかけた時であった。

「何を――っ」

そう声を上げ、運転席の秘書――尉^{ウエイ}が突然、ブレーキを踏んだ。道が混んでいたために、スピードはそう出ていた訳ではないが、それでも、不意の出来事は、相応の衝撃をもたらした。

「――どうしたんだ？」

収まった衝撃に顔を上げ、グリフィスは、その突然の出来事に問いかけた。

「申し訳ございません。車の前に、フラフラと飛び出して来た子供がいて……」

この街では、特に珍しいことではない。皆、そうして器用に擦り抜けて行くのだ。そして、ブレーキを踏まなくてはならない事態に陥ることも、ある。

「轢いたのか？」

グリフィスは訊いた。

「いえ、衝撃はありませんでした。ですが、車の前に倒れたようですので……。様子を見て来ます」

「いくら時間に余裕をみていても、この街では無駄らしい」

その眩きは、多分に諦めを含んだものでもあった。

マイペンライ、と言わないところが、香港・英国で教育を受けた客家人である彼と、土地の子との違いであっただろう。

同じ東洋人でも、中国人とタイ人では、氣質が全く違うのだ。

特に客家人は、本土から海外へ散らばりながらも、客家の風習を守り、文化や言葉を子々孫々にまで伝えている民族であり、日本人が、二世、三世となるに連れて、日本語が全く話せなくなるのと同じ、彼らは自分たちの国の言葉を忘れることなく過ごしている。

だからこそ、海を越えた血のネットワークを築くことが出来、国家以上の組織力と団結力を持つことが出来るのだ。

そんな彼らは、客家語^{ハッカーワー}を話すものを兄弟とし、決して兄弟を裏切ることはしない。

それこそ、客家系組織が、他の組織に畏怖される所以であった。

「グリフィス様——」

一人の少年を腕に支え、尉が車の窓から姿を見せた。

「どうした？ その少年がそうか？」

形のいい眉をわずかに寄せ、グリフィスは訊いた。

少年は意識がないように、ぐったりと体を預けて、項垂れている。

「は……。いきなり私に襲い掛かろうとしましたので、つい力を入れ過ぎて……」

「襲い掛かる？ おまえに？」

「はい。どこかの組織の者かも知れませんが、見たところ、コシヤン港人が中国人のようですし」

そう言って、尉が持ち上げた少年の面は、ハッ、とするほどの端麗さであった。壮絶、とも表現できる美貌である。尉に鳩尾を突かれて気を失っているとはいえ、その美しさは、充分、知れた。瞳を閉じていて尚、絶対的な美を有しているのだ。

「まだ十七、八歳の子供じゃないか。どこかの売春宿から逃げ出して来たんだろう。車に乗せる」

「——は？」

「気を失ったままの子供を放っておく訳にはいかないだろう？」

「しかし、こんな得体の知れない少年を——」

「得体が知れないからこそ、だ。何故おまえを襲おうとしたのかを、はつきりさせる。——早くしろ、尉。これ以上、時間を無駄に使う積もりか？」

「……かしこまりました」

尉は、グリフィスが開くドアのままだに、少年をリア・シートへと横たえさせた。

テーブルを挟んで、グリフィスの向かいに当たる革張りのシートである。

細い黒髪が煩わしげに顔にかかり、その美貌をヴェールに包む。

尉が運転席に落ち着くと、車は滑らかな動きで走り出した。

「何かございましたら、すぐに私に——」

「薬を常用しているな」

少年の腕に残る黒点を見て、グリフィスは言った。

「ちょうど、静脈の上である。」

「ヘロインですか？」

「さて。おまえに襲い掛かったのも、薬の幻覚のせいかも知れない。それに……」

「まだ何か？」

「随分、顔色が悪い」

「薬のせいでしょう」

「髪はつい最近きれいにカットされ、服も、汚れているとはいえ、名の知れた高級な店のものだ。——これが、ただの麻薬中毒者か？」

「……」

「この少年は、麻薬中毒者でも、男娼でも、浮浪児でもない。何か訳ありの少年だ」

突然、車の前に飛び出して来た美貌の少年——。その少年の姿を見据え、グリフィスは怜悯な瞳を薄く細めた。

運転席では、尉が厳しい表情を隠しめせず、時折、ルーム・ミラーを覗いている。

わずか十七、八歳の子供が、どこかの組織の刺客である、という可能性は無きに等しいだろうが、それでも用心しない訳にはいかない。尉に襲い掛かるうとしたことからしても——その時の反応の速さからしても、ただの少年ではあり得ない。ケンカで覚えられるレベルでの攻撃ではなく、意図的に鍛え上げられたレベルでの身のこなしだったのだ。今は窺^{うかが}われているとはいえ、もともとはしなやかなに鍛えられていた体であっただろう。一歩間違えれば、尉の方がやられていたのではないか、と思えるほどに……。

「その少年……あなたが考えておられる以上に、危険な少年かも知れません」

尉は言った。

「フツ……。私はまだ死ぬ訳にはいかないさ。何万もの兄弟たちが、豊かな生活を望んでいる。華南経済圏の中だけの繁栄ではなく、全中国の繁栄を――。これは命令だ、尉。おまえは私を死なせてはならない」

「かしこまりました」

車は、天使の都をクルンテープ駆け抜けていた……。

AREA・5 曼谷（バンコク） ？？

部屋には、洪門会の幹部が集まっていた。——いや、洪門会というのは、全堂口（組織）を示す内輪での名称であり、堂口は、当局に踏み込まれても一網打尽にされないよう、幾つもの名の会に別れている。

洪門会は、その堂口を一つにまとめた総称であり、正式名称を、洪門致公堂、という。

名の由来は、中国を表す『漢』の字から『中と土（中国の意味）』を取った『洪』と、一族を表す『門』から来ている。

『反清復明』を唱えて拡大された秘密結社である。
「遅くなりました」

その部屋に、一人の青年が姿を見せた。

部屋の両脇に控える幹部たちが、一斉に声の方へと視線を向ける。
正面に座する人物も、また同じである。

「何をしていたのだ、^{グロフィ}国輝。この幹部会に遅れるなど」

と、不機嫌を露に、訪れた青年を睨みつける。

「以後、気をつけますよ、お父様」

青年は、堪える風もなく言葉を返し、正面の人物、^{チンユウケン}陳有健の隣に、腰を下ろした。総司の後継者——次期総司であることを示す席である。
「る。」

国輝というのは、その青年の中国名であり、普段は、グリフィスという英国名で通している。香港、英国での生活が長かったこともあり、今も世界中を飛び回っている、という状況の中では、当然のことであつただろう。もちろん、彼に「国輝」と名付けた陳有健は、普段から中国名で彼を呼んでいる。

国に輝く——その名をみただけで、彼がどれほどの期待を陳有健にかけて生まれて来たかは、容易に知り得る。

高級住宅街に聳える屋敷の中で開かれたこの幹部会は、蔣が殺さ

れた事件についてのものであった。

夜に起こった事件とはいえ、蔣を殺したと思える犯人を目撃した者は、何人かいた。全て、夜の魔窟で客を取っていた街娼であり、彼らは警察には訴え出ないが、堂口には素直に口を開く。それ所以に、堂口では、警察よりも早く、犯人の手掛かりを掴むことが出来ていた。

蔣の《金行》に入って行った人物は、まだ幼さを留める少年であったという。それも土地の子ではなく――。

「中国人か日本人……？」

幹部が持ち寄った報告を聞き、グリフィスはわずかに眉を寄せた。「はい、グリフィス様。随分ときれいな少年だったということ――」。年は十代の後半。蔣の《金行》の裏口に回るところを、何人かの街娼が目撃しています」

「……」

頭に何かが過っていた。――いや、何か、ではなく、ここへ来る前に拾った少年のことが。中国人か日本人の、随分ときれいな顔立ちをした――。

だが、あれほど華奢で、しかも薬漬けになっている少年に、蔣を殺すことが出来た、というのだろうか。

「馬鹿な。もう一度調べ直せ。そんな少年に蔣を殺せるはずがない」

「しかし――」

「蔣の側には、何人かのボディ・ガードがいたはずだ。そのボディ・ガードたちは全て、たった一発の銃弾で仕留められている。急所を一発で撃ち抜かれているんだ。――十代の少年に、そんな芸当が出来ると思うのか？」

「それは……」

幹部たちの声は、小さくなった。誰もが皆、グリフィスと同じ疑問を抱いているのだ。そんなことが出来る少年がいるはずがない、と。

実際、自分の目で確かめてみなければ、信じることも出来なかつ

たであろう。それでもこの場に報告したのは、そう語る街娼たちの数が一人や二人ではなかったせいなのだ。

「ぼくはこれで失礼しますよ、お父様。この後、またすぐに香港へ飛ばなくてはならないので」

グリフィスはそう言つて、席を立つた。

「おい、国輝——」

その呼びかけにも応えずに、部屋を出る。

だが、心の内は、表情ほど穏やかなものではなかった。

玄関に回された車の前では、尉がドアを開いて待っていた。

「あの少年は？」

グリフィスは訊いた。

「まだ気を失つたままです」

「そうか……」

リア・シートには、尉に横たえられたままの格好で眠る、美しい少年の姿があつた。

まだ目を醒ます様子は見受けられない。

恐らく、尉に鳩尾を突かれたせいだけでなく、薬物の常用による脱力や疲労、栄養不良のせいで、体が弱っていたのだろう。そう思える昏睡であつた。

「私の屋敷へ戻れ。それから、この少年の動向には気をつけている。目を醒ましたら訊きたいことがある」

「——。かしこまりました」

車は、陳有健の屋敷を後にして、グリフィスの屋敷へと戻り始めた。

道端で拾つた少年——彼は一体、どれほどの人物だ、というのだろうか……。

「どういうことだ、ビル？ あの少年の遺体は、まだ上がらんではないか」

ベッドの上から不審を露にビルを見据え、初老の紳士、ウェブスターは、憤りの言葉を投げ付けた。

指先も、忙しなげに動いている。

それは、目に見える恐怖、であっただろうか。

「随分、気が小さくおなりではありませんか、サー・ウェブスター。次々に敵対企業を潰して、怖いものなしでニューヨークの実業界に君臨していらしたあなたらしくもない。ミスター・ローウエルの死と、一色透の存在は、それほど堪えましたか」

「――」

「いくらチャイニーズ・マフィアとはいえ、そうすぐに捜し出すことなど出来ませんよ。この街には、ただでさえ彼ほどの年頃の少年が溢れていますからね」

ここは、そんな少年たちが集って出来た『繁栄の首都』なのだ。そして、男たちは、そんなあどけない少年たちを求めて、世界中から集い群がる。厭らしい目付きで少年たちを舐め回し、欲望のままに体を貪り――。

ここは、精液と欲望で創られた、生贄の街。

「あの少年――一色透がここへ来る、ということはないだろうな？」
怒りに肩を震わせながら――それでも恐怖の方が勝っているのか、ウェブスターは訊いた。

「^{ジャン}蔣を殺す、という目的を果たした彼には、街を彷徨うことしか出来ませんよ。もちろん、誰に何を訊かれたところで、応えられる記憶も持っていない」

目的を持たない人間は、すでに死人^{とっし}と同じなのだ。記憶を持っていないのなら、尚更。

「信頼してもいいのだろうか？」

「……そういう風に育てられていますよ、私は」
「そうだったな。——だが、カインの例もある」

「彼は……今はローウエルの当主です。兵器であつた頃に抜けたのではなく、ミスター・ローウエルが死んだ後に、手を引いた。ローウエル家の当主、ケイン・ローウエルとして——。私に彼をも始末しろと？」

「出来んかね？」

ウェブスターは、チラ、っと瞳を持ち上げた。

「フツ……」

その笑みの意味は、何だったのであろうか。

肯定か、否定か。

そのどちらとも、受け取れる。

「私は……カインよりも、あの少年の方が気に入っていましたよ」
ビルは言った。

「まさか、手を抜いたりは——っ」

「していれば、とつくにここへ来ていますよ。あなたを私と殺しに」
「……」

「ただ気に入っていただけです……。何となく……」
何となく……。

そうとしか言いようがないほどに。

AREA・6 香港？

AREA・6 香港

国籍も未来もない街で、孵化したばかりの彼を見た者が、いる、という……

SCAPEGOAT・1

長い睫が小刻みに揺れ、肩を覆う柔らかい毛布が、わずかに、擦れた。

ベッドの上での出来事である。

そう広い部屋では、ない。余計な装飾も何もない、シンプルなスタイルでまとめられた一室である。

「目が醒めたようだな。——ああ、まだ起き上がらない方がいい。ドクターの話では、君に必要なのは眠りと栄養らしい。一応、点滴付きで旅行を許してもらったが、点滴だけでは本当の栄養にはならない。鳩尾の痛みも、尉に殴られたのでは、少なくとも三日は消えないだろうからな」

漆黒の瞳が開くのを見て、グリフィスは、まず必要なことだけを、
淡々と告げた。

少年は、訳が解らない様子で、茫としている。幼子のような表情
である。

少しすると、辺りをゆつくりと見渡し、戸惑うようにグリフィス
を見上げた。

何か言いたげだが、何を言っているのか判らないように。

「ここは、私の機——ビジネス・ジェットのベッド・ルームだ。バ
ンコクを飛び立って、香港へと向かっている。君はともかく、私に
は仕事があるのでね。ゆつくりと君に付き合っている訳にはいかな
い。移動時間に、出来るだけ話を聞いておきたい」

グリフィスは、口調を変えずに言葉を続けた。

バンコクを発つ前に、その少年の身体検査を含む全てのことを済
ませ、後は、話を聞くだけの状態になっているのだ。

彼は、武器の類いを隠し持っているようなこともなく、どこから
見ても、危険とは思えない少年であった。今も茫としているだけで、
敵意一つ見せてはいない。が、腕には注射針ニードルの跡があり、首には枷かせ
を嵌められていた跡が、ある。どこかに監禁され、薬漬けにされて
いたのではないか、と思える痕跡であった。

医者の話では、少なくともここ一週間は、食べ物をお口にしていな
いらしい。

そんな体で、彼は尉に襲い掛かろうとしたのだ。ろくに歩けませ
ず、立っていることが精一杯の体で。

「声は出せるか？ 目が醒めたら、スープか何かを食べさせるよう
ドクターに言われているが——。君の体には、流動食がやっとだそ
うだ。普通の食事が出来るようになるには、まだ当分、掛かるだろ
う。摂取していた薬物の影響もあるらしいが」

そう言って、グリフィスは、ドアの脇に控える尉へと、食事の支
度を言い付けた。

「あ……う……」

声が、した。ベッドの上からである。

だが、すぐに咳き込み、噎せ返る。

黒い瞳が涙で潤み、頼りなげな背中が、苦しそうに丸まった。

「……話は無理のようだな。——水を飲むといい」

グリフィスは、傍らに置いた水差しを取り、グラスに注いで手渡した。

少年は、突然知らない人間の元に引き取られた仔犬のように、戸惑っている。それでも、上半身を少し起こし、そのグラスを受け取った。別に警戒するでもなく、無心に水を飲み始める。

薬のせいで、喉が渴いているのだらう。

「もう少し飲むか？」

グラスに半分ほどの水が空になったのを見て、グリフィスは訊いた。

少年は黙って、首を振る。

「タイ語は解っているようだな。——中国人か？」

「……？」

戸惑うような瞳が、持ち上がった。

「名前は？」

眉を寄せて、次を訊く。

「な……まえ……」

「ああ、君の名前だ」

「ぼく……ぼくは……とお……る……。一色……透……」

途切れ途切れに、やっと聞き取れるほどの声で、少年は言った。

AREA・6 香港？

「一色透？ 日本人なのか？」

グリフィスの問いに、少年——一色透は、再び戸惑うように、首を傾げた。

そして、それは、その質問に關してだけでは、なかった。名前以外の質問には、全てそうして首を傾げるのだ。ふざけている、とも思えない表情で、本心から戸惑っている様子で。

「……覚えていないのか？ 自分のことを、何も？」

訊くまでもなく、すでに察していた問いかけであった。

記憶喪失——名前以外の全ての記憶を失っているのだ。

それからしばらくは、尉が運んで来たスープを食べさせるために、話は途切れた。

美貌の少年、一色透——。記憶喪失になってしまった彼の中には、《友だち》すら存在してはいないのだろうか。

誰にも愛されることなく育った日々の記憶がなければ——。

蔵の中に閉じ込められた日々の記憶がなければ——。

今の透は、普通の少年でしかない、というのだろうか。

「グリフィス様、彼は……」

透が食事を続ける中、小声でそう訊いたのは、尉であった。

「この体の弱り方だ。記憶喪失になっただけでも不思議ではない。特に、監禁されてドラッグを打たれていたのなら、な」

「しかし、演技ということも——」

「ああ、解っている。気をつけるさ」

二人が話を続ける間も、透は一口、一口、義務のようにスープを口に運んでいた。

きつと、自分が空腹なのか、満腹なのかも解ってはいないのだろう。

「もう無理か？—— まあ、欲しくなったら、また言えいい。無

理に食べても吐くだけだろうからな」

スプーンを置く透を見て、グリフィスは言った。

尉が皿を片付ける。

不思議なほどに、穏やかな空気が漂っていた。——いや、尉の視線は相変わらず用心深げだが、それでも部屋に漂っているのは、確かに優しい空気であった。

それは、食事、という日常の何でもない時間がもたらしたものであったのだろうか。

それとも、幼子のようなその少年が生み出している雰囲気なのだろうか。

「もう少し眠るといい。次に目が醒めた時は、また別の都市の上だ……」

AREA・6 香港？

カインがバンコクへ着いたのは、夕映えの中に、暁「ソット・アルン」の寺が美しく浮かび上がる時間であった。

黄昏の神々が、そう仕組んだのかも、知れない。

もちろん、暁の神々は、彼を凜とした紫色の朝焼けの中に立たせてみたい、と思っていただろう。

彼が歩く度に、人々が彼を振り返る。

優雅に流れる金髪を。

優しい色合いの緑翠の瞳を。

場所は、ホテルのロビーである。

チャオプラヤ河沿いに建つそのホテルは、一八七六年に創立されて以来、世界中から宿泊客が訪れる世界トップ・ランクのホテルであり、政府首脳や王室関係者はもちろんのこと、高名な作家が執筆に勤しんだことでも知られている。

その作家が使った部屋は、今もオーサーズ・レジデンスとして、当時のままに保存、利用され、ホテルの格調高い雰囲気と、マナーの良さと共に愛されている。

カインが足を入れたのは、そのオーサーズ・スイートの一室であった。

窓の側に、一人の男が立っている。

ドラッグスト
薬師、ビル――。

ここは、彼の部屋であり、カインがニューヨークで、ジーンから訊き出した部屋であった。

「いい部屋だろう？ 書斎もある。あの少年にも、ぜひ使わせてやりたかったが、生憎、行方が知れない」

と、肩を竦めて、口を開く。

「チャイニーズ・マフィアは、まだ透を手に入れていないようだが」カインは言った。

「そうらしいな。その上、おまえまでこのバンコクへやって来て、こっちは大弱りだよ」

「……」

優しい緑翠の瞳が、部屋の中を見渡した。ビルの言葉など聞いていない様子である。

「ここにあの少年がいると思って来たのなら間違いだ、カイン。俺はそれほど馬鹿ではない。ここに部屋を取ったのは……そうだな。あの少年のことを思い出したかったから、とでも言っておこうか」それは案外、本心であつたのかも知れない。約三十室あるオーサーズ・スイートの中、どの部屋でも良かった訳ではないのだ、と。

「……邪魔をしたな」

くるり、とビルに背中を向け、カインはドアへと翻った。

「おい、クギを刺して行かなくてもいいのか？」

あつさりとした引きようへの、皮肉——いや、苦肉であつた。

「……透以外の人間と係わりうとは思わない」

怒りさえ持つてはいない、と言うのだろうか、彼は。

ビルが目を見開いている間に、カインの姿はドアの外へと消えて行つた。

殺人兵器として育てられた青年、カイン——。彼には、人としての何かが欠落しているのだ。それは、彼が人間であつた頃の記憶、であつただろうか。

暁の寺が、そろそろシルエットだけになろうとしている。
ワット・アルン

墮天使たちが、この街に降りて来るのだ。
クルンテープ

「この街が《天使の都》とはな……」

AREA・6 香港？

SCAPEGOAT・2

この街はますますパワフルでエネルギーになって行くではないか。

あのアヘン戦争で英国の植民地となつてから、百数十年——。中国と英国の混在文化の中、自由貿易港として発展して来た街、香港。今、また大陸の一部となつた街。

ビクトリア・ハーバー 維多利亞港を抱いて摩天楼が聳え、エキサイティングな街並を形成している。

社会主義の本土への返還後も、この街は未だ自由であり続けているのだ。

窓の外には、そんな戸惑いの中の自由が、浮き沈みしている。

「……以前、ある男が、この街は今の自分にそっくりだ、と言っていた。あと少しで自由を奪われてしまうこの街は、今の彼そのものであると——。私には、その彼の気持ちがよく解る。組織のドンとなり、何万もの兄弟たちの頂点に立った時、彼の体も心も、もう彼一人のものではなくなってしまうのだ。全てが兄弟たちのものになつてしまう。私情で動くことは許されず、彼の判断一つで、結果が決まる。——それがどんなに恐ろしいことか解るか、尉？ ウエイ 彼の一言で、数万の兄弟たちの運命が決まってしまうんだ。行き先を間違ふことは許されない。常に私情を殺し、冷静でいなくてはならないんだ」

「グリフィス様……」

「私は……彼のように決断できないかも知れない。父が私を後継者として選んだことが重荷なのだ。銀行の グループ ことだけなら、自信はあ

る。金融のノウハウは全て学んだ。だが、組織の後継者としては……」

ハイグレードなインテリアを誇るホテルの一室で、夜にきらめくビクトリア・ハーバーを見据えながら、グリフィスは言った。

伝統と格式あるこのホテルは、各国のVIPが宿泊し、その展望の素晴らしさと、贅沢さで、優雅な時間を与えてくれる。

セントラル
中環――。

奥のベッド・ルームには、透が静かな寝息を立てて、眠っている。「フツ……。おまえに愚痴を零してしまうとは、な。余計な揉め事が起こったせいで、動揺しているのかも知れない。おまけに、その揉め事から逃げ出すように、香港へ来て――。私はおまえが思っているほど強い人間ではない。笑いたくなるほどに気の小さい人間だ」唇を歪めての自嘲であつた。

「洪門会は変わりつつあります……。親組織たる台湾哥老会や天地会も、若い世代に代替わりをし、洪門会がマフィアではなく、政治結社であることを誇りに戦おうと」

「ハッ。のんびりとした台湾人の好きそうな台詞だ。香港が本土へ返還された今、台湾も無事ではられないというのに――。そう遠くない未来に、中央政府は武力を行使しても、台湾に統一攻勢を仕掛けようとするだろう。事実上自由民主主義たる小さな島に――。それを目前にして、何がマフィアではない、だ。そんな「きれいごと」で世界は動きはしない。どんなことをしても、この香港の繁栄を沈めてはならないのだ。この自由の都の宝石を……」

「……その言葉の方が、あなたらしくございます」

秘書、というのは、何故こつちも食えないものなのだろうか。

グリフィスは、フツ、と鼻を鳴らした。その時だった。

カタ、つとベッド・ルームの方から、音がした。

尉が、ダーク・スーツの胸に手を差し込む。

脇の膨らみからして、銃に手を掛けていることは確かであつた。

「……か……さま？」

透が、漆黒の瞳に涙を浮かべて、姿を見せた。その動作も何もかもが、幼子のように、たどたどしい。

グリフィスは、視線だけで尉を制し、透の方へと足を向けた。「どうした？ 夢でも見たのか？」

と、優しい口調で、問いかける。

「か……さまが……いない……。どこにも……か……さまが……」それは、透が初めて口にした、名前以外の言葉であった。

「記憶が戻ったのか？ 他に何を思い出した？ バンコクでのことは覚えているか？」

と、少し早口に問いかける。

「グリフィス様、あまり近づかれない方が……。身元も何も解ってはいない少年です」

そう言つて、口を挟んだのは尉であつた。

「別に油断している訳ではない。私には……彼が聡明で、優しい少年だとは思えない」

「しかし――」

「心配するな。おまえたちには手を出させはしない。何があるうと、私はおまえたちを守ることを優先するだろう」

「……」

それでもまだ、彼が気の小さい人間だ、と言ふのだろうか。

彼は、人の上に立つように生まれて来た青年なのだ。

AREA・6 香港？

部屋はただ静かであった。

透は相変わらず涙を浮かべ、心細げに突っ立っている。その姿はまるで、四、五歳の幼子のようにではないか。

「こっちへおいで。お茶を入れてやろう」

グリフィスは、透の肩を抱いてソファに促し、尉に紅茶の支度を言い付けた。

「カーさまは……？」

透がすぎるような眼差しで、グリフィスを見上げる。

ハッ、と胸を突かれるような表情であった。その美貌のせいもあるのだろう。今の彼は、親とはぐれた小鹿のように所在無げで、放っておけない雰囲気纏っている。

「……君は母親を探していたのか？」

ソファに落ち着き、グリフィスは訊いた。

透の口調が、年よりもずっと幼いことにも気づいていた。

多分、医者是这样言うだろう。彼は全ての記憶を取り戻した訳ではなく、四つ五つの頃の精神にまで後退して、思い出している状態であると。

逆行性健忘症――。

今の透は、父親と母親をまだ愛していた頃の幼子なのだ。

「目がさめたら……カーさまがいなくて……。それで……。それで……」

「私のことは覚えているか？」

紅茶の匂いが漂う中で、グリフィスは訊いた。

「グリフィス……グリフィス・チェン……」

「ああ、そうだ。ここは君の家ではない。香港のホテルだ。君のお母様は家にいるだろう。――家の住所は言えるか？」

コクリ、とうなずき、透は素直に口を開いた。

グリフィスは、傍らの尉に目配せをし、入れたての紅茶を透に渡した。

「彼がすぐに君の家に連絡を入れてくれる。君のお母様のことも判るだろう」

その言葉の間にも、尉は受話器を持ち上げ、透が口にした住所を、グリフィス直属の部下たちに伝えていた。

香港へ来て三日――。初めて、その美貌の少年について知り得た情報であった。

数時間前、ベッドに入るまでの透は、自分の名前以外の記憶は持っておらず、言葉も極端に少なかったのだ。

だが、今は、幼い頃の記憶を持っている。

もちろん、それだけでは透がバンコクで何をしていたのかは判らないが、彼が何者であるのかは知り得るはずであった。

彼は本当に蔣^{ジアン}を殺したのか。

もし殺したのだとすれば、何故殺したのか、も……。

今のところ、彼に蔣を殺さなくてはならない理由があるようには、思えなかった。

「紅茶を飲みなさい。体が冷える」

肩にガウンを羽織らせ、グリフィスは言った。

ただでさえ休息が必要な病人だというのに、当人は一向に自分の体を気遣う様子がないのだ。――いや、医者は『少なくとも二週間は寝たり起きたりのベッドでの生活が続く』と言っていたのに、彼はずでにベッドを降りて歩けるほどにまで回復している。若さのせいもあるとはいえ、驚くほどの回復力である。

それだけではなく、ドラッグの禁断症状も見せてはいない。痙攣も発汗も起こさず、我を失って暴れ回ることもないのだ。

あれだけの針^{ニードル}の跡があれば、必ず常用者であるはずなのに、全く薬を欲しがらない。

薬に免疫があるのか、中毒性の強い薬ではなかったのか、どっちにしても、ただの少年とは思えない。

彼は一体、何者だ、というのだろうか。

「おいしい」

にこ、っと愛らしい笑みが持ち上がった。

手のひらにティー・カップを包み、透はまた、紅茶に口づけている。

さっきまで泣いていたとは思えないほどの、無邪気さである。

グリフィスは、つられるように、暖かく瞳を細めていた。

多分、そうすることが、この場には最も相応しいことだったのだ。

「明日は普通の食事が出来そうだな」

AREA・6 香港？

透の身元に関する報告が、グリフィスの元へ入ったのは、翌朝、十時を過ぎてからのことであつた。思った以上に時間が掛かつてしまったのは、透が今、日本ではなくアメリカに住んでいるせいだつた。

透が口にした住所には、確かに透のものである屋敷が建っているが、当人はそこで暮らしていないのだ。

父親も母親もすでに失く、母親の連れ子であつたという透は、近くに血縁と呼べる存在も持つてはいなかった。

現在はハーバードの学寮で寝起きをし、日本では作家として活動しているという。才能に満ち溢れた少年なのだ。

「ますます、バンコクでドラッグに溺れていたとは思えないな」

報告を聞き終え、グリフィスは言った。

理由がないのだ。両親がいらないとはいえ、その遺産で何不自由なく暮らし、名門と仰がれる大学で学び——そんな少年に、蔣を殺す理由があつたとは思えない。

「ですが、蔣の《金行》^{みせ}に入つて行つたという少年は、凄まじい美貌の持ち主であつたと聞いております。ちょうど、彼のように……」

尉は、窓に張り付き、外に出たい様子でうずうずしている透の姿を垣間見た。

あどけない幼子のような表情をしているとはいえ、その面貌の端麗さは、誰が見ても一目瞭然である。

「では、次のおまえの仕事は、蔣と彼——一色透の繋がりを調べることだ。早急に、な」

「かしこまりました」

二人の会話は、全て客家語^{ハッカーワー}で続いていた。

中国の五大放言であるその言葉は、北京語と広東語の中間のようなイントネーションを持ち、それでも、どちらにも通じない別の言

葉である。

中国はその広大さ所以に様々な放言が存在し、北京語、広東語、上海語を取ってしても、外国語と呼べるほどに違っている。北京の人間と広東の人間が自分たちの言葉で話をすれば、全く通じないのだ。

そして、客家語^{ハッカーワー}は、透には解せないはずの言葉であつた。当の透は、まだ窓の外を眺めている。

家の中ではじつとしていられない好奇心旺盛な野良猫、とでも言えはいいのだろうか。それも、気品だけは充分に備えた。

ベッドから降りられるようになった途端、彼がじつとしている時間は、目に見えて少なくなっていた。

「残念だが、病人を外へは連れ出してやれない。それに私は昼からミスター・王^{ワシ}との会食がある。ドアの前に一人残しておくから、用があれば彼に言えばいい」

グリフィスが言うと、透は期待を裏切られた子供のように、眉を落とした。

だから、なのだろう。遠くへ捨てて来なくてはならない仔猫に、じつと見つめられているような罪悪感を、感じた。

不思議な少年なのだ。何をする訳でもないのに、人を惹き付ける雰囲気備えている。

「……本当に体が大丈夫なら、明日には時間を作ってやろう。私もランチョン・パーティー^{ランチョン・パーティー}の午餐会にはうんざりしていたところだ」

その言葉に、溢れんばかりの笑みが零れた。

他の誰が、そんな笑みを零すことが出来る、というのだろうか。

「私も甘くなつたものだ……」

フツ、と鼻を鳴らすその苦笑は、魔に魅入られた者の刻印であつたかも、知れない……。

AREA・6 香港？

「まだ見つからんのか？」

そろそろ苛立ちの見え始めた口調で、バンコク銀行グループの総裁、そして、客家系秘密結社の総司、陳有健は、傍らに立つ部下を睨みつけた。

目撃者は何人もいるというのに、まだ蔣を殺したと思える少年が見つからないのだ。

「申し訳ございません。空路も陸路もすぐに手配したのですが、それらしき少年は出入りせず、市内の方も……」

「たかが少年一人に、こう何日も手こずるとはな」

「は……。あの――」

何か言いたげに、それでも言っていないのかどうか判らない様子で、部下がそこで言葉を止めた。

「何だ？」

「あ、いえ……。それらしき少年を見た、という情報もあったのですが……」

と、また言いにくそうに、口ごもる。

「そんな情報が入っていたというのに、何故、私に黙っていた？
その少年は、我々の組織に不利益をもたらした危険人物だぞ。それを解っているのかっ！」

きつい口調で怒鳴りつけ、陳は書斎のデスクを、ダン、っと打った。

「も、申し訳ございません。実は、その少年はすぐに車に拾われた、ということ……」

「車の持ち主は調べたのだろうか？」

「は、はい。それが……グリフィス様の車で……」

「――クォン国輝の？」

眉を寄せるに充分な言葉であった。

部下の額には、冷たい汗が浮かんでいる。

部屋の中には、居心地を悪くする雰囲気漂っていた。

陳の息子であるグリフィスが、その少年を手にながら黙っている、と言ったのだ。部下の淀みも当然のことであっただろう。

「……あれは今、香港だったな？」

陳は訊いた。

「は、はい。香港商業銀行の方で、大陸への投資と、進出企業への融資拡大を——」

バンク・オブ・チナグループの香港での基地たる香港商業銀行は、グリフィスが代表として立っているのだ。華南経済圏へ進出する台湾企業への多額の融資の件で、この間から香港とバンク・オブ・チナを行ったり来りしている。

「機を留意しろ。香港へ向かう」

東洋の伏魔殿と呼ばれた、その街へ……。

「随分とお忙しそうですね」

部屋に訪れた陳を見て、ウェブスターは労うように声をかけた。

もちろん、陳が何故忙しい思いをしているのかも、ウェブスターは承知していた。チャイニーズ・マフィアが一色透の行方を掴んだらしいことは、さっきビルから聞いていたのだ。

「ここではいつも、こんなものですよ。とにかくタイ人ときたら働かない。何を言ってもマイペンライで、そのクセ、中国人を小賢しい商人のように言う。お陰で私たちは休む時間ありませんよ」

表情は、言葉ほどに間延びしたものでは、なかった。

「アメリカ人としても同感ですね。ビジネスには時間が大切だ」

「全く——。足の方はどうですか？」

「ええ。足はともかく、動けない体では腰に来ますよ。これが冬の

ロンドンやニューヨークなら、もつと堪えていたでしょうな。ここは暖かくて、随分、楽になりました」

「それは良かった」

そう言つて、陳は話を始める前触れのように、咳払いをした。

「実は、これから香港に発たなくてはならなくなりましたね。お客人を残して失礼とは思つたのですが、急用で」

と、眉を顰める。

「ああ、それは氣を遣わせてしまったようで――。どうぞ氣にせんください。私の方も、主治医が煩いもので、もうそろそろ戻らなくては、と考えていたところです」

お互い、タヌキとキツネの化かし合い、としか言えないような会話であつた。喋っている当人たちでさえ、空々しくなるような、きれいごとであつただろう。もちろん、政治家であれ何であれ、人の上に立つ者には欠かせない「礼儀」なのであるうが。

「では、お元気で、ミスター」

それだけが、会話の終わりを示す言葉であつた。

人は、年を重ねるごとに、便利な言葉を覚えて行くものなのかも知れない。

AREA・6 香港？

「どうやらチャイニーズ・マフィアは、本気で一色透の捕獲に乗り出すようではありませんか」

陳の姿がドアの向こうへと消えるのを見て、ビルは褐色の瞳を薄く細めた。

「フンッ。今まで一体、何をしていたのやら。機動力を誇るチャイニーズ・マフィアが聞いて呆れるわ」

さっきの空々しい言葉よりは、余程マシな言葉である。

「……外面以上に頭の切れる人物ですよ、ミスター・陳^{タン}は——。自分の息子が蔣を殺した犯人と係わっている、と聞かされても、部下を疑いもせず、自分の目で確かめてみることにした。——中国人は血族結社を重要視するが所以、裏切りには冷酷です。たとえば、血を分けた親子であるうと……」

「君にも親子の情が解ると言うのかね？」

「フッ……。それを知らないのは、私だけではありませんよ。それに……私情を持つことを許されない組織のドンよりは、私の方が恵まれているかも知れない」

息子をかばってやることすら出来ない父親よりは……。

SCAPEGOAT・3

火龍の街——。この街をそう形容した男が、いる。鱗を逆立て、

身をくねらせて行方を求めるこの街は、火龍のようであると。

パワフルにエキサイティングに身を燃やし、アジア最大の、そして、ドラマティックな喜悲劇劇を見せてくれるであろう都市、香港。この世のあらゆる悪が蔓延り、あらゆる偽物が溢れる無国籍のこの街は、人間の欲望を剥き出しにする。

「ジャン・コクトーではないが、私にもこの街が行方を求めて彷徨っているのがよく判る。中国、英国のどちらにも属さず、日本の占領下の中でも国籍を持たない無法地帯を存在させ、社会主義に組み込まれた今でさえ、尚、自由であり続けようともがいている。麻薬、売春、不法滞在者、武器、殺人……腐った土壌からも金が溢れ、肥えた土壌からも金が溢れる。この街は、アジアで最も魅力的な街だ……」

ビクトリア・ハーバーから摩天楼を見渡し、グリフィスは陽差しに手を翳すように、言葉を綴った。

傍らでは、透が風に目を瞑りながら、聞いている。

波を弾く豪華なヨットの上であった。

冬でも平均気温十五度前後の香港は、薄手のコートで充分、凌げる。

二人は昨日の約束通り、外の空気を満喫していた。

普通の観光客には、望んでも持てないゆったりとした時間であっただろう。

買い物に駆けずり回る日本人や、決まりごとのようにビクトリア・ピークから街を見下ろすツーリスト——そんな姿は、彼ら二人には相応しくもない。

あちこち歩き回り、くたくたになり……それのどこが楽しいというのだ。

ヤブツァイ

『日本仔』と嫌悪されながら、それでもそれに気づかず、恥をさらしている鈍感な人間が多過ぎるのだ、ここには。

ヌーン・デイ・ガン

午砲の重い音が、正午を告げた。

ロイヤル・ヨット・クラブの敷地内にあるその大砲は、百数十年

間、この儀式を続けている。

「そろそろキャビンへ戻ろう。長い間、風に当たっているのは体に悪い」

透の肩を軽く叩き、グリフィスは船室の方へと翻った。

ヨットの豪華さから知れる通り、キャビンもまた、最高級ホテルのスイート並に、造られている。

テーブルの上には、ランチの支度が整っていた。

「また食事か。一日が本当に二四時間あるのかどうか疑いたくなるような早さだな」

ヌーン・デイ・ガン

午砲が鳴ったのだから、昼であることは間違いないが、それでも、少し考え事をしている間に時間が経ってしまう、というのは、詐欺にあったような気分になるものである。

隣で透も、うんうん、と同意するようにうなずいている。

「何が「うんうん」だ。病人は食べるのが仕事だ。——ホラ、座って」

グリフィスは、強引に透を椅子へと座らせた。

「ぼく、もう病人じゃ——」

「ああ、病人扱いはしていないさ。——外に出した途端、人の言うことは利かずにそこから中歩き回るし、運転手がドアを開くまでの短い時間に、もうどこかへ行っている。ヨットに乗って、やっと一息つけるかと思えば、キャビンでじっとしている時間など少しもない」
今日だけで、さんざんてこずらされた上での言葉であった。

もし、これが透の日常であるのだとすれば、彼と共に、常に一緒に行動できる人間など、一人もいないだろう。五人のボディ・ガードがいてさえ、ドタバタと駆け回る始末だったのだ。

「ともかく、これからは一人で歩き回ることはやめるんだ。——いいな？」

グリフィスは言った。

AREA・6 香港？

「一人……？」

「ああ。私は今、君に姿を消されては困る。これが演技であれ、本当の記憶喪失であれ——」

「違う……」

透が言った。

呟きにも似た口調であった。

じつ、と一点を見つめている。

「ん？」

「違う……。いつも、一緒に……。ぼくの側に……。誰？ ぼくと一緒に……」

ぶつぶつと口の中で呟いている。

「どうかしたのか？」

グリフィスは訊いた。

「誰……？ あなた……。じゃない……。ぼくと一緒に……。いたのは……あなたじゃ……」

「何か思い出したのか？」

透の表情は、苦しげな形に歪んでいる。

何かを思い出しかけているのだ。

額には汗が滲み出し、手のひらにはきつく爪が食い込んでいる。

「わからな……。い……。誰？ 誰？ ぼくが……。どこに行っても、

必ず……。振り返ると、必ず……。誰？」

「透？」

「誰……。誰かいた。ぼくの側に……。く——っ！」

ガシャン——つ、と食器の乱れる音がした。

透が頭を抱え込み、その拍子に皿が踊ったのだ。

透は目を潰さんばかりに、きつく瞼を閉じている。

頭痛がするのだろう。激しい痛みであることは、容易に知れた。

顔面蒼白で、今にも狂ってしまいそうな雰囲気である。

「何を思い出した？ 君は誰かと一緒にいたのか？ その人物はバ
ンコクにいるのか？」

空港には、透が入国した、という記録すらなかったのだ。

「あ……う……痛い……頭が……っ」

「透——」

声をかけようとした刹那であつた。

「ああ——っ！」

絶叫としか呼べないような、叫びが、上がった。

瞳を見開き、声を張り上げ、透は狂つたように叫んでいる。

そして、その叫びが途切れた刹那、透の体は崩れ落ちた。

グリフィスは、倒れる前に、透の体を抱きとめた。

腕の中で、透は完全に意識を失っていた。

ボタン、とドアが開いた。

「グリフィス様、今の声は——っ」

と、ガードが部屋へと姿を見せる。

「……ドクターを呼べ」

「は？」

「ホテルへ戻る。この少年と一緒にいた人物を捜すんだ」

いつも彼と一緒にいた人物——。五人のガードがいてさえ手に負えない少年を、いつも側で見守つて来た人物を。

そんな人物が本当にいるのだとすれば、それは一体、どれほどの人物だというのであろうか……。

AREA・6 香港？

ハイグレードなインテリアを誇る最高級ホテルのロビーで、その男は不意に、足を、止めた。

「どうかなさいましたか、お客様？」

荷物を運ぶ阿哥^{ボーイ}も、同じように足を止めて振り返る。

フツ、と笑みが零れ落ちた。男の笑みである。

「荷物はあのボーイに運ばせてくれ」

と、美しい姿勢で立つ、長身のボーイを視線で示す。

緩やかな弧を描いて目元に落ちる黒髪のせいで、そのボーイの顔立ちはよく判らないが、周囲に漂う雰囲気からして、かなりの端麗な青年であることは容易に知れた。

「ですが――」

「これはチップだ」

握らせた紙幣に、ベル・ボーイの表情が、すぐに変わった。

「か、かしこまりました、ミスター・ライナー」

と、長身のボーイの方へと歩き出す。

その行動を見ただけで、チップの額も知れるだろう。

ベル・ボーイが、長身のボーイに声をかけると、長身のボーイは、男の方へと視線を向けた。

無表情な黒い瞳である。

彼がルーム・キーを受け取り、男の方へと歩き出すまで、その時間には掛からなかった。

「荷物はこちらですか、ミスター・ライナー？」

と、前に立って、冷やかに問う。

「ああ。気をつけて運んでくれよ。商売道具の薬が入っている」
「……」

駆け引きのような刹那、であった。

ボーイは無言で荷物を持ち上げ、エレベーターへと歩き始めた。

男も後に続いて、足を進めた。その表情は、微笑、であっただろうか。

エレベーターの中では、互いに口を開くことも、なかった。時計の針が午後を指している今、チエック・インする客が他にもいて、エレベーターの中にも、二人以外の人間がいたのだ。

口火を切るのは、部屋に入ってからに、なった。

「黒髪に黒い瞳、というのもセクシーだが、港人^{コシヤン}というより、ローマ人だな」

男はボーイの容姿を皮肉げに眺め、頭に乗る帽子を、さっ、と取った。

長い黒髪が緩やかに零れ、そのボーイが誰であるのかを明らかにする。

カインだ。

金髪を黒く染め、黒のカラー・コンタクトレンズをはめてはいるが、その玲瓏な面貌は間違いようがない。

「さしずめ、チャイニーズ・マフィアを追って香港へ来た、というところか。——あの少年を取り戻して、本気で逃げ切れると思っているのか、カイン？ チャイニーズ・マフィアはもう、あの少年の素性も調べている。彼を連れて逃げ切ることは不可能だ」

男は言った。

「……君には関係ないことだ」

「フツ。どうかな。俺ならあの少年を——」

「私はまだ人の殺し方を忘れてはいない。それを覚えておくことだ、ビル」

「——」

カインの言葉に、ビルの瞳が凍りついた。

ただ静かな口調が、どれほど恐ろしいものであるのかは、彼でなくとも知り得たであろう。

その優しい青年は、人を殺すことを教えられて育った殺人兵器なのだ。

白い手が、ビルの前に、スウ、と伸びた。
気配さえない、滑らかな動きである。

ビルは、ハッ、と気づいて、身を引いた。
だが――。

「帽子を……」

と、カインは言った。

視線は、ビルの手にあるボーイの帽子を示している。

「……。今後、俺に向かって手を伸ばさないでもらいたいものだ。
寿命が縮む」

冷や汗を拭うように、ビルは言った。そして、ボーイの帽子をカインに渡した。

長い髪を片手でねじ上げ、カインは元の通りに帽子を被った。

その姿に、いつも以上の色香を感じるのは、黒髪と黒瞳、そしてボーイの制服のためであっただろうか。男であっても、やはり、制服というのは、別の一面を創るのだ。

「悪いな、カイン。おまえに係わる積もりはないが、あの少年には係わらない訳にはいかない。おまえも、黙って部屋について来たからには、危険は承知していただろう？」

ビルは言った。

ドアの方へと歩き出していたカインの足が、そこで、止まった。

「……どういう意味だ？」

動きが乱れたのは、その言葉の後であった。

最初に異変が生じたのは、眼、であった。

度の合わない眼鏡グラスをはめた時のように歪む部屋に、カインは黒い瞳を薄く細めた。

同時に、頭の中も揺れ始める。

次には、手足の力が抜け始めた。

「薬……か……」

「おまえの長い髪を確認するために、帽子を取った訳ではないさ。
薬は飲ませたり打ったりするだけのものではない。肌から染み込ま

せることもできる」

帽子に薬が仕掛けてあったのだ。

「く……」

カインは床の上に、膝を折った。

「俺は、ジーンのように甘くはない。おまえに一時間の猶予をやることも、選択権を持たせることもしない。これは、普通の薬の効かないおまえのために、特別に調合した薬だ。しばらく眠っていてもらうよ。目が醒めた時には、全てが片付いているだろう……」

そのビルの声は、果たして最後までカインに聞こえていたであろうか。

急速に薄れて行く意識は、すでに、カインの体を深い眠りに導いていた。

倒れた体から帽子が外れ、長い髪が優雅に広がる。

「おまえが冷静さを欠いて、俺への注意を怠るとは、な。そこまで気にかけている少年を、何で一人にしたんだか――。らしくもないじゃないか、カイン。ジーンから聞いたが、おまえが幼い日の記憶を取り戻した、というのは、案外、本当のことなのかも知れないな。おまえは確かに、以前のおまえでは、ない……」

以前の無気質な殺人兵器、カインでは……。

AREA・6 香港 ？？

ドアを開くと、そこにはダーク・スーツの男たちが数人、控えていた。

奥には、五十代後半の恰幅のいい紳士が、ソファに掛けてくつろいでいる。――いや、くつろぐ、というには、あまりにも厳しい顔付きである。

そして、グリフィスには、そこにいる全ての人間の顔に、見覚えがあった。

ハイグレードなインテリアを誇る、最高級ホテルの一室――。

「随分、唐突な訪問ですね、お父様。連絡一つ受けてはいませんでしたか」

と、足を進めながら、声をかける。

目の前にいるのは、グリフィスの父親、陳有健と、その部下たちであった。

「事と次第によっては、おまえを制裁にかけなくてはならん。その少年の素性を説明してもらおうか、グオフイ国輝」

陳有健は、グリフィスのガードの一人に抱えられる、透の方へと視線を向けた。

ヨットの中で気を失ってから、まだ眠ったままなのだ。そのあとけない寝顔を見て、誰が彼を殺人者だと思うだろうか。

「彼は一色透。今年、二十歳になったばかりの日本人で、ハーバードの学部生ですよ。バンコクへの出入国記録はなく、シアン蔣との関係は、今、ウエイ尉が調べています」

グリフィスは、淡々とした口調で、受け応えた。向かいのソファへと腰を下ろし、長い足を、優雅に、組む。

陳の表情は、相変わらず厳しいままである。

「何故、今まで黙っていた？ 我々がその少年を捜していたことは、おまえも承知していたはずだろう？」

と、精神的な疲労を示すような声で、溜め息すらついて、問い詰める。

「彼が蔣を殺した、という証拠が何もなかったもので」

「そんなことは、吐かせてみればすぐに——」

「記憶喪失でも、ですか？」

「——記憶喪失？」

「必要なら、医師の診断書を提出しますよ。ぼくが彼を拾った時、彼は尋問に耐えられる容体ではなかった。あのまま放っておけば、真相を訊き出す前に死んでいたでしょう。ぼくはドクターの指示の通り、彼に休息と栄養を取らせ、話ができるまでに回復させた。——ですが、意識を取り戻した時、彼は自分の名前以外のことは何も覚えておらず、先日、やっと身元が判ったところです。そして、さつきも申し上げた通り、今、尉が、彼と蔣の繋がりを調べています。その報告が届き次第、幹部会にかける積もりでいました」

飽くまでも冷静に、一語の淀みもない口調で、グリフィスは言った。

部屋が、シン、と静まり返る。

「……今のその少年の容体は？」

口を開いたのは、陳であった。意識なく、ガードに抱かれるままの透を見ての、問いかけである。

「ごらんの通り——」

「容体を訊いておるのだ」

「……。歩けるまでに回復したので、外に連れ出し、ヨットに乗せたところ、何かを思い出しかけて——。そのまま気を失いました。酷い頭痛があったようで」

「回復しているのなら、私が引き取る。異存はないだろうな、国輝？」

異存なく引き渡してしまう、というのだろうか、彼は。

もし、透がチャイニーズ・マフィアの本部に監禁されるようなことになったら、カインといえど、透を助け出すことは出来ないのでは

はないか。

本来なら、今頃は、ホテルへ戻って来たグリフィスの手から、透を奪還しているはずだったのだ、カインは。――ビルの介入さえ、なければ。

「……。異存はありませんよ。会の命令には従います」
グリフィスは言った。

陳が、自らの部下へと視線を送り、指示を受けた部下が、眠ったままの透を、グリフィスのガードの手から、事務的に引き取る。電話のベルが鳴り響いたのは、その時であった。

ガードの一人が、電話を取る。

「ん、ああ、繋いでくれ」

ホテルの交換にそう応え、

「グリフィス様、尉からです」

と、グリフィスの前に、受話器を差し出す。

誰もが息を呑む刹那であった。

尉は今、バンコクで透と蔣の繋がりを調べているはずなのだ。その報告次第で、透の処分も、すぐに決まる。

「……私だ」

グリフィスは、一同の視線を浴びる中、神妙な顔付きで、電話を取った。

「尉です。一色透と蔣の関係ですが……」

バンコクからの連絡は、果たしてタイミングが良かったのだろうか、悪かったのだろうか。

AREA・6 香港 ？？

電話の声は、続いていた。

尉が調べた結果、透は以前にもバンコクに訪れており、およそ十日間ほど滞在していた、という。半分はパタヤで、半分はバンコクで、クリスマスから正月にかけての、何の変哲もないバカンスだ。

——いや、取材旅行、と言った方がいだろうか。のちに、バンコク・パタヤを舞台にした小説が、出ている。

その時に彼が蔣と接触した、ということはないらしいが、一度バンコクへ訪れている、ということで、透に対しての疑惑が強くなったことは、確かであった。

しかし、蔣を殺すほどの理由となると、何一つ浮かび上がっては来ず、透が蔣を殺した、と裏付けるようなことも、何もなかったらしい。

だが、何も掴めなかった訳ではない。透と一緒にバンコクに訪れていた人物がいる、というのだ。その男は、ケイン・ローウェル、といった……。

「——ケイン・ローウェル？」

グリフィスは、その名を聞いて、眉を寄せた。どこかで聞いたような名前だ。

「はい。米国籍の青年ですが、ニューヨークから一色透と共に、バンコクへ入国しています」

「ローウェル……。すぐにニューヨークを当たれ、尉。ジョン・H・ウェブスターの知人に、ローウェルという人物がいたはずだ。以前、ウェブスターと共同で手当たり次第に企業を買収し、随分、騒がれた人物だ。バンコクにウェブスターが来ていたのも、偶然ではないのかも知れない」

「——。かしこまりました」

闇に閉ざされた世界の中に、一本の細い道が見え始めて、いた。

まだ行き先すら判つてはいない道だが、確かに前へ進むことが出来る道である。

電話を置き、グリフィスは、父、陳有健の方へと視線を向けた。電話の内容を繰り返し、

「ミスター・ウェブスターは、まだあなたの屋敷に、お父様？」と、問いかける。

「彼が今回のことに絡んでいる、とても言う積もりか、国輝？ 彼は政財界の人間に顔の利く――」

「まさか、＂兄弟＂の死より、ご自分のバンクوك銀行グループの利益の方が大切だ、とおっしゃる積もりではないでしょうね？」

「――」

グリフィスの言葉に、陳は喉の奥で、言葉を止めた。

「ミスター・ウェブスターが今回のことに関係しているかどうかは、あなたが決めることでも、ぼくが決めることでもないはずですよ。ぼくとしては、わずか二十歳の子供が人を殺した、というよりも、何らかの利益の絡んだ欲深い人間が、蔣を殺した、という方が納得し易いですが」

「……随分、その少年の肩を持つではないか、国輝」

「肩を持つ？ ぼくが彼の？ ……フツ。そんな積もりはありませんけどね。ただ、ミスター・ウェブスターがあんな怪我を負って、あなたの屋敷に身を隠しているのを見た時から、何か厄介な事を持つて来ているのではないか、という気がしていたんですよ」

「……」

不敵な風が、部屋を、掠めた。

「あの怪我――。尉に調べさせましたが、ロンドンの病院の医師の話では、何かで酷く足を潰され、骨まで砕かれていたというではありませんか。事故ということでしたが、もし、誰かに故意にそんな目に遭わされたのだとすれば、殺人の動機には充分ではありませんか？」

徐々に進むべき道が、見えて、来る。

だが、その道は正しいと言えたのだろうか。

どこかで横道に入り込んでしまった、とは思えないだろうか。

何しろ、霧はまだ完全に晴れた訳ではないのだ。見落としている標識があっても、不思議では、ない。

憶測で足を進めることは、危険すぎるのではないか。

もしかすると、その少年は、ウェブスターよりもさらに恐ろしい殺人鬼かも知れないのだ。

「——で、おまえはその少年を手元に置いておきたい、というのか、国輝？」

瞳を細めて、陳は言った。

「会の決定に従いますよ。ぼくといった方が、彼が記憶を取り戻すのは早いでしょうが」

「……。よもや、おまえが少年を手元に置きたがるとは、な。まあ、これほど美しい少年では無理もないが」

「何の話を——」

「やはり、おまえをあんな娘と結婚させるのではなかった。子供も産めず、体が弱くて、一年のほとんどを病院で暮らす女など——。結果が、これだ」

「彼女の悪口はやめてください！　いくらあなたでも、それ以上の言葉は許さない」

グリフィスは、激しい視線で、陳の言葉を睨みつけた。

全てが氷に閉ざされてしまうのではないか、と思えるほどの、きつい眼差しである。

かつて、彼がこれほどまでに感情を露にしたことがあっただろうか。唇を噛み締め、指を結び、その姿はまるで、誇り高き貴族戦士フラッシュのようなのではないか。

「……。言葉が過ぎたことは謝ろう。——だが、その少年には監視を付ける。このホテルから一步も出られんように、な。少しでもおかしい行動を見せるようなら、その場で撃ち殺すことにもなるだろう。それを忘れずにおくことだ」

その言葉を残し、陳の姿は部屋から消えた。

部下も、グリフィスのガードに透を返し、後に続いて部屋を出る。

「グリフィス様……」

ドアが閉じるのを見て、口を開いたのは、ガードであった。

「……私は、彼女との結婚を後悔したことなど、一度もない」

「……」

「ただの一度も……」

悔しさを握り潰すような口調で、グリフィスは言った。

「ミスター・陳は——お父上は、そんな積もりでおっしゃった訳では——。ただ、お孫様の顔を見ることを、とても楽しみにしていたので……」

「私はそれを親不孝だとは思わない。——透を寝室へ連れて行ってくれ。病人は……一人でたくさんだ」

AREA・6 香港 ？？

SCAPEGOAT・4

透が目を醒ましたのは、それから一時間ほど経ってからのことであつた。

「よく眠っていたな。何か飲むかい？」

寢室から姿を見せた透を見て、グリフィスは訊いた。

「紅茶を」

と、透は応える。

だが、その口調は、年相応のものではなかつただろうか。

表情も仕草も、気を失う前とは、変わってはいないだろうか。

「君は……」

「優しい人だな、あなたは。飲み物の好みを訊くよりも、もっと他に訊きたいことがあるだろうに」

彼は、今までの透ではないのだ。——いや、彼こそが本来の透の姿なのだ。

「記憶が……戻ったのか？」

椅子から腰を浮かせて、グリフィスは訊いた。

「ああ。悪いとは思ったけど、ホテルへ戻ってからの会話も聞かせてもらった。目が醒めたことを言えるような雰囲気じゃなかつたからね。あなたがぼくに親切にしてくれたことも覚えてる。もちろん、その親切が条件付だ、ってことも——。これでも紅茶をごちそうしてくれるかい、ミスター・チェン？」

持ち上がった黒瞳は、まさしく、美貌の少年、一色透のものであつた。目的を持つ者の、強かな瞳だ。

「フツ……。私のことはグリフィスで結構。そのファースト・ネー

ムで呼んでいたことを忘れていないのなら」

そう言つて、グリフィスはティー・ポットから、紅茶を注いだ。

「ありがとう、グリフィス」

緊張感一つ漂わないこの雰囲気は、果たして、安堵をもたらすものであつたのだろうか。

「私がガードを外に出してから起きて来たのは、偶然かい？」

一口、紅茶を含んでから、グリフィスは訊いた。

「あなたにこれ以上、迷惑をかけたくなかつた。紅蓮を抑えるのは大変なんだ」

「——紅蓮？」

「……。あなたが訊きたいのは、そんなことじゃないだろ、グリフィス？」

透の口調は聡明で、且つ、歯切れが良く、グリフィスが思つていた通りの少年であつたことは間違ひなかつた。

心地よい、のだ。

紅茶を運ぶ指先も、それを含む唇も、何もかも美しく整っている。「君が人殺しには見えないな……」

そんな言葉が出て来たのも、無理のないことだつただろう。だが——。

「ヤワラート（チャイナ・タウン）の街娼が見たことは、本当だよ……。ぼくが、^{ジアン}蔣という人を殺したんだ。一緒にいたガードも」
目を見開くしかない言葉であつた。

「ま……さか……」

手に持つカップが、大きく、揺れた。

「ウェブスターの足を潰したのも、ぼくだ。——でも、今、チャイニーズ・マフィアに捕まる訳にはいかないんだ。ぼくにはまだやることがある」

ただ静かな口調で、透は言つた。

「やること……？ 一体、何のためにあんなことをしたんだ？ これから何をしよう」と——

「紅茶、ごちそうさま。とてもおいしかった」

と、席を立つ。

水面を飛び立つ水鳥のような、鮮やかさであった。

「待つんだ、透——っ」

グリフィスは、翻ろうとする透の腕をつかみ取った。

紅茶のカップが、揺れて、倒れる。

AREA・6 香港 ？？

「私が訊いているのは理由だ。君に蔣を殺す理由があったとは思えない」

「……」

「何故あんなことをしたんだ？ ローウェルとウェブスターは、君にどう関係している？ 君といつも一緒にいたという人物は、ケイン・ローウェルというアメリカ人だろう？ 彼もバンコクに来ているのか？」

と、いくつもの質問を投げかける。

「……。ぼくは、紅茶を飲まずに逃げ出すことも出来た」

「透……？」

「カインは——ケイン・ローウェルは、ぼくとは関係ない。バンコクにも来ていない。それ以上のことは、あなたには言えない。たとえ、親切にしてもらった人でも——。ぼくは誰も信用しない」

そう言つて、透は軽やかな動きで、床を蹴った。グリフィスの手を振り払う代わりに、華麗なまでの反転を見せる。

「く——っ」

それは、グリフィスの苦鳴であつた。透の体が一回転すると同時に、グリフィスの手も、透の腕から止む無く離れる。

「透——っ」

「悪いね。僕はもう透じゃない」

「……え？」

それはどういう意味であつたのだろうか。

彼は、もう透ではない——。

グリフィスには、理解できないことであつただろう。

グリフィスが戸惑う内に、透の姿は寝室へと消えていた。——いや、彼は透ではない。羽紺だ。さっきの華麗な身のこなしと、並外れた運動神経は、疑いもなくそう思わせる。

「透！」

グリフィスが寝室へと入って行った時、透——羽紺の姿は、もう部屋の中から消えていた。

窓が開いている。恐らく、そこから外へと逃げ出したのだろう。だが、ここは地上を遙か下に見るホテルの上階ではなかったか。窓から飛び出したところで、どこにも逃げ場はないはずなのだ。

「……飛び降りたのか？」

窓の前に立ち尽くし、グリフィスはポツリと呟いた。刹那であった。

上の階から、ガラスの碎ける高い音が降りかかった。

「上か！」

ガラスの破片が、光にきらめく。

グリフィスは、部屋の外へと飛び出した。

「一色透が逃げ出した！ ホテルの出入り口を全て固める。駐車場もだ。彼は、上の階にいる！」

と、ドアの前に立つボディ・ガードに指示を放つ。

「は、はっ」

バタバタと慌ただしい足音が響き渡った。

この中で彼は逃げ切れる、というのだろうか。チャイニーズ・マフィアが守りを固め、即座に出入り口を封じてしまったホテルの中から——。

「馬鹿なことを……。父が射殺命令を出したことは聞いていたはずだ、透……」

その呟きは、口惜しさを表すものであったかも、知れない……。

ホテルの出入り口は、駐車場から関係者口にいたるまで、全てガ

ードたちが張り付いていた。

出入りする人間を見落とすことなく、用心深く、チェックしている。

外国人、家族連れ、ビジネスマン……その中、透らしき人物は、見当たらない。

透が逃げ出してから、すでに十五分。

館内で捕まった、という情報も届いてはいない。

目立つ少年であるはずなのに、一向に『姿を見かけた』という情報が入らないのだ。

その中、届いたのが、ボーイの制服が一着紛失している、という情報であった。

しかし、その紛失した制服というのは、小柄な透には大き過ぎると思えないサイズのもので、もし、それを身につけているのなら、すぐに不自然だと判るお粗末な代物だ、というのだ。

ガードたちは目を凝らしていたが、それらしきボーイの姿をした人物も見当たらなかった。

「持久戦かな。ネズミみたいにどこかに隠れているんだろう」

正面玄関を見張るガードの一人が、傍らに立つもう一人に、声をかけた。

「ハーバードの学生だかなんだか知らないが、所詮、子供だ。じつとしていられなくて、すぐに出て来るさ」

多分、どこの出入り口でも、そんな会話が交わされていたに違いない。

「おい、見てみるよ。凄い美人だ。あれは絶対、モデルだぜ。歩き方が違う」

一人が、ロビーを歩くエレガントな美女を見て、顎でしゃくった。サングラスをかけてはいるものの、その美貌は、周囲に漂う雰囲気から、容易に察することが出来た。長い黒髪も、それを飾る優美な帽子も、近寄り難いハイソサティな雰囲気を感じているのだ。

誰もが、ただ遠巻きに、茫と見惚れるだけの存在であった。

その美女がロビーを横切り、ホテルを出るまでに、一度も彼女を振り返らなかつた人間などいなかっただろう。

もちろん、ガードたちも、その中の一人であつた。

だが、彼らは己の任務も忘れることなく、遂行していた。その美女に氣を取られていたとはいへ、一色透がホテルを出るところを見過ごしたりはしなかつたのだ。

だが、それでいて、一色透の姿は、誰の目にも止まることなく、ホテルの中から消えていた……。

AREA・6 香港 ？？

「どういうことだ、国輝！ 一色透を逃がしただと？」

報告を聞き、グリフィスの部屋へと訪れた陳有健チエンヨウシェンが放った第一声は、その言葉であつた。

館内を隈無く捜しても、透の姿は見当たらず、ホテル内のショッピング・アーケードの店舗から、女性物の服や帽子、アクセサリーが盗まれていることが判つた、というのだ。

「……今、一色透と考える女性の姿をした人物を捜させています」
グリフィスは言つた。

「おまえは処分が決定するまで、行動禁止だ。一色透のことに手を出すことも許さん」

返つて来たのは、その言葉であつた。

「しかし——っ」

「会の決定だ。一色透を捕らえた地点で、おまえの処分を決める幹部会を開く。その間、おまえに許されるのは、バンコクと香港、台湾の往復だけだ。それ以外の国への出国は認めん。——いや、英国への出国は認めよう。幹部連も、おまえがエイミス上院議員の娘に逢いに行くことには寛大になってくれるだろう」

「……ロレインは——彼女はぼくの妻です。たとえあなたが認めていなくても」

その女性が健康な体を持っていたのなら、祝福されて当然の結婚だつたのだろう。

ヒアリッジ
貴族院議員の娘を娶ることは、陳のグループに取ってもプラスであり、エイミス上院議員に取っても、世界三大銀行の一つに数えられる財閥銀行グループとの縁組は、その資金力も含めて、この上ない魅力であつたはずなのだ。

「これくらい言葉でカツとなっているようでは、部下など守れんぞ、国輝。もちろん、その娘も」

「――」

「まあ、まだ私のように守りに入る年でもないだろうが――。結果、私もその守りのせいで、外からの攻撃者ばかりに注意を向け、知人たるウェブスターへの注意を怠ることになったのだから、な。その非は素直に認めよう。私も追って、おまえと同様、その失態の処分を幹部会で受けることになるだろう」

バンコク銀行グループの総裁、そして、チャイニーズ・マフィアのドンに相応しい、堂々たる言葉であった。ただの男が巨大財閥を、そして、数万もの「兄弟」たちを率いていけるはずもないのだ。

彼は、確かに人の上に立つに相応しい器を持った、聡い人物なのだ。

「お父様――」

グリフィスは、席を立とうとする陳を引き留めた。

「――ん？」

「彼は……一色透は、逃げる前、ぼくにこう言いました。蔣を殺したのは自分だと――。そして、ウェブスターの足を潰したのも自分だと……」

その言葉に、陳を含め、周りに立つ部下たちの表情が、驚愕に変わった。

人の足を骨まで碎くなど、常人の考えつく行動ではない。

「……理由は？」

難しい顔で、陳は訊いた。

「訊いてみましたが、彼は何も言いませんでした。――ウェブスターは被害者です。一色透は彼を追ってバンコクへ来ていたのでしょ。そして、ウェブスターがあなたの屋敷にいて手出しが出来ないことを知ると、その腹いせに蔣を殺した。――ですから、あなたが処分を受ける理由はありません、お父様」

グリフィスは、父親の非を打ち消す言葉を、真摯な面で口にした。その彼の言葉が間違っている、と言える人間など、ただの一人もいなかっただろう。唯一、言える人間は、『誰も信用しない』とい

う言葉を残して、消えてしまったのだ。傷を癒して、優しい言葉をかけてくれた人間さえ、信用出来ない、と言って――。

だが、それは不憫ではないだろうか。人にどれほど優しくされても信用できないなど。

そんな彼が生きて行くためには、憎しみを見いだせる方向へと歩いて行くしかないのかも、知れない。

「ジョン・H・ウェブスターの周辺を張れ。一色透は、必ず彼の元に姿を見せる」

また、誰もが彼を、追い詰め、始める……。

A R E A ・ 6 香 港 ？ ？ （後書き）

近日中に、完結済小説の『魔窟降臨伝』を削除させていただくこととなりました。

詳しくは、活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

AREA・6 香港 ？？

SCAPE GOAT・5

第一発見者は、ベッド・メイクに来たルーム・メイドであった。
『Please don't disturb』の札がドアに掛か
つていないことを確かめ、部屋に入り、そのボーイが倒れているの
を見つけたのだ。

長い黒髪をした、きれい、と形容できるほどの容姿を持つ、二七、
八歳の青年であった。

声を掛けても目を醒ます様子がなく、それを不審に思つて、すぐ
に支配人へと連絡したのだ。

だが、メイドが支配人と共に部屋へと戻つて来た時、その青年の
姿は消えていた。

時計の針が、まだ朝を指している時間の出来事であつた……。

ルーム・メイドの呼び声で目を醒ましたカインが、最初に向かつ
た場所は、グリフィスが滞在しているはずの部屋であつた。

昨日の午後、ビルに薬を仕掛けられてから、二十時間近くもの間、
ずっと眠り続けていたのだ。メイドが来なければ、もっと眠り続け
ていたかも、知れない。帽子からの微量の薬物のせいだけでなく、
意識を失ってから、さらに薬を打たれたはずだ。

危惧した通り、グリフィスの部屋には、もう透の姿は見当たらな

かった。——いや、透だけでなく、グリフィス自身も、すでにホテルをチェック・アウトし、そこから姿を消していた。

完全に遅すぎたのだ。

一度入った亀裂は、どんなに埋めようとしても、二度と塞がらない、というのだろうか。

優しい面貌を重く曇らせ、カインは薄く瞳を細めた。

己に対する怒りを含む表情であつたかも、知れない。

指を結び、空っぽの部屋から翻る。

ホテルを後にしたカインが、次に足を運んだのは、空港であつた。ボーイの服も着替え、黒のカラー・コンタクトレンズも外している。

香港啓徳空港——。

バンコク銀行グループのビジネス・ジェットは、すでに香港から飛び立っていた。

だが、「人」は残っている。空港の要所要所に、陳の部下らしき、雰囲気の違い・ダーク・スーツの男たちが、立っている。

カインは少し、眉を寄せた。

どう見てもその男たちが、《目》のようにしか見えなかったのだ。誰かが空港に姿を見せるのを待っている、としか。

だが、それは一体、誰なのであろうか。

彼らが見つけようとしているのは、一体誰だというのだろうか。グリフィスと透が香港を飛び立った今、彼らもまた、香港に止まっている理由などないはずではないか。

サングラスを掛け、カインはその《目》たちの唇の動きを、じっと見据えた。

男たちは、携帯電話を手に、互いに連絡を取り合っている。

人の出入りに気をつけながら、

『そっちはどうだ？』

『まだ現れない』

と、それぞれに言葉を交わしている。

唇の動きから、そんな会話が読み取れた。

だが、特定の人物名は出て来ない。

そして、カインも長くその様子を窺っていることは出来なかった。透とグリフィスの行方を追わなくてはならないのだ。陳有健^{チエンヨウシェン}が香港に訪れていたことからしても、チャイニーズ・マフィアが本気になることは、容易に知り得る。

カインは区切りをつけるように歩き出し、ヘリの手配を手早く済ませた。

民間機や個人のジェット機で空港に出入りすれば、あつと言う間にジーンやビル目の目に止まるが、ヘリなら少し、時間を稼げる。今回、ジェット機を使っていないのも、そのためであった。

「火龍の街、か……」

果たして、その言葉は声になっていたであろうか……。

A R E A ・ 6 香 港 ？ ？ （後書き）

近日中に、完結済小説『魔窟降臨伝』を削除させていただくこととなりました。

詳しくは、活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

AREA・6 香港 ？？

『あの……やっぱり、ニューヨークに戻った方がいいと思う……。カインだって、きつと心配してるから……。それに、もうじきモーガン教授のテストだってあるし、大学に戻らなきゃ、テストを受けられないし……。』

透の内側で、不安げに口火を切ったのは、浮世離れた少年、緑乃であった。

カオルン
ガウクウンチツロー
九龍から九広鉄路に乗って広州へ入り、そこから空路でバンコクへ向かう飛行機の中での出来事である。

『毎回、毎回、遅いんだよ、おまえは。状況を見てから言えよ。ここはもう飛行機の機内で、操縦士も行き先の変更はしてくれないんだよ』

そう言って、苛立ちを打付けるように緑乃を怒鳴りつけたのは、自信に満ちた面貌を持つ少年、夏黄である。

彼の苛立ちは性格によるものではなく、多分に緑乃のせいであつただろう。頭の回転の速い彼に取って、緑乃の周回遅れの回転数は、苛立ちを催す以外の何物でもないのだ。

特に、三〇〇キロもの列車での道程の末に聞かされた言葉が、その緑乃の台詞では、無理もない。こういう状況で大学の教授が行うテストの心配が出来る緑乃の神経そのものが、理解できないのだ。しかし、今回は、それ以外にも夏黄の苛立ちの原因となっているものが、あった。

この数週間の記憶が、誰の頭の中にもないのだ。もちろん、それは透が記憶を失っていたからであり、その間のことは透から聞かされているが、＂自分たちの存在が消えてしまう＂ということは、少なからず、誰しもの不安の要因となっていた。ただし、緑乃は除く。透は今、束の間の休息に浸るよう、子供のように眠っている。羽紺から、モデルである青華に代わってホテルを抜け出し、その後、

パスポートやその他一式を揃えるために朱道に代わり、やっと一段落ついた機内である。

『でも……このままバンコクに行ったら、透は殺されるかも知れない……。紅蓮だって——ううん、黒都が出ても、チャイニーズ・マフィアから逃げるなんて無理かも……』

『そんなことは、おまえが一回考える間に、皆、何回も考えているさ。取り囲まれて狙い撃ちされたら終わりだからな』

『じゃあ、行かない方が——』

『ここは飛行機の機内だと言っただろっ！ 途中下車できないんだよっ』

もうケンカ腰になるしかないイライラ度らしい。

結局、この後、緑乃は無視され続けることになった。

『あなたたちがそうやって緑乃ばかりを怒鳴るから、緑乃がカインばかりを頼るようになるのよ』

青華が横から口を挟む。

『なら、君が話相手になってやれよ』

『……』

沈黙。

この辺りは正直な反応をせざるを得ないようである。

人は、自ずから自分とテンポの合う人間を話相手に選ぶものであり、それ以外の人間との会話は、かなりの労力を要するのだ。

傍らでは、茶京と赤樹が透の眠りを妨げないよう、静かに話を続けている。

『記憶を消す方法はいくらでもあるさ。CIAでもKGBでも何十年も前から研究していることだ。また同じ手を使われたら、ぼくたちは今回と同じよう、透の中に存在していられなくなる』

厳しい口調で、赤樹は言った。精神医学も含めて、これは彼の得意分野なのだ。

『……この件に関しては、君が専門だ。対抗策も思いつくだろう？』
扇を手に舞う時と同じような優雅な仕草で、茶京は訊いた。

『捕まらないようにすることだな』

『医学書に出て来るとは思えない台詞だが』

『冗談で言っている訳ではないさ。記憶を消される以上に、今回のように新しい記憶——『蔣を殺せ』——というような命令を植え付けられる方が厄介だ。時間を掛ければ、全く別の人間に作り替えられる可能性さえある。キャメロン博士が言うところの《精神操作》（サイキック・ドライビング）だ。度重なる電気ショックと、薬物の投与で、人間の精神を完全な白紙状態にして、その精神を任意に「再パターン化」する。ソラジン（クロールプロマシン）、ネンブタール（ペントバルビタルナトリウム）、セコナール（セコバルビタール）、ベロナル（バルビタール）、フェネルガン（フェネルジン）……それらの薬を調合して作った薬物を使った実験では——口に出す気にもならない結果だったそうだ』

『CIAの精神コントロール技術開発の一端か』

『その実験から数十年……。あの薬師は、ドラッグリストキャメロン博士とは違って、完璧な技術を備えているさ』

『……』

どう考えても、透を守り得る手立てがないのだ。

それでも、透はバンコクへ行くことを諦めはしないだろう。透の母親の行方を知っているのは、ドラッグリスト薬師ビルと、ウェブスターの二人だけなのだ。

『奈落の底への道行きは、昨日今日、選んだものではないさ……』

A R E A ・ 6 香 港 ? ? (後 書 き)

近日中に、完結済小説『魔窟降臨伝』を削除させていただくこととなりました。

詳しくは活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

AREA・6 香港 ？？

この国が世界を支配する——かつて、そう信じた者は無数にいたことだろう。

誰彼に『陽の沈まぬ国』と言わしめた、大英帝国。

今もなお、かつての栄光と伝統にしがみついて生きる紳士淑女たちは、テムズ川の流れの如く、変わらないものばかりに価値をつける。

労働者階級とは一線を敷き、自らの貴族階級を誇りにする。

だが、古いものに、どれほどの価値があるというのだ。

時代の流れに風化していくものが、彼らの誇りだとも言つのか。見よ、コベントガーデンでパフォーマンスを繰り広げる若者たちを。

アーティスティックで、ファンタジックなその様を。

彼らの夢にまだ形はなくとも、それは決して過去の栄華に劣るものではない。

イングォ
英国——。

ロンドンの南方約八五キロに位置するこの街は、かつてはハイソサエティな人々が集う高級保養地でもあった。

美しい、のだ。

穏やかに湾曲する海岸線も、石畳の路地が入り組む情緒ある街並も。

そして、この街は今もまだ、昔のままの趣を残して佇んで、いる。その近郊——。

小高い丘の上に建つ白い建物は、病院であった。療養所、サナトリウムというのだろうか。

皆、ただ緩やかな時の流れの中で、過ごしている。

その女性も、そうであった。

贅沢な個室の一室——。

透けるような白い肌をした、聡明そうな女性である。栗色の柔らかな髪を肩で束ね、チェスの駒を睨んでいる。二五、六歳だろう。細い指を飾る結婚指輪が、幸福そうである。

「はい、これで王手」
チェック・メイト

「えーっ！ ひどいわ、グリフィス。今度こそ勝てると思ったのに――。一生懸命覚えたのよ」

と、チェス盤を挟んで向こう側に座る秀麗な青年を、睨みつける。「ぼくに勝とうなんて一〇〇年早いさ。それより、こんなものに根を詰めないで、もっと体力をつけて欲しいけどね」

グリフィスは、聡明なレディの隣に腰を移し、慈しむように肩を抱いた。

「……また、お父様とケンカをしたの？」
心配げな眼差しが、持ち上がる。

「いや――。仕事が予定よりも早く片付いたから来ただけさ」

「……」

「君が気にすることはないさ、ロレイン」

あれから――。透が逃げ出し、その透への関与を禁じられてから、グリフィスはバンコクへ戻る気にもならず、そのままこの英国へと足を運んだのだ。

華やかなロンドンから離れたこの街は、シギリス人が憧れる別天地でも、ある。

だが、日々の変化を見せない静かな街並は、決して落ち着ける場所では、ない。少なくとも、グリフィスには。

ここで覚えるものといえば、目まぐるしく変わって行く時代から取り残されて行くような焦りと、変わらないものへの憤りだけなのだ。

アジアのようなパワフルさは、ここには、ない。病人とリゾート客にしか向かないような土地なのだ。

「外は寒そうね」

白い空を窓越しに見上げて、ロレインが言った。

「散歩でもしてみるかい？ 熊みたいにたつぷりと着込んで」

「並んで歩くのが恥ずかしいでしょう？」

「離れて歩くさ」

「まあっ」

ムツ、とする白い頬は、それでも機嫌がいいように、ほんのりと桜色に染まっていた。

これが幸福でなくて、何だというのだろうか。

「冗談だよ。レディをエスコートするのは嫌いじゃない」

「学生時代からの有名なフェミニストですものね」

「フツ……。行こう。まさか、来た早々、チエスの相手をさせられるとは思ってもみなかった」

苦笑混じりに腰を上げ、グリフィスはクロゼットから、オフ・ホワイトの暖かいコートを取り出した。それをロレインの肩に羽織らせ、部屋を出る。

サナトリウムは今日も、昨日と同じ時間を刻んでいる。

「空気が冷たくて気持ちいい……」

葉を落とした木立が立ち並ぶ庭へ出ると、ロレインが琥珀色の瞳を心地良げに細め、大きく息を吸い込んだ。

北海道より北に位置する国土とはいえ、メキシコ湾流の影響で、地図を見て思うほどの耐え難い寒さは無きにひとしい。

その老婦人の姿が目についたのは、冬枯れた樹木の方へと歩き初めて、すぐのことであつた。

A R E A・6 香港 ？？（後書き）

近日中に、完結済小説『魔窟降臨伝』を削除させていただくこととなりました。

詳しくは活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

「あら、ごきげんよう、ミセス・久世。今日もお散歩？」

と、ロレインが優しい笑みで声をかける。

白髪のお婦人が、振り返った。――いや、顔立ちや服装は、髪の色とは不釣り合いなほどに、まだ若い。どう多く見積もっても、五十歳前後である。

「この子が……寒くても外で遊びたがるから……」

と、腕に抱く人形を示して、お婦人は言った。

グリフィスは、その雰囲気、普通ではないものを感じ取って、眉を寄せた。

動きもしない人形を手に、そのお婦人は、まるで自分の子供であるかのように、そう言ったのだ。

だが、ロレインは気にも留めていない様子で、二言三言、言葉を交わし、それからグリフィスを紹介した。

もちろん、グリフィスもその場で疑問を問いかけるような真似はせず、形式通りの挨拶を交わした。

その疑問を口にしたのは、ミセス・久世という婦人と別れ、再びロレインと二人、歩き初めてからのことであつた。

「ロレイン、さっきの婦人は……」

「ミセス・久世？　彼女はついこの間、このサナトリウムに来たばかりなのよ」

「ここに精神科があるとは知らなかったよ」

人形を我が子のように可愛がるお婦人の姿は、誰が見てもまともではない。

「意地悪な言い方をするのね」

「……」

「彼女は特別なよ。何でも、凄いお金持ちが、『自分の妻を精神病院に入れたくないから、ここで預かって欲しい』って、大金を積

んだそうよ」

「ずさんなことだ。もし他の患者に何かあったら、どうする積もりなんだか。ここには心臓の悪い患者がたくさんいるんだ」

「彼女はそんなことはないわ。精神病、って言っても、人に危害を加えるような外に向けてのものではないのよ。子供を亡くして、それからあの人形を自分の子供だと思い込んでいるのですって。サイコ小説のような危険なんてないわ」

「……」

危険がどこにあるのかなど、判りはしない。昨日安全であった場所が、今日にはもう危険な場所に変わっている時代なのだ、今は。

「……彼女は日本人？」

心の声を抑えて、グリフィスは訊いた。

「そうだと思うけど……。今、私と一番仲がいいのよ」

「君と？」

「ええ。私、彼女がとても好きなの。だって、あなたと同じアジア人なんですもの。いつもあなたが側にいてくれるような気分になるのよ」

ぴつたりと寄り添って歩く中、グリフィスを見上げて、ロレインは言った。

「随分、グローバルなものの考え方だ。ヨーロッパ人から見れば、日本人とタイ人は同じアジア人かも知れないが、タイと日本は全く違う。民族性も、政治も、社会も——」

「ここはビジネスの席ではなくてよ。私は彼女が好きなの。ただそれだけ」

病を抱えているとはいえ、彼女は決して弱い人間ではない。グリフィスの父親に反対されながらも結婚に踏み切ったように、常に前を向いて歩いている。だからこそ、グリフィスも前へと進めるのだ。時の流れの止まったこの英国にいてさえ、幻滅せずに立っている。

もちろん、そんな二人を世間知らずの『お坊っちゃま』と『お嬢

様』だという人間もいるだろう。二人がしていることは、ままごと遊びのような生活感のない『結婚ごっこ』だと。

だが、それは確かに、二人で選んだ道、なのだ……。

A R E A・6 香港 ？？（後書き）

近日中に、完結済小説『魔窟降臨伝』を削除させていただくこととなりました。

詳しくは活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

AREA・7 曼谷 - 倫敦 ?

AREA・7 バンコク ロンドン
曼谷 - 倫敦

彼の背を月明かりに透かして見れば、銀色の羽根が生えているのが見えるという……

SCAPEGOAT・1

黄金に輝く寺院が、生々しく、なまめ艶かしい姿で、聳えている。わびさび侘寂を尊ぶ日本の仏教とは、あまにも違った華燭な姿である。夜の中にありながら、それでも絢爛と輝いている。

バンコク
曼谷――。

埃つぽく、臭く、汚く、危険なこの街は、日一日と、新しい何かを取り入れて行く。

スクムヴィット通りに聳える大邸宅は、その街の未来を示すかのように、そこに、あった。

夕食の時間が迫る中、調理場では、誰もが慌ただしく動いている。だが、料理の皿は、屋敷の主人たる陳のものと、その部下たちのものだけで、来客がいる様子は窺えない。

香港のホテルで聞いた、陳とグリフィスの会話では、この屋敷に

ウェブスターがいるはずなのだ。

「ほら、茫としていないで、この皿を旦那様のところへ運んでくれ」
「え？ あ、はい」

厨房から突き出された皿を前に、藍香は、ハツ、としながら、手を伸ばした。エプロンをつけるメイド姿では、断ることが出来ない成り行きである。ショート・ボブの髪形だけでなく、丸い伊達メガネを掛け、ソバカスまでつけているその姿は、ガードたちの知る颯爽とした美しいモデル、青華ともまた違った雰囲気で、周囲の忙しさに溶け込んでいる。

美人、というより、可憐、といったイメージなのだ。

「逃げ足だけは速いようだな」

藍香の内側で、灰裂が言った。もちろん、早々に屋敷から逃げ出しているウェブスターを指しての言葉である。

「どうするの？ このお皿を捨てて、わたしたちも逃げる？」

声を出さずにそう訊いたのは、藍香であった。

「そんなことをしてみる。すぐに怪しまれて追っ手がつく。馬鹿みたいに、ボー、っと突っ立ってるから、そんな皿を渡されるんだ」

「馬鹿ですって？ そんなこと、あなたに言われる筋合いはないわ、灰裂。だいたい、料理なんてしたことがないのに、こんな役をわたしに回すから悪いのよ。指を怪我したら、ヴァイオリンもピアノも弾けなくなるのよ。こんな役は二度とごめんだわ」

「じゃあ、白亜がやりたいっ」

幼い声が、名乗りを上げる。

「……。わたしがやるわよっ」

半分、ヤケになっての言葉であった。

ダイニング・ルームの前には、陳の部下が二人、控えている。

藍香は皿を乗せたワゴンを運び、うつむきがちに部屋へと入った。テーブルについているのは、陳一人である。

傍らに、二人の部下が立ってる。他の部下たちは、別の部屋で食事を取っているのだろう。

運んで来た料理をテーブルに置くと、陳の視線が藍香の方へと移行した。

キュ、っと胃が縮まるような刹那であった。

だが、陳の視線はただ反射的なものであったのか、それとも部下との話の方を優先したかったのか、それ以上、藍香に向くことは、なかった。

ホッ、と胸を撫で下ろし、藍香はドアへと翻った。

ちょうどその頃、カインが二階の一室へと忍び込んで、いた。

A R E A・7 曼谷・倫敦 ? (後書き)

完結済小説『魔窟降臨伝』削除させていただきました。
詳しくは活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

AREA・7 曼谷・倫敦？

ダイニングを出ようとした時であった。

「あの少年……一色透は、ここへ姿を見せる、ということも考えられるな」

陳が言った。

藍香は背中に汗を伝わせた。

「そこまで愚かではないでしょう。ここへ来れば袋のネズミになるだけです」

傍らに立つ部下が言う。

「どっちにしても、香港を出国しているのなら、もうそろそろウェブスターの所に姿を見せてもいい頃だ。——国輝も今、英国へ行っていただろう？」

「はい。エイミス上院議員のお嬢様の病院へ」

「国輝から目を離すな」

「は？」

「サー・エイミスの娘に逢いに行くついでに、ウェブスターに会いに行こうと考えても不思議ではないからな」

「——。はっ」

それ以上の会話を聞くことは、メイド姿の藍香には不可能なことだった。

ワゴンを押して、部屋を出る。

だが、少なくとも、向かうべき方向だけは、記されていた。

英国——。ウェブスターは、その島国のどこかにいるのだ。彼に最も相応しくない、誇り高き紳士の国に……。

黒のハイネックの上下に、長い黒髪、その中で、優しい色に浮かび上がる緑翠の瞳は、夜の中にポウと輝く神秘的な宝石、翡翠のようにも見えた。

全身を闇の色に染めたその麗人は、カイン、であった。

人類最初の殺人者の名を持つ、玲瓏な青年――。

二階の窓から陳の屋敷に忍び込み、今、ウェブスターがいたはずの客室に立っていた。
ゲスト・ルーム

ここへ来る前に、グリフィスの屋敷へも行っている。

だが、そこにグリフィスの姿はなく、また、透の姿も見当たらなかったために、グリフィスの父であり、チャイニーズ・マフィアのドンである陳有健の屋敷に訪れたのだ。
チエンヨウシェン

だが、ここでも結果は同じであった。

全てが英国様式で整えられているグリフィスの屋敷とは違い、絢爛な中国様式で聳え立つこの屋敷にも、透の姿は見当たらなかったのだ。
ブリティッシュ・スタイル
チャイニーズ・スタイル

そして、ウェブスターも姿を消している。

香港のホテルで意識を失っている時間が長過ぎたのだ。

しかし、それなら透は、グリフィスと共に英国にいる、というのだろうか。

眉を寄せた刹那であった。続けざまに、数発の銃声が夜を裂いた。カインは、ハッ、と息を止めた。

だが、狙われたのは、カインではない。別の部屋で起こったことだ。

屋敷がバタバタと慌ただしく、なる。

カインは慎重に様子を窺いながら、廊下に出た。

騒ぎは、階下のダイニング・ルームで起こっていた。

「救急車を呼べ！」

「いや、車を用意しろっ。ミスター・陳を病院へ運ぶんだ！」

「窓から逃げたぞ！　すぐに後を追うんだっ。まだ遠くへは逃げて

いない！」

次々に、怒鳴り声のような叫びが飛び交った。

「クソォー—— ミスター・陳、しっかりしてくださいっ」

「おい、すぐにグリフィス様に連絡をするんだ！」

屋敷はすでにパニックに陥っていた。

カインは廊下の陰からその様子を眺めていた。

陳が何者かに撃たれたのだ。この嚴重な警戒が敷かれている屋敷の中で——。それは、ガードたちの怒鳴り声で、すぐに判った。

だが、誰がそんなことを成し得た、というのだろうか。屋敷へ忍び込むことさえ容易ではないというのに、その上、チャイニーズ・マフィアのドンを撃つなど、普通の人間に成し得ることでは、ない。だが、それもすぐにカインの耳に入ることとなった。

「全てのネット・ワークを使って、一色透を捜し出せ！」

憤りを込めた声が、上がった。

カインは瞳を見開いた。

陳を撃ったのは、透、なのだ。という状況であったのかは判らないが、ガードたちが透の姿を確認していることは、確かであった。そして、透には陳を殺す理由がある。少なくとも、ガードたちはそう信じ込んでいる。蔣を殺した犯人としてチャイニーズ・マフィアに追われる中、そのドンである陳有健を殺そうとしたのだと——。だが、陳を撃ったのは、本当に透なのであるのか。そんなことをすれば、ますますチャイニーズ・マフィアが躍起になることは判り切っているというのに、敢えてそんな馬鹿な真似をしたと。

畏の匂いがしないだろうか。また、誰かが背後で動いている気配が。

カインは、バタバタと駆け回るガードたちに背中を向け、屋敷の外へと抜け出した。

いくらガードたちが興奮しているとはいえ、確証もないことを、ああもはつきりと口に出したりはしないだろう。彼らは、確かに透の姿を見ているのだ。透が犯人である、と決定づける状況の中で――

」。

だとすれば、透はこの屋敷にいたはずだ。今も、カインのすぐ側にいるはずなのだ。同じバンコクの大地の上に。

陳を撃つたにせよ、撃たなかったにせよ、たった今まで、同じ屋敷にいたはずなのだ。

ニューヨークで二人の星霜を引き裂いた神々の騎行は、一体、いつまで二人にすれ違いの舞台を演じさせるのだろうか。

そして、どこまで透を追い詰めて行くのだろうか。

もしかすると、神々は「黒都」の出現を望んでいるのかも、知らない。愚かな人間どもに恐怖と狂気を焼き付けるため、無垢な魔人の出現を――。そうは思えないか。透が追い詰められ、逃げ場を無くすことに、《友だち》たちは不安になる。皆の意志が揃わなくなる。喧嘩を始め、仲間割れを起こす。

恐怖こそ、黒都の眠りを醒ますのに、一番相応しいものではないか。

その内、銀嶺も限界に達し、「真実の黒都」を目醒めさせる……。

AREA・7 曼谷・倫敦？

英国――。

チェンヨウジエン

父、陳有健が透に撃たれた、という連絡がグリフィスの元へ入ったのは、午後二時を回った時間のことであった。

バンコクでは、夜の八時過ぎ――夕食の時間である。

「透が……父を撃った？」

その報告を聞き、グリフィスは、指が白くなるほどに、受話器をきつく握り締めた。

「はっ。ミスター・陳は今、病院の方へ――。一色透の行方は、全力で追わせておりま――」

「まさかっ。透が父を撃つなど、そんな……っ」

「――グリフィス様？」

「確かに透だったのか？ 透が父を殺そうとしたと言うのか？」

「はい。銃声を聞き、ダイニング・ルームに飛び込みましたところ、一色透が陳様の側に立っていました。床の上には、陳様と二人のガードが倒れていて、すでに意識もなく……」

部下の話は、こうであった。

事件が起こった時、陳はダイニング・ルームで食事を取っており、傍らにはいつものように二人の部下が控えていた。

そして、ドアの前にも、二人。

廊下に立つその二人の部下が、銃声を聞いて、ダイニング・ルームへと飛び込んだ。

床には血まみれの陳とガードが倒れており、その陳をのぞき込むようにして、透が立っていたという。メイドの姿をし、ショート・ボブのカツラをつけていたが、それは確かに一色透であった、と。

「……それで、父の容体は？」

話を聞き終え、堅く目を瞑って、グリフィスは訊いた。

「まだ何とも……。私が見ましただけでも、陳様は少なくとも四、

五発の銃弾を受けておられ、もう意識もなく……」

「そんな……。おまえたちは何をしていたんだ！ その屋敷には何人のガードがいる？ 侵入者を易々と屋敷に入れ、父を撃たせるほどの人数か？」

「も、申し訳ございません」

沈痛の汗が見えるような謝罪であつた。

「……すぐに戻る。一色透を国内から一步も出すな。そして、必ず生け捕りにするんだ。そのためには、傷を負わせても構わん」

「かしこまりました」

電話を切った後も、グリフィスはしばらくその場に立ち尽くしていた。

きつく噛み締める唇が、その心情を表すものであつたかも知れない。

チエンヨウジェン

蔣だけでなく、父、陳有健までもが、透の手に掛かった、というのだ。あの美しい少年の毒牙に――。

「許さない……。彼は私が始末をつける」

そう呟く手のひらには、爪がきつく食い込んでいた。

「どうかしたの、グリフィス？ 今の電話、タイ語ではなかったでしょう？ 仕事の話なの？」

心配げな言葉が、背中に届いた。

ロレインが、琥珀色の瞳を持ち上げている。

彼女には客家語ハッカーワーが解らないのだ。

「ん、ああ……。少しトラブルがあつたらしい」

グリフィスは言った。

「……帰らなくてはならないのね」

「ロレイン……」

「心配しないで。私は大丈夫よ。あなたが大統領並プレジデントに忙しい人だと解つていて一緒になつたんですもの。それより……あなたが怒鳴るなんて、初めて見たわ」

「……。悪かつた。君を驚かす積もりは――」

「心臓なら大丈夫よ。ただ、あなたのことが心配なの」

彼女なりに何かを感じているのだろう。普段、変化のない閉ざされた空間で暮らしているために、余計に人の変化には敏感なのだ。

「心配要らない。仕事にはよくあるトラブルだ。それを片付けたら、またここへ戻って来る」

一色透を片付けたら――。

それは、憎悪という名の、道標であつたかも、知れない……。

AREA・7 曼谷・倫敦？

SCAPEGOAT・2

やはり、ここは「魔窟」なのだ。真つ白に輝く天使の羽根を、漆黒に濡れる厭らしい翼に変えてしまう。

曼谷——。

カインは、透の行方を追って、天使の都を駆け抜けていた。

その彼の背中に羽根が生えているとすれば、それはやはり、漆黒に染め換えられた闇色の翼であつただろうか。それとも、汚れなき魂を示す白い翼であつただろうか。——いや、その両方を塗り取られ、すでに飛ぶことも出来なくなっているのかも、知れない。

歓楽街の賑わいが、聞こえる。

この辺りもオフィスと共にレストランやナイト・クラブが増え、観光客や在留外国人の姿を多く見かけるようになった。

カンボジア国境まで続くこの長い道は、左右に一〇〇近くの小路を持ち、さまざまな顔を持つているのだ。

その小路の一つを横切ろうとした時であつた。小路の先に、ちらっと人影が垣間見えた。まだ線の細い少年の人影である。そして、その人影は、壮絶な美貌を持っていた。

カインは、ハッ、と気づいて足を止めた。

「透——っ！」

と、薄暗い小路の先へと、声を放つ。と同時に、その人影の方へと、踏み出した。

だが——。

スウ、と壁から剥がれるように、一人の男が前に立った。

四十代の半ば過ぎであろうか。細身で、それでいて鍛え抜かれた

体軀をしている。鋭い瞳も、機敏な身のこなしも、彼がただ者でないことを示していた。濃いブラウンの髪と、同色の口ひげ——。恐らく、アメリカ人、だろう。

カインの足は、その男を前に、止まっていた。

「久しぶりじゃないか、カイン。らしくもなく血相を変えて誰を捜しているのかと思えば、日本人のチビだ。冷静さを欠いてはしくじるだけだろうに。——そう教えてやっただろう？」

茶色い口ひげの男は、言った。

「……あなたが陳有健チエンヨウケンを撃ったのか、マックス？」

カインは、月をかき消すような瞳を、持ち上げた。

マックス——その名は確か、以前、カインが見た夢の中で、ローウェルが口にしていた人物の名前ではなかっただろうか。カインに殺人兵器としての技を一から教えた男——。彼は、権力者たちの《資産アセット（秘密結社用工作員）》の一人なのだ。

死の使いに相応しい妖光を放っている。

「陳を撃ったのは、一色透——。飽くまでも、チャイニーズ・マフィアにはそう思わせるようにやれ、と言われている。日本人の子供一人に、私までが出ることになるとは思わなかったが——。ビルもジーンもなかなか苦戦しているらしい。なんせ、あのチビの側についているのがおまえだ、というんだから、それも無理のないことだろうが。——なア、カイン？」

「……」

「どうした？ 私はここで勝負をつけても一向に構わないんだ。おまえには好きな獲物（武器）を選ばせてやろう。教え子へのせめてもの思いやりだ」

マックスの唇が、勝算に、歪んだ。

だが、彼は決して自信過剰になっている訳ではないだろう。それは、カインの表情を見れば、容易に知り得る。

「生憎……ぼくは誰とも係わる気はない。あなたの方も、ぼくには係わるな、と言われているはずだ」

厳しい表情で、カインは言った。

「まるで世捨て人だな。——だが、その体には人を殺す時の高揚感が染み付いているはずだ。命のやり取りを楽しむ己がいることを、はつきりと自覚している。おまえをそういう風に育てたのは私だからな。その自分を否定するために、おまえは逃げた。——そうだろう?」

「……」

「逃げれば、また人間に戻れるとも思っていたか? 無防備な背中をさらして、毎日電車を乗り降りするサルになれるとでも——。一度戦場に立った者は、故郷へ戻ったところで誰も歓迎してくれないのさ。戦場においてこそその英雄だ」

「……口数が多くなったな、マックス」

「——」

カインの言葉に、マックスは瞳を見開いた。

普段の冷静さを欠いているのは、カインだけではないのだ。マックスもまた、言葉で相手を威嚇してからでなければ勝算を見いだせないほどに、緊張している。

「なるほど——。お互い、この調子では、無様な殺し合いに終わるだけのようだな」

「……。行かせてもらう。今は、あなたの相手をしてもらえない」
淡々とした口調で言葉を残し、カインは、透が消えた小路^{ソイ}の方へと踏み出した。が、その爪先、数ミリのところに、カツ、とナイフが突き刺さった。

狙いを定める時間もかけず、そのナイフを放ったのは、マックスであつた。

「当たらなくてホッとしたよ。ナイフは銃ほど得意ではない。特に、当てないように投げるのは——。おまえも私も専門は「殺し」だ。一発で仕留める方が、ずっと楽だ」

AREA・7 曼谷・倫敦 ？

「……チャイニーズ・マフィアが透を捕らえるまで私を足止めしておきたいのなら、何故、殺さない？」

ゆつくりと振り返りながら、カインは訊いた。

それが、殺せない、という自信の上での言葉であったのか、マックスへの宣戦布告であったのかは、解らない。わざわざ相手を挑発するような言葉を持ち出すからには、もうどちらか一つに決めているのだろう。

「殺せ、という命令は受けていないが、おまえに引導を渡す役目なら、私は喜んで引き受けるだろう」

黒光を放つコルト・ガバメントの銃身が、マックスの手の中で閃いた。

何度も分解しては、組立て直したらしい、改造銃である。

その銃口が、火を弾いた。

銃身が、スライドと共に後退する。

夜の中に、鼓膜を突くような音が、跳ね返った。

カインの黒いコートが、夜の闇に翻る。

銀色の一線が、夜を駆けた。

「上か！」

マックスの声であった。

上空には、建物に渡した銀色のワイヤーにぶら下がるカインがいる。

マックスは銃を構え直した。

今、引金トリガーを、引く……。刹那であった。カインが翻した黒のコートが、ふわり、とマックスの頭上に影を落とした。

一発の銃弾が、コートを貫く。

「く——っ！」

苦鳴を上げたのは、マックスであった。

手の中のガバメントが、空を舞う。

路上に落ち、カラカラと転がる音がした。

だが、黒のコートは地に落ちず、マックスの手に引っ掛かった。コートとマックスの手を繋ぎ止めているものは、銀色に輝くナイフであった。その切っ先は、コートを通して、マックスの腕に突き刺さっている。

ポタ、つと真紅の血が、地面を濡らした。

また、一滴。

カインの姿は、すでに上空から消えている。

だが、彼も決して無事ではなかっただろう。

「急所は外れたらしいな」

マックスはポツリと呟いた。

少し離れた地面の上に、マックスのものではない血痕が残っている。それは、明らかにカインのものであった。ナイフのせいで狙いが外れたとはいえ、マックスの放った銃弾は、確かにカインを捕らえていたのだ。

何という男であろうか。あのカインに傷を負わせることが出来るなど――。しかも、互角に渡り合うことが出来るなど。

カインが生まれる前から銃を扱っていた彼には、はったりでないキヤリアがあるのだ。そして、カインを育てた、という自負が。

「おまえに特別目を掛けてやっていたのは、ローウェルだけではない。私も同じだ、カイン」

夜を見上げてのその言葉は、確かに真実であっただろう。

もぎ取られた羽根の代わりに、銀色の糸を放って舞い上がった玲瓏な青年――クルンテープ彼には、翼のない飛翔こそ、相応しいのだ。特に、堕天使の都たる、この魔窟では……。

AREA・7 曼谷・倫敦 ？

『あ、あの……今、カインの声がしたような気が……』

夜の小路^{ソイ}を駆け抜ける中、緑乃がそう言って口火を切ったのは、十分ほど前のことであつた。

もちろん、その意見が「空耳」として片付けられたことは、言うまでもない。

『カインはニューヨークだ。バンコクにいるはずがないだろ！』

の一喝に押され、緑乃も黙るしかなかったのだ。

その中、透は追っ手を逃れて、走っていた。

あの銃撃事件は、透にしても、予想外の出来事だったのだ。ウェブスターが英国にいると判り、陳の屋敷を抜け出した時、不審な人影が目についたのが、始まりだった。

その人影は、ガードたちの目をかい潜って屋敷に近づき、一つの窓から屋敷の中へと忍び込んだ。その直後、バシユ、つという、音ともいえない小さな連続音が駆け抜けたのだ。窓が空いていなければ、透の耳にも届かないほどの音だったに違いない。もちろん、ドアを隔てて廊下に立っていた陳の部下には、全くといっていいほど、聞こえなかっただろう。

その人影が、入って行った窓から抜け出すのを見て、透は部屋の中の様子を窺ったのだ。

そこは、陳が食事をしていたダイニング・ルームだった。部屋の中には、陳と二人のガードが銃で撃たれ、床の上に倒れていた。

その時やっと、透はさっきの音が何であつたのかを知ったのだ。

カートリッジが飛び出す音——消音銃である。だからこそ銃声は聞こえず、カートリッジが飛び出す音だけが耳に届いた。

透は、陳の様子を確かめるため、窓から部屋へと入り込んだ。そして、陳の前に身を屈めた時、数発の銃声が駆け抜けたのだ。今度は消音銃ではなく、はっきりとした銃声であつた。

全てが、周到に仕組まれた罠だったのだ。人影が窓から忍び込み、その窓を開けたまま陳を撃つたのも、透にカートリッジが飛び出す音を聞かせるためだったのだろう。廊下に立つガードには聞こえない、と判断していたのだ。

もちろん、三人の男を、騒ぐ間も与えずに仕留める腕を持っているのだから、ただ者であるはずもない。

そして、銃声が渡ると、廊下に立つガードたちが、ダイニング・ルームへと飛び込んで来た。

透に逃げる間は、なかった。

ガードたちは、透の顔を、はっきりと見た。メイドの姿をしていたとはいえ、あの状況では、そのメイドが透であると、ガードたちにもはつきりと判っただろう。彼らは一度、そのメイドの姿の透を見ているのだ。そして、もしかしたら透が屋敷に訪れるのではないか、という疑問も持っていた。疑ってくれ、と言わんばかりの状況だったのだ。

もとより、チャイニーズ・マフィアに追われる身であり、加えてあの状況では、透に言い逃れる術など、全くなかった。

人はいつも、彼を追い詰める。

大勢で周りを取り囲む。

それがどれほど残酷で、また、危険であるのか、知りもせずに……。

刹那、一発の銃声が駆け抜けた。

透は、ハッ、と回想から抜け出し、静寂の夜を振り返った。が、思ったよりも、遠い場所での発砲だったのだろう。辺りに追っ手の姿は見当たらない。透に向けての発砲ではなかったのだ。

息をつき、透は小路^{ソイ}24のホテルの駐車場へと入り込んだ。

「車が欲しい、灰裂。カギを開けてくれ」

と、息を整えながら、用件を告げる。

透と入れ替わった灰裂は、ものの一分と経たない内に、一台の車のカギを開けた。

運転席に座って、エンジンをかける。そして、再び透と入れ替わった。

車が危険な夜へと走り出す。

『あの……車があるなら、さっきの小路^{ソイ}まで戻ってみた方が……。ぜったい、カインの声だったから……』

と、皆の非難を承知するように——いや、非難を受けるなどとはこれっぽちも考えていない様子で、緑乃がまた、口を開いた。

『車があっても、チャイニーズ・マフィアが殺気立って動いてるんだよ。戻れる訳がないだろ！』

予期した通りの返答であった。もちろん、緑乃の予期では、ない。だが——。

『わたしにもカインの声に聞こえたわ』

と、藍香がその時のことを思い出すように、横から言った。

皆の表情が、少し、変わる。緑乃のように、全面的にカインを頼っている《存在》の言葉ではなく、音楽的才能に溢れ、人一倍耳のいい藍香が言った言葉なのだ。

AREA・7 曼谷・倫敦 ？

それでも、皆を納得させるには、現実味がなさ過ぎたのだろう。

『空耳だよ。カインがバンコクにいるはずがないだろ。それどころか、カインは透がカナダを発ったことだって知らないさ。追い詰められて、気が動転していたから、聞こえもしない声が聞こえたような気がしたんだ』

『……そうね』

もうそれっ限、皆の話がカインの話題に戻ることは、なかった。

透の足は、ただアクセルだけを踏み続けている。

彼にもやはり、カインの声が聞こえていたのであろうか。緑乃や藍香に聞こえたように、透にも、また――。

正面を見据える透の表情には、そんな様子は窺えない。

二十分ほど経った頃であった。背後に迫る車のヘッド・ライトが目についた。一台の黒塗りの乗用車が、透の車の後に、一定の距離を置いて張り付いているのだ。

「もう見つかったか」

透は、チラ、っとミラーを垣間見た。

その一台の他に、車はない。もちろん、すぐに、他の車も集まってくるだろう。

これが、チャイニーズ・マフィアの機動力なのだ。どこで、どんな車が盗まれたかなど、すぐに知れる。

透は、グツとスピードを、落とした。

後ろの車も、戸惑うようにスピードを落とす。

それを見て透は、一気にハンドルを切って、Uターンした。戻したアクセルを再び踏み込み、車線を真つすぐに逆行する。

正面には、追っ手のものたる車がある。

カッ、とヘッド・ライトが、車を、照らした。

だが、彼は一体、何をしようというのだろうか。このまま進めば、

間違はなく追っ手の車に突っ込んでしまうではないか。

スピードは、落ちない。それどころか、上がっている。

追っ手の車は、もう目の前であった。

その車の中では、陳の部下たちが目を瞠っていた。

「お、おい、ハンドルを切れ！ 突っ込んで来る！」

キキ——っ、とブレーキを踏む激しい音が、路面を擦った。同時に、派手な破壊音が炸裂する。

二台の車が激突したのだ。

「く——っ！」

体を駆け抜けた衝撃に、透は押し殺すような呻きを上げた。車から飛び降り、堅い地面に叩きつけられ、目が眩むようなショックを食らったのだ。面も苦痛に歪んでいる。

夜が瞬時に明るくなった。大破した車が、路上で炎を吹き上げている。

「痛……っ。先手必勝というには、痛手が大き過ぎるな……」

何という少年であろうか。狙い撃ちされる前に、危険を承知で追っ手の車へと突っ込んで行ったのだ。チャイニーズ・マフィアが相手では、逃げ果せないと判断していたのだろう。

しかし、すぐにも次の追っ手が迫っているはずであった。

彼はそれをも切り抜けることが出来る、というのだろうか。

「肩の脱きゅう、打撲、打ち身……もう少し何とかならなかったのか、羽紺？」

透の内側で、受けたダメージを確かめながら、赤樹が言った。

車が衝突する寸前に、外へと飛び出したのは、透の《友だち》の中でも随一の運動神経を誇る羽紺であったのだ。

「これ以上のダメージを受けずに済む方法があるなら、教えてもらいたいものだ」

羽紺は睨みつけるようにして、言葉を返した。

「どうでもいいが、腕や指先の損傷は避けてもらいたいな。車を盗むくらいの技術なら差し支えないが、精密機械を扱えなくなるのは

困る』

と、灰裂が横から口を挟む。

『そんなことより、顔や体に傷がつく方がイヤだわ。モデルなのよ、私』

と、青華。

『わたしもピアノやヴァイオリンが弾けなくなるのは困るわ』
と、藍香。

『私も、扇が持てなくなるのはごめんだな』
と、茶京。

『その点、夏黄はいいわよねエ。年増女をコマすのだけが取り柄なんですもの』

その青華の言葉に、夏黄が反論したことは、言うまでもない。
『俺の勘の良さがなけりや、透は今頃、もっと危険な目に遭っているさ。頭の悪い奴は小手先で努力をしているよ』

『何ですって——っ！』

この辺り、彼らに緊迫感があるのか、のんびりと余裕があるのかは、判らない。ただ、夏黄の頭の回転の速さと勘の良さに関しては、正当な反論であつただろう。

だからこそ彼は、頭の回転率の鈍い緑乃と気が合わないのだ。——いや、緑乃の場合、回転率を引き合いに出すより、生活サイクルが全く違う、と言つた方がいいかも知れない。彼の一日は、二四時間ではないのだ。この車同士の衝突も、多分、あと三十分くらい経つてから、大きなショックを受けることになるだろう。そして、遅れた言葉を口にして、また夏黄に怒鳴られるのだ。これは、彼らの中で、一つのパターンとして出来上がっていることである。

『どっちにしろ、戦闘機でも手に入れない限り、海外脱出は不可能だな……』

AREA・7 曼谷・倫敦？

SCAPEGOAT・3

ブレーキを踏んだ刹那、激しい痛みが脇腹を駆け抜け、カインは唇を噛み締めた。

マックスが放った銃弾は、カインの脇腹を掠めていたのだ。弾は、体内に残らず貫通している。体内に留まっていれば、もっと厄介な状態であっただろう。

路上に止めた車の中で、カインは包帯を縛り直した。その面は、出血のためか、月のように蒼白い。

今、車を運転していることさえ、常人には不可能なことであっただろう。

包帯を通して、赫い血が滲んでいる。

苦しげに息を吐く姿さえ物静かなのだ、彼は。

白い包帯を縛り終え、カインは再びアクセルを踏み込んだ。

向かう先は、空港である。

チャイニーズ・マフィアに追われている透が、遅かれ早かれ出す結論は、海外脱出——。もちろん、国内で追っ手に捕まらなければ、という大前提がついているが、国内に留まっていれば、どこに隠れていようと、必ずチャイニーズ・マフィアの手が伸びる。

それに、今の透には、ビル、もしくはウェブスターを捜し出し、彼らの口から母親の居場所を聞き出す、という目的がある。

空港は、もう目前であつた。

チャイニーズ・マフィアが、要所要所で目を光らせている。ダーク・スーツにサングラスを掛ける男たちの姿は、否が応でも目に付いた。

まだ、これといった動きは、ない。
カインは静かな動きでエンジンを切り、シートに凭れて、目を瞑った……。

英国を発ち、バンコクへと向かうジェット機の中、ニューヨークにいる尉^{ウェイ}から、グリフィスの元へと連絡が入った。

ウェブスターの知人であり、以前、透と一緒にバンコクへ訪れていたという青年、ケイン・ローウェルに関しての調査報告である。

「――それで？」

グリフィスは先を問いかけた。

「ミスター・ウェブスターの知人であるローウェル氏はすでに他界し、今はその息子がローウェルの事業を継いでいます」

卓上のスピーカーから、声が返る。

「その子息の名が、ケイン・ローウェルか」

「はい。子供のなかったローウェル氏が、十八年ほど前に養子にした子供で、早くから後継者としての教育を受けさせていたようで、^{プレップスクール}有名私立高校から^{アイビリーグ}東部名門八大学の一校に進学し、十六歳の時に^{ファイナル}学士課程を終了しています」

「――。大した人物だ」

それ以外の言葉は、見つからなかったであろう。

「――で、透との関係は？」

「それが……」

尉の返答は、そこで詰まった。

結局、調べてみても何も判らなかった、というのだ。二人がどういう知り合いなのか、どこでどう知り合い、どんな関係であるのかも――。

ケイン・ローウェルは、もう何年も表舞台には姿を見せておらず、最近の彼を知る者はほとんどいない、という。東海岸の財閥のトップでありながら、どこか謎めいた青年なのだ。

「どっちにしても、ただの男とは思えないな。——今、その男はニューヨークにいるのか？」

グリフィスは訊いた。

「いえ。所在は掴めておりません。普段から屋敷には戻らず、マンハッタンのホテルを点々としているとかで……。ホテルの方も調べてみましたが、それらしき人物は見当たりません」

「そうか……。その男のことはもういい。すぐにバンコクへ戻れ、尉。父が……。撃たれた」

「——。陳^{タン}総司が……。？」

尉の声が、驚愕に、凍った。

「まさか……。そんな……」

「数発の銃弾を撃ち込まれ、意識不明だ。現場には、メイドの姿をした一色透がいたらしい……」

距離を置いて、互いの表情が見えるような沈黙が、続いた。

「私は……。彼を聡明で優しい少年だと思い込んでいた……。おかしいだろう？ 何故か、そう思い込んでいたんだ」

「グリフィス様……」

「もう二度とそんな甘い考えは持たない。私の判断が、私一人のことで済まないことは、今回、はっきりと思い知った。総司となる者が私情を捨てなくてはならない理由も、心も体も「兄弟」のものであるという意味も——。一色透は私が始末する。これは絶対命令だ、尉。一色透を生かして捕らえろ」

「かしこまりました」

きつと、誰が悪い、という訳ではないのだ。ただ、ここが戦場であつた、というだけのこと……。

A R E A・7 曼谷・倫敦 ？

すでに、明け方近い時間であった。空はまだ白み始めてはいないが、凜とした朝の空気が、この埃っぽい街にも立ち込めている。

その中、一発の銃声が駆け抜けた。まだ街が目醒めていないこの時間には、キュ、っと胃が縮まるような、高い音である。

空港に控えるガードたちの表情も、緊迫の色に変わっていた。

「どこだ？」

「向こうだ。国内線ビルの方から聞こえた」

彼らが立っているのは、バンコク市内から見て、国内線の別棟のビルの向こう側に位置する、国際線のターミナル・ビルの前である。

「どうする？」

「どうもしないさ。持ち場を離れたら、終わりだ」

「＂兄弟＂が撃たれていないことを祈るだけ、か」

銃声はそれっきり、街を揺るがすことは、なかった。

彼らの元にも、さっきの銃声に関する連絡が入り、あれは、一色透に關してのものではなく、国内線ビルの方に異状はない、という伝えが届いていた。

空が徐々に白み始め、空気に埃が混ざり始める。

ビジネス・マンが活動を始める時間になると、空港もザワザワと賑わい始めた。

人が多くなるほどに、ガードたちの負担も増えるのだ。

「交替だ。休んで来いよ」

その声と共に、一夜を過ごしたガードたちと、新たなガードたちが入れ替わった。

昨夜、一色透を発見したという仲間たちが、衝突事故を起こして――いや、車を打付けられて死んだ、という情報が入ってから、一色透の姿は発見されていない。空港が混み合う時間を見計らって、彼が空港に姿を見せることは、一番に考えられる可能性であった。

だが、彼は、今度はどんな姿で現れるというのだろうか。

ガードたちは、サングラスの奥の瞳を細め、出入りする人間を注意深く窺っていた。

ハイヤーが止まり、運転手がトランクから荷物を降ろす。小麦色の肌をした、土地の子らしい小柄な運転手である。

ガードの一人がそれを目に止め、訝しむように眉を寄せた。

「ここを動くなよ。俺を見ずに、出入りする人間だけをチェックするんだ」

と、もう一人のガードに言い残して、その運転手の方へと足を向ける。

運転手は、客の荷物を手に、ターミナル・ビルの方へと歩き出すとしていた。前髪が顔に被さっているために、その顔立ちまでは確認できない。

ガードは、その運転手の前に、立ち塞がった。

「市内までいくらだ？」

と、うつむきがちの運転手に、問いかける。

「……。三〇〇バーツですよ。ですが、今はお客様の荷物を――」

「これは、客に自分で運んでもらえ」

ガードは、運転手の手から荷物を取り上げ、乱暴に客へと投げ付けた。

「何を――」

「騒ぐな、透。私だ」

ガードは、小声で運転手を窘めた。

運転手の表情が、驚愕に、変わる。

やっと持ち上がった表情は、確かに透のものであった。

瞳を隠す髪をかき上げると、端麗な面貌が現れる。

なら、彼の前にいるガードは――。

「カイン……なのか？」

透は呆然と、喉を開いた。

「何故、こんなところに……」

その問いかけも当然のことであつただろう。カインがニューヨークではなくバンコクにいるなど、透には思いもかけないことだったのだ。しかも、ダーク・スーツにサングラスを掛け、陳の部下に成り済ましているなど――。もちろん、夜明け前に国内線ビルで起こった発砲騒ぎのこと知らず、その騒ぎに乗じて、カインがガードの一人と入れ替わっていたことも、透は知らない。

今のカインはオール・バックのカツラを付け、口ひげさえ蓄えているのだ。見た目にも、それがカインであるとは判らない。

A R E A・7 曼谷・倫敦 ？

「今は話をしていられない。空港から出国することは不可能だ、透。チャイニーズ・マフィアが守りを固めている」

カインは言った。

「……そんなことは知ってる。電車もない国での交通手段は——」

「聞くんた、透。クロントイ港にあるクルーザーに、私のへりを止めてある。それを使ってバンコクを出るんだ」

「……」

カインの言葉に、透は薄く瞳を細めた。どこか冷めた、見据えるような眼差しである。

彼はもう、カインさえも信用しない、というのだろうか。ニューヨークで入った亀裂は、今も消えずに残っていると——。そう思えるほどに、冷たく鋭い瞳であつた。

だが、カインはその瞳に怯みもせず、真つすぐに透を見据えている。

舞い上がる砂埃さえ、霜と化して地に積もるような時間であつた。

「早く、透……。私も長くは立ってられない」

それはどういう意味であつたのだろうか。

そう紡ぐカインの唇は、色を失くしてはいないだろうか。

「カイン？」

「私もすぐに後を追う。ウェブスターはロンドンの《聖トーマス病院》にいる。早く行くんだ」

それだけを言い、カインはターミナル・ビルへと翻った。

脇腹をかばうような歩き方は、気を付けて見ていなければ判らないほどに、優雅な動作に隠されている。

「どうした？ 何かあつたのか？」

それは、見張りに立つもう一人のガードの言葉であつた。

「いや……。思い違いだ。——色透はまだか？」

「ああ。そう何度も騙されはしないさ。陳様に銃を向けた子供だ」
「……」

ハイヤーの走り出す音が、した。
サングラスの奥のカインの瞳が、優しく細まる。脇の傷が送り込む痛みさえ、感じさせないような表情である。

だが、その面は血の気を残していない。

それでもカインは、しっかりと立っている積もりだっただろう。
実際には、透の運転するハイヤーが遠ざかるのを見て、安堵するよう倒れたのだとしても。

「おい、どうしたんだ？　しっかりしろっ。おい！」

その声も、もう聞こえていなかったに違いない。

次の声も――。

「この男は……！」

カインの素顔を見たガードの言葉であった。

倒れた拍子に外れてしまったカツラからは、長い髪が零れて、いた……。

ブリティッシュ・スタイル

英国様式の美しい屋敷であった。豪華なシャンデリアがきらめき、階段には重厚な絨毯が敷き詰められている。

だが、その地下室は、殺風景な灰色の壁に閉ざされていた。

中には簡素なパイプ・ベッドだけが、置いてある。

牢獄のような造りであった。

ベッドに眠っているのは、玲瓏な容姿の青年である。――いや、眠っている、という表現は相応しくないかも、知らない。意識を失っているのだ。原因は、脇腹に受けた銃弾による、出血多量のせいであった。

今は、その傷も手当され、その代わりに、ベッドのパイプに頑丈

な鉄枷^{かせ}で四肢を繋がれている。

人類最初の殺人者の名を持つ青年、カイン。

瞼が震え、優しげな緑翠の瞳が、ゆっくりと開いた。

目を醒ました場所への戸惑いはないのか、それとも、まだ意識が完全に目醒めていないのか、表情には一切、変化がない。

「目が醒めたようだな、ケイン・ローウェル」

ベッドの傍らに立つ青年が、言った。

後ろには、鋭い目付きをした男が立っている。

だが、カインは何も聞こえていないように、黙って正面を見つめている。

「私はグリフィス・チェン。怪我人にこんな真似をして申し訳ないが、空港での変装の一件もあつて、君を信用することが出来ない。何故あんな格好をして私の部下と入れ替わっていたのか、聞かせてもらおう」

淡々とした口調で、グリフィスは言った。

後ろに立っている男は、ニューヨークから戻って来た秘書、尉である。

「君と一色透はどういう関係だ、ミスター・ローウェル？」

冷たい口調で、質問を続ける。

英国からバンコクへ戻ったグリフィスが、最初に耳にしたのが、空港での出来事だったのだ。ガードの一人がいきなり倒れ、カッラとサングラスを取ると、全くの別人であつたという――。それが、今、ベッドに眠っている青年、カイン、であつた。

透の行方は、昨夜の衝突事件以来つかめておらず、カインが何らかの手引きをして、透を国外へ出国させたことは明らかであつた。しかも、己の身を犠牲にしてまで――。

彼は、透のためにスケープゴートとなつたのだ。

「透は……」

カインが言った。

「透との関係は……私にも、よく解らない……」

と、グリフィスの顔を静かに見上げる。

「解らない？」

「……考えたこともない。ただ……互いに、他に信じることが出来る人間がいなかった……」

抵抗するでもなく零れ落ちた言葉は、何と穏やかな響きであっただろう。グリフィスに対する警戒心も見せず、また、媚びさえ混じえてはいないのだ。

「信用できる人間がいらない、というのは、君はローウエルの養子で、透は早くに両親を失くし、他に身内がいらない、という意味なのか？」

「……あなたが、そう思うのなら」

彼は何故、そんな表情が出来るのだろうか。清涼な空気に包まれる山々のような、それでいて、人々を近づけない断崖のような。

「はつきりと訊こう。君は一色透と共謀して蔣を殺し、私の父、陳有健を撃ち、透を国外へ逃がしたのか？」

最初の問いかけに答えを得られないまま、グリフィスは訊いた。

「……私を信じていないのだろう、ミスター・チェン？ それなのに、何故訊く？」

「――」

「私は……嘘しか言わないかも知れないし、自分に都合のいいように話すかも知れない。私の応えなど無意味だ」

その声の高低のせいだっただろうか。彼の言葉は体の内部まで染み渡り、反論できなくなる呪縛のように、次の言葉を喉で封じた。

「なるほど……。私は透と同様、君のことも甘く見過ぎていたようだ。一色透は、君と同じことを私に言ったよ。信用していないから話せない、と――。わずか二十歳前後の少年が、何故、そこまで人を信用できないのか……。何故、私の父を殺そうとしたのか……。」

それを君から訊き出すことは無理、という訳だ」

「……本気でそう思っている訳ではないだろう、ミスター・チェン？」

「自白剤でも使えと？ その前に舌を咬むだろう？ そうなつては、薬を使ったところで、君の言葉は聞き取れない。――いや、それ以前に、君に薬が効くかどうか疑問だ。ドクターは、君は明日の朝

まで目を醒まさない、と言っていたのに、その薬の効果もなく、夜にはもう目を醒ましている。君も透もただの人間とは思えない。これ以上薬を使ったところで、私がアンブルを無駄にするだけだ」

グリフィスは言った。

数日前までの彼なら、自分の勘を信用し、カインの話を聞くことを優先したかも知れない。透と同様、カインも理由もなく人を殺す人間ではないと。

だが、今は――。

「残念だよ。あと君に我々の役に立てることがあるとすれば、一色透を捕まえるための餌になってもらうことくらいだ。透が君だけしか信用していないのなら、必ず餌に食いついてくれるだろう」

と、ドアの方へと翻る。

「……私が『本気で』と言ったのは、喋る喋らないのことではない。本気で透が陳有健――君の父君を殺そうとしたと信じている訳ではないだろう、と訊いたんだ」

「……殺す積もりはなかった、と？」

グリフィスは、足を止めて振り返った。

「それを調べる手段を持っていない訳ではないだろう？」

「……」

「透が君の父君を殺すためにバンコクへ来たのでなければ、他に理由があったはずだ。君は……透を追い詰めてはいけない」

あの美貌の少年を、逃げ場のない片隅へと追い詰めては――。そう語るカインの眼差しは、真摯であった。

それは、決してしてはならないことなのだ。

そして、グリフィスは、カインが何も喋らない限り、自分で調べるより他、手立てがない。

疑いようのない真実がどこにあるのかを。

誰が真実を握っているのかを。

そして、グリフィスはその手段を持っているのだ。

透は、ウェブスターの足を潰したのは自分だ、と言っていた。彼

の目的が、グリフィスの父、陳有健でなかったのだとすれば、同じ屋敷にいたウェブスターであった可能性が強い。もとより、透は、『ウェブスターを調べれば全てが解る』と、グリフィスに言い残して行ったようなものなのだ。信用できない人間の話を半信半疑で聞くより、真実を見て信用しろ、と……。

部屋を出て、グリフィスは尉の方を振り返った。

「おまえはケイン・ローウェルを見張っている。私は英国へ戻ると、指示を渡す。」

「あの男——ケイン・ローウェルの言葉を信用なさるので？」

「信用しているのなら、わざわざ調べたりはしないさ。信用していないからこそ、真実を確かめるんだ」

夜は、イギリスの白い空へと続いていた……。

AREA・7 曼谷・倫敦 ??

SCAPEGOAT・4

美しき古都――。そう呼ばれる街の中で暮らし、憤りを覚える人間はいないのだろうか。

王侯貴族の築いた贅沢三昧の遺物を誇り、過去の栄華にしがみつき、静かな時の流れに身を任せるだけの毎日。

果たして、そんな街が本当に魅力的だといえるのか。

貴族が借家に住む時代となり、成り上がりの商人たちが豪邸に暮らし、それでもまだこの街は、伝統と格式を重んじる紳士の国だと言いつ張るのだろうか。

ロンドン
倫敦――。

ビッグ・ベンの鐘の音が、聴こえる。

テムズ川を挟んで向かい側にあるその時計塔の鐘は、毎日、この病院に美しい響きを届けてくれる。

《St・Thomas・Hospital》

「カインを引き留めておくのに失敗しただと？ それでおめおめと戻って来たというのか、マックス？ おまえほどの男が」

初老の紳士、ウェブスターは、ベッドの脇に立つ冷やかな男を、きつい視線で睨みつけた。

「失敗した、とは言っていないですよ。チャイニーズ・マフィアに捕まっていて手が出せない、と言っただけです。もちろん、あなにチャイニーズ・マフィアを敵に回す覚悟がありなら、私も遠慮はしません」

「――。クソっ！ 何がチャイニーズ・マフィアだつ。あんな少年の一人や二人に手こずりおって！」

マックスの言葉に、ウェブスターはやり場のない怒りを、シートに打付けた。——いや、怒りだけではない。まだ恐怖が染み付いているのだ。

この病院の周りには、一色透が現れた時のために、チャイニーズ・マフィアが固めているというのに、それでも一〇〇パーセントの安堵はもたらしてくれない。

ことは全て計画通りに進んでいる。

チャイニーズ・マフィアは透を追い、その上、ウェブスターを守ってくれている。

それでも、あの日の恐怖が消えないのだ。

「雪ですよ、サー・ウェブスター」

窓を見つめて、マックスが言った。

「ハッ！ そんなものなど——」

「ごらんなさい、この美しく白い雪を——。こんな日は、必ずどこかで事故が起こるものですよ。何しろ、雪道は滑りやすいですからね……」

昼にチラつき始めた白い雪は、すぐに本降りの兆しを見せ、夕刻には街中を白い化粧で埋めていた。

家路に向かう勤め人の足は大いに狂い、マフラーに顔を埋め込んで歩く人々の姿が、多く見えた。

ラッシュ時の雪は、仕事で疲れた人々の心を、さらに重くしていたのだ。

赤色灯の光が回り、賑やかなサイレンが鳴り響く。

「おい、ただだぜ。イギリス人ってのは、雪の降る国で育っておきながら、雪道もロクに歩けない、ってんじゃないだろうな？ ——

「まったく、何をやってるんだか」

病院の前に救急車が止まるのを見て、男は小馬鹿にするように、肩を竦めた。

ここは救急指定の病院ではないが、掛かり付けの医師がいる場合、患者が希望して運ばれて来るのだ。

「それより、この寒さは何とかならないのか？ 何がメキシコ湾流の影響で、考えるほどの寒さはない、だよ。あつと言う間に指先の感覚がなくなるぜ」

そんな言葉も、タイという暖かい国で育った彼らには、無理もないことだっただろう。

今は、冬真っ只中の季節なのだ。

雪を楽しんでいるのは、普段、変化のない入院生活を送っている患者たち、だけだったかも、知れない。

院内――。

「この患者は？」

救急車で運ばれて来た黒髪の少年を見て、そう訊いたのは、医師であつた。

「轢き逃げされたそうです。周りにいた人たちが救急車を呼んで、この子がこの病院を指定したとかで――。その後すぐに意識を失つたそうですけど」

と、看護師は応える。

「そうか。担当のドクターは判るか？ 持病を持っていて、この病院を指定したのなら、担当医に任せた方がいい」

「すぐに訊いてみますわ」

「ああ、頼む」

看護師が部屋から出るのを見て、医師は少年の体を覆う毛布を取った。

雪と泥に濡れた衣服と、細かい擦り傷のついた手が、現れる。

だが、その傷は、ついさっきの事故でついたものではなく、少なくとも、一日は経過している傷であつた。意識はないようだが、心拍も脈拍もしっかりとしている。

服を開くと、打ち身や打撲の痕が目についた。肩も随分、腫れている。

しかし、それも、ついさっきの事故で負つたものではないだろう。「やんちゃそうな子だ。これでは担当医も苦勞が耐えないだろう。」

――頭でも打つたかな
言いながら、医師は少年の顔にかかる、煩わしげな髪をかき上げた。

現れたのは、驚くほど端麗な面貌であつた。

中国人だろうか。神秘、ともいえる不思議な魅力を湛えている。

そのあまりの麗容に、茫と見惚れていた時だった。

「ドクター。ドクター・ワース」

と、看護師の声が耳に届いた。

「え、あ、何だ？」

ハッ、としてドアの方を振り返る。

「警察の方がお見えです。轢き逃げ事件のことを訊きたいと」

「あー、そうか……。担当のドクターが来れば、患者の身元も判るだろうが、今はまだ意識が戻っていないからな。担当医から話をさせると言っておいてくれ」

「はい、ドクター・ワース」

看護師が部屋から出るのを見て、医師は再び少年の方を振り返った。が――。

「え……？」

少年の姿は、診察台の上から、消えていた。

手品師が黒い幕を外した時のように、跡形もなく消えていたのだ。

――いや、眠っていた跡だけは、残っている。

だが、それだけで、部屋の中を見渡しても、その少年の姿は、見当たらない。

第二診察室へと続く仕切りのカーテンが揺れていることは、医師の目には止まらなかった。

突然消えても不思議ではないほどに、美しい少年だったのだ……。

コンコン、とドアにノックが届き、看護師が部屋へと姿を見せた。

「ミスター・ウェブスター、面会の方がお見えです」

「面会？」

ウェブスターは、その言葉に眉を寄せた。

「わしは誰にも会わんと言ったはずだ。勝手にそんな人間を通すなど――」

「もう遅いさ」

それは、看護師の言葉であつた。冷やかな眼差しでドアを閉じ、ウェブスターを見据えている。

「き、貴様は――」

「面会人は一色透――。このぼくだ」

夜よりも暗い漆黒の瞳が、持ち上がった。

その美貌は、まさしくウェブスターを恐怖に陥れた、あの少年のものであつた。

「ま、まさかつ。表にはガードたちが――」

「ああ、何人もいたさ。ぼくが救急車に乗って運び込まれるのに気がつかなかつただけで」

「な……っ」

どんな言葉を口に出来た、というのであろうか。

ウェブスターは、氷の柩に閉じ込められたように、凍りついた。

「随分、豪華な部屋だ。ぼくの母が同じ扱いを受けているとは思えないが――。久世綾子をどこへやった？」

ベレッタM92Fの銃口を持ち上げ、透は訊いた。

「わっ、私は……っ」

「知らないのなら、殺すだけだ」

冷酷としか言えない言葉で、ウェブスターを見据える。

「こっ、こんな年寄りを殺すというのかっ！ 私は動くことも出来

ん不自由な老人だぞつ。おまえがこんな体にしたんだつ。弟だけでなく、この私までも——つ」

「……。久世綾子はどこだ？」

ウェブスターの言葉を聞く様子もなく、透は引金トリガーに掛ける指に、力を込めた。

はったり、ではないのだろう。銃口は少しも揺れては、いない。

「サ、サナトリウムに……」

ウェブスターは言った。

「サナトリウム？ どこのだ？」

「……。サウス・イングランドの……」

言葉の途中、ウェブスターの視線が、チラ、っと続き部屋の方へと移行した。

この豪華な特別室は、ホテルのスイート・ルーム並の造りになっているのだ。

透は、ハッ、と気づいて視線を向けた。——いや、向けようとした時であった。銀色のナイフが頬を掠め、カツ、と壁に突き刺さった。

一筋の血が頬に現れ、ただ者ではない気配を、透に伝える。

「悪いことをしたな。何しろ、ナイフは人に当てないように投げるのが難しい。おまけに、利き腕を負傷中だね。顔に傷をつける積もりはなかったが」

その言葉と共に姿を見せたのは、細身の、不敵な印象を与える男であった。

「何をしておるのだ、マックス！ さっさとそいつを始末せんか！ ウェブスターが、叱責を放つ。

「いいんですか？ そんなことをすれば、カインが黙っていませんよ」

「——」

「それに、院内には警官がいる。今、電話でチャイニーズ・マフィアに密告しておきましたから、じきに彼らが来て始末してくれます

よ」

その彼の冷静さは、まさしくプロと呼べるものであっただろう。透はゆっくりと視線を向けた。——いや、彼は本当に透であろうか。その冷たい面貌は、別人のものに変わってはいないか。

マックスの表情が、何かを感じ取るように、強ばった。

部屋全体が、空気を変えて、淀み始める。

腐った沼を見るような嫌悪と、悪寒が、そこに、あった。

「私は……銀嶺」

透が言った。——いや、今は『銀嶺』と名乗っている。

「……銀嶺？」

その名に聞き覚えはないだろうか。以前、真性のサディスト、と呼ばれる緋影が口にした名前である。

だが、その役割は——。

「すぐに……チャイニーズ・マフィアを帰しなさい……。でなければ、私は『真実の黒都』を解放する……」

夢の中で聴くような、心地良い響きの声であった。ケルトの民が信じていたという、精霊^{セイ}のようであったかも、知れない。

「なっ、何だ、こいつは——っ」

「私は銀嶺……。『真実の黒都』の封印。——さあ、早く」

神の如き神々しさで、言葉は続いた。

封印、という言葉の意味は、果たして彼らに知り得たであろうか。彼女が封じているものが何であるのかを。

「なるほど。チャイニーズ・マフィアが怖くて人格を代えた、という訳か。これはいい。その気味の悪い多重人格も、最高の余興ではないか」

全く理解している風もなく、ウェブスターは言った。

先にある恐怖が見えない馬鹿もいるのだ。——いや、そんな馬鹿の方が、ずっと多い。

「早くしなさい、マックス……。そして、私を透の母の元へと案内するので……」

銀嶺は、ただ静かに言葉を続けた。

その言葉に従うよう、マックスがゆっくりと足を踏み出す。

目を睜つたのは、ウェブスターであった。

「何をする積もりだ、マックス！ その少年の言う通りにする、とでも言う積もりかっ」

と、ベッドの上から怒鳴りつける。

だが、マックスは魂を抜かれた傀儡のように、ただ足を進めている。

おかしくは、ないだろうか。その茫洋とした表情は、普通である、と言えるだろうか。

彼には、ウェブスターの声など聞こえていないのだ。鋭いはずの瞳は虚ろに淀み、機械的に手足を動かしている。

「マックス——っ！」

パタン、とドアが閉じ、マックスの姿は廊下に消えた。

ウェブスターの表情が、戸惑いに、揺れる。もちろん、恐怖も現れている。もう彼を守ってくれるものは何もないのだ。

「私は目を醒ましたくはなかった……。でも、私が目を醒ますしか、透を守る術がなかった……。あなたたちが、透を追い詰めるから……」

哀しげな口調で、銀嶺は言った。

「や、やめろ……。っ。大声を出すぞ！　ここは病院だ。すぐに人が駆けつけて来る」

ウェブスターがまた、透を追い詰める言葉を口にする。

「私は誰も殺したくない……。でも、私の覚醒は、『真実の黒都』の覚醒……」

「よ、よせっ。近づくなっ！」

「私は『銀嶺』であり、『黒都』……。私を含めて、黒都は真実の姿を持つ……」

何ということであろうか。黒都はすでに目醒めているのだ。それも、真実の姿として。

腐臭を放つ沼のような瘴気は、彼が呼び出したものであったのだ。だが、こんなことが有り得るのだろうか。透の多重人格の一人であるはずの銀嶺が、さらに別の人格——『第二人格』たる黒都を持っているなど……。多重人格の中に、さらに二重人格があるなど。そんなことを学者が発表したとしても、荒唐無稽と笑い飛ばされるに違いない。小説家でも思いつかない突拍子もないことだと。

だが、それなら目の前にあるものを、どう説明しろ、と言うのだ。彼女は確かに、黒都が自分の『第二人格』——同一の存在であると言ったではないか。自分が覚醒しない限り、黒都は真実の姿を持っていないのだと——。

今、その『真実の黒都』が姿を、現す……。

見ひらいた、瞳が乾いていく。もう瞬きすらも出来ずにいるのだ、彼は。

悍ましい真実を前にした時、人は誰しもそうなるのであろう。鳥肌が立つていない部分など、どこにも、ない。

彼の前にあるのは、紛れもない恐怖なのだ。

「ひっ、ぐ……っ」

喉に掛かった形のいい指に、ウェブスターは抗うことも出来ずに、喉を鳴らした。

親指が深く食い込んでいく。

その様子をじっと眺めているではないか、真実の魔人は。笑いもせず、憎みもせず、ただ興味深げに。ウェブスターが目を剥き、苦しむ姿を。

人に、実験動物のように眺められることが、どれほどの気味の悪さをもたらすか、一度でも考えたことのある人間はいるだろうか。

いるはずが、ない。人は、人をそういう風に観察できるものではないのだ。

何故なら、それは、狂気。正気の人間が出来ることでは、ない。

しかも、どす黒くなっていく『死への顔』を眺めることなど――。

それをしているのだ、真実の黒都は。

「ぐ……うっ……っ」

血管が浮き出る面から、また、ぐぐもった呻きが、零れ落ちた。

食い込む指から、じわじわと血が滲んでいる。

片手で易々と首を絞める黒都の姿は、まさしく、魔人の名に相応しいものであった。

その指がゆつくりと、喉から、離れた。

ウェブスターは噎せ返り、ゼーゼーと喉を鳴らしている。

だが、叫ぶことは、しない。声帯を潰され、声すら出せなくなっ

ているのだ。

これからが、始まり、であつた。

叫ぶことが出来ない人間を、無垢な心のままに弄ぶことが出来る時間なのだ、黒都に取つては。

空が暗く暮れている。たつた今、急に、暮れたようでもあつた。

黒都の手が、ウェブスターの顔に伸びる。

指先がその目を抉^{えぐ}り出した。

声はもちろん、上がらなかつた。ウェブスターはエビのように体を曲げ、狂気と恐怖にのたうつている。

黒都の興味は、目玉にあつた。

親指と人差し指で、抉り出した目玉を潰していく。

それは確かに、純粹な興味であつた。気味の悪いこととも思わず、目玉が潰れていくのを眺めているのだ。そして、赤子がそうするように、彼はそれを、口に、入れた。何でも口に持つて行き、咀嚼しながら喉を動かす。

口を開く度に、生臭い血臭が漂つた。

もちろん、黒都には、血が生臭いものである、という先入観もない。日本人が、外国人には到底理解できない腐つた豆——納豆を口に入れるようなものなのだ。

銀嶺が覚醒し、真実の姿となつた黒都は、人をも自由に操り、まさに無敵ではないか。幼い透が何人もの大人たちを殺すことが出来たのも、当然なのだ。

だが、いくら無敵であろうと、透には、絶対、現れて欲しくはない存在であつただろう。

また、カインにも——。

マックスと同じように催眠状態にされては、カインといえど、抵抗することも出来ないのだ。

叫びのない恐怖の時間は、それからしばらく続いていた……。

AREA・7 曼谷・倫敦 ??

SCAPEGOAT・5

バンコクを発ち、グリフィスがロンドンの病院に着いた時、その院内では、警官や記者たちが、血の気を無くして、年寄りのように動いていた。

「何かあったのか？」

グリフィスは、病院を見張っていた部下たちに、眉を顰めて問いかけた。

「そ、それが……」

部下の話は、こうであった。

ウェブスターが何者かに殺された、というのだ。しかも、遺体は肉の塊のようにボロボロで、見るに堪えない状態であったと。

警察の方でも、精神異常者の犯行であるという見方を強め、今、その犯人を洗っているらしい。

「精神異常者？ 透ではないのか？」

状況を聞き終え、グリフィスは訊いた。

「そこまでは……。ただ、事件が起こる前に、我々の元に、『一色透がウェブスターの病室に姿を見せた』という密告があり、部屋へ駆けつけたのですが、マックスというウェブスターの側近が姿を見せ、結局、部屋には入れないままで……」

「マックス……。その男のことは調べたのか？」

「は……。ですが、身元も何も判らず……」

部下は冷や汗を浮かべて、口ごもる。

「ニューヨークでは、身元不明の人間など珍しくもないが、ウェブスターがそんな人間を側に置いているとは、な。——おまえたちが

病室へ向かっている間、表の見張りは？」

「罊の可能性も考えられましたので、各所に一人ずつ残して置きました。一色透の姿は確認されておりません」

「マックスという男は？」

「それが……いつの間にか院内から姿を消して……」

「ただの男ではなさそうだな。——交通機関は？」

「全て、手を回してあります」

「病院に何名か残して、後はマックスという男の搜索に回せ。何か知っているとすれば、その男だ」

「かしこまりました」

部下は踵きじすを揃えて、翻った。

これで、そのマックスという男が見つからなければ、真実を知るための手掛かりが、全て消え失せてしまうのだ。

グリフィスは、騒然とする院内を、薄く見据えた。

時間的なタイミングからしても、ウェブスターを殺したのが、透であるという可能性が一番、高い。彼はウェブスターに何らかの関わりを持ち、以前にもウェブスターの足を潰しているのだ。

そして、グリフィスがウェブスターから何かを訊き出す前に殺した、ということも考えられる。——いや、それなら、特別な殺し方をする必要などないだろう。部下が言っていたような、狂人の如き殺し方をしなくても、蔣を殺した時のように、銃で仕留めれば済むことだ。その方が時間も掛からず、犯行中に人に見られる危険性も少ない。

そこまで考え、グリフィスはわずかに眉を寄せた。何か心が引っ掛かったのだ。

殺し方——。そう。父、陳有健チェンヨウジエンを撃った時の透の行動——。

蔣とその部下をそれぞれ一発の銃弾で仕留めたにも拘わらず、陳有健に関しては、透は数発の銃弾を打ち込み、それでも仕留めることが出来ていないのだ。

あの時の部下の話からしても、透が至近距離で陳を撃ったことは

容易に察し得る。陳の側に立っていたのだから、外から撃つたはずもない。それでいて、仕留めることが出来ていない。弾はことごとく外れ、まるで、わざとそうしたように――陳が重症を負いながらも助かるように、弾を打ち込んだ形になっている。

だが、何故――。

何故、透はそんな真似をしたのだろうか。

陳が命を取り留めて困るのは、透のはずなのだ。陳が意識を取り戻し、透の犯行だ、といえば、さらに透は追い詰められる。

もちろん、それはグリフィスの考え過ぎかも、知れない。透はわざと外した訳ではなく、二人の部下をも同時に仕留めなくてはならなかったために、銃口が狙い通りに定まらなかったのだと。

いつでも侵入者に対応できる姿勢で立っていた部下を、一瞬の内に始末するには、銃口を正確に定めている時間などなかったはずだ。そうなると、一発で仕留めることも不可能で、必然的に、数発の弾丸を撃ち込まなければならいことになる。

どっちにしても、何故そうだったのか、ではなく、何故あんなことをしたのか、が問題なのだ。

そして、今回も……。

グリフィスは、ウェブスター殺害現場である病室へと足を向けた。が、すぐに警官が前に立ち、グリフィスの行く手をそこで塞ぐ。

「ここは立ち入り禁止だ」

こういう時の警官の傲慢な態度は、どうにかならないのであろうか。どこの国でも警官は、脳ミソの足りないチンピラのように――いや、それ以上に腹の立つふてぶてしさで、威張り散らす。

「私はグリフィス・チェン。ジョン・H・ウェブスター氏に会いに来ただけです」

淡々とした口調で、グリフィスは言った。

「会いに？ 知り合いか？」

「ええ。父、陳有健の持つバンコク銀行グループのニューヨーク支店の方で、取引をしています。今回、ロンドンの支店の方へ来たの

で、お見舞いがたら、ご挨拶に、と。——この騒ぎは？」

警官の説明は、部下の説明と同じものであった。手順のようにいくつか質問をされたが、それも特別なものではなかった。

財閥銀行グループの名前のせいかな、警官の態度も少し、変わっていた。

「部屋へ入ってもいいですか？ 何かお力になれるかも知れない」

「……やめておかれた方がいいと思いますがね」

その警察官の言葉の意味は、病室に入って、すぐに判った。異様な臭いが立ち込めているのだ。血臭——それも、ちよつとやそつとの臭いではない。

遺体はすでに片付けられていたが、部屋は血の海の手まで、肉片も全ては回収されていない。

「ぐ……っ」

グリフィスは、その光景に目を瞠り、口を押さえて飛び出した。込み上げる吐き気を堪えながら、残像を消すように、目を瞑る。

耳にしていた以上に、悍ましい光景であったのだ。それに、透がこれほどまでに悍ましい殺し方をするなど、考えてもいなかった。

「我々も何度も吐きましたからね。お陰で、皆、病人のように驚れていますよ。普通の人間が出来るような殺し方じゃあない。今は遺体も片付けられて、随分マシですが、最初、あの死体を見た時の悍ましさと言ったら……。まともではないですよ。人間の形をしていないんですから。無くなっている部分は、犯人が食べたか、持ち帰ってコレクションにしているか……。どっちにしても、正気の人間がすることじゃない」

正気の人間がすることでは……。

確かにその通りだろう。

だが、グリフィスの知る透は、確かに正気だった。こんな悍ましい殺し方をするような狂人ではなかった。

「……犯人の特定は、まだ？」

グリフィスは訊いた。

「すぐに見つかりますよ。事件が事件ですからね」

本当にそうなのだろうか。犯人はすぐに見つかるのだろうか。これほど大胆な殺し方をしたにも拘わらず、あっさりと院内から姿を消してしまった犯人が。

そして、時同じくして姿を消した、マックスという男――。

犯行は確かに狂人のものでも、犯行の目的は、狂気では、ない。そう思うのは、グリフィスだけであっただろうか……。

「北欧トップのガラス・メーカーが、デザイナーとして迎えてくれる、っていうんだ。まだ夢を見るのに遅い年齢じゃない。俺は行くよ。——おまえはどうするんだ？ 同じ内容だったんだろ？」

龍生は、魁の向かいのソファへと腰を下ろし、チラ、っと視線を持ち上げた。

「……。俺には、この画廊がある。それに、ダールクビストには、名の知れた一流の芸術家が、デザイナーとして何人も雇われている。俺の出る幕はないさ」

事実、ダールクビストが、イタリアのヴェネツィアン・グラスや、チエコのボヘミアン・グラスと並んで、世界を代表するガラス・メーカーに成長したのも、その芸術家——初めをいうなら、肖像や風景画家であつた人物の功績があつたからでも、あるのだ。

その彼の作品は、パリ博覧会でグランプリを受賞し、以後も、ダールクビストのガラス製品は、その芸術性の追及を続けている。

「まあ、おまえは行かないだろうと思っていたよ。だが、俺は行く。もう日本にも未練はないし……それに、正直、日本にいと、息が詰まる。すぐに追い出されるかも知れないが、行くだけは行ってみるよ」

「ああ」

魁がうなずいた時、であつた。また、ドアが——今度は静かに開き、小柄な、初老の紳士が姿を見せた。

受付の女性が、普通の——龍生とは違って、いい客らしいその紳士へと、記帳を求めている。

「客だぜ、魁。行かなくてもいいのかい？」

「客にくつついて回って売るような商売じゃないさ」

「けど……表に止まつてる車、ロールス・ロイスのリムジンだぜ。

あんな車、初めて見る……」

衝立の向こうを覗きながら、龍生が少し呆然と、言葉を続けた。
ロールス・ロイスのリムジン、となると、この画廊でもやはり、
珍しい。

魁は、龍生と同じように、衝立の向こうを、覗き見た——時、ふ
と、その初老の紳士と、視線が出合った。

初老の紳士が、丁寧、日本の挨拶であるお辞儀をし、魁の方へ
と歩いて来る。

こうなると、魁も立たない訳には、行かない。

その紳士は、外国人であつた。魁が立つのを目に留めると、
「秋月魁様でいらっしゃいますね？」

と、これも丁寧な日本語で、魁を見上げた。

「え、ええ……」

何となく、客とも思えない紳士である。

「私は、ダールクビストの命で、あなたを迎えに上がった者です」
「え？」

「手紙は届きましたでしょうか？」

「え、あ、ええ、今日——」

「安心いたしました。手紙ではあまりにも不躰とは思つたのですが、
ダールクビストも忙しい身で、仕事と学業を離れることが出来ず、
私が参つた次第でございます。飛行機等手配を含めました全てを、
私が任されて来ております。お支度の方の手伝いも——」

「あの、支度の手伝い、と言われても、ぼくは——」

と、魁が言いかけたところで、

「ぼくは仁龍生です。手紙をいただいて、どうも」

と、龍生がソファから、腰を上げた。

「これは、仁龍生様もこちらにおいででしたか。後ほど、伺つつも
りでありました」

「ぼくの方は身軽なので、いつでも飛び立てますよ。あの手紙が、
エリ阿斯・ダールクビスト氏の厭がらせでないのなら」

「滅相もございません」

初老の紳士は、愉しそうに口元を緩め、

「失礼ながら、お二人の大学での成績や、いくつかの作品は、こちらの方で調べて、拝見させていただきました。もちろん、ダールクビストは厳しい人間でございますから、これからのことまではお約束できませんが、若き芸術家の才能を引き出す努力を惜しむような人間ではございません」

「それを聞いて安心したよ。——魁も連れて行くのなら、この画廊の始末もしないとな」

「おい——っ」

魁は、抗議しようとしかけたが、

「それも、ダールクビストから言い遣って来ております」

「言い遣って、って……」

どうやら、話は、魁抜きで、出来上がってしまったっているらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1957u/>

スケープゴート

2011年10月29日14時22分発行